

- イル状突起を配する。1本引きの沈線が全体に施される。
- 11 深鉢口頸部から体部上位。体部は直線的に立ち上がり、頸部で外反する器形である。頸部に施された眼鏡状小突起とコイル状突起から派生した隆線が楕円区画文を構成し、交点で瘤状小突起となり、さらに下位への隆線が派生する。区画内は三叉文を充填する。全体は、隆線と1本引きの沈線が巡り、間に三叉文を施文する。胎土は白色粒子、輝石を含み褐色を呈する。「焼町類型」。9と同一個体。
- 12 深鉢口縁部から体部上位。頸部で強く外反し、口唇部で内湾する器形。口唇部に眼鏡状突起が貼付されるが、副突起となる可能性もある。眼鏡状突起、コイル状突起を施し、頸部で強く外反し口縁部がやや内湾する。復元口径約28cmを測る。眼鏡状突起間に主突起が配された可能性が高い。曲線隆、幅広沈線を巡らし、間に列点刺突、斜沈線を施文する。色調は暗褐色である。「焼町類型」。
- 13 深鉢体部破片。コイル状突起から2条の隆線が弧状に配され、区画する。区画内は沈線を側線とし、RL編文が充填される。区画下は沈線が弧状に施される。胎土に雲母を含み灰褐色を呈する。文様構成は「新巻類型」に近いが問題が残る。
- 14 深鉢体部破片。捻りを加えた弧状隆帯。内縁を1本描きの沈線による渦巻文と三叉文を埋める。胎土に白色粒等、色調は暗褐色を呈す。加曾利E II式併行
- 15 深鉢体部破片。捻りを加えた縦位隆帯と横位隆帯。接点より断面三角の細隆線が上位に分散派生する。横位隆帯には短沈線や三叉文が加わる。隆帯以下は縦位沈線や連続刺突文が垂下し、空白部に三叉文が埋められる。胎土には白色粒等、色調は暗褐色。14と同一個体。
- 16 深鉢体部上半破片。半截竹管状工具の内皮を使用し、半隆起状の斜位渦巻文と平行沈線文を配す。空白部には縦位斜位の斜位沈線を浅く施す。胎土は粗く砂礫を含む。黄灰色を呈しやや異質な感を見せる。加曾利E II式併行と捉えた。
- 17 深鉢体部下半。隆線が垂下し、体部下半の横位隆帯と接し、台形状の連続区画文を構成する。区画内は、横位や縦位の沈線で充填する。胎土は石英を含み、明赤褐色を呈する。
- 18 深鉢体部下半。隆線が垂下し、体部下半の横位隆帯と接し、区画文の構成をなす。区画内は沈線を配する。胎土は、雲母や白色粒子などを含み粗く、赤褐色を呈する。「焼町類型」か。
- 19 深鉢体部下半。隆線が垂下し、側線として沈線が沿う。沈線間には円形刺突が施される。胎土は白色粒子を微量に含み、褐色を呈する。内面には杖状の付着物が観察される。「焼町類型」か。
- 20 深鉢底部。体部1/4残存。隆線と沈線による懸垂文構成。隆線は分岐懸垂文を呈す。沈線は深い施文で併行重複施文で、空白部を充填する。体部下半に緩やかな膨らみを持たせる器形形状と平行沈線施文手法から、「焼町類型」と考えられる。
- 21 深鉢頸部破片。大きく外傾する口縁部は無文と思われる。頸部隆帯には横位RLを施し、以下交互刺突文による連続コ字文が平行する。体部は一本描きの沈線が施されるが、全容は判然としない。胎土は比較的緻密で微量の白色粒を含む。色調は暗褐色。加曾利E式古段階。
- 22 深鉢体部上位破片。横位隆線以下楕円状区画文が配され、体部は横位隆線で画され2条一對の隆線が弧状に垂下する。あるいは渦巻状意匠か。空白部は斜位沈線が丁寧な充填される。胎土は細かく雲母、白色粒を含む。色調は暗褐色を呈す。加曾利E II式。
- 23 深鉢体部上半破片。数条の横位隆線による頸部区画線。以下縦位隆線による体部区画。隆線には浅い刻みが施される。体部区画内は隆線による半渦巻状意匠を配し、側線沈線を強く施す。また、縦位沈線に交互刺突文を加える。胎土は緻密で、色調は黄灰色を呈す。極めて異質な土器である。
- 24 深鉢体部下半から口縁部。体部はほぼ直線的に立ち上がり、頸部で強く外反し、口縁部でやや内湾する。口径25cm、突起部までを含んだ残存器高は26cmを測る。文様構成から全体は、口唇部裝飾帯、口縁部裝飾帯、口頸部文様帯、頸部区画文、体部文様帯に分けられる。主突起として鶏頭冠状の中空突起を4単位配し、主突起間に瘤状小突起を付す。中空突起のブリッジはT字状であり、交点に環状貼付文を施す。口唇部の鋸歯状小突起には、上面に窪みをもち、連鎖状文を呈するものも観察される。幅狭な口縁部文様帯には隆線を波状に貼付し、連続三角文を呈する。隆線は刻み有りとは刻み無しの2種が観察される。口頸部には、隆線による弧線が対向するように施文される。弧線には平行沈線が沿う。頸部には1条の横位隆線が通り、上下に平行沈線が施される。体部は縦位平行沈線により4分割し、口頸部の対向弧線に呼応するかのごとく、上位に弧状沈線、下位に斜位沈線を配す。また、下位斜位沈線間に波状沈線を施す例も観られる。地文はRL編文であり、口頸部から体部まで施文されている。胎土は若干の小砂礫と輝石、赤色粒子を含み、黄褐色を呈する。
- 25 口縁部が体部と一体化した、緩やかに内湾する樽状の器形を呈す。口縁部に狭い無文を設け、横位隆線による口頸部区画線が付される。正面には対弧状の渦巻状の意匠が配される。渦巻状隆線下端および底部対応部より隆線が垂下し懸垂文構成を示す。体部の空白

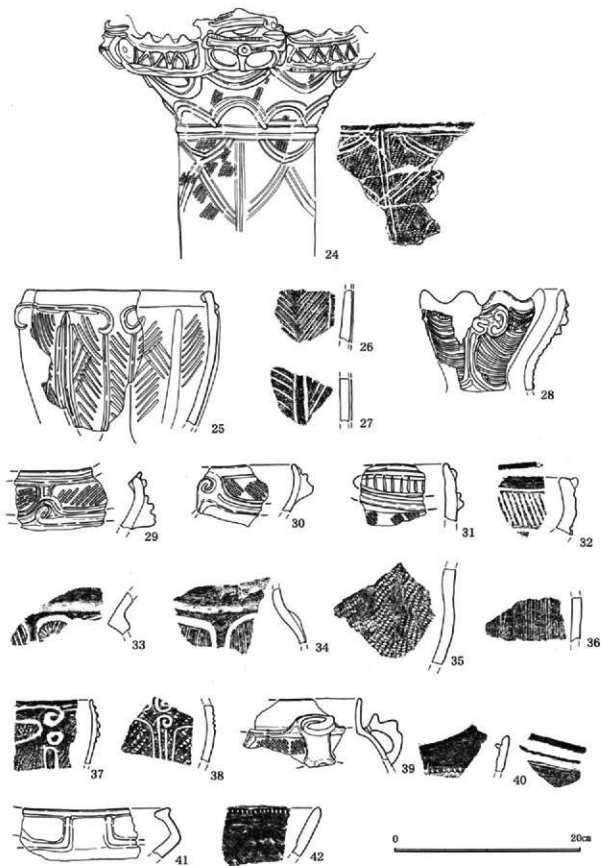


图9 1区包含層出土土器(2)

- 部には櫛状の矢羽状縦位沈線文が充填される。多量の砂粒・白色粒を含み暗褐色を呈す。加曾利E II式とした。
- 26 深鉢体部破片。隆線が垂下し、側線として沈線を配す。隆線間を櫛状の沈線で充填する。胎土は雲母を微量に含み粗く、内面に黒色の光沢を有する物質が付着している。褐色を呈する。
- 27 深鉢体部破片。隆線が垂下し、隆線間を櫛状の沈線で充填する。胎土は雲母を多量に含み、暗褐色を呈する。
- 28 双波状口縁深鉢口縁部。約1/3残存。小径の小型深鉢と捉えられる。波頂下には小楕円状意匠が隆線によって配される。楕円状意匠より2条の細隆線が垂下するが体部中位で横位に連繋する。口唇部直下より連続刺突文が横位3条施され、以下1本描き沈線が平行して弧状に充填する。胎土は緻密で白色粒を含む。鈍黄褐色を呈す。加曾利E II式併行。
- 29 深鉢口縁部破片。口縁部文線帯がやや狭いながらキャリバー状深鉢。2条の隆線を一組として口縁部に楕円状区画文を配す。頸部隆線下端に小渦巻状意匠を隆線に貼付するが、おそらく波底部意匠と考えられる。口縁部区画文内は横位LR縄文を充填する。胎土は細かく白色粒等を含む。色調はやや暗い暗褐色を呈す。加曾利E II式であろう。
- 30 深鉢口縁部破片。隆線により口縁部に楕円状区画文を配す。楕円状区画文の交点に隆線による小渦巻文を施す。口縁部区画文内はRL縄文が施文される。胎土には石英、白色粒子を含み、褐色を呈する。加曾利E II式
- 31 深鉢口縁部破片。内面に稜が貼付された痕跡が観察できる。隆線により楕円形状の区画文が構成され、区画内は縦位沈線が充填する。区画文下はRL縄文が施される。胎土は白色粒子を微量に含み、灰黄褐色を呈する。
- 32 深鉢口縁部破片。隆線により区画文が構成され、区画内は斜位沈線が充填される。胎土は石英を微量に含み、暗褐色を呈する。
- 33 浅鉢頸部破片。隆帯による楕円形状の区画文をなし、区画内を縦位沈線や短沈線で充填する。胎土は石英を含み、におい褐色を呈する。
- 34 浅鉢頸部破片。隆帯による楕円形状の区画文をなし、区画内を縦位沈線で充填する。胎土は雲母を含み、淡黄色を呈する。
- 35 深鉢体部破片。地文としてRL縄文が施文される。白色粒子、石英を含み、におい赤褐色を呈する。
- 36 深鉢体部破片。地文として条線が施される。胎土は輝石を大量に含み褐色を呈する。
- 37 深鉢口縁部破片。緩やかに内湾する口縁部形態。沈線による渦巻文と直下に櫛状沈線文を配す。両脇に低

- 隆帯による楕円状区画文が配される。体部は逆「U」字状沈線文による懸垂文構成か、楕円状区画内LR縦位充填施文。器厚は極めて薄く内面は研磨が施される。胎土は緻密で微量の白色粒を含む。色調は暗褐色を呈す。加曾利E II式併行。
- 38 深鉢体部破片。RL縄文を地文とする。沈線により方形区画をなし、区画間は縦位の蕨手文が施される。胎土は石英、白色粒子を含み赤褐色を呈する。
- 39 渦巻状の櫛状把手を付す深鉢口縁部破片。おそらく両耳意か。口縁部は強く外傾し、把手上位に連繋する横位隆線には上下に小孔が連続する。櫛状把手が跨ぐ文線帯区画内は横位RL縄文が施される。しかしながら、櫛状把手内部にまで施されることから縄文施文後の隆帯・把手貼付と捉えられよう。器厚薄手で、内面研磨、煤も付着する。胎土に極小の片岩粒、色調は鈍黄褐色を呈す。加曾利E IV式併行か。
- 40 深鉢波状口縁部破片。口縁部に連続する刺突文と横位沈線を配す。内面に、強い稜を持つ。胎土は白色粒子、輝石を含み暗褐色を呈する。
- 41 浅鉢口縁部破片。強く内湾する口縁部形態。口唇部は短く突出し隆線による方形の区画文が配される。内外面とも丁寧な研磨を施し、赤色塗彩を加える。胎土は緻密な雲母等を含む。色調は褐色を呈す。
- 42 浅鉢口縁部破片。口唇部に刻みを施し、内面は段を持つ。内外面に黒色物質が付着している。胎土は輝石が含まれ褐色を呈する。

(1区西出土土器 図10)

- 本資料は、1区西を走る農道側溝工事の際に出土した資料である。緊急性の高い調査のため、立ち会い調査とともに出土土器の採集調査となった。おそらく、1号住居跡と同様に台地西端に位置する住居跡等遺構の存在が予測されるが、工事範囲は狭く詳細は把握できない。また、出土は比較的時間もたった状態ではあったが、前述の様に遺構出土とは特定できず、一括性は保証できない。
- 1 大型の波状突起を付す深鉢。突起は非対象で、外面は短沈線が縁取られ、内面には円孔を中核にした三叉文と交互沈線文が配される。口縁部は内面が隆帯で肥厚し、外面も段を有す。体部は外反気味に開き、底部は屈折底を呈す。体部上半は2単位の双円状磨面文が配される。地文は燃糸が縦位に施される。群馬県内では類例は少なく、長野県域-中部山岳域に多く分布するタイプである。勝坂3式併行と捉えられよう。
 - 2 キャリバー状深鉢。口唇部は短く外傾し口縁部は内湾する。体部直立気味に立ち上がる。口唇部には刻みが連続し、口縁部の膨らみには隆帯による「S」字意匠が連繋して配される。隆帯には刻みが施される。頸部隆線には交互の押圧が加えられる。体部は無文で

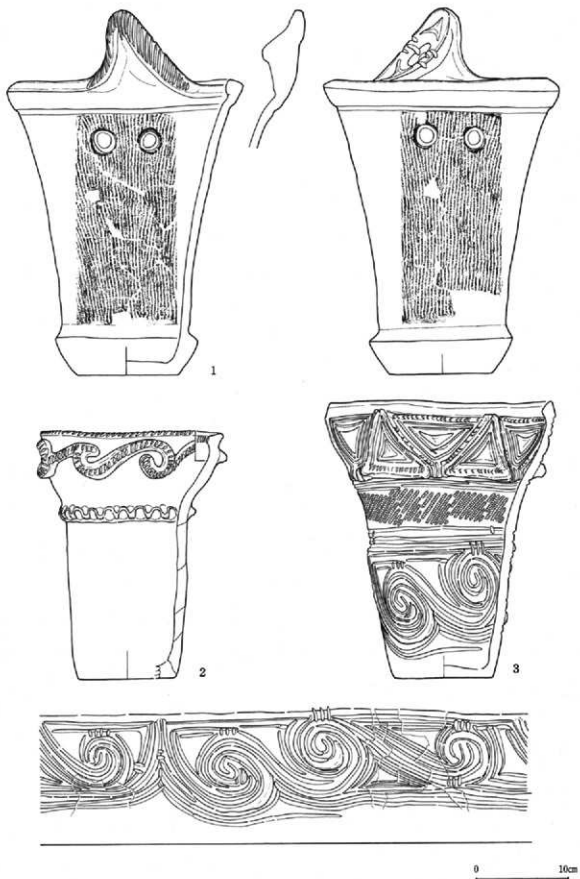


图10 1区西调查区域外出土土器

ある。口縁部内面の内縁には刻みかえられる。加曾利EⅠ式古段階の所産と見ている。通常このタイプの一群は体部縄文施文が一般的ではあるが、本例は無文であり、極めて特色を有する。地域差と見るべきなのであろうか。

- 3 口縁部が緩やかに内湾するキャリバー状深鉢。体部器形はやや開く。口唇部は幅狭の無文部を持ち、口縁部文様帯は、刻みを付す隆線による大型三角区画文が交互に配される。区画内は中に三叉文を置き、隆線の側線として2条の沈線が沿う。また頸部隆線との接点は瘤状小突起が付けられ、幅広の連続刺突文が横位に施される。頸部には、横位LR縄文が埋められ、体部との境は数条の1本描きの沈線が横位に画す。体部文様帯は隆線による渦巻文が配され、一部「S」字状意匠となっている。体部下半は沈線による横位区画線が施され体部文様帯を画すが渦巻状意匠と連繋した形態であり、隆線等による横位区画線との差が見出せよう。頸部の縄文施文に類例の少なさを見るが、口縁部三角区画文や体部の幅広文様帯から勝坂2式併行と考えた。

5. 所見

以上のように、今井東平遺跡1区で検出された住居跡と出土土器、及び包含層出土土器の概要を紹介した。無論、出土資料全てを網羅できた訳ではなく、先にも述べたように1区出土土器については、資料数が果たされていない。次回の本遺跡資料紹介の際に補足したい。

ここでは、今回紹介した出土土器を概観し、その傾向と特徴を列記し、問題点の抽出に努めたい。また、最も特徴的と思われる「火焔土器」について、現状で散見される類例資料を集めて、考えを巡らしてみたい。

5-1. 所見1

(1号住居跡出土土器)

1区西端で検出された1号住居跡からは、縄文時代中期資料が比較的多く出土した。図6・7に図示した土器資料は24点であり、阿玉台Ⅱ式から加曾利EⅢ式まで、時間幅のある出土状況を示す。そのうち、主体をなす時期は加曾利EⅡ式段階であり、図示しなかった破片資料も当該階層を示す土器が多かった。

おそらく、本住居跡の帰属時期として加曾利EⅡ式に比定されると思われるが、図6-1~6にある中期中葉段階の土器群にも安定性が見られ、重複する住居跡の時期や土坑の存在も想定しておきたい。

1号住居1~5は阿玉台Ⅱ式(1~3)及び勝坂2式(4・5)併行の土器群である。本遺跡では、この他に阿玉台Ⅰa式やⅠb式が見られる。特に1b式~Ⅱ式段

階の資料は充実しており、安定的に阿玉台式が浸透しているように観察された。勝坂式も同様に、1・2式の充実が見られるが、所謂「新道式」に見られる密接連続刺突文を施す一群は少なく、3・4に見る沈線縦直列を施す例が多い傾向が看取された。

6の「焼町類型」に関しては個体図示し得た資料である。隆線側線である沈線は単独施文で、体部文様帯も横位一次区画線を設定するため、「焼町類型」内部でも古段階の標相を示す例と考えた。あるいは4・5の勝坂2式段階に併行する可能性もある。

7は極めて異色の土器であり、現状のところ類例を知らない。口縁部文様帯が数段に分帯され、頸部の弧線文など特徴的である。ここでは、波底部対応域の上下環状の小突起の存在から、加曾利EⅠ式新段階に併行する要素と考えた。大木的色彩を重視すれば大木8b式段階か。今後類例をあたりたいが、後述する「道訓前類型」との関係性も重視したい。

8~17の加曾利EⅡ式段階の資料と考えた。所謂「曾利式系」・「唐草文系」と捉えてきた土器群が多く、斜位短沈線等が埋められる共通性が見られる。8は体部に縦位矢羽状沈線が充満され、9は口縁部文様帯の地文として横位に施される。11は矢羽状構成ではないものの、斜位沈線の充満施文が空白部を覆う。12・13とも空白部の縦位矢羽状沈線の充満が特徴といえよう。14・15・17は縄文を施文する。14は頸部隆線以下に体部縄文が施文される。15は燃糸文施文からEⅡ式としても古段階か。あるいはEⅠ式の可能性もある。17は縦位充満施文であり、EⅡ式後半段階の所産と考えた。

その他にEⅢ・EⅣ式段階の破片資料(18~22)もあるが、関東的な文様要素内部で収まる内容である。

土偶足部破片(24)に関しては、多くの類例を持たないが、同様の足部破片が3区包含層(捨て場)より出土しており、今後紹介を重ねる際に提示したい。

(包含層出土土器)

さて、包含層出土の土器においては、五領ヶ台式や阿玉台Ⅰb式、勝坂式、「焼町類型」などが見られる。また、加曾利EⅠ式やEⅡ式併行の土器群やEⅢ式も見られ、1号住出土土器と同様に時間幅のある出土状態を示す。このうち量的に多く見られるのが「焼町類型」(9~20)である。すべて沈線単独施文で文様帯もあることから、1号住で提示した例(6)と近い古段階であろうか。尚、13に関しては、厳密な「焼町類型」ではなく、別の分類項目が必要な土器であろう。

21は加曾利EⅠ式併行と考えたが、体部文様帯をみると短沈線が充満されており、信州系の土器群と捉えた。22は勝坂式終末段階あるいは加曾利EⅠ式古段階に併行する勝坂系の土器であろう。

さて、23は類例の少ない資料である。体部上半の半渦巻状意匠や交互刺突文は「火焰型土器」にも見られる要素であるが、本資料の器厚は薄く、全体的に「火焰型土器」の施文法とは差がある。今後の追証が必要な土器である。24は別項で後述する。

25～33は加曾利EⅡ式併行の土器と考えた。34～38はEⅢ・EⅣ式である。

(1) 区西出土土器

3個体を並べたが、前述のように農道側溝工事の際に出土したため、詳細な観察が果たせなかった。所謂遺構一括資料ではなく、時期差のある出土土器である。

1は、おそらく勝坂3式併行と捉えられる。底部の屈曲底や突起形状などが長野県域に見る特徴であろう。また、体部上半の磨消状の円文も、長野県域に特徴的な文様要素と考えた。あるいは、直接的な搬入とも捉えられよう。体部の縦位擦糸施文も勝坂3式段階とした根拠である。

2に関しては、口縁部文様帯が関東地方北西部一群馬県域の資料に近似する。勝坂3式終末・加曾利EⅠ式出現期～古段階に多く見る例である。時間幅を持たせたが、体部が無文という様相は他に類例を見ないためである。

3は極めて問題の多い文様と考えた。口縁部交互三角区画文構成は、勝坂式の伝統的な文様構成であり、本資料のように大型区画化した様相は2式段階の所産と捉えられよう。また、体部の幅広の文様帯も2式に特徴的な文様構成と考えた。しかし、頸部の縄文施文は特徴的であり、果内では類例を見ない。地文ではなく、充實施文と観察したが、敢えて頸部のみに縄文を充てる文様構成は、当段階の文様構成には見られない方法である。さらに、体部文様帯の大型渦巻文構成は、淵線に沈線を施すなど、勝坂式に見る渦巻文構成とは違う様相を見せる。共存するであろう、他の異系統土器群一例として「焼町類型」との関係性も視野に入りたい。本資料に関しては、類例をあたり再検討する必要がある。

このように、今井東平遺跡1区出土土器は、縄文時代中期に取まれる時間幅を以て提示できる。その中で、最も量的に安定するのは加曾利EⅡ式併行の信州系の土器群であり、この様相が本遺跡の土器様相の一つといえよう。加曾利EⅡ式段階における信州系の土器群の存在は本遺跡及び吾妻川上流域における大きな特徴であるが、その様相は混在というより主体と見做すことも可能なほど、関東系の土器群を圧倒している。この吾妻川上流域の中期後半土器様相は、既に、長野原町跡木遺跡住居跡出土土器(桜岡 1988)、長野原町坪井遺跡Ⅱ(富田 2000)で指摘されており、本資料の提示は、従来の指摘を追従する結果となった。

すなわち従来、群馬県では加曾利EⅡ式併行期の土器

群で、地文に縄文を持たず、沈線文や刻みで装飾される一群を「曾利系土器」「唐草文系土器群」として位置付けてきた。確かに縄文施文に傾斜しない懸垂文構成は同じ懸垂文構成が定着する加曾利EⅡ式に比して、より「曾利系」であり、県内の出土状況も、長野県に近い西毛地域により濃密に分布する傾向が見られる。長野県域に接する地域においては、「曾利系」土器の存在は、充分承知されてきているのである。また、近年の資料の飛躍的な増加に伴い、再度吟味が加えられてきており、例えば、西毛地域である松井田町新堀東源ヶ原遺跡(大賀他 1997)の資料と、北西毛ともいえる坪井Ⅱ遺跡や長野原町長野原一本松遺跡出土資料(諸田 2001)等が加えられ、一層の「曾利系」「唐草文系土器」の浸透が認められるのである。

一方、長野県内一とりわけ千曲川流域におけるこの段階の資料も注目されてきている。こちらも従来「佐久系土器」や「唐草文系土器」と扱われてきた一群の見直しがなされ、新資料の提示(桜井 2000)を見つめ、「郷土式」としての位置付けが模索されている。この「郷土式」は、本遺跡出土資料としては、包含層出土土器25が顕著であり、32・33にもその要素が見られる⁹⁾。また、「郷土式」と同様に千曲川流域の該期土器群に「大木式」に極めて近い文様構成を示す例が近年知られてきた(水沢 2000・2003)。大木式との直接的な関連性は今後の検討課題として残るが、今井東平遺跡においても、例えば1号住8・9がそれに近い文様要素であり、分布域としても広がりのある土器群として提示できよう。

ともあれ、今井東平遺跡1区出土土器の様相は、明らかに信州地域の影響がきわめて濃く、縄文非施文の一群が主体的になる傾向がある。このような土器群の組成例を当地域の特徴とするかは、前述の諸遺跡の調査報告例と比較検討するべきである。また、繰り返して述べるが、中期後半段階の資料は3区包含層(捨て場)で大量に出土しており、前述の「郷土式」や千曲川上流域の「大木式」に近似する資料が多く見られる。故に詳細は次の紹介で果たしたい。

5-2. 所見 2

一「道調前類型」について一

今井東平遺跡からは、前節で紹介したように長野県域の土器群と群馬県域の土器群とが混在している様相が確認でき、当地域は浅間山を中心とした交流の一翼を担っていたようである。

ところで、単独ではあるが興味深い土器が出土している。残念ながら、他に明瞭な共存遺物がいないため、時期を特定することができないものの、鶏冠突起に類似した中空突起や口唇部の副筒状小突起から、一見すると新潟県域を中心に出土する「火焰型土器」の印象を受ける。

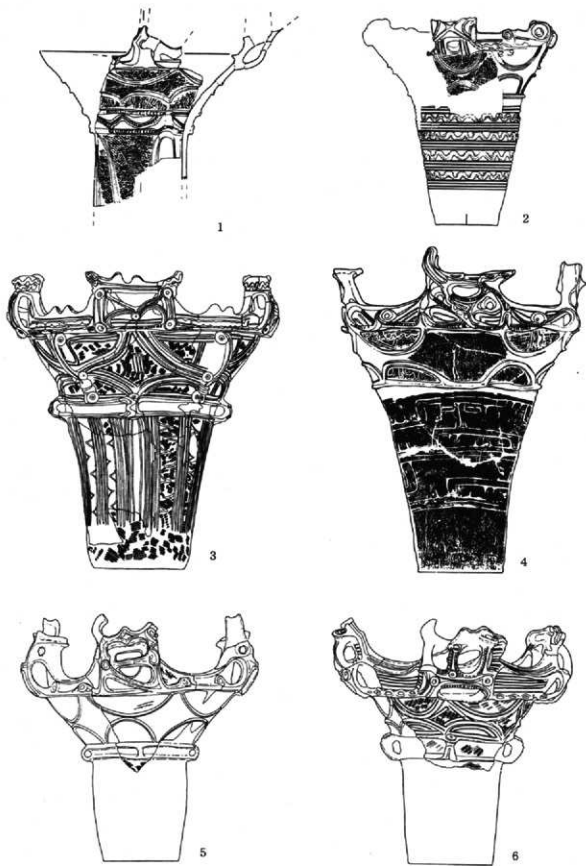


図11 「道満前類型」類例資料(1) (s=1/8)

群馬県内において、近年このタイプの土器が資料として充実始めているものの、時代的な位置付け等、流動的であるような感がある。そこで、今回の分析では本資料にも認められる鶏頭冠状の中空突起や口頸部に施文された隆線による対向弧線を中心に類例を集め、時間的・系統的な位置付けを行いたい。さらに、類例を集め、特定の土器群としての位置付けも行いたい。

さて、群馬県内で、この土器群を分析した論考として、長谷川福次氏の一連の研究がある（長谷川 2000・2001）。長谷川氏は、この土器群を「火焰形系土器」と呼称し、県内外から類例を集め分析されている。さらに、共存関係や層位的関係が明確ではなく、資料数も少ない「火焰形系土器」を「型式学的な作業仮説」を前提として、鋸歯状小突起の変化から「火焰形系土器が成立する前段階」、「火焰形系土器が成立」、「火焰形系土器が確立、盛行、終末」の3期の変遷を示された。また、確定的ではないとされながら、1期は勝坂1式（新段階）や大木7b式、2期は勝坂2～3式、3期は勝坂2～3式や阿玉台皿～IV式が伴出するとし、「火焰形系土器は火焰形土器を直接の祖とし、赤城山西麓、利根川・吾妻川合流地点周辺地域で独自の発達をした土器」と捉えられた。同時に、鋸歯状小突起の有無や口縁部の連弧文の踏襲、ほとんどの資料に縄文が施文されていることにも着目されている。長谷川氏の業績により、このタイプの土器が研究の俎に乗った。そして、多様な土器群が存在する中期土器群において、特色を有する一群として認識されるに至ったのである。

このように、長谷川氏の精力的な研究成果を受け、その後、若干ではあるものの資料が増加している今、非力ではあるが筆者も「火焰形系土器」について考えを巡らしてみたい。後述するが、このタイプは類例や共存資料に乏しい土器群ではあるが、「類型」としての位置付けを試みたい。具体的には従来「火焰形系土器」と位置づけられてきた土器群の一部を本稿では「道前前型」として捉え、「火焰形土器」や「火焰土器」を直接の祖形としない土器として考えていきたい。

1) 文様構成と類例資料

さて、図12-8に挙げた今井東平遺跡出土土器について、特徴的な文様要素を抽出してみよう。

①口縁部に配された中空突起。「火焰形系土器」の鶏頭冠突起は以前より広範囲にわたり出土していると考えられており、多様な突起も鶏頭冠突起の範疇として捉える傾向にある。そこで、ここでは鶏頭冠突起という特定の文様要素を避けて、中空突起として捉えておきたい。

②口頸部対向弧線。隆線による弧線が口頸部をめぐる。上位の弧線は口縁部文様帯に、下位の弧線は頸部文様

帯に接し、瀬線として半裁竹管による平行沈線が施される。上位、下位の弧線は9単位で隆線は無文であり、貼付方法は全体的に脆弱な印象を受ける。また、頸部の弧線に呼応するように、体部には平行沈線による弧状の文様モチーフが施されている。

③縄文の大地。地文として頸部から体部にかけて、まばらに施されている。縄目が浅いため、器表面が硬い段階での施文であろうか。

④口唇部鋸歯状小突起。口唇部に配された鋸歯状小突起は、裏面に明瞭な抉りを持つが、表面については抉りを有するタイプと有さないタイプに別れる。また、小突起形成時の表裏面接合による小突起上面の窪みも同様に有無がみられる。ところで、口唇部の鋸歯状突起施文は、群馬県大胡町船荷窪A地点遺跡や群馬県吾妻町藤原遺跡等出土の深鉢にもみられるが、その施文方法は滑らかで、口唇部と一体化しており、今井東平遺跡の立体的な鋸歯状小突起とは趣が異なるようだ。

⑤口縁部に施された隆線による波状文。幅狭な口縁部文様帯内に隆線を波状に貼付し、立体的な装飾を形成している。また、口縁部文様帯が張り出していることも注目される要素である。

このほかにも、横位隆線による頸部区画文や平行沈線による弧状モチーフが体部に施される点も看過できない文様構成である。

さて、今井東平遺跡出土土器の文様要素を観察していくと、この土器は口唇部装飾帯、口縁部装飾帯、口頸部文様帯、頸部区画文、体部文様帯から成立しているようである。

このように、諸特徴をあげた今井東平遺跡跡に顕著な文様として、①中空突起、②口頸部の対向弧線を重視したい。次項ではこの2点を優先して群馬県内及び長野県内の類例を集めたい。その際、完形資料あるいは体部上半の資料を優先し、破片資料や体部下半の資料は割愛した。

・道前前遺跡

図11-5は、JP-20号土壌より出土した、体部上位から口縁部にかけての土器である。口縁部に2対の中空突起を4単位配し、口頸部に波状の大きな対向弧線を施す。頸部は2条の横位隆線と橋状突起で区画する。体部には無節縄文を施す。

・行幸田遺跡

図12-9は、64号土坑より出土した頸部から口縁部にかけての土器である。口縁部に中空突起を配し、口唇部に鋸歯状小突起を付す。口頸部には刻みを有する対向弧線がめぐり、RL縄文を充満する。頸部にも刻みを有する隆線をめぐるせり区画文とするが、橋状突起を有する頸部区画文となる可能性も有する。

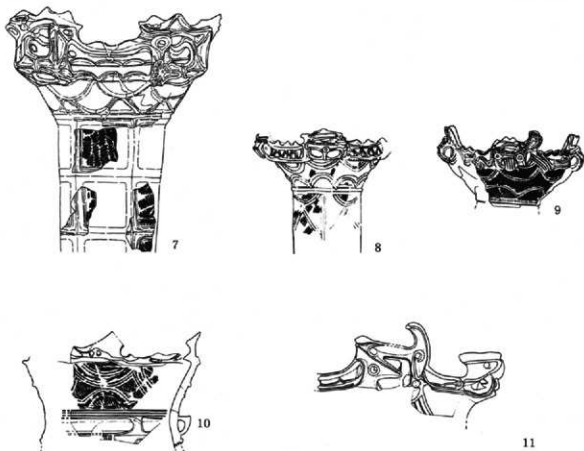


図12 「道訓前類型」類例資料(2) (n=1/8)

・沼南遺跡

図12-7は、104号住居より出土した頸部から口縁部にかけての土器である。体部は明確に接合しないが胎土等から同一の土器であると報告されている。口縁部に中空突起を配し、口唇部に緩やかな鋸歯状小突起を付す。鋸歯状小突起下、鶏頭冠状中空突起間に2連の小弧線をめぐらす。口頸部には、上下の弧線が接合する対向弧線が施される。体部に隆線による方形区画構成となり、RL 縄文を施す。

・大川遺跡

図11-3は、SB-14(住居址)より出土した、深鉢であり、唯一の群馬県外の資料である。口縁部に中空突起を配し、口唇部には突起が緩やかな鋸歯状文を付す。口頸部には、橋状把手により縦に4分割された区画内を隆線と沈線による対向弧線が施される。頸部は2条の隆線と4単位の橋状突起に区画される。体部は、頸部の橋状突起から垂下する隆線、半隆起線や三叉文が交互に施文されている。口縁部から胴部まで縄文が施されている。報告者の調査時の観察により、共伴資料が優れ、時期を特定する際の参考資料となる。詳細は後述したい。

・五代伊勢宮IV遺跡

図11-2は、D-93(土壌)から出土した深鉢である。

口縁部に中空突起を配し、突起から派生し、背が押捺された横位隆線が巡る。口頸部には、隆線と側線としての沈線により対向弧線が施される。体部文様帯は、半肉形りの横位の波状文を巡らす。口頸部にのみ縄文が施される。ところで、この土器は一個体の中で異系統の文様が共存する例である。土器共々、異系統土器の共伴や異系統による文様構成等、重要な研究視点を提示する遺跡である。

図12-10は、D-51(土壌)から出土した深鉢である。10は、中空突起を口縁部に配す。口頸部の残存が悪いものの、口縁部文様帯に接して弧状の隆線が巡ることが予想される。11は、D-65(土壌)より出土した。口縁部から体部上位にかけての土器片である。様相は不明瞭であるものの口縁部に突起が付く。口頸部には相対弧線と沈線がめぐり、縄文を施す。頸部は2条の横位隆線を巡らし橋状突起を配し、頸部区画文とする。体部は隆線や沈線により区画文構成をとると思われるが、判然としない。

・五代伊勢宮VI遺跡

図11-4は、D-984(土壌)から出土した完形の深鉢である。下部を眼鏡状に穿孔した鶏頭冠状の突起を口唇部に4単位配す。口頸部は、隆線と側線としての沈線に

よる対向弧線が施文される。相対弧線内は波状沈線やクラック状沈線により充填される。体部は沈線によりクラック状に施文される。口縁部から底部まで縄文が施文される。

図11-1はJ-11号住居跡から出土した土器である。現在のところ、群馬県内で初の住居出土例である。判然としないが、おそらく口縁部に中空突起が配される。口頸部には対向弧線が施文されるが、上位は波状が大きく下位は小さいという違いが観られる。頸部は2条の横位隆線と橋状小突起により区画され、区画内は波状隆線がめぐる。体部は逆「U」字状隆線が垂下する。口頸部から体部までRL縄文が施文される。

・久久保C遺跡⁹⁾

図11-6は、包含層出土の深鉢である。口縁部に大柄の中空突起を配し、突起間の口縁部文様帯には横位沈線を施す。口頸部に、丁寧な対向弧線がめぐる。頸部は2条の横位隆線をめぐらした4単位の橋状突起を配し、頸部文様帯とする。口頸部から体部にかけて縄文を施す。

以上のように、今井東平遺跡例の類例資料を集めた。個体数は少ないが、「道訓前類型」の確実な類例資料として、11点が挙げられると考えている。現在のところ、出土した遺跡をみると群馬県域では県北での出土例は知られていない。さらに、長野県域では大川遺跡のみである。今後、類例資料の検索を進め、分布範囲を詳らかにしたい。

このように類例資料を探った結果、「道訓前類型」としての共通項目が確認でき、一群の土器として理解できるものとする。次項では、「道訓前類型」の文様構成を再度考察し、文様帯・装飾帯内の施文方法について考えた。

ii) 各文様帯・装飾帯の文様施文の相似

ここでは「道訓前類型」に観察される幾つかの文様構成上の共通性を探ってみた。

今井東平遺跡出土例と類例資料から、「道訓前類型」は、口唇部装飾帯、口縁部装飾帯、口頸部文様帯、頸部区画文、体部文様帯から構成されていることが指摘できる。ところで、類例資料を検索する際に指標とした中空突起や口頸部文様帯の対向弧線という2大特徴の他にも、各々の個体間において若干の共通要素が存在するようである。そこで、ここでは各文様帯に施文された文様構成上の共通性を抽出したい。

必ずしも配されているわけではないが、大川遺跡や沼南遺跡、今井東平遺跡、行幸田遺跡のように、口唇部に鋸歯状小突起を施す例がある。さらに、この鋸歯状小突起は大川遺跡や沼南遺跡に観察されるように、小突起が疎らであり平坦な印象を受ける。その一方で、今井東平

遺跡や行幸田遺跡は小突起が密に配され立体的な印象を受ける。

口縁部装飾帯は、大川遺跡では小三角連続印刻、久久保C遺跡では横位平行沈線、沼南遺跡は2段の波状隆線、今井東平遺跡は波状隆線というように、各々の個体間でモチーフが大きく異なる。

体部文様帯は、例えば五代伊勢宮V遺跡(D-93)や大川遺跡は区画意識の違いはあるものの、五代伊勢宮V遺跡では半肉彫りの横位隆線、大川遺跡では小三又文の連続印刻を施すなど勝坂系の印象を受ける。さらに五代伊勢宮IV遺跡(D-984)においては、大木系のクラック状を意識した施文であり、沼南遺跡の方形区画文は群馬県域で連有に存在する施文手法である。体部文様帯は、施文パリエーションが豊富であり、共通する施文文様は見いだせない。

頸部区画文は、道訓前遺跡JP-20、久久保C遺跡、大川遺跡にみられる2条の横位隆線と橋状突起による幅狭の区画文や今井東平遺跡にみられるような1条の横位隆線による区画文に大別される。

中空突起はその形状が各個体間で大きく異なるが、必ず中空突起を配す点で共通している。

口頸部文様帯は大小の違いはあるものの隆線を基調とした対向弧線が施文される。側線である平行沈線が弧線の内外のどちらかに施される、あるいは上下の弧線が接するという様相も看取されるが、口頸部に隆線による対向弧線が施されるという共通性が指摘できる。

器形からは、底部から体部上半にかけて緩やかに開きながら立ち上がり、頸部で大きく反転することで共通性がはかれる。

この他にも口頸部から体部にかけての縄文施文⁷⁾、中空突起や頸部橋状突起に施されたボタン状の円形貼付文も二次的な共通施文といえよう。以上のように、様々な文様構成が指摘できる状況において、中空突起や口頸部文様帯の対向弧線の2つの文様要素が普遍的に存在していることは特筆される。さらに、各文様帯に施文される文様施文手法の相違、とりわけ体部文様構成のパリエーションの豊富さも指摘したが、この様相については別稿で考察したい。

iii) 時間的位置付け

前述したように「道訓前類型」は伴伴資料に恵まれておらず、時間的な位置付けに苦慮する土器群である。また、前項で示したように、文様構成は複雑であり施文方法も多岐にわたるため、型式学からも「道訓前類型」の発生と消長は確定できない。このような状況において、五代伊勢宮IV遺跡と五代伊勢宮VI遺跡、大川遺跡から伴伴資料が得られている。そこで、まず伴伴資料から得られる時期を把握し、次に、文様構成から比定できる時期

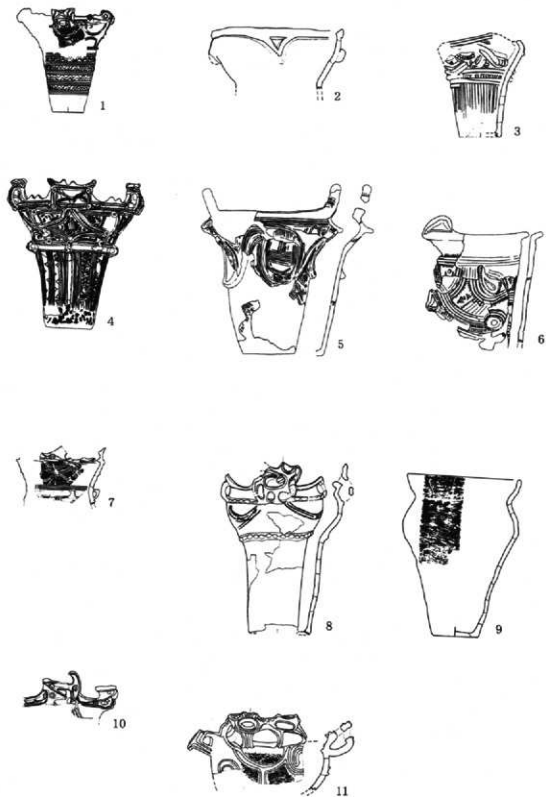


図13 「道訓前類型」 共伴資料 (共伴資料のみ S=1/8)

を模索したい。

五代伊勢宮IV遺跡、D-93(土壇)からは2点の深鉢が伴している。図13-2の深鉢は、肥厚した口縁部から派生した隆線により「V」字状の小突起を配し、体部は無文である。阿玉台II式期に比定されよう。ついで、図13-3は口頸部に平行沈線为主体に文様を描出する。頸部は連続爪形文の施された平行沈線で区画文を構成する。体部は平行沈線による懸垂文構成である。勝坂2式の古い段階の土器であろうか。D-51(土壇)からは2点の深鉢が伴している。図13-8は、口唇部に2単位の中空突起を配し、間に横状突起を持つ小形の副突起を設ける。中空突起、小形の突起は背が押捺された隆線により結ばれ、口縁部裝飾帯となる。口頸部には、施文方法が粗雑な弧状の平行沈線を施す。頸部には口縁部裝飾帯と同様な隆線をめぐらし区画文とする。体部は無文である。器形は、底部から緩やかに立ち上がり頸部最大の膨らみを持ち口縁部に向かって内湾する。中空突起や口頸部の弧線、頸部区画文など、「道訓前類型」との共通要素は多くみられる。器形の名から考えると、「諏訪タイプ」の器形と共通しているようである。重視したい土器である。図13-9は、底部から緩やかに外傾し体部上半で一旦膨らむ。頸部で内湾し、口縁部は緩やかに外反する。全体は無文である。D-65(土壇)出土の図13-11の深鉢は、口縁部に2単位の大形中空突起、2単位の横「S」字状をモチーフとした中空突起を施す。口頸部は2対の隆線により、弧文や渦巻文を描出する。地文として縄文が施文される。眼鏡状の中空突起や口頸部の隆線による渦巻文から大木8a式段階の土器としたい。図13-11のほかに、「焼町類型」に近似した深鉢も出土しているようである。重要な伴例である。また、五代伊勢宮VI遺跡J-11号住居跡も口頸部に対向弧線が施文される土器が伴しているようである。

大川遺跡SB-14(住居址)からは数点の深鉢が出土しているが、同一所産期の可能性が高いと報告されている2点の深鉢を例示したい。図13-5の深鉢は、口縁部に2単位の穿孔された突起を配し、体部は隆線を基調として楕円区画文で構成されている。楕円区画間は「S」字状隆線で結ばれ、連結部に小突起を有する。また、楕円区画下位にも連結部と同様な小突起を配する。体部中位から下位にかけて縄文が施される。類例の少ない資料ではあるが、施文方法等から「焼町類型」の系譜に連なる土器であろうか。図13-6の深鉢は、口唇部に突起を配し、口縁部は無文である。体部に3点の小突起を配し、各突起間を隆線で結び区画文を構成する。小突起、隆線には刻みが施され、平行沈線が沿う。区画文内は平行沈線や刺突文、三叉文が充填される。器形はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部で短く外反する。おそらく勝坂2式並行であろう。

以上のように、伴件資料からは「道訓前類型」は阿玉台II式新段階から大木8a式段階と比較的時間幅が短いと考えられそうである。しかし、伴件資料が少ないため積極的位置付けのことは控えたい。伴件資料の少なさを積極的に捉えるならば、この土器群の大きな特徴であるといえる。その反面、時間的位置付けの困難さを具現化している。そこで、伴件資料からの時期特定を補充させるため、文様構成の特徴からある程度の位置付けを試みたい。

前述したように、この土器群で通有に存在する文様として、中空突起と口頸部文様帯の対向弧線がある。中空突起は福島県の大木8a式段階にみられる重要な文様構成である。

口頸部文様帯に施文された対向弧線は、福島県の大木式とその系譜を求めることができるようである。

ついで、道訓前遺跡JP-20、久久保C遺跡、大川遺跡SB-14の頸部区画文にも着目したい。いずれも2条の横位隆線と橋状突起による区画文構成であり、口頸部文様帯と胴部文様帯を強く分離する役割を持つようである。この頸部区画文は、法正尻遺跡SK333や妙音寺遺跡SK259、桑名邸遺跡SK381からの出土土器にも観察されるものである。一方、新潟県域の該期土器に目を転じてみると、確かに火焔形土器には存在するが、「道訓前類型」の頸部区画文はおもむきが異なるようであり、近似する類例は少ないといえる。栃木県においても同様である。2条の横位隆線と橋状突起による頸部区画文は、「道訓前類型」において通有に施文されるわけではないが、注目すべき要素である。

次に、施文バリエーションが豊富で各個体間で最も共通性が高くない体部文様帯にも着目してみたい。道訓前遺跡JP-20、今井東平遺跡、大川遺跡SB-14出土土器の体部文様を縦位に4分割する施文方法は、大木8a式中段階にみられる手法である。沼津遺跡の深鉢にみられる体部方形区画文も、同様の解釈がてはまる。また、五代伊勢宮VI遺跡D-984出土土器の体部には、沈線によるクランク状文が施されており、大木8a式古段階の様相が看取される。一方、前項で記述したように、五代伊勢宮IV遺跡D-93出土の深鉢体部に施文された半円形の高隆線による多段の横位波状文は、勝坂2式段階の施文手法である。

中空突起、口頸部の対向弧線、頸部の横位区画文、体部文様及び前述の伴件資料から、「道訓前類型」は大木8a式段階には存在していた土器群といえる。

また、今井東平遺跡出土の土器に代表されるように、口縁部文様帯が突出する様相も、この土器群における特徴的な施文方法である。口縁部文様帯の突出は、大木8a式古段階から栃木県北域で観察される大木8a式新段階

際に見られる特徴であり、この土器群は栃馬県北域、あるいは福島県と群馬県の接点である尾瀬のルートを強く印象づける。

iv) 小結

以上、雑駁ながら今井東平遺跡出土土器を中心に、類型例資料を提示し、類型としての位置付けを試みた。また、各文様帯・裝飾帯に共通する文様要素を抽出し、その共通性を示した。

この土器の文様は、口縁部裝飾帯、口頸部文様帯、頸部区画文、体部文様帯から構成されているようだ。

このうち、口縁部裝飾帯と体部文様帯の施文バリエーションは豊富であり文様からの共通性は見いだせなかった。この土器群を特徴づける一つの様相としたい。頸部区画文は、2条の横位隆線と橋状突起による区画文構成と1条の横位隆線による区画文構成の2種類の様相が看取され、比較的にまとまっている。なお、口頸部裝飾帯として捉えた鋸歯状小突起は幾つかの個体で施文されているが、普遍的ではないため、本土器を構成する重要な文様要素として捉えたい。ところで、縄文時代中期中葉は各型式間において、文様の置換が盛行していた時期であり、「道訓前類型」も口縁部裝飾帯や体部文様帯の施文文様の多様性が挙げられる。このような状況において、中空突起を配し、口頸部文様帯に対向弧線を施すという共通性を保つ点は特筆されよう。もちろん、詳細に観察すれば、中空突起の形状や対向弧線に沿う側線の在り方などの相違が観察される。若干の時期差あるいは地域差を示しているのであろうか。今後の課題としたい。また、「道訓前類型」で通用ではないが、頸部区画文を構成する2条の横位隆線と橋状突起は、出土例が増えている「焼町類型」にも見られる文様構成である。「焼町類型」の分布範囲は長野県域や群馬県域、栃馬県域であり、「道訓前類型」の範囲と一部が重なるようだ。「焼町類型」と「道訓前類型」の相互関係を考慮したい。

残念ながら、「道訓前類型」はあまり共伴資料に恵まれず、単独出土も一つの特徴としているようであり、時間的に位置付けるのが困難な土器である。そこで、数少ない共伴資料と文様構成の特徴からこの土器群の時間的位置付けを導き出した。その結果、「道訓前類型」は大木8a式の段階には既に存在していたようである。観察を進め、さらに詳細な時期設定を試みたい。

「道訓前類型」は各文様帯内の文様モチーフにおいて、またある程度出土範囲を有する。そこで、この土器群を類型として把握し、考察を重ねていくことが最適であろう。出土量が多く、また著名な遺跡である道訓前遺跡にちなみ、今後も「道訓前類型」と呼称したい。

おわりに

以上、今井東平遺跡1区出土土器を中心に紹介をした。今井東平遺跡出土資料に関しては、前述のように、たとえば赤色塗彩された中期前半期の浅鉢や2個体一對の黒色磨研注口土器など、重要な資料が多く、今後資料化を重ねて随時紹介していきたい。今回は3名の共著の形を取ったが、必要に応じて多くの方に共著という形で参加していただく計画である。

今回は1区出土土器のうち、包含層出土の図9-24に注目した。従来「火焰形系土器」として、新潟県に見る「火焰土器」・「火焰形土器」に突起形状等が類似する一群として、問題提起のあった土器群に対して、本資料を介させ文様構成と類型資料を探り、大木8a式の影響下に、その様相を位置付けた。その上で改めて「火焰形系」という名称を外し、「道訓前類型」として仮称させていただいた。類型に関しては、県内資料を中心としたが、おそらく周辺地域にも同様な例は存在するものと考えている。ただし、例えば「金津火焰形系土器」とされる一群との様相差なども明確にしなければ、類型資料をあたえる際に混乱が生じる恐れがある。課題として明記しておきたい。

また、類型資料の共伴資料としては勝飯2式段階のものが認められており、中期中葉段階における、「土器群の個性化」ともいうべき時期にあたる。「異系統土器群の共伴」現象を背景に「小型式」「類型」群が混在する段階でもある。この段階の土器製作に関わる視線に大木8a式の色彩が濃く映えていたのではないだろうか。

しかしながら、今回提案した「道訓前類型」に関しては、類型数も少なく、検討すべき分析要素や課題は残されている。今後の研究蓄積を約束したい。

最後に、今回の資料紹介に際して、多くの方のご協力・ご指導を得ている。今井東平遺跡出土資料の紹介は、未だ緒についたばかりだが、今後も継続していく所存である。これからも温かく見守っていただき、お名前を明記し感謝の意を表したい。

石田 真 江原 英 小川卓也 小林 正 鈴木徳雄
富田孝彦 長谷川福次 姫恋郷土資料館 群馬県埋蔵文化財調査事業団職員諸氏

尚、出土資料のトレース・版組みは小見明美 関口照子 奈良美江 本望空子 茂木良子さんらにご助力を頂いた。併せて感謝したい。

本稿を昨年5月にお亡くなりになった下城正さんに捧げた。下城さんとは純文資料との思い出を手繰れば、限られた紙幅ではとても間に合わないだろう。下城さん独自の斬逸な感性と、縄文資料に対する真摯がなした様々な「技」が私たちを支えてくれていたように思う。

いつか、一息ついて一服しながら、お礼を言わなければならない。ご冥福をお祈りするとともに、下城さんの「技」の一端を受け継ぎ、群馬県内の縄文時代研究を充実していきたい。

註

- 1) 松島栄治 1981 『鎌原遺跡発掘調査概報—浅間山噴火による埋没村落の研究—』 埼玉教育委員会
- 2) 松島栄治 1999 『東平遺跡調査報告書』 埼玉教育委員会 (既刊されている)
- 3) 1号住居跡に関しては、松島・山口・福田の協議のもと、松島の調査所見を元に、福田が加筆修正を加え山口が記述を担当した。
- 4) 本文中にも触れたが、出土土器の図化抽出は筆者の個人的な判断による。今回掲載されなかった資料としては極少量の前期破片や後期破片が見られたが、細片のため別表した。
- 5) 藤田弘美 2003 『長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群』 『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』 縄文セミナーの会
坂井秀雄他 2000 『縄土遺跡』 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19—小瀬市内3—』 長野県埋蔵文化財センター
- 6) 旭久保C遺跡は、勢多郡富士見村に所在し、平成10・11年度にかけての発掘調査である。報告書の刊行が資務である。
- 7) 『火焔土器』の特徴の一つとして、非縄文施文があげられる。この点からもこの土器はおそらく火焔土器を直接の祖形としないようである。
- 8) 単発出土の多さは、県内における「道前前型」の立場をあらわしているのであろうか。客体的な土器と位置付けることも可能であろう。

参考文献

- 赤山容造 1990 『三原田遺跡 第2巻』 群馬県企業局
大賀 健他 1997 『新堀東郷→原遺跡』 松井町遺跡調査会
近藤雅順 2002 『五代伊勢宮VI・五代中原II遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
坂井美嗣 1992 『大川遺跡・中原遺跡群他』 東部町教育委員会
桜岡正信 1998 『跡場木遺跡』 『群馬県史 資料編1』 群馬県史編纂委員会
佐藤達夫 1974 『土器型式の実態—五領→台式と瓣版式の間—』 『日本考古学の現状と課題』 吉川弘文館
鈴木素行 2003 『越の旅人 自立編』 『新潟県立歴史博物館研究紀要』 第4号 新潟県立歴史博物館
高橋一彦・倉品敦子 2001 『五代伊勢宮田遺跡・五代深堀II遺跡・五代中原I遺跡・五代伊勢宮IV遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
塚原孝一他 1994 『三輪仲町遺跡』 栃木県文化振興事業団・埋蔵文化財センター
塚本節也 1990 『関東地方の火焔土器様式』 『火焔土器様式文化圏の成立と展開』 柳津町教育委員会
堀 隆 1997 『川原田遺跡』 御代町教育委員会
寺内隆夫 1997 『川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について』 『川原田遺跡』 御代町教育委員会
寺崎祐助 1999 『中部地方 中期(馬高式)』 『縄文時代』 第10号 縄文時代研究会
寺崎祐助 2003 『コメントA』 『新潟県立歴史博物館研究紀要』 第4号 新潟県立歴史博物館
富田孝彦 2000 『坪井遺跡II』 長野県町教育委員会
野村一寿 1984 『塩尻市焼町遺跡1号住居址出土土器とその類例の位置付け』 『中部高地の考古学』 III 長野県考古学会
長谷川福次 1997 『六反田II遺跡』 北橋村教育委員会
長谷川福次 1999 『道前前遺跡II 遺構・遺物』 『北橋村内遺跡VII』 北橋村教育委員会
長谷川福次 2000 『焼町土器について』 『土曜考古』 第24号 土曜考古

- 学研究会
長谷川福次 2001 『道前前遺跡の焼町土器』 『道前前遺跡』 北橋村教育委員会
長谷川福次 2001 『火焔系土器(群馬)について』 『考古要英』 梅沢重昭先生退官記念論文集
長谷川福次 2001 『火焔系土器について』 『道前前遺跡』 北橋村教育委員会
長谷川福次 2003 『国境を越えた土器様式』 『北橋村文化財年報』 3 北橋村教育委員会
羽島政彦 1986 『田中田・窪谷戸・見原遺跡』 富士見町教育委員会
羽島政彦 1987 『向吹張・若之下・田中・寄居遺跡』 富士見町教育委員会
福島県立博物館 1991 『企画展 縄文絵巻』
細野高伯他 1996 『鼻毛石中山遺跡』 宮城村教育委員会
水沢敦子他 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—更埴市内その3—更埴糸屋遺跡・矢代遺跡群—縄文時代編—』 長野県埋蔵文化財センター
水沢敦子 2003 『中期後葉の縄文を有する土器とその周辺』 『第16回 縄文セミナー 中期後半の再検討』 縄文セミナーの会
松村和男他 1999 『沼南遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
松本 茂 1990 『福島県の火焔土器』 『火焔土器様式文化圏の成立と展開』
森 幸彦 1998 『福島県内の大木8号式土器について』 『第11回 縄文セミナー 中期中葉から後葉の遺跡群』 縄文セミナーの会
山口逸弘 2001 『沼南遺跡縄文時代中期中葉末の土器様式』 『沼南遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬北辺の弥生社会

— 後期弥生集落の分析から —

大木 紳一郎

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 弥生社会の形成とその変遷 |
| 2. 沼田周辺地域の土器編年 | 5. 総括 |
| 3. 弥生集落の分布と構造 | |

— 論文要旨 —

弥生時代から古墳時代への変化は、文物のみならず社会構造の大きな変化をももたらした。それは、新たな社会の形成であり、同時に地域に根ざした弥生社会の崩壊をも意味する。群馬県では、東海地方西部を起点とするS字型に象徴される文化の伝播、ないしは集団の移動によって、古墳社会形成の端緒がひらかれた、と理解されている。古墳出現の背景、大規模水田開発、土器の大転換といったキーワードで古墳時代と弥生時代を対位させ、その歴史的な意義について多くの論者によって語られてきた経緯がある。しかしその多くは、統一史観が色濃く反映された、古墳文化の側からみた理解であったように思える。本稿では、古墳文化の普及が他よりも遅れたと考えられている群馬県北辺地域を対象として、その背景を解明するために、まずどのような弥生社会が形成されていたのか、そして時代の大きな変化にどのように対応したのかを明らかにしようとするものである。まず、群馬北辺における弥生社会の主要範囲である沼田台地周辺を対象地域として設定し、集落群の分布様相とその形成過程の把握を試みた。その前提として、時間軸となる土器編年を再検討し、従来「弥生後期後半」と一括して扱われてきた時期を細分した。あわせて、地域としてのまとまりを把握する手段として土器の地域色の把握に努めた。それらの検討により、時空的な位置づけを与えられた集落遺跡群を相互に関連づけることで、弥生社会の形成と変遷の動態を明らかにした。また、立地条件や存続期間、集落構造の特徴から、防衛的性格を併せ持つ集落の意義について検討してみた。その結果、沼田地域における弥生社会は、後期中葉から始まり古墳時代前期には解体すること、その変遷過程において環濠集落の形成と廃絶、拠点集落の成立、小村の分散、移住、合併といった動態がうかがわれること等が明らかになり、このような変遷を促す大きな要因として、「倭国乱」「邪馬台国連合と狗奴国の争乱」といった時代背景が関わった可能性についても言及した。

キーワード

対象時代 弥生時代後期
対象地域 群馬県北部
研究対象 弥生集落の動態

1. はじめに

旧社会が新しい文化を受容し、新たな社会に変革しようとするとき、また異なる社会体制のなかに組み込まれようとするとき、彼らはいったいどのように行動し、何を指して変化を遂げていったのだろうか。日本史の流れの中で、弥生時代から古墳時代への転換は社会構造そのものを大きく変えるできごとだった。地域社会を形成してきた弥生びと達にとって、まさにそのような大きな歴史上の転換を乗り越えるために、その対応が迫られたときであった。

東海西部地域を起点としたS字壺を主体とする土器群の東遷は、群馬の地に至って定着する。その前段階でも遠隔地からの土器の流入現象が活発化し、その背景には弥生社会全体を揺るがすような列島の規模の大きな動きがあったと想定されている。群馬県の古墳社会形成は、そのような外来的インパクトによって引き起こされ、最終的には群馬県全域を巻き込んだ地域社会の再構成という形で決着したと理解される。その過程や背景の解釈については、主に古墳文化形成史の側面から、多くの論者によって語られてきた。群馬県域への「植民説」などはその代表といえるだろう。S字壺を主体的に使用する集団（ここでは仮に「石田川集団」と呼称する）の存在を想定し、彼らを主人公として、あるいはその主導者として古墳社会が形成された、との解釈が大多数の考え方であろう。だが、実態として「移住民」がどのような集団として存在し、古墳文化形成にどのように関わったものなのか、具体的な論証は充分になされているとは言えない。その点については、「植民」や「移住」という現象まで考える必要はないとの反論（友廣 2003ほか）もあるが、少数意見として留まっているのが現状であろう。

筆者は、S字壺の持つ規格性の高さや、製作技術上の画一性、広範囲かつ大量の普及という事象からみて、地域色に彩られた後期弥生土器と異なり、専門的な工人集団による生産供給体制が存在したと考えている。それに従事した者達こそ、東海地方からの「移住民」だったのではないだろうか。S字壺を主体的に用いる石田川集団のうち、受容する側であればその出自を東海地方に求める必要はない。土器からいえるのはその辺りまでである。群馬県における古墳社会形成に、東海勢力の果たした役割は決して小さくないと思うし、必ずしも過小評価するわけではない。だがそれを正当に評価するには、東海地方と関連する考古遺物や、墓制、集落形態、祭祀形態などの状況証拠を丹念に積み重ねていくこと以外はないと考えている。

このように、群馬県における古墳社会形成の主役として、常に主張されてきたのは石田川集団の動向であり、その果たした役割の大きさであった。だが実態はどうだったのか。それまで地域社会を創り上げてきた在地の

弥生びと達は、この歴史の荒波に対してどう対応したのだろうか。自ずから日用土器としてS字壺を採用し、「石田川集団」に支配された場合もあろうし、新たな地域再編に抵抗を続けた集団もいたはずである。そこには、地域弥生社会の持つ地理的環境や利害関係、集団内規範や集団間の絆の強弱など、多様な条件によって、各々の集団毎に、能動的な変貌はもとより、妥協、服従、抵抗などの様々な対応が迫られたことだろう。そのような弥生びと達の対応の実相を明らかにすることで、古墳社会への転換が歴史上に示す意義を、別の側面から評価できるのではないかと考えるのである。それは、新たな時代を迎えようとする弥生びと達の視点に立つことであり、この時代を古墳前史ではなく、弥生時代の続史として扱うことになるだろう。

以上のような問題意識の上に立ち、本稿では最も遅れて古墳文化を受容したと捉えられている群馬県北辺地域（具体的には沼田市周辺地域）の弥生社会を取り上げ、その形成史と動態を明らかにすることを目的とし、やがて地域再編を達成することになる、古墳社会形成史の地域の実相を探ろうと思う。沼田周辺地域を取り上げたのは、待望久かった沼田市日影平遺跡の報告書が刊行され、県内でも希有な後期環壕集落の全貌が明らかにされたことが、その契機になったのは間違いなし。また、既に公表されていた戸神諏訪遺跡や石墨遺跡、糸井宮前遺跡等の、弥生後期～古墳前期の集落遺跡に関して、地域社会内での位置づけをめぐる再評価の機会を窺っていたことも確かだ。

集落動態から地域弥生社会の変遷を探る、との試みは、すでに榛名山東麓地域を中心に緒論を展開した若狭徹の業績（若狭 1989・1990）がある。本稿で行う弥生集落の分析も、氏の考え方に強く刺激されたところが多い。及ばずながら、地域を替えて同様の検討を試みるに過ぎないのだが、十分な検討資料という条件さえ整えば、他の各地域においても、独自の弥生社会形成史が解明されてしかるべきだと考える。

弥生集落の一部しか判明していない大多数の遺跡例をもとに、集落動態や弥生社会形成史まで解明しようとの試みは、ともすれば、憶測に依拠しただけの空論に陥る危険が無いわけではない。だが、たとえそのような仮説だったとしても、不確定要素を恐れるあまりに、モデルケースに準じた図式的理解に終止することは、独自の歩みを留めていたはずの地域形成史を、正当に解釈することには繋がらないと考える。対象を一地域に限定した理由もまた、そこにある。

2. 沼田周辺地域の土器編年

(1) 構式土器編年の概観

まず、本論の分析対象となる弥生集落の時間軸上の位

置づけを明確にするために、沼田周辺地域における弥生土器編年について概観し、更に後期後半に相当するV-3期(若狭 1996)の細分案について検討することにした。なお本論では、土器編年の時期区分名称について、若狭の提示したI~V期の5期区分名に従い、必要に応じて「前期・中期・後期」の呼称を付すこととする。

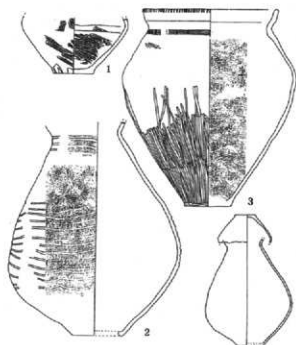
沼田周辺地域におけるIII期(中期中葉)以前の資料は断片的で分布も非常に稀薄であり、現状で遺構に伴う例はほとんど知られていない。

月夜野町八東腔洞窟遺跡は、再葬墓関連の人骨を出土した遺跡として知られており、ここからIII期に遡る土器片が出土している。中期後半にあたるIV期¹⁾では、栗林式(竜見町式)²⁾を出土する住居跡が利根郡白沢村寺谷遺跡で検出されており(図1、4~10)、また利根郡昭和村川額軍原遺跡からは単独の壺形墓(図1-1~3)が検出されている。調査による発掘資料ではないが、利根郡川場村立岩から出土した川原町口式あるいは山草苜式とも比定される完形の壺は搬入品の可能性も考えられ、この時期における東北地方南部との直接的な交流の存在を裏付けるものとして注目される。

IV期に続く後期初頭のV-1期についても、出土資料は稀少だ。利根郡月夜野町十二原遺跡4号住居跡から出土した樽式の一括資料(図2)が注目に値するのみである。ただし住居跡1棟のみであり、同遺跡及び周辺地点ではこれに後続する遺構は判明していない。同様に後期前半にあたるV-2期の資料も少ないが、同一遺跡内でこれ以降に後続するV-3期の樽式土器が豊富に見られる例が数カ所知られる。従って現在判明している資料による限り、沼田周辺地域における長期定着型の集落形成はV-2期からと考えて良さそうだ。そこで、V-2期以降の土器群について、沼田周辺地域を対象とした編年細分案を検討してみたいと思う。

ところで、樽式土器が後期の土器としての編年の位置を獲得して以後、その時期細分作業については、井上・柿沼両氏によって二分されたのが最初といえる。甘楽郡甘楽町笹遺跡出土資料を代表とするA類、水沼遺跡出土資料をB類として古新の2時期に分けたのがそれだ(井上・柿沼 1977)。樽式に先行する栗林式(竜見町式)と水沼遺跡資料との中間的な器形や文様をA類として位置づけたわけで、類縁関係の強い長野県における栗林式→吉田式→箱清水式の変遷を視野に入れてのことと思われる。また、B類よりも古相で異系統の可能性のある剣崎遺跡や分郷八崎遺跡例をB'類として分離した。さらに弥生終末期に位置づけられていた石田川式に近似する様相がみられるとして、東小学校遺跡例をB類でも最新段階に位置づけ、樽式B類がさらに時期的細分できる可能性についても言及した。

相模原史・三宅敦教は県内各地の発掘調査で急増した



1~3 昭和村川額軍原
4~10 白沢村寺谷

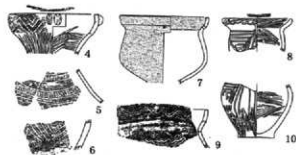
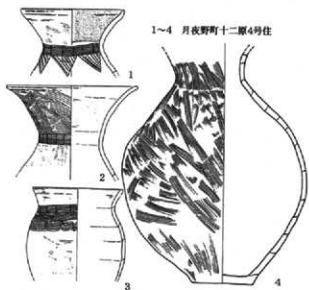


図1 沼田周辺地域のN期の土器



1~4 月夜野町十二原4号住

図2 沼田周辺地域V-1期の土器

豊富な資料を用いて、4時期細分を行った(三宅・相京1982)。井上・柿沼のA類をI・II期、B類をIII、そして土師器への移行期としてとらえる段階をIV期とした。注目されるのは、遺跡分布の在りようから群馬県に5地域を想定し、特に資料の多い榛名山東南麓と赤城山南麓の両地域を比較して、構式のなかの地域差の存在に言及した点だ。ただしここでは、両地域の差は大同小異であると、各地域色の抽出は後の課題であると指針を示すにとどまった。飯島克巳・若狭徹は榛名山南麓の豊富な資料を用いて、器形と文様の変遷過程から各器種の型式組列を導きだし、共存出土例から器種組成を検討、そしてその時間的先後関係をもとに、1～3期の3時期区分を行った(飯島・若狭1986)。また、県内の構式分地域を5地域に分け、それぞれの地域でこの3時期区分が通用することを検証した。そして、この地域別検証において、笹道跡例で見られるように鍋川流域では榛名山南麓とは異なる地域色が見られること、利根川上流域では地域色として抽出しうる壺の存在を指摘した。なお、相京・三宅の提示した第IV期については、すでに構式のもつていた様式構造が崩れているとの考え方から、構式から除外している。

高崎市新保遺跡の出土資料を用いた佐藤明人の編年(佐藤1988)、県内全域を扱った入沢雪絵・加部二生の編年(入沢・加部2000)も、飯島・若狭の編年観とほぼ同様の結論を示している。すなわち、後期にあたる構式の3期区分編年であり、後に若狭は県内の弥生土器を1～V期に大別し、後期にあたる時期をV期と呼称したが、細分内容に基本的な変更はみられない(若狭1996)。

以上にみたように、土師器への移行期を弥生・古墳時代のどちらに含めるかという議論をのぞけば、構式の3分案はすでに研究者間ではほぼ定着していると言っている。飯島・若狭が検証したように、群馬県全域を対象とした場合、この3期区分が有効なのは確かだ。しかしその一方で、地域によってその変遷過程が微妙に異なっており、それはV～3期に顕現化する地域色の発生と展開を説明することで明らかとなる。

本稿で対象とする沼田周辺地域の土器編年については、戸神諏訪遺跡、糸井宮前遺跡、石墨遺跡等の報文の中で、それぞれの遺跡出土資料の位置づけが行われている。ここで編年細分の検討に先立って、簡単に触れておこうと思う。

石墨遺跡以外は、各器種の型式分類を行った上で、主に住居跡伴伴資料をもとに時期細分を試みている。時間的先後関係の判断は、構式だけで構成される段階から土師器に転換する段階への変遷と捉え、その間に移行期を設定するか否かという点に若干の相違がうかがえる。同一の集落で、ほぼ時間幅を共有するにもかかわらず、戸神諏訪遺跡では4期区分、戸神諏訪III遺跡では2期区分

としているのは、この移行期に対する考え方の違いによる。ただ、いずれも弥生終末期～古墳時代前期との時間幅で捉えることは共通している。石墨遺跡では、土器そのものではなく、住居形態の変遷に新旧時間差を求めることで編年細分を試みた。土器の編年作成手続きとしては変則であるが、結果は戸神諏訪遺跡と同様の編年観を導き出している。それらの編年観に従えば、戸神諏訪遺跡から糸井宮前遺跡までが非常に短い時間幅でしか捉えられないことになる。だが、これらの遺跡で検出された住居群には、重複関係や著しい密集状況が認められることから、実際にはより長い時間幅を想定せざるを得ないのではないかと。かつて筆者は、富岡市にある中高瀬観音山遺跡と南蛇井増光寺遺跡の土器編年細分案を手がけた際、V～3期として一括されていた構式土器が、地域と遺跡を限れば時期細分は可能であり、思いのほか長い時間幅を有することに気付かされた経緯がある。これまで後期後半あるいは後期末～古墳時代前期として扱われることの多かった、沼田地方のこれらの集落遺跡についても、同様な捉え方が可能ではないかと考えている。それには、土器の先後関係を保証する型式組列の検証と、同時性を保証する厳密な意味での共存関係の再検討が必要だ。このような作業は、個別遺跡での限られた資料だけでは困難であったと思われるが、戸神諏訪遺跡や糸井宮前遺跡の成果が公表されてから10年余りたった現在、日影平遺跡をはじめとする沼田市周辺地域の新たな弥生土器資料が続々と公表されたことで、地域を対象とする土器編年あるいは地域色の検討が可能時機がようやく到来したと考えている。本稿のはじめに、従来の編年観を見直し、新たな編年細分案を提示しようとする所以も、これら新資料の公表に促された感がある。

後述する編年案作成の対象としては、これまでに公表された沼田周辺地域の構式土器にできる限り限定した。その際に問題となる共存関係については、同時存在の厳密性を保つため、堅穴住居出土遺物のなかでも、同時性の疑われる埋土中の土器はもちろん、床面に接している埋没過程での廃棄の可能性が考えられる中央付近出土品は一括遺物として扱わなかった。また、壁原や炉内、貯蔵穴などからの出土であっても、小破片資料は流れ込みの可能性が考えられるため、二次的な資料として扱った。可能な限り、このような厳しい条件を設けて共存資料の抽出に努めたが、廃棄時の一括性が認められる完形品や大型破片に関しては、不足を補うための補充資料として参考にした。なお、出土位置の認定は、報告書所載の遺物出土状況記録に準拠したため、完形品であっても位置の不明確な資料に関しては割愛せざるを得なかった。また、器形の細かな特徴や文様、整形技法についても報告書所載記録に追うところが大きい。後日の資料実見により訂正余儀なき部分も生じるのではないかと危惧

もされるが、あらかじめことわっておきたい。

(2) 樽式土器の器種と型式的特徴

ここではまず、沼田周辺地域における樽式土器、とりわけ本論で取り扱うV-3期(後期後半)について型式的特徴と器種組成について略述しておく。

図3に掲げた土器がV-3期の主要な型式的特徴をもつ代表的な器種である。ここにみる型式的特徴はV-3期の時間幅をとおして不変と考えるものである。まず各器種毎にその特徴を述べ、のちに経時的变化の把握できる壺と甕について組列を試みるつもりである。

大型壺 器高50cmを越える大型品。「ラップ」状に開く口縁と倒円形か球形の胴部の器形で、口縁は矮小化した一段の折り返し口縁が主流を占める。文様は頸部に簾状文、胴部への櫛歯波状文と櫛歯垂下文が主流。垂下文下端に円形貼付文を付すのが基本構成。口縁部には櫛歯波状文を施す場合もある。なお、胴部に櫛歯T字文を施す例も知られるが、これは箱清水式の影響。整形は外面が研磨、内面はなでか刷毛目。赤彩は箱清水式の影響の強い例以外には見られない。

中・小型壺 器高30cm以下。器形の特徴は大型壺と同じ。折り返し口縁と単口縁がある。文様は、頸部簾状文と胴部櫛歯波状文が主流で、簾状文の代わりにT字文を施す例もみられる。ここでも大型壺と同様に胴部波状文に櫛歯垂下文を加飾する例がある。口縁部への施文はほとんどみられない。また量的に少ないが赤彩品もある。整形は大型壺と同じ。

短頸壺 図示できる完形品がないが、他地域例から短く開く単口縁に肩の張る球状胴部の器形をもつと考えられる。基本的に赤彩で頸部に簾状文か櫛歯横線文を施す。なお、器高10cm以下の小型品もあり、口縁の緊縛孔から常時蓋を伴ったことが明らかである。

甕 器高20~40cmにほぼ含まれる。外反するやや長目の口縁と胴部の強く張る器形。口縁には折り返しと単口縁の二種がみられる。文様は口縁から胴部付近までを櫛歯波状文で充填し、頸部を簾状文で画するものがほぼ半数を占める。口縁から頸部にかけてくびれる形状や胴部の膨張形状などいくつかのパラエティーがみられ、ここに地域色や経時的变化を看取することができる。整形は内外面とも無文部を研磨する³⁾。

小型甕 器高15cm前後からそれ以下のものを含める。器形は口縁が短く外反し、胴部は張るが胴径が口径と同じかそれ以下のものが多い。文様や整形は甕と同様である。**大型高杯** 杯部形状で三種に分類できる。直状か内湾きみに開くA類、杯部中心で直立か内傾し口縁で外折するB類、杯部中心から屈折して外反するC類で、数量的にはA類が主流。脚部はいずれも円錐形が基調。いずれも赤彩品が多く、B類は口縁下の直立部分にしばしば櫛歯

文で加飾する。なお箱清水式には口縁が曲線的に開く形態が知られるが、沼田周辺ではほとんどみられない。またC類は割合が少なく、図示例は口縁部の瘤状貼付や脚部の三角形透し孔から箱清水式の影響と考える。

小型高杯 大型高杯A類と同様の形状。赤彩品のほか無彩品もあり、新しくなるにつれその比率が増す。また少数ながら杯部が小振りで直線的に開く例もみられ、地域色として捉える可能性を示す。

台付甕 口径15cmを越える大振りのものから、口径10cm前後の小振りのもの、また口径と器高が10cm以下の極小品までを含めた。口縁が短く外反し球形に近い胴部と円錐形に開く脚部が標準形。文様と整形は甕と同様で、口縁と胴部に円形貼付文を付す例がみられる。なお、極小品は容量が極めて小さいことや赤彩例もしばしばみられること、また加熱痕が認められないことから、「煮る」よりも「盛る」機能と考えられ、用途上の器種分類であれば高杯や鉢の一群に含まれよう。

小壺・小甕 口径・器高が10cm以下の極小品の類で、壺形を「小壺」、甕形を「小甕」と呼ぶことにする。また台付壺形もこれに含めた。形状はいずれも中・小型壺、甕のミニチュアと呼ぶにふさわしいが、文様や研磨による整形、小壺にみられる口縁緊縛孔などから、実用品である。少量の貯蔵や供膳、飲料用などの用途が想定される。

鉢 やや内湾する載頭円錐形で、口径15cm前後のものが多い。口径20cmを越える大型品もあるが器形は同じである。また少量だが小さな片口の付く例もみられる。赤彩品と無彩品がみられるのは小型高杯と同様。

有孔鉢 口径と器高がほぼ同大の載頭円錐形で、口縁形状に単口縁と折り返しの二者がみられる。また底部孔は中央一孔が標準だが、多孔も少数みられる。整形は研磨が基本で赤彩や施文などの加飾はしない。

蓋 円錐形の天井部に皿状の横みを付す。頂部に穿孔の有無があり、いずれも多用。なお、短頸壺の緊縛孔から小振りの壺用蓋も存在したはずだが、図示しうる好例がない。

片口鉢 深めで碗状に開く体部に注ぎ口を一つ所付けた器形。安定した平底と円錐形の脚付きの二者がある。また注口は筒状もみられるが少数。整形は無でや粗い研磨が多く、基本的に加飾はされない。しばしば、内面から注口部にかけて白色灰状物の付着が認められ、他器種と異なる特殊な用途の専用器と考えたい⁴⁾。

(3) 地域色の検討

沼田周辺地域におけるV-3期の型式的特徴に、群馬県内他地域の樽式土器と比べていくつかの地域色といえる特徴を指摘することができる。ここでは対比資料の豊富な壺と甕について検討してみることにする。

壺の口縁形状について、沼田周辺地域は矮小な一段の折り返しにほぼ限られていて加飾が少ないのが特徴だ。

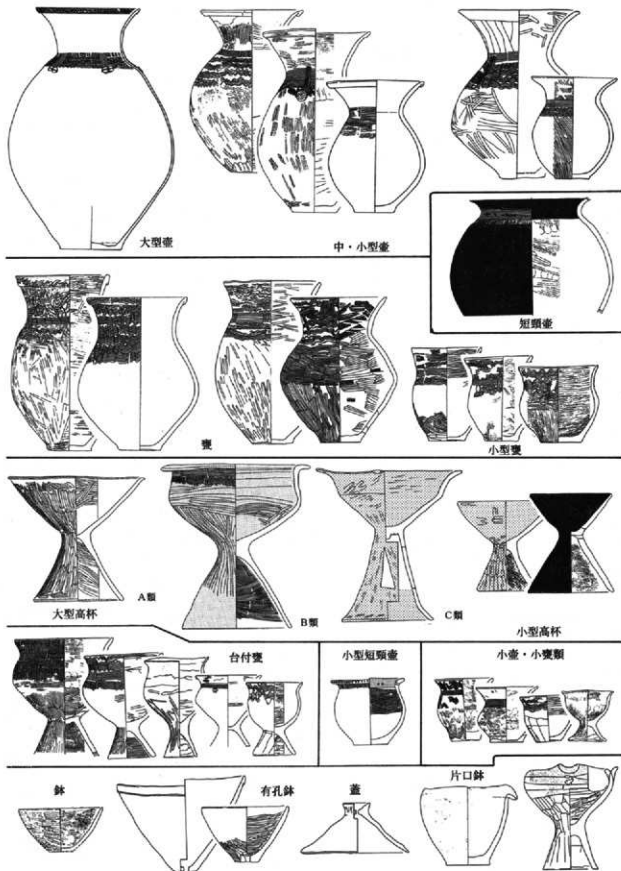


図3 Y-3期の主要器種

一方、渋川・高崎地域では一段のもの以外に二段以上の多段折り返し口縁で、そこに刻みや刺突で加飾することが盛行する。文様では、頸部簾状文と肩部櫛描波状文の組み合わせを基本構成とし、これに箱清水式のT字文の影響を受けていくつかの類型が生まれる。沼田周辺地域では基本的な文様構成をそのままに、櫛描垂下文と端部の円形貼付文のみを加えたのが特徴だ。渋川地域では、頸部の簾状文をT字文に替えて肩部の櫛描波状文と組み合わせる構成を採用した(図4)。基本的な文様構成を同じくしながら、外来系の文様を受容するにあたって異なる文様デザインを作出したのだ。垂下文のみを取り込んだ沼田周辺地域では、特に横帯文様を縦線で区切るという文様モチーフの伝統があったわけではない。両地域で文様デザインに嗜好の差が生じたしと言いようがない。あるいは、わずかな相違であれ自集団のアイデンティティを表現したと理解すべきなのかもしれない。

壺はその器形に注目する必要がある。前述した器形の特徴は樽式に通用のものだが、沼田周辺地域では頸部屈曲の形状からさらに二種に細分できる。頸部が屈曲さみのA類と、緩やかな弧線を描くB類である。A類は頸部を境に上位の口縁側を外反、下位の胴部側を内湾さみに成形した結果であり、これに対してB類は胴部中部の最大幅部分から口縁までを弓なりにくびれる形状を目指したものと考えられる。このうちA類は県内各地で通用の一般的な器形だ。B類は他地域ではわずかな存在で、沼田周辺地域では全体のほぼ半数近くを占めるようだ⁹⁾。また文様については、一般的な簾状文と櫛描波状文の組み合わせのほかに、波状文のみを充填するものが多いとの指摘がある(佐藤 1988)。かつて筆者は月夜町町諏訪遺跡出土土器の検討から、B類の壺と波状文のみの文様構成とを関連づけ地域色の可能性を示唆したことがある(大木 1984)。B類や波状文のみを施文する例は少ないながら他地域でもみられることから、沼田周辺地域だけの地域色とは言い切れない。だが他地域に比べて量的な比率がかなり高いという印象は強い。次に施文部位についてだが、V-3期の壺は口縁から肩部までを櫛描文で充填することを指標的な特徴とする(飯島・若狭 1988)。これを基本形としながら、沼田周辺地域においては口縁～頸部を主要施文部位としており、肩部への施文に重点が置かれぬ傾向がうかがえる。詳細な比較をするならば、高崎・渋川地域では肩部に櫛描波状文を3段以上重ねることで口縁部とほぼ同幅の文様帯をもつものに対して、沼田周辺地域では肩部波状文帯が2段以下が多く無文例もみられる。樽式分布圏西端に位置する富岡地域では、これと逆に肩部施文のみで口縁部を無文とする文様構成が盛行し(大木 1997)、さらに峠を越えた北・中信の箱清水式では胴部下位付近まで幅広い波状文帯をもつことを特徴とする。このような施文部位の相違はV

3期を通して終末期まで継続することから、地域色として定着した文様デザインと捉えていいだろう。

ここにみてきた土器の地域色は、樽式という一式内での小変異、あるいは嗜好の傾向に過ぎないのだが、それが一定の空間的存在として認められる限り、その背景に土器製作における同一嗜好性を共有する人間集団のまとまりを想定することは許されよう。ただし、それが弥生地域社会のなかのどのようなレベルの集団に相当するのかという問題についてはここでは触れない。それには土器の文様や形にみるデザインが人間集団のどのような側面を表徴しているのか、あるいは土器製作そのものが集団社会のなかでどのような位置づけにあるのかといった理論的前提のもとに解明されるべきと考えるからだ。ここでは壺と甕にみる地域色の存在を指摘するに止め、その変遷と地域内での在り方について検討する。

(4) 型式の組列と編年

ここではV-3期の樽式土器編年を細分するため、その時間軸となりうる壺と甕について、型式の組列について検討を行う。対象として選んだのは大型壺・中型壺・甕の三種である。各器種毎の類別と組列について以下に述べる(図5)。

大型壺 1～5類に分けられ、変化の方向性を①口縁部の外傾化②頸部の屈曲度③球脚化④文様の形態化に求め、1類→5類へと順に変遷をたどるものと想定した。①②③の変化要素は個々に独立するのではなく、器形を形づくる各部位に分解したのに過ぎず、その変化が相互に関連していることはいうまでもない。

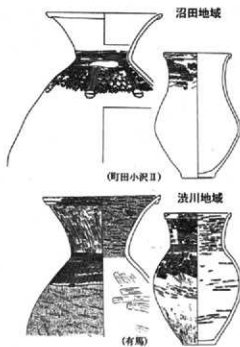


図4 地域色の比較

1類—口縁は外反ぎみに小さく開き、断面三角形の折り返し粘土帯を付す。頸部は「く」の字状に近い弓なりの屈曲。肩部は直線的に開いて下影れの胴部に続く。折り返し口縁の外面に櫛波状文を主に施文、頸部の簾状文は等間隔止めか間隔の狭い二連止め、肩部には数段からなる櫛波状文帯。

2類—口縁はやや伸長し中位でやや角度をへたえて外反し、端部は薄く短い折り返し。頸部は弱い「く」の字状に屈曲。肩部はやや膨らみをもって弱く内湾しながら下影れの胴部に続く。頸部の簾状文は二連止めのほか多連止めもみられる。T字文の影響による櫛波垂下文がみられる。

3類—口縁は全体的に外反して開き、端部形状は2類と同じ。肩部の膨らみが強くなり、結果的に頸部は「く」の字状に強く屈曲する。胴部は最大幅がやや下位にあり、楕円形に近い形状もみられる。口縁はほとんど無文で、頸部～肩部の文様が部分的に省略されるものがみられる。

4類—図示した例は口縁を欠くが、3類と同様に大きく外反して開く。頸部屈曲は強く外折し、肩部が大きく膨らむため胴部は球形に近い。文様は3類と同じ。

5類—口縁は短く外反し端部が外折する。図示例では口縁端部の折り返しがない。頸部から胴部形状は4類と同様だが、上下にやや潰れた形状。文様はない。

大型壺の変遷過程をまとめれば、口縁の外反化と球胴化は同時に進行しており、それとともに胴幅が大きく、器高の低い形状へと変化する。文様では、樽式の基本形ともいえる頸部簾状文と肩部櫛波状文の文様構成が1類ですでに確立しており、2類以降に沼田周辺の地域色として指摘した櫛波垂下文との組み合わせが主流となる。3類は最も類例が多く、口縁の外反度や胴部の球形度、さらに文様の省略度などで変化も多い。それだけ時間幅を有した可能性が高いが、ここでは細分を避けた。なお、4・5類は出土数が少なく図示例を代表とせざるを得なかった。

中型壺 5類に分けられ、大型壺と同様の変遷をたどるものと想定した。

1類—口縁は上半が直線的、下半から頸部が曲線的に外反して開き、端部は小さな折り返しとなる。頸部は細く膨らむが曲線的な屈曲。直線的な中で肩で下影れの胴部に続く。文様は口縁端部に波状文、頸部に簾状文（図示例は間隔の短い三連止め）、肩部に二段の櫛波状文。

2類—1類に比べて口縁がやや伸長し、中位で屈曲して外反する。端部は折り返しと単口縁がみられる。頸部径が口径に対してやや大きく、屈曲は「く」の字に近い曲線。やや膨らみを持つ中で肩で丸みを帯びた下影れの胴部に続く。文様は頸部簾状文と肩部櫛波状文の組み合わせにT字文の影響による櫛波垂下文が加わる。口縁端

部での施文が省略される例もみられる。類例が最も多く、変化もみられる。図示した二例は器高の高いものと低いもので、後者は口縁の開きが大きく球形に近い胴部形状から前者よりも3類に近い位置づけができてしまう。

3類—口縁は大きく開いて端部では水平に近い。頸部は曲線的ながら強く屈曲し、胴部は球形。2類と同様の文様構成を残すが、部分的に省略する例が増える。口縁は無文。

4類—形状は3類に近いが、無文。口縁が短くなり頸部は鋭角的な曲線で屈曲する。整形では口縁～頸部外面の研磨が粗雑になる。

5類—無文。口縁端部の折り返しが無軌跡で、頸部の屈曲は稜をもって外折する。胴部は完全な球形か上下に潰れた楕円形。口縁内面や外面の口縁～肩部への研磨が省略される。

1類は全形が知られるのは少ないが、V—2期の形態に近い。大型壺と同様に、口縁外反化と球胴化が進み、さらに小型化も変化傾向として捉えられる。垂下文を加える文様構成は2類に始まり、以後省略化→無文の過程をたどる。2類が最も量的に多く変化もみられることから、時間幅が長いことが想定される。

壺 6類に分類され、さらに2～4類は前述したA・Bの2類に細分される。

1類—口唇部が内湾気味で口縁は短く直線的に外傾する。頸部は丸みをもった「く」字状。胴部は中位がやや張る楕円形。文様は口縁端部に櫛波状文、口縁中位に間隔を空けた波状文帯、頸部は止間隔の狭い簾状文か波状文、肩部に2段程度の波状文帯。なお、肩部無文例もすでにみられる。図示例では内面を刷毛目整形としており、「内面研磨」がまだ十分に定着していない。沼田周辺地域での類例は少ない。

2 A類—口縁がやや伸長し、端部は折り返し。胴部形状は楕円形。口縁～頸部は櫛波状文帯を重ねて充填し、頸部には簾状文。肩部には2段ほどの波状文帯。内面は丁寧な研磨。類例少なく、全形の判明するのは図示例のみ。

2 B類—口縁から胴部最大幅部分までが弓なりの曲線で、胴中位が強く張り出す。口縁端は単口縁にほぼ限られるようだ。文様と整形は2 A類と同様。

3 A類—口縁が伸長し弱く外反する。口縁端部の折り返しが多くなる。頸部のくびれは弱く屈曲。胴部は中位がやや張り出す。文様は2類と同様で、簾状文は二連止めが主。

3 B類—口縁と胴部形状は2 A類と同じ。頸部は弓なりの曲線を描く。文様は波状文のみの構成が多い。

4 A類—外反する口縁で端部がさらに小さく外反する。頸部の屈曲が強くなり、胴部は球形。また、口縁が短かく5類に近い例もみられる。文様は、頸部の簾状文が間

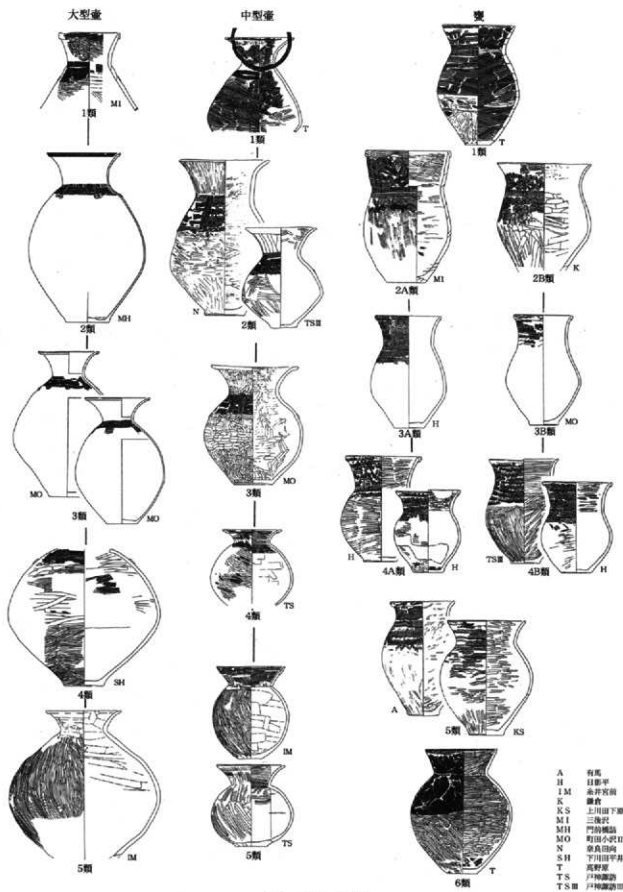


図5 壺と甕の組列

- A 有馬
- H 日影平
- IM 赤井宮前
- K 鎌倉
- KS 上川田下原
- M1 三股沢
- MH 門田横田
- MO 町田小沢目
- N 奈良田向
- SH 宇月田平井
- T 滝野原
- TS 戸神原野
- TSB 戸神原野田

延びて多連止めが増える。

4 B類一臼縁と胴部の形状は4 A類に準ずる。頸部は曲線的だが、球胴のため3 B類よりも強く締まる。

5 類一臼縁が短小化し端部は外折気味、頸部は弱い「く」字状に屈曲する一群で、最大幅が上位で肩の張る胴部が多い。文様構成が乱れるが省略される例が現れ、これらは単口縁か痕跡的な折り返しの臼縁端部を呈する場合が多い。5 類のなかでも新しい一群として理解したい。なお、沼田周辺地域内では全形を知る資料がないため、ここでは渋川市有馬遺跡例を図示した。

6 類一短く直線的に外折する臼縁で、胴部は球形、無文。臼縁端部は単口縁か痕跡的な折り返し。内面の研磨は維持されるが、臼縁へ胴上半の外面整形に刷毛目仕上げのものが現れる。

壺1類は類例が少ないが、若狭編年(1996)のV-2期新段階に併行すると考える。また2 A類も少ない。この時期に属する遺跡数が稀少であることも考え得るが、占める時間が短く3 A類に早い段階で変換を遂げた可能性が考えられよう。沼田周辺の地域色と捉えた壺B類は2類から始まり、臼縁の短小化と球胴化が進んだ5類にはA・Bの区分は不明瞭となる。文様については、頸部簾状文と波状文の組み合わせ、及び波状文のみを充塞する構成の両者とも、1類から5類まで維持されるようだ。波状文のみの文様構成はB類に多いとの傾向はうかがえるが、新しい段階のものほど増加するといった傾向は特に見いだせない。ここにみる壺の形状と文様にみられる変遷過程は壺と同調しており、様式構造全体の変遷過程であったことをうかがわせる。なお、ここでは図示していないが、壺6類に後続する例として、頸部径が広く器面への研磨を省略する一群が位置づけられる。ただし、すでに樽式としての残存要素がほとんどみられず、赤井戸・吉ヶ谷式系の無文化した例との区分が困難なため、組列から除いた。

以上に述べた壺と甕の組列について、同時性を保証する共伴関係から検証を試みることにする。対象となる資料は、堅穴住居跡から出土した土器群のうち、そこで使用されたまま遺棄されたと判断されるもの、壁際に近く床面上から出土したもの、貯蔵穴等の屋内施設から出土したものを同時性が高いと判断して取り上げ、さらに周辺地山からの流れ込みや後世の混在品を避けるため、そのなかから1/2以上の遺存度を保つものを抽出した。出土位置の確認は報告書に掲載された実測図・出土位置の記録・出土状況の写真から判断している。なお床面直上の出土であっても、住居中央部に集中するものは堅穴埋没途中における廃棄の可能性が考えられるので、完形品や遺存度の高い大型破損品であってもできる限り避けた。ただし上記のような厳しい条件下では検討資料が少なくデータ数としては不十分と考えられるので、それを

補うために廃棄時の一括性が高いと判断されたものを参考資料として用いた。共伴関係の検証に用いた資料は19遺跡、46例であり、詳細は以下に掲げる。

三後沢遺跡	Y 1・Y 2・Y 6・Y 7 住
大原遺跡	3 住
諏訪遺跡	1 住
戸神諏訪遺跡	11・15・32・85・87・88・161 住
戸神諏訪III遺跡	53・64・69・78・91 住
石墨遺跡	A12・B 6・B11 住
日影平遺跡	2・3・9・18 住
下川田平井遺跡	10・12・24・25 住
上川田下原遺跡	Y 1・Y 3 住
赤坂遺跡	4・8・9 住
町田小沢遺跡	21 住
町田小沢II遺跡	1 住
鎌倉遺跡	SJ 6・SJ 7 住
上久屋橋場遺跡	1・2・A地区Y 2 住
奈良原遺跡	2 住
奈良田向遺跡	1 住
高野原遺跡	6 住
門前橋詰遺跡	2 住
糸井宮前遺跡	57 住

以上の検証資料の共伴関係から明らかになった同時存在率の高い型式相互の相関関係を図式で示す。

- 壺2類—中型壺2類—大型壺2・3類
 壺3類—中型壺2類—大型壺2・3類
 壺4類—中型壺2・3類—大型壺2・3類
 壺5類—中型壺3・4類
 壺6類—中型壺4・5類—(大型壺5類)

ここで明らかになった相関関係では、壺と中型壺の組列に矛盾はみられない。また同一器種間では、壺は2類—3類が、甕では2類—3類及び3類—4類に高い共伴率が認められる。これは連続する時間のなかで漸移的に変遷したと理解され、甕でいえば2類→3類→4類への組列を保証するものであろう。大型壺については2・3類が壺2～4類のいずれにも共伴するが、他器種に比べて長い期間使用され続けたことの表れだろう。また中型壺についても2類が壺2～4類に伴うのは、長期継続的に用いられた可能性とともに、破損した後も口頸部のみを転用器台として使用した床面出土例が多いことが影響している。また、大型壺1類・4類・5類、中型壺1類、壺1類については類例が極めて少ないため、相関関係については保留した。特に大型壺については4類以降に激減しており、代わりに外来系の二重口縁壺が組成を占めると考えられる。最終段階に位置づけられる壺6類と共伴する壺のほとんどが二重口縁壺であることはその

証文であろう。編年細分上の時間軸として考えた場合、壺と中型壺の組列が有効であり、可能な限り両者を併用することが望ましい。

ここに示した組列と、器種間の組み合わせから、以下のように時期細分を設定した。

- 1 期——大型壺1類・中型壺1類・壺1類
- 2 期——中型壺2類・壺2類
- 3期古——中型壺2類・壺3類
- 3期新——中型壺2類・同3類・壺4類
- 4 期——中型壺3類・同4類・壺5類
- 5 期——中型壺4類・同5類・壺6類

ちなみに若狭編年(若狭 1996)との対比については、1期がV-2期、2~3期がV-3期、4期が古墳前期のI段階(若狭 1990)、5期がII段階にほぼ該当すると考えている。以上の時期区分に基づき、壺と壺の各類型と共伴する他の器種を加えて作成した編年表を図6に掲げた。以下に各時期の概要について記す。

1期一壺・壺とも1類を主体とする。沼田周辺地域では住居跡例が稀少なため明確な共伴資料はない。従ってこの段階に相当すると想定される各器種の型式を例示した。これらは2類壺との共伴例がみられることから時間的に連続し、かつ2期まで残存することを示す。

2期一壺・壺の2類を主とし、胴部が強く張り出す器形の特徴が台付壺や高杯・片口鉢などにも共通してみられる。鉢と有孔鉢は深めの逆台形。大型高杯はA・Bがみられ、A類は深めで直線的に開くものが存在する。

3期一大型壺3類・中型壺3・4類、壺3・4類が主体。これらは共伴する機会が多いため3期として扱ったが、中型壺3類・壺3類と胴部にやや張りを残すその他の器種を主体に組成される場合は古相、一方壺4類・壺4類を主とし、球形胴部に共通性をみる場合は3期新相と細分する。新相では、高杯がやや浅く、片口鉢や有孔鉢にも浅く丸みを帯びた体部が見られる。なお、3期以降に箱溝水式系の壺や高杯が共伴する例がしばしば見られる。

4期一5類の壺を指標とする。口縁が短く「く」字状に外反するのが特徴だが、胴部形状が上下に潰れた球形から肩の張る倒卵形まで変化があり、新旧に分離できる可能性を残す。壺については図示しうる好例が欠くが、3類のうち口縁が大きく開き球胴化の進んだものや文様構成の崩れた段階が伴うと考えられる。樽式の器種組成に東海地方西部の有稜高杯、小型器台が加わるのが大きな特徴。また客体ながら頸部が「く」字状に屈曲する単口縁台付壺が伴うのもこの時期からの特徴として注目される。

5期一壺と壺は無文のものが主体となる。また、「く」字状に屈曲する短い外傾口縁と球形胴部が定着する。赤井

戸・吉ヶ谷式の末期の痕跡とも考えられる口縁積み上げ痕を残した壺が現れるのも特徴。樽式の組成器種であった鉢・片口鉢・有孔鉢も球形化が著しい。古墳時代前期の主要器種である外来系の二重口縁壺や柑が組成に加わり、有稜高杯や小型高杯が樽式系の高杯を凌駕する。また、客体だがS字壺がこの時期から伴う。

図示はしていないが、これに後続する6期と呼ぶべき段階があり、二重口縁壺や磨盤整形を省略した平底球胴の壺や鉢、S字壺、有稜高杯、柑、杯、器台の組成が定着し、樽式の特徴はほとんど見られなくなる。沼田周辺地域ではこの6期段階をもって集落が断絶するようであるが、これについては次節で述べる。

なお、沼田周辺地域と近縁関係をもつと想定される北信地域の箱溝水式の編年(青木 1999)と対比するならば、共伴資料から3期古相が箱溝水2式2段階、3期新相が同2式3段階にほぼ相当すると考えている。また、松本平の後期後半に相当すると考えられるJ字文模倣の壺が戸神諏訪遺跡77号住居跡から3期古相に伴って出土しており、交流範囲を必ずしも北信にのみ限る必要はないことを示している。S字壺については、樽式土器との共伴関係は不明瞭であるが、5期から確実と思われる共伴例をみる。図示した高野原遺跡5号住居跡例(図6最下段中央)は、外面磨盤という樽式壺の技法によって制作された模倣品で、口縁形状から廻間Ⅲ式期(赤塚 1990)にまで下るものをモデルにしたと考えたい。ちなみに渋川地域の北橋村北町遺跡A区H3号住居跡からは、5期に相当する土器群に廻間Ⅱ式期新段階相当のS字壺が伴っている。北町遺跡例と高野原例のS字壺を時間差と捉えれば、その型式変化は5期の時間幅の中に含まれていていだろう。S字壺を比較する限り、沼田地域への波及は遅かったと考えられる。このことについてはすでに田口一郎によって指摘されており(田口 1998・2000)、その波及源については、先行して受容・定着していた利根川水系低地域からの搬入と想定している。さらにS字壺を時間軸とした古墳時代の時期細分を行っており、I~Ⅶ期区分のうちⅢ~Ⅳ期が沼田地域への波及時期とした(田口 2000)。在地系弥生土器(樽式)を時間軸にした本論での編年と対比するならば、田口Ⅰ・Ⅱ期は5期以前に相当することになる。この編年上の交差部分については、S字壺をはじめとする外来系土器の受容の仕方によって、地域毎に時間幅が異なると思われる。また交差時期にも地域間でずれがあると予想される。場合によれば、遺跡単位での相違といったミクロな次元にまで及ぶ可能性も考えられるのではないかと。沼田周辺地域の後期弥生土器編年について、その後半部分にあたるV-3期をさらに細分したのも、このような編年上の「交差時間」を明確にしておきたかったことがひとつのきっかけとなっている。

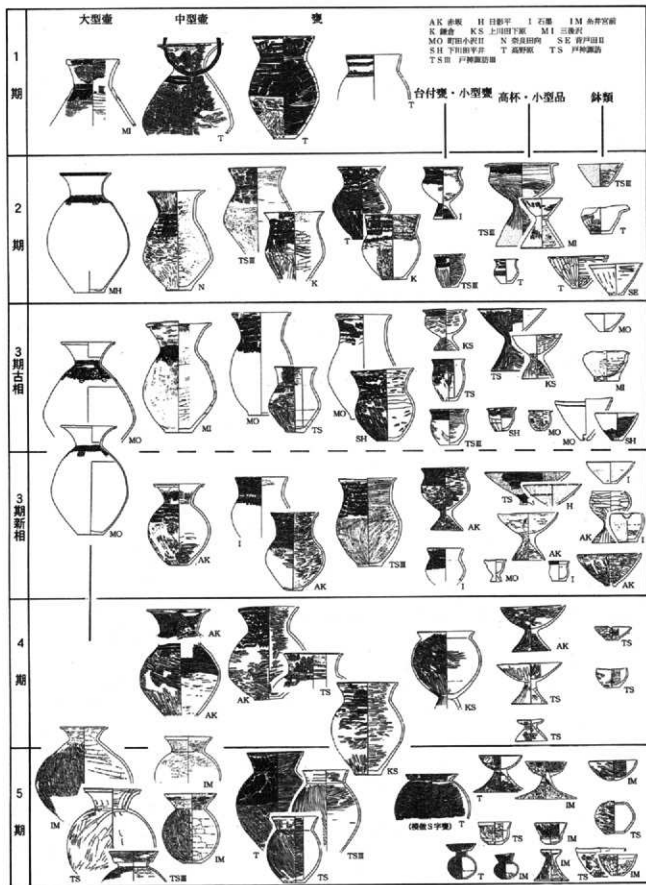


図6 北毛地域編年表

表1 遺跡の時期

遺跡名	棟数	IV期	V-1	1期	2期	3期古	3期新	4期	5期	6期
藪田遺跡	1					-----				
大原遺跡	2					=====				
十二原遺跡	6		=====			-----		=====		
三後沢遺跡	7			-----	=====					
諏訪遺跡	1						=====			
上川田下原	10					=====		-----		
赤坂遺跡	2						=====			
背戸田II遺跡	1				=====					
下川田平井遺跡	15					=====				
戸神諏訪遺跡	66					=====				
戸神諏訪III遺跡	28					=====				
石墨遺跡	14					=====				-----
町田小沢遺跡	6						=====			
戸神吉田遺跡	3			-----	=====			-----		
向田遺跡	22			=====					=====	
鎌倉遺跡	9				=====	-----				
上久屋橋場遺跡	4					=====				
上光寺遺跡	2						=====			
奈良原遺跡	7					=====				
奈良田向遺跡	3			-----	=====					
高野原遺跡	8			=====		-----		-----	=====	
門前橋詰遺跡	2					=====		-----		
門前外海戸遺跡	1			-----	-----				=====	
寺谷遺跡	4	=====				=====				
糸井宮前遺跡	35					-----			=====	
中棚遺跡	5							=====		
日影平遺跡	30				-----	=====				
見立酒井遺跡	10							-----	=====	
北町遺跡	48					=====				
分郷八崎遺跡	7					=====			-----	
有馬遺跡	83		=====						=====	
有馬鹿寺跡遺跡	2	=====	=====							
有馬条里遺跡	64		-----							
中村遺跡	3			-----	-----					

(破線は存在が予想される時期)

さて、以上に示した編年で面期を設けるならば、壺文様にT字文の影響下に生成された垂下文が採用され定着すること、壺にV-3期の指標である柳掻波状文の充填とB類という地域色が出現することから1期と2期の間に、更に外来系の器種が加わり、壺が4類から5類へと大きく形態が変化すること、壺や壺にみられた地域色が消滅することから3期と4期の間に置くことができる。これは若狭編年におけるV-3期の始源と終末に等しい。なお、壺5類にみられる肩の張る倒卵器形の出現は、それまでの樽式の内因的変遷というよりも、同時期の箱清水式や、北陸や東海地方などの外来系の壺の器形と軌を一にするものと考えられ、その強い影響下に誕生した可能性を想定しておく必要がある。

以上に掲げたV-3期(後期後半)の編年細分に従い、沼田地域周辺の弥生集落遺跡について、時期別グラフを表1に示した。これにより、各集落の開始と終末の時期、及び継続期間が把握できると思う。ただし、集落全体のうちの調査された遺構出土土器のみを対象としており、時期が若干前後する土器も含めて、遺構外の土器は除いたため、集落の実態はグラフで示したよりも時間幅が広がる可能性は充分考え得る。確実に存在した時期を実線で、存在する可能性が高いと考えられる場合には破線で示した。なお、対比のため南方の隣接地域である渋川地域(北群馬地域)の代表的な遺跡も掲げた。見立沼井へ中村遺跡がそれである。

3. 弥生集落の分布と構造

(1) 地形的景観

沼田周辺地域における弥生時代集落遺跡は、沼田市街地の沼田台地を中心に北方は月夜野町、南は昭和村、東は白沢村に拡がりを見せる。ここで簡単に分布地域の地形について述べておこう(図7)。

群馬県の最北部、新潟県境付近に源をもつ利根川は、利根郡城の山間を流下する幾筋かの支流を集めながら南下し、月夜野町で西方から流下してきた赤谷川と合流する。この合流地点から8kmほど南東方向に下ったのち、沼田市南部で栃木県境に源流を発する片品川と合流する。ここから利根川は狭い峡谷を12kmほど南流して、吾妻川と合流する渋川地域に至る。月夜野町から沼田市にかけての間は河岸段丘が発達しており、特に利根川と片品川が合流する付近では、片品川によって形成された段丘が数段にも及ぶ。この利根川と片品川に挟まれた台地状の地形は、北に位置する三峰山塊に遮られて東西10km、南北5kmにわたる規模をもち、中央を北東から南西に貫流する薄根川によって南北に二分される。北半は南に緩傾斜する段丘面、南半は「沼田台地」と呼ばれる平坦面で、現在沼田市街地が形成されている部分にあたる。北半の段丘面には、北方の山間から流下する中小小川によ

る開析谷が発達し、面積が限定されながら洪水被害の少ない良好な水田可耕地を提供している。その標高は、約400~500mで、県内の弥生遺跡分布地のなかでは最も高所に位置するといえる。冷涼な冬季には降雪の多い地域としても知られ、現在の気候でも渋川地域との中間に位置する子持山を境にして南北で降雪量が大きく異なる。子持山東麓の山裾は狭隘な渓谷となっており、沼田地域と渋川地域以南とを結ぶ主要交通路でありながら、視覚的に両者を分かち地理的境界となっている。

(2) 分布の様相と集落の特徴

ここでは、弥生集落の分布状況と、その立地条件を把握し、さらにそこでのような規模や性格を帯びた集落形成がなされたかについて述べてみたい。それらを相互に関連する集落群の動態として捉えることで、沼田周辺地域での弥生社会形成の輪郭が浮かび上がってくるだろう、と考えている。

これまでに知られている弥生時代の集落遺跡の位置を図8に示した。一見沼田台地を中心とする周縁部に点在する分布状況に見えるが、空白となっている台地中央部は沼田城下の開発以来、市街地化が早くから進んだため、遺跡の存否が明確でないという条件が付く。

ここでは同一の地理的環境のなかで分布のまとまりをみせる小地域を設定し、A~Hの8地域に細分した。以下、各地域毎の遺跡分布の特徴について述べ、そのなかで各地域での代表的、かつ当地域での弥生社会形成に重要な位置を占める集落遺跡を取り上げて詳述する。

A地域

分布域の北西端にあたり、赤谷川と利根川の合流点付



図7 沼田周辺の地形 (1/500,000) (A~Hは沖積地分布域)

近で形成された、通称「名胡桃平」と呼ばれる右岸段丘上に立地する。月夜野町大原遺跡、同町三後沢遺跡などの小規模集落が段丘に沿って連なるように分布する。これは上越新幹線やバイパス道路に沿って調査されたためだが、地形的には深く刻まれた筋筋の沢によって段丘が分断されており、大規模な遺跡が形成されるだけの広い平坦地や微高地が存在しないことが大きな要因でもある。更に周辺における水田可耕地が、未発達で面積の小規模な谷地に限られることも影響していると考えられる。30mほどの比高を測る段丘下には、利根川と赤谷川の堆積物による沖積低地が流路に沿って見られるが、現状で弥生集落の存在は確認されていない。河川氾濫の危険性を避けたと考えられよう。なお、赤谷川の北方対岸には月夜野町藪田遺跡が2km離れて存在し、判明する後期の集落遺跡としては本地域のなかで最北西端に位置する。地域を分けて単独で扱うことも可能だが、立地条件や集落内容が近似するのでA地域に含めた。

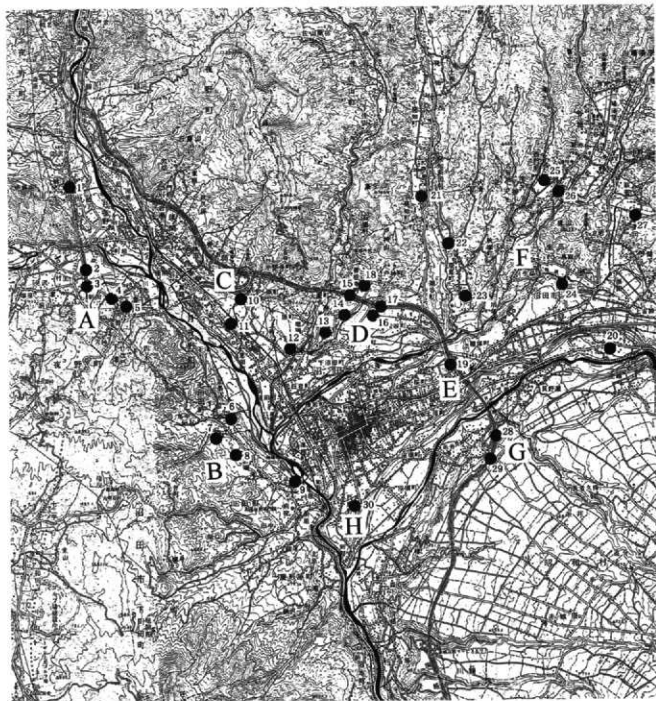
三後沢遺跡は、北から南東に並ぶ集落のうち、中央に位置する(図9)。南北を深い沢に沿って分断された幅200~300mの台地上に位置し、住居は北西端の最も高位な場所に立地している。国道17号バイパス線の発掘調査では、7棟の住居跡が検出されている。後、月夜野町教育委員会によって北側隣接地が調査され、住居分布がさらに北東側にひろがるのが確認された(三宅 1993)。台地中央付近は浅い窪地状になっていて、弥生時代遺構は検出されていない。また、町教育委員会によって、住居検出地点から南方約150m地点も調査されたが、弥生時代の痕跡は確認されていない。このことから、三後沢集落は南北約150m、東西100m弱ほどの範囲に居住分布をもつと考えられる。この居住範囲と住居の密集度から全体での住居棟数は多くても30棟ほどと推測する。出土土器の時期は1期に遡りうるものを含めて、2~3古期が主体である。住居同士が2m以内に接近する例が見られ、屋根構造が重複してしまうと考えられることから、2~3段階の住居群配置の変遷が想定される。だとすれば、1時期の住居棟数は10棟強ということになろうか。集落景観としては、北側に急崖が迫っており、各住居の出入り口が全て南側に向いていることから、道や広場、水田や畠などの生産域は、居住域の南側から南西部に想定できよう。特に、遺跡南西部で侵食の少ない小規模な谷状沖積地が延びており、これを水田に利用したと考えられる。

三後沢遺跡の谷を隔てた北側台地には十二原II遺跡・十二原遺跡、さらにその北側の谷対岸には大原遺跡が知られる。南東には、谷を隔てて諏訪遺跡が存在する。十二原II遺跡と大原遺跡では、三後沢遺跡にやや遅れて3期から集落形成が始まっており、同時存在したことが明らかである。ただし、十二原II遺跡では一時断絶して4

期に再び居住域として利用されたらしい。大原遺跡でも、遺構外出土で5期に下る土器がみられることから、この時期まで存在した可能性はある。なお諏訪遺跡は、3期新の住居1棟が検出されたのみで、集落規模や存続期間が不明だが、三後沢出土土器の新しい段階に相当する時期であることから、三後沢集落の分村と捉えることもできようか。十二原遺跡ではV-1期(後期初頭)の住居跡1棟が検出され、さらにその近辺からV-2期(後期前半)の壺が出土している。V-3期に属する十二原II遺跡や三後沢遺跡は、それぞれ150m、300mほど東方に離れる位置関係にある。「名胡桃平」上の弥生集落のなかでは最古段階に相当し、小規模ながらA地域における弥生集落の先駆といえる。土器の時間的連続性や地理的位置関係から、これは三後沢集落や大原・十二原II集落の母胎となった可能性は高い。それが、本稿の編年で2期にあたる時期から、分断された各台地平坦部に小規模な住居群として分散し、地点を変更する程度の移動や分離などの変遷を経て、古墳時代前期に相当する4~5期段階まで継続した、と想定したい。個々の集落は相互に250~300mと離れていて、日常生活は独自で営まれたとしても、これらがA地域の社会を構成する集団としてひとつのまとまりをもつと想定することは許されよう。三後沢遺跡が多くても10棟程度で構成される集落だと前述したが、住居分布や地理環境から、大原遺跡や十二原II遺跡でも、ほぼ同程度と考えていい。最終段階まで拠点といえるような大集落が形成されなかったのは、水田や畠の可耕地が小規模なため、食糧生産力に限界があったため、と解釈しておきたい。

B地域

分布域の南西部は、利根川右岸に沿った山麓の末端にあたり、約3kmの長さにわたって右岸に沿った分布状況を示す。利根川右岸ということではA地域と同じだが、その中間は約3kmにわたる山麓地形によって分断されている。B地域の弥生集落は、上川田から下川田にかけて山麓からの小川や豊富な湧水によって形成された小規模な谷地の周縁に分布する。広い平坦面が少ないためか、A地域と同じく小規模な集落が点在する様相を示す。相互間の距離は500m~1kmで、未発見の遺跡の存在を想定すれば、集落同士は指呼の間に隣接する状態と考えていい。下川田平井遺跡は、B地域南端に位置する集落で、利根川と片品川の合流点に南東方向に望む高位地点に住居群が営まれる(図10)。幅50mに満たない狭い尾根上で14棟が密集して検出されており、住居跡同士の重複も見られる。住居跡出土土器の時期は3期古~4期までは確実に存在し、5期相当の住居跡1棟がやや離れて存在する。東側は足下に地割れを生ずる崖、南東は急斜面、南西には尾根に沿った埋没谷の沖積地が延びる。住居群が尾根上で更に北西方向に分布していたことは確かで、市



- | | | | |
|-----------|---------------|------------|-----------|
| A | C | E | G |
| 1 藪田遺跡 | 10 沢口遺跡 | 19 鎌倉遺跡 | 28 糸井宮前遺跡 |
| 2 大原遺跡 | 11 観音堂遺跡 | 20 上久屋橋場遺跡 | 29 中棚遺跡 |
| 3 十二原遺跡 | 12 諏訪原遺跡 | F | H |
| 4 三後沢遺跡 | D | 21 上光寺遺跡 | 30 日影平遺跡 |
| 5 諏訪遺跡 | 13 向田遺跡 | 22 奈良原遺跡 | |
| B | 14 町田小沢・同II遺跡 | 23 奈良田向遺跡 | |
| 6 上川田下原遺跡 | 15 石墨遺跡 | 24 高野原遺跡 | |
| 7 赤坂遺跡 | 16 戸神諏訪III遺跡 | 25 門前橋詰遺跡 | |
| 8 背戸田II遺跡 | 17 戸神諏訪遺跡 | 26 門前外海戸遺跡 | |
| 9 下川田平井遺跡 | 18 戸神吉田遺跡 | 27 寺谷遺跡 | |

図8 遺跡分布と地域区分 (1/100,000)

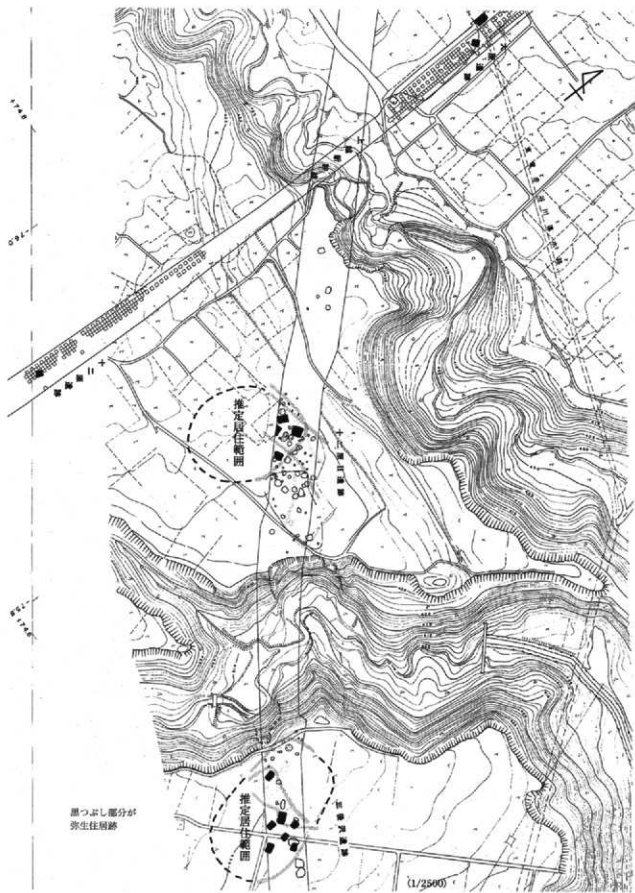


図9 A地域の集落分布 (報告書より転載)

分布調査による土器分布範囲(沼田市教委 1989)を参考に居住域の範囲を推測すれば、約200mの長さにも及ぶ。調査区と同一密度で住居が分布したとすれば、全体で30~40棟ほど、一時期の棟数が10棟前後と想定できよう。また、南西の埋没谷をはさんだ対岸には、幅100mほどの丘陵地があり、ここでも弥生土器の分布が知られることから、集落の存在を想定してもいいだろう。水田可耕地は、南から西側に幾筋か延びる谷状沖積地が有力だが、居住城南東斜面下の谷地部で6世紀代の水田面が確認されたものが、それ以前については検出されなかった。谷部の土層断面から、弥生時代には沖積土の堆積が十分進んでいなかった様子がうかがえる。谷を全面的に対象としたのではなく、斜面の強い部分や沖積土の不十分な場所をのぞいて水田化されたのではないだろうか。他の地域と比べて水田可耕地ははけっして恵まれているとはいえず、そこからの収穫量には限界があったろう。居住地以外の高塚地については、打製石鏃が出土していることから、畠の存在は十分考えられる。また下川田平井集落の立地が、農耕集落としてははけっして好適と思えない危険な崖線の尾根上に存在することについては、別の側面を考慮する必要がある。その位置が、沼田地域周辺の弥生集落群のなかでも最南端にあり、利根川下流方面を見晴らす眺望に優れていること、利根川対岸のD地域で、沼田台地南端の拠点的要地にある環濠集落の日影平遺跡を間近に望めることから、利根川沿いの監視あるいは防衛的な性格をも帯びていたと類推する。なお、下川田平井遺跡の出土土器には、渋川地域に見られる口縁に刻みを施す壺が混在する。渋川地域との関係が友好的か否かはともかく、交流の結節点であり、沼田周辺地域における南の「玄関」的役割も併せ持っていたと捉えておきたい。B地域には下川田平井遺跡より北で、青戸II遺跡、上川田下原遺跡、赤坂遺跡などが小規模な谷の沖積地に面した台地や丘陵上に分布する。いずれも小規模集落ながら、編年では2期~4期に含まれ、一部で5期段階のものもみられることから、下川田平井遺跡とほぼ併行して存在したことがわかる。赤坂遺跡は沢沿いの奥まった斜面に立地する、極めて小さな集落である。調査区では住居跡2棟が検出されており、3期新~4期に位置づけられる。B地域内で先行して営まれた集落からの分村と考えていいのではないだろうか。なお、9号住からは北陸系の赤彩台付き壺が出土しており、月影式以後に散見する北陸地方との交流が、このような分布域の奥まった小集落にまで及んだことを示す好例である。同様の例は、後述するD地域の町田小沢遺跡でも見られるが、これらをもって北陸地域との直接的な交流を想定するのは早計である。沼田周辺地域では、3期以降に北・中信地方の箱清水式土器がもたらされ、また壺の垂下文に見られるように、その影響を強く受けているのは間違いない。

い。北陸地方の土器や情報が伝播したとしても、実態としては北・中信地方を介した間接的なものであったと理解したい。

C地域

利根川の左岸、沼田市北部の山麓南西部に形成された中位の段丘にあたる。段丘面は利根川に沿って、幅400~500mで約4kmの長さにわたって南東に延びる。中央には旧河道と思われる埋没谷状の沖積地があり、良好な水田可耕地になりえたと考えられる。北東山麓から下る小河川や山麓裾の湧水をうまくコントロールできれば、後述するD地域に匹敵する広範な水田経営が可能だったと推測される。沖積地の右岸には月夜野町観音堂遺跡、左岸には同町沢口遺跡が立地している。この沖積地は南東端で南流してきた四釜川の谷と合流するが、その地点に臨む段丘端には諏訪原遺跡が知られる。観音堂遺跡は環濠を伴う後期集落で、住居同士が著しく重複しながら35棟が検出されたという(三宅 1991)。公表された図によれば溝と住居との重複も見られることから、数時期にわたる集落変遷を重ねていたことが推測される。本報告未刊のため、詳細については後日に期待するところが大きい。恵まれた水田可耕地を擁する地域として、さらに未知見の弥生集落の存在が予測されるなかで、そ



図10 下川田平井遺跡周辺の地形(1/5,000)(黒書影は住居跡)

の拠点的な位置づけが与えられる内容をもつのではないかと想定している。諏訪原遺跡も、狭い範囲に住居跡8棟が高密度で検出されており、立地する地形規模から本来は30棟クラスの集落だったと推測する。これも本報告が未刊のため詳細は不明であるが、沼田市史に公表された資料によれば少なくとも3期古から5期までの時間幅は見込めるようだ(秋池 1995)。沖積谷の合流地点に臨み、広い水田可耕地に面することから水田経営には絶好の地理的環境にあったといえる。諏訪原遺跡の東側を流れる四釜川の対岸上には、後述のD地域に属する弥生集落が数箇所知られている。両者は四釜川に地形を分断されるとはいえ、分布上はひとつのまとまりを持つ集落群として捉えることも可能だ。

D地域

薄根川右岸の段丘上で、美しい円錐形の戸神山(標高760m)に北側を遮られ、東西をそれぞれ発見川と四釜川に面された南向き緩斜面にあたる。南側は薄根川の段丘崖で画され、最下位の段丘面には近代以降でも洪水被害のあった沖積低地が見られる。戸神山南麓には、小沢川が山裾に沿って北東から西方向に流れており、ここに幅300~400mの沖積地が形成されている。さらに戸神山麓を下る小河川によって形成された小規模な沖積谷がこれに加わり、沼田地域のなかでは比較的広大な水田可耕地となっている。弥生集落はこれらの沖積地に面する微高地上に分布しており、現段階では最も高い密度で弥生集落が分布する地域だ(図11)。戸神山南麓から広がる沖積地の内には、さらに埋没谷状の窪地が幾箇所存在しており、実際に水田として利用された面積は限られていたかもしれない。しかし、緩傾斜地形で沖積作用が進んでいたこと、小沢川や山麓湧水からの灌漑用水確保が容易と考えられること、さらに、東西2km、南北1kmと沼田地域でもっとも広い面積の平坦地を有する地形的優位性が、弥生時代の中核的集落の形成に大きく寄与したと考えられる。ほぼ中央部に位置する戸神諏訪遺跡(戸神諏訪III遺跡も含む)は、直径約300mの範囲で居住域が展開する沼田地域唯一の弥生集落である(図12)。ここでやや詳しくその形成過程や変遷についてふれてみたい。出土土器を見る限り、開村の時期は2期に相当し、断絶することなく、最終段階の6期(布留式新段階併行)まで継続する。3期古段階での住居跡は10棟前後が確認できる。調査区北側にも居住域が延びており、その本来の面積は約2倍程度と想定されるから、全体では20棟前後で構成されていたと思われる。隣接する住居同士の間隔は、25m~50mと非常に広く、南西から北東にのびる馬の背状の高低い位置を占めて、居住域に幅広く散在する状況を示す。続く3期新には大型住居(戸神諏訪11号住、戸神諏訪III69号住の2棟)が出現するが、分布状況に大差はない。個々の住居跡をみれば、隣接宅地に建て替えたり、

拡充、あるいは分棟を行っていることがわかる。後続の4期についても同様で、分布傾向や住居数に大きな変化は見られない。住居数の漸増と、分布の高密度化が窺われるが、それでも住居間距離は10m前後と離れている。集落構造の大きな変化は5期以降に訪れる。まず、居住域が中央部の窪地をめぐるように、大きく拡大する。それとともに、住居棟数がそれまでの倍ほどに増大する。その内実は小規模な住居の急増である。住居密度もそれまでに比べて格段に高くなることが明らかだ。戸神諏訪遺跡で検出された住居総数は94棟を数えるが、時期の判明するものだけでも半数ほどが5期以降に属する。人口の自然増と理解するには、あまりに急激な変化なので、その背景には他集落からの人口流入があったと想定せざるを得ない。それも一部構成員の転入程度ではなく、小規模な集落ごとに移住してきたと考てもおかしくないほどの急増ぶりである。そうだとすれば、どのような集落が、何処から、何故この地を運んで合流したのかという問題を解明する必要がある。それについては、全地域の集落動態を俯瞰したうえで、後述するつもりである。また、個々の住居跡についてみれば、正方形プランが主流を占め、主軸方向がそれまでの西に振れるものから、南北方向に揃える傾向が強くなるのが特徴だ。ただし住居形態や主軸方向の転換は、その配置プランや、さらには宅地や集落構成員の共有空間、付属施設などを含めた集落構造全体の改変と関わる可能性についても考慮しておく必要があるように思う。なお墓域については、居住域の南東に窪地を挟んで対岸で約120m離れて位置しており3期新の円形周溝墓1基と主体部構造を同じくする木棺土墳墓1~2基が検出されている(図13下)。戸神諏訪遺跡は、以上に見たように、長期にわたって継続する集落であること、北側未調査部分を含めれば、全期を通じて200棟に及ぶ住居棟数が見込めること、さらに弥生集落分布の中央にあって、広い水田可耕地と居住可能な平坦地を擁する場所に位置すること等から、沼田地域の弥生集落のなかで中核的な存在であったことは間違いないだろう。また土器の様相でみれば、5期以降になっても在地弥生系が残り、すでに利根川上流へと北上を始めていたはずのS字壺が、ついに最後まで主流の座を失っていない点に注意しておきたい。

戸神諏訪遺跡の西側を流れる小沢川(幅約100m)の対岸台地上には、これと同様に3期古から6期まで長期継続する石墨遺跡がある。幅350mほどの台地上で、最も高位の西端に居住域を設け、200mほどの間隔を空けた東端には、円形周溝墓群と土墳墓からなる墓域が設けられる(図12)。検出された住居跡は25棟で、さらに南北方向に分布の広がりを見せる。ここでも5期以降が半数近くを占めることから、戸神諏訪遺跡と同一歩調で拡大していったと解釈したい。なお同一台地上には、東方250m地

点で戸神吉田遺跡、南方350m地点には町田小沢・町田小沢II遺跡が存在する(図12)。両者とも小沢川右岸に位置する小規模集落で、距離的に見ても石墨集落ないし戸神諏訪集落と一連の集落群を構成したと考えると差し支えなからう。戸神吉田遺跡は調査範囲が狭く3棟の住居跡しか検出されなかったが、出土土器は2期に相当するものから4期段階まで見られ、比較的長期にわたって集落が営まれたことを推測させる。ただし、戸神諏訪遺跡や石墨遺跡のように、間断なく継続したというより、調査地点においては断続的な居住域として利用されたとの理解をしておきたい。注目されるのは9号住出土器にみられる古相の台付甕で、2期ないしは1期の新しい段階まで遡るとみていい。このことは、戸神吉田集落の開始が石墨遺跡や戸神諏訪遺跡とほぼ同時期か、あるいはそれに先行する可能性を示唆するものであり、母村の拡大に伴って分離した後出的集落という解釈はできないと考える。町田小沢遺跡(以後、同II遺跡も含める)は台地の南端にあって、小沢川河岸の小規模な沖積地に臨む狭小

な緩斜面に立地する。主に3期新に相当する短期間の存在で、石墨集落や戸神諏訪集落の分村的性格を想定したい。なお、1号住からはそのまま遺棄された状態の一括土器が大量に出土しており、甕のなかからは約0.45リットルの炭化米、また箱清水式系と月影式相当の甕が共伴することが特筆される。また住居群と小沢川右岸の斜面を画するように、1条の溝が検出されているが、その性格が環濠か条溝かは確認されていない。

向田遺跡は、町田小沢遺跡からさらに700mほど南西に離れて、幅の狭まった台地南端の中央に位置する(図11)。ここでは検出された21棟の住居跡のうち、1～2期の住居1棟を除いて、他は全て5・6期に属する。この空白期間の長さから、5・6期の集落はそれ以前の関わりはなく、新たに形成された新出集落と解したい。これらから考えられることは、向田集落が戸神諏訪集落や石墨集落からの分村、あるいは他地域からの移転集落であった可能性だろう。住居の形態については、正方形プランながら柱穴間に樺状礎を据えた戸を設ける構造から、在地

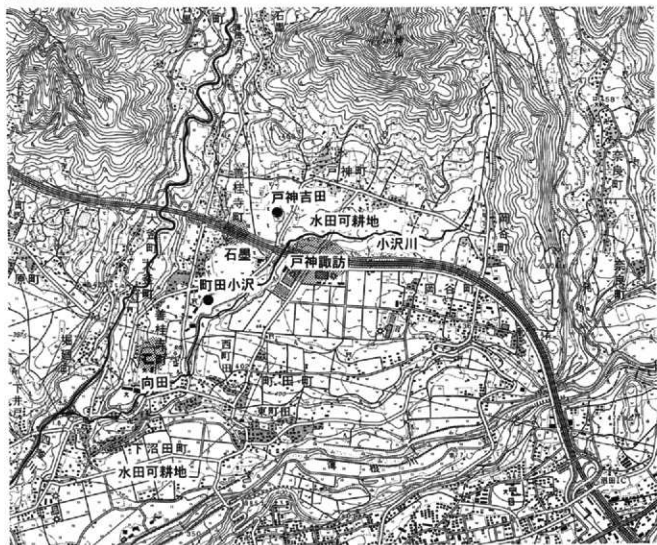


図11 D地域の集落分布(1/25,000「新田」後編)

弥生集団の伝統を引いた可能性は高い。異質な点をあげるならば、S字壺が多く見られる点だが、限られた公表資料のみによる印象だけなので、土器様相については多くを語れないのが現状だ。この向田遺跡の南側は小沢川の谷を隔てて薄根川の氾濫原と思われる広域な沖積地が広がる。その規模は南北400m、東西に約1.5kmに達し、用水路の整備という条件が実現できれば広大な水田経営が可能な場所といえる。向田遺跡の位置から想定すれば、小沢川流域の狭小な谷底地よりも、むしろ眼下に開けるこの広い沖積地の水田開発を目的としたのではないかと類推する。このことは、水田経営という側面についても、D地域が沼田地域における中核的な存在であったことを示しているのではないだろうか。

E地域

沼田台地の東部、薄根川と片品川に挟まれた上位段丘面にあたる。弥生集落としては鎌倉遺跡が知られる。地形はほぼ平坦で、北寄りに小河川（滝取川）とその旧河道とあられる小規模な埋没谷が西流し、現状で推測できる唯一の水田可耕地となっている。鎌倉遺跡は、この沖積地の北側に位置しており、調査面積は小規模であったが、住居跡は比較的密な分布を示す。谷部の試掘調査では沖積土の堆積が不十分で、流入層が見られることから、弥生時代に水田として利用された可能性は少ないとの所見が報告されている（大江 1989）。北側の崖下30mに広がる薄根川氾濫原は現在水田化されているが、近代まで洪水被害を被ることが度々あったことから、弥生時代の水田域とは考えにくい。沼田台地の中央部、沼田城がある現市街地帯はほとんど発掘調査が行われていないため、弥生集落の存否の確認はできないが、水田可耕地となりうる窪地や谷に限られるため、その分布は非常に稀薄だったと推測する。むしろ、地形や分布調査の結果（沼田市教委 1989）などを参考にすれば、小河川による沖積地が残る、東方の横塚町や上久屋町方面に弥生集落の分布が予想される。上久屋橋遺跡はそのうちの集落と思われ、鎌倉遺跡から東方約3km離れた片品川右岸の中段段丘に位置する。鎌倉遺跡と上久屋橋遺跡は、いずれも小規模な集落と考えられ、前者は2～3期古、後者は3期古～4期と、やや存在時期にずれを見ている。集落全容が判明しているわけではないので、先後の時期存在した可能性を残すが、遺構外出土土器を見ても新しい段階が稀薄であり、鎌倉遺跡は沼田周辺地域のなかでも、古くに集落を形成した後、比較的早い段階で別の場所へ移転した可能性を考えておきたい。

F地域

分布地域の北東部を占め、北側山腹を流下する発見川、薄根川、田沢川などの比較的広い開析谷が発達する地域である。弥生集落は谷底低地に面した微高地や小規模扇状地等に立地して、全般的に小規模で点在する

様相を示す（図14）。隣接する谷同士は、山麓（標高60m前後）が張り出して両者間を遮っており、集落相互は視認できない。直接山を越えるか、河川に沿って回り込むかをしないと、隣接谷の集落との交流はできない。日常的な生活や、農作業はそれぞれの谷間を単位として行われ、集落領域もこの範囲内に限られていたろう。それぞれの河川流域毎に小集落群としてのまとまりを持つと考えておく。戸神山の東側を南流する発見川沿いの谷底低地では、上光寺遺跡、奈良原遺跡、奈良田向遺跡が、その東側に展開する薄根川沿いの沖積谷には門前橋詰遺跡、門前外海戸遺跡が知られていて、それぞれが小群を構成していたと捉えられる。なお、北東の最奥部に位置する田沢川上流域に形成された開析谷は、F地域で最も広い沖積地をもつ。その東側扇状地面に、IV期（中期後半）の住居跡が検出された白沢村寺谷遺跡が知られる。V期（後期）の住居も存在するが、公表された出土土器による限り、断続的な小規模集落で、長期継続集落ではないらしい。沼田周辺地域の農耕集落としては、最も早く進出したフロンティアの集落として捉えたい。またその対岸には、川原町口式と考えられる壺が出土した、と伝えられる川場村の立岩地点があり、この沖積地が水田可耕地として早くから注目されていたことをうかがわせる。田沢川の中流付近には高野原遺跡が知られており、12棟の住居跡が検出された（図15）。小規模集落ながら2期には形成されて、3期新、5期と断続的な住居の存在が確認できる。集落全体では継続したことも予想されるが、途中で断続的に居住地点を移した可能性も考えておこう。また土坑や遺構外から1期に遡る壺と壺が出土していることから、V期（後期）以降に広範な分布を見せる遺跡のなかでは、最も早くに形成された集落のひとつと理解される。居住域の立地の田沢川左岸は平坦な段丘面で、水田可耕地は眼下の田沢川両岸に残された低地を想定しよう。これは集落立地面とは20mの比高があり、小沢川は浸食崖を形成してさらに10m下位を流れる。河川氾濫の脅威は比較的少なく、上流からの取水や、段丘下からの湧水によって、安定した水田経営が可能な場所と考える。F地域の弥生集落は立地地形の狭小さと住居分布の密度から、いずれも高野原遺跡と同程度の小規模なものであり、水田可耕地等の地理的条件も近似した場所に選地している。集落の継続期間は、本稿の編年区分で2～3時期にわたり、4期で断絶する様子がうかがわれる。また、集落間での時間的ながらも看取され、これを積極的に評価するならば、流域内での集落の移動あるいは小規模な分村が行われた、と捉えられるのではない。なお、発見川流域では上光寺遺跡、薄根川流域では門前橋詰遺跡と門前外海戸遺跡が最奥部の集落と判明しているが、これより上流域にあたる標高500m以上の地域には極めて稀薄な分布しか知られていない。沖積地

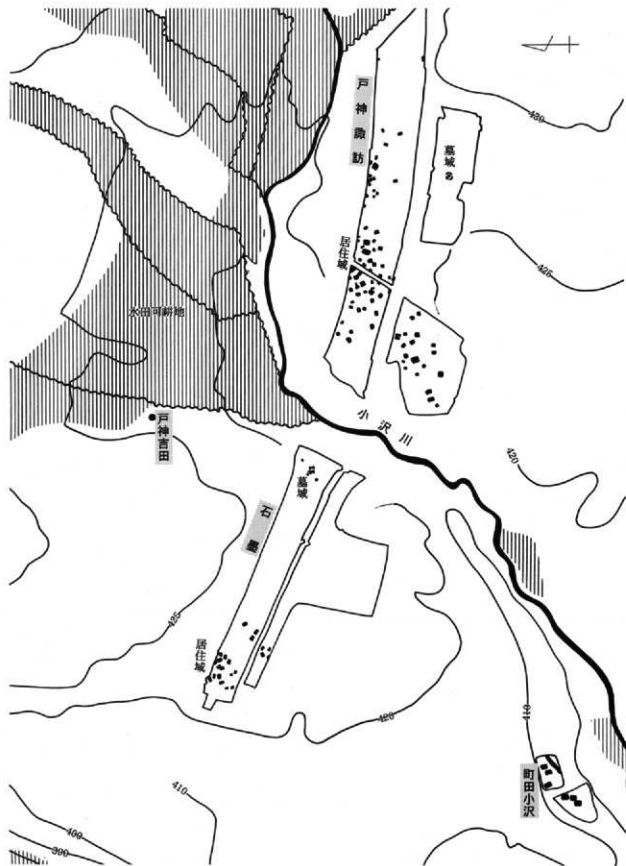
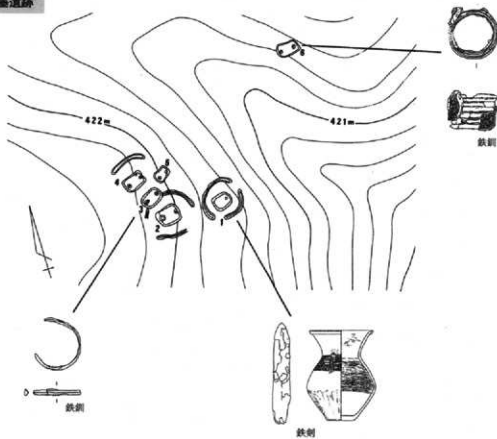


図12 戸神諏訪を中心とした集落分布 (1/5,000)

石黒遺跡



戸神諏訪遺跡

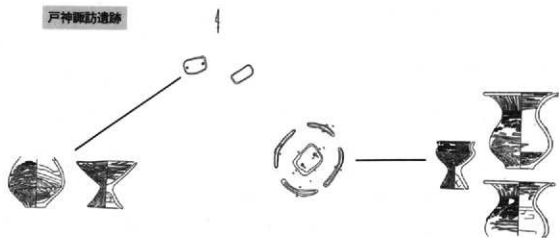


図13 石黒・戸神諏訪遺跡の墓群



図14 F地域の集落分布 (1/25,000 [後撰])

が存在しても、傾斜が強く堆積が不十分であったり、また水温の低いことも水稲の生長に不適であったのではなかろうか。自由に選地できる環境であれば、やはり住みやすく水田経営に好適な地を選ぶだろう。その結果が、このような弥生集落の分布状況に反映されていると理解しておきたい。

G地域

片品川左岸に発達した段丘面にあたり、集落としては糸井宮前遺跡、中棚遺跡が知られる。沼田台地周辺における分布域全体の中では、南東辺部に相当しており、片品川によって沼田台地と画される。糸井宮前は中段、中棚遺跡は上段と、比較的高位な場所に立地する。段丘面は深い沢によって分断され、下位段丘面ではその沢の水を集めた用水によって水田が営まれている。遺跡の立地する中・上位段丘面では、高燥な平坦面が広がり、水田経営はほとんど不可能といっている。下位段丘面に残された谷状の小規模な沖積地が水田可耕地と考えられるが、面積としては沼田台地のC地域・D地域ほど広域ではない。下位段丘の微高地にも、土器の分布が知られることから集落が存在したことは十分に想される。その場合、糸井宮前遺跡と中棚遺跡が、あえて50m以上高い



図15 高野原遺跡住居分布 (報告書より転載)

段丘崖の上位に形成された意味についてあらためて考えてみたい。この中・上位段丘面は、片品川の谷を挟んだ西岸に、ほぼ同標高の沼田台地を見晴らすことができる。ちなみに、沼田台地南端の日影平遺跡は西方に3km強と離れていて、眺望が良く双方に視認できる位置にある。上位段丘の崖上には戦国期の山城が築かれたことも知られている。以上の立地条件を考慮にいれば、これまで見てきた水田可耕地の近辺に立地する他の弥生集落とは異なり、これらは水田経営よりもむしろ眺望を優先的に考えた立地である、と理解したい。とていも、全く隔絶した高所にあるわけでもなく、下位段丘での水田経営も可能だ。その点、防衛的色彩の強い「高地性集落」との性格を与えるのは早計だろう。実際、遺跡には櫓や濠のような防衛施設は見られない。糸井宮前遺跡では、35棟の住居跡が検出されており、そのうち1棟は3期古に属するが、他は全て5期以降に位置づけられる。遺構外でも3・4期の土器が認められないことから、5期以降の古墳時代前期に入ってから、新たに形成された集落と考えていい。ところで、糸井宮前遺跡出土の土器をみると、樽式系土器を主体とする一群と、S字壺と外来系土器を主体とする一群に大きく二分されることが判明している（関根 1985）。本稿の編年では5・6期に相当しており、集落としては時間的に連続することが明らかである。ところが、S字壺を多く出土する住居跡とそれ以外とを分けて、住居分布を検討した結果、樽式系住居（主に5期に相当）は段丘縁辺にそって平行に、後続する6期のS字壺主体の住居跡は直交方向に分布する事が判った（図16）。集落の変遷過程のなかで住居配置が変わることは、樽式土器の集落でも見られることから、過大評価は避けるべきだが、これが土器の大きな転換期と軌を一にしていて点を重視したい。糸井宮前遺跡にみる5期から6期への変化は、樽式系土器の払拭とそれに替わる外来系土器への全面的転換という現象で理解される。それは言い換えれば、南方から進出してきた古墳文化への同化を意味し、さらに視野を広げれば、群馬県南東部を中心に既に形成されていたと思われる古墳社会⁹への参画、あるいは同調といった意味合いをも想定することができる。そうだとすれば、糸井宮前遺跡にみられる集落構造の変化は、単なる宅地移動の結果という範囲を超えて、道や広場、共同祭祀場、畠等も含めた新たな集落形成を目指した構造変革だった、という理解もあながち空想とばかりはいえないかもしれないだろう。後述するように、S字壺を主体的に出土する集落は、非常に限られており、しかもその立地は、伝統的な在地弥生集団の領域とは異なっている。その意味で、在地弥生集団の稀薄だったG地域をのぞき、しかも沼田台地への眺望に優れた高位に進出することの背景には、平野部で古墳文化を築きつつあった集団の北上によって、沼田周辺地域の弥生社

会との間に引き起こされたであろう緊張関係が見え隠れするのである。

H地域

沼田台地の最南端部で、利根川と片品川の合流地点を臨む地点にあたる。弥生集落としては後期の環濠集落である日影平遺跡が知られる。そのさらに南方の段丘下平坦面にもいくつかの遺跡の存在が判明しているが、居住用地としては日影平遺跡のある台地上が最も広い面積を占めている。台地の東側は段丘崖となっており、その東側には片品川の右岸段丘面が形成されている。この段丘面は南方に緩く傾斜しており、崖下からの湧水や旧河道によって形成されたと考えられる小規模な窪地が点在するか、幾筋かの小規模な谷状の窪地が南北方向に延びる。台地寄りの微高地には弥生後期の土器が採集されるので、小規模な集落の存在が想定される。水田可耕地は、台地上では利根農林高校の北側にわずかに見られるだけで、むしろ東側の下位段丘面に形成された沖積地が候補としては有力だ。ここは現在広範に水田化されているが、片品川底面標高が低く灌溉用水としては天水や段丘からの湧水に頼らざるを得ないこと、下位段丘面が平坦ではなく、微高地と小規模な谷状の窪地が連続する地形であることなどから、弥生時代には比較的小規模な水田可耕地が点在する地形だったと考えられる。日影平遺跡はB地域の下川田平井遺跡、G地域の糸井宮前遺跡と並んで、沼田周辺地域における弥生社会の「南玄関」とも言うべき地理的位置にあり、環濠集落という形態からも特殊な性格を付与できると考えている。標高は380mを越え、眺望に優れる。西方には利根川河畔とB地域の集落が形成された山麓斜面、東方には片品川河畔とその対岸に展開する段丘面が一望できる。南方は両河川の合流点をはるか下方（比高約100m）に見下ろし、遠望すれば荒川地域との地形的境界となっている峡谷部も見晴らすことができる。日影平遺跡からは30棟の住居跡が検出され、うち28棟が環濠内に位置している。さらに環濠外で住居分布の広がる可能性は否定できないが、概ね集落の全容を明らかにしたと言ていい。環濠の規模は、長さ110m、短径85mの「卵」形で、群馬県内の環濠集落例のなかではやや小規模な部類に含まれるが、住居数からすれば決して見劣りするものではない（図17）。時期は3期古から3期新までに限られており、4期以降は廃絶したと考えられる。環濠は、V字断面の1/3～1/2まで埋没した段階以降に多くの土器が廃棄されている（小池 2003）。ここから3期古相当の土器が出土していることから、環濠そのものは集落形成の古い段階から存在したと考えていい。報告者は環濠に高さ1.5mほどの土累の存在を想定しており、濠自体の深さを含めれば、最大3.5mに達する深さを有したことになる。土器廃棄が多く見られる段階で、土累の崩落と濠内1mほどの埋没があったとしても、2

黒 5期
白 6期
矢印は推定出入口

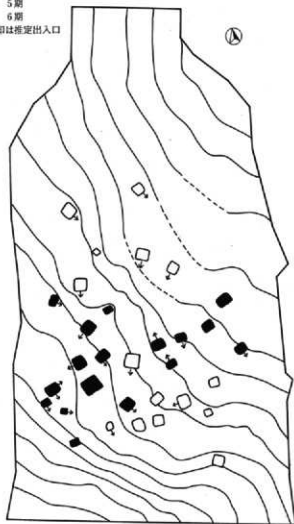


図16 糸井宮前遺跡住居分布 (1/2,000)

m近い深さは保っていたと思われる、十分に防衛的機能を果たしたと考えられる。環濠の性格について、一般論としては「防獣」や「水害対策」なども考えられよう。だが、獣害を防ぐならば他の集落（特に山麓部）に見られないのはおかししい、また洪水の起こりえない地形に位置することから「水害対策」説も否定される。従って日影平遺跡の場合は、間違いなく防衛的施設と理解していただろう。住居跡の出土遺物から、集落は概ね3期に区分され、一時期あたり10棟前後で構成されていたと考えられる。環濠外の2棟はそのなかでも古段階に位置づけられ、集落形成当初から環濠の外側に構えていたことがわかる。このことは、環濠の築造時期が集落開始と同時になく、3期古の途中から形成された可能性も考慮する必要があることを示すものである。なお、日影平遺跡出土土器のなかに、淡川地域で多く見られた折り返し口縁に刻みを加飾する壺が湧出している。B地域の下川田平井遺跡と同様に、淡川地域との交流の一端を示す例

として注目しておきたい。

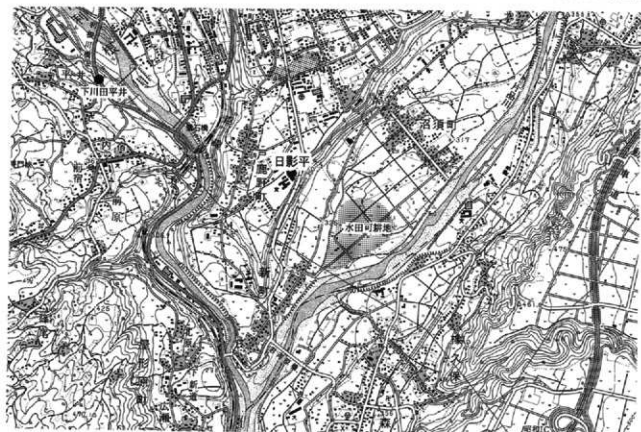
以上に述べた弥生集落の分布の様相と立地傾向について総括すれば、いずれも河川流域の谷底平野や湧水あるいは小規模河川によって沖積地が形成された地点に面しており、各々の地形条件に応じた分布密度と集落規模をもつ、といえよう。基本的にはたとえ小規模であっても、洪水の危険性がなく少人数の労働力でも経営可能な水田可耕地を選択して集落が立地する傾向が強い。この事実から、弥生集落の居住地選定において、まず水田経営を最優先にしたことは明らかだ。そのことが必ずしも“水田農耕を主な生業とした集落”を意味するものではないにせよ、基本的に彼らがそのような強い指向性を持っていたことについては、「稲作偏重に過ぎる」との批判が高まってきている昨今の論調をふまえてもおお、強調するのはやぶさかではない。当然のことながら、その地理的条件には可耕地や居住地の許容面積、あるいは水利の便などで優劣の差があり、またその較差も氾濫などによる河川の流路変更や、沖積作用の進行がもたらす沖積地の乾燥化等で、必ずしも不変ではないことを考慮しておく必要もあろう。このような弥生集落の立地傾向は、戦前の研究以来、多くの先学や論者によって語られてきた事象であり、あらためて筆者がここで指摘するまでもない。ここで論点にしたいのは、水田指向か畠作指向かといった総論的な生業傾向の把握ではなく、沼田周辺地域という独自の地理的条件や自然環境の中で、個々の集落遺跡が実態としてどのように適応し、それらがどのような関係をもって地域社会を形成していたのかという理解にある。

ここでは、前述した土器編年の細分案に従って、各地域毎に形成された集落の時期と継続期間を把握し、代表的な集落遺跡の性格やその成立背景についても言及した。最後に、沼田台地を中心とした全地域を対象にして、集落群の成立と変遷過程について総括してみる。そこに浮かび上がってくるであろう弥生社会の動態のなかにこそ、弥生びとを主人公とした地域形成史の実相が現れるはずであり、それが弥生時代から古墳時代へと大きく移りゆく歴史の流れを具体的に解明するひとつの重要な鍵になると考えている。

4. 弥生社会の形成とその変遷

(1) 沼田周辺地域における弥生社会の範囲

ここでは、先に検討した沼田周辺地域における弥生土器の地域色に基づき、その分布と弥生集落の関係を見ることにしたい。地域色は壺と甕にほぼ限定されること、時期は2～3期に目立ち、その前後の時期は不明瞭である、という条件付であるが、幸い3期に最も遺跡数が増え最大域まで分布が広がるので、分布範囲の検討には差し支えない。



(1/25000)

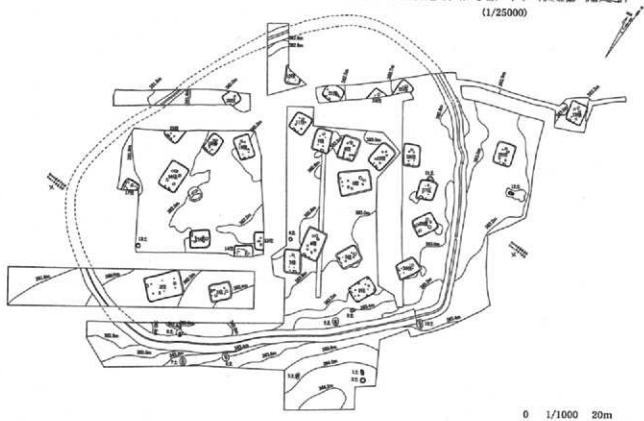


図17 日影平遺跡の位置と全体図 (報告書より転載)

まず、記述の煩雑さを省くために、沼田周辺地域に特徴的な地域色をもつ土器を、「沼田型壺」「沼田型甕」と仮称することとする。また先に対比した渋川市周辺の土器についても、仮に「渋川型壺」「渋川型甕」と呼称する。ただし、それぞれ様式概念として捉え得たわけではないので、あくまで便宜的な名称として用いる。特に「渋川型」については、榛名山東麓の土器と分離する意図はないので、あらかじめ断っておく。

前項で詳述した地域分類に従って、土器の地域色の分布状況を見ることにしよう。北部を占めるA・D・E・F地域では、沼田型壺と沼田型甕が優位を占めており、特に壺はほとんどが沼田型と言っている。甕については中間的な例も見られることから、明確な分離は難しいが、(2) 沼田型壺も一定量併存するようである。A地域の月夜野町諏訪遺跡1号住居跡では、櫛歯波状文のみの沼田型壺と、頸部籬状文を施した渋川型壺が共存している。両者には、先に地域色の特徴とした器形の差も明確に認められる。当初これを時期差と考えたが、多くの遺跡で両者共存が存在することから、沼田地域北部での一般的な在り方と考えておきたい。一方、B・H地域では、渋川型壺が混在することが特徴である。しかし、ここにも沼田型壺は、口縁部に刻みや刺突を施す点で渋川地域の壺と共通するもの、頸部一肩部文様も沼田型が多く、いわば両者の折衷型といえるものだ。数量的にもついでして主流を占めるわけではないことに注意の必要がある。この種の渋川型壺が、分布城南端にあたる下川田平井遺跡と日影平遺跡で明確に認められることについては先述した。壺については北部の状況と大差はなく、沼田型と渋川型が併存する。

以上のことから、沼田周辺地域では集落の分布域全域にわたって沼田型の壺・甕が主体を占めており、南端部の集落に限って渋川型壺、ないしはその影響が色濃く見られるといつてよい。それは前項でも触れたように、渋川地域の弥生集団との交流が、南端部に位置する集落ほど活発であったことをものがたる。地理的な位置関係からすれば、これは当然のこととして捉えられる。では、一方の渋川地域ではどうなのか。南端部の日影平遺跡から、直線距離で離れること約13kmの地点にある有馬遺跡を見てみよう。なお、有馬遺跡は長期にわたる拠点集落なので、ここでは特に3期相当の土器にしぼって対比する。それによれば有馬遺跡では、壺の大部分が渋川型で占められており、甕では渋川型を主体として一定量を沼田型が占めるようである。このことから、壺では両地域の集落分布と地域色がうまく符合するが、甕については較差が不明瞭で、全体に占める量比の違いに帰結するようだ。先述した「地域色」を「様式」として明示できない理由がここにある。だが、それがたとえ様式概念で捉えられなくとも、壺に顕現する地域色がそれぞれの集落

分布と一致することは、地理的な隔絶が異なる地域色を生み出し、それによって沼田周辺地域の集落群をひとつのまとまりを持った社会として捉えることが可能であることを意味する。このように考えた場合、日影平遺跡や下川田平井遺跡はその土器様相からみて、沼田地域弥生社会のなかにおける渋川地域との交流拠点という位置づけが与えられよう。そして、北部に展開する集落群は地域社会の主体であり、さらに継続期間や規模の大きさからその中核的位置をしめる戸神諏訪遺跡や石墨遺跡は、名実共に地域社会の中心的な拠点集落であったことが理解されるのである。では、その地域弥生社会がどのような過程で形成されたのか、そしてどのような変遷を辿ったのかについて述べることにしよう。

(2) 地域社会の動態

沼田周辺地域における弥生時代の地域社会形成は、その様相から大きく3期に分けて理解される。これを、開拓期、定着期、再編期と呼称して記述を進める。

開拓期 土器編年の1～2期に相当する段階で、地域内の北部にあたるA・D・E・F地域での集落形成が始まる。数棟から多くても10棟前後の住居から構成される小規模集落で開始し、各地域で1ヶ所程度の分散した分布状況を示す。本来の意味で当地域のフロンティアといえ、IV期(中期後半)に集落を構えた白沢村寺谷遺跡や土器棺墓が検出された昭和村額原遺跡であるが、これに後続する集落遺跡が現状では確認されていない。定着することなく、移転を続けたと考えたい。ここで開拓期としたのは、集落形成がその後引き継がれ、地域社会形成の開始期にあたるという理解による。ただし月夜野町十二原遺跡や沼田市背戸田II遺跡、同向田遺跡、同高野原遺跡のように、短期間で終了し、別の地点や地域に移転したと想定される集落も少なくない。稀薄な集落分布密度からすれば、集落選地の自由度は高く、より良好な水田可耕地や、環境に優れた居住適地があれば、地域内で転々と居を移したと推測する。A地域における十二原遺跡と三後沢遺跡、B地域における背戸田II遺跡と下川田平井遺跡あるいは上川田原遺跡にみられる、定期的な先後関係(表1)は、短期移転の末に数期にわたる集落として定着しえた集落動態を示すのではないだろうか。また、この時期には母村といえるような大規模な拠点集落は見られず、最小の集団単位による小規模集落の形で定着することは注目して良い。それは水田開墾やその経営が小規模なものに留まっていた事を示す。地域を異にする集落間の紐帯の程度については、3～5kmという集落間距離から、日常生活や協業面では、各々が独立的存在であったと想定したい。ただし、この直後から土器の地域色が顕在化かつ全体化していくことを評価すれば、婚嫁や情報交換、物資流通等を通じた地域全体のまとまりはすでに存在したと考えていざらう。

ここで問題となるのは、これらの開拓期集落を形成した集団の出自である。当然ながら、IV期から存在した在地弥生集団が、そのまま継続して集落分布を広げたとの解釈も可能だが、後続するV-1・2期（後期初頭～前半）の遺跡が、十二原遺跡や高野原遺跡など限られたわずかな遺跡でしか見られないことから、人口の自然増があったにせよ、その直後に位置づけられる開拓期集落群の主体とは考えにくい。むしろこのような集落群出現の直接的要因として、他地域からの集団移住の可能性を想定してみたい。その候補としては、利根川で結ばれる渋川地域の弥生集団があげられよう。渋川地域では、有馬遺跡・有馬条里遺跡・中村遺跡（以後一括して「有馬遺跡群」と呼ぶ）のような拠点集落が既に形成されており、沼田地域の開拓期に相当する頃（V-2期）には住居数も増えて、有馬遺跡群では集落形成の最盛期を迎えている。渋川地域と沼田周辺地域を比べれば、土器に見られたT字文の借用や地域色成立後の窯の相互流入などから、両地域の関係は密接なものであったことが理解されよう。それには当然、地理的に近接し交流が絶えなかったことが大きな要因であろうが、沼田地域の弥生社会誕生に関しても、渋川地域の弥生集団が大きな役割を担っていた可能性を考えておきたい。

定着期 本稿編年の3期古から3期新に及ぶ時期に相当する。前述の各分割地域毎に定着し、安定した継続集落が形成される。加えて集落規模の拡充も見られるようだ。先に見たように、A地域では分析された台地毎に小規模集団が分営しながらも、相互に視認できる隣接関係から、ひとつの紐帯で結ばれた小地域集団を構成していた可能性が高い。また、D地域では戸神調訪遺跡・石墨遺跡のような拠点集落の形成が目される。その初期段階では必ずしも他集落を大きく凌駕する規模ではなかったが、順調に拡大、あるいは周辺への分村によって、D地域の中核的存在となっていたことが窺われる。その背景として、安定した広い水田可耕地の存在が大きな要因と考えられる。一方、北東部のF地域では、発見川、薄根川、小沢川の河川流域に形成された谷底低地に沿って、小規模な集落が進出している。上光寺遺跡、奈良原遺跡、門前橋遺跡等がこれにあたる。新たな耕地を求めての分村と解したい。片品川流域の段丘面に形成された上久屋橋場遺跡やG地域の糸井宮前遺跡なども同様な性格と考えていこう。以上のような集落様相にみる、地域毎の集落の定着と、そこから派生する分村により、集落分布は最大限にまで広がる。この時期には、先述の土器地域色が顕現しており、これによって全体がまとまったりひとつの沼田地域社会が完成されたとも考えることも可能だ。その場合、個別集落を基礎単位として、前述のA～H地域区分における同一地形のなかで共存する地縁的集団と、さらにそれらを結びつける沼田地域全体のまとまり

といった、重層する社会構造を想定しておく。ここで最も注目されるのは、地域の中で南端に位置する日影平遺跡と下川田平井遺跡の存在だ。すでに詳述したとおり、両者は渋川地域との交流拠点といった性格を有し、しかも眺望優先ともいってよい高所に占地することは、監視台的な役割をも担っていたことを想起させる。日影平遺跡が、後期としては数少ない防衛的環濠集落の形態をもつことも、大河川の合流地点を見晴らせる最南端部に位置する、という立地条件と密接な関係があると考えるべきだろう。日影平遺跡の環濠は、どのような集団に対する防衛だったのだろうか。各々の集落が環濠を具備する例の多いIV期（中期後半）では、個々の集落間における緊張関係を想定することも可能であろう。だが、日影平遺跡の存在した3期古～3期新には、少なくとも沼田地域の中で他に環濠集落は見られない。C地域の観音前遺跡もその可能性があるが、詳細については明確になっていない。拠点集落と位置づけた戸神調訪遺跡、石墨遺跡にしても環濠はもちろん、柵などの防衛的施設の使用は否定的だ。このように沼田地域内の弥生集落を対比した場合、日影平遺跡が特別な性格を有していたことを想定せざるを得ない。すなわち、沼田地域内の弥生社会において、緊張関係をもった独立的集落だったか、あるいは、沼田弥生社会の南限における防衛と監視的役割を担った存在であったかのどちらかと想定しよう。ここであらためて、表1の存続期間を見てほしい。日影平遺跡は3期古に形成され、3期新まで継続して以降には廃絶している。ほぼ集落の全域を調査しているから、前後の時期に延びたことはまず考えにくい。前述したとおり、住居群は3段階の変遷を経たと考えられるので、継続期間は短くて50年、長くても100年未満と想定している。3期新は、町田小沢II遺跡で共存した北陸系環から、月形式併行と考えている。だとすれば、日影平遺跡の時期は、月形式併行期をふくめたその直前段階までの期間に相当する。これを暦年代に比定するならば、新しくは3世紀半ばを下ることなく、集落の成立は2世紀後半段階まで遡ると考えている。まさに中国の史書に記された「倭国乱」や「邪馬台国と狗奴国の対立」の時期に合致するのであり、それが群馬の地でも及んだとの実証は今後の問題としても、このような列島内の緊張状態と関連させて考えることは、あながち荒唐無稽とも思えない。近似した時期に、北陸～上越地方においても高地性集落が出現するなどの急変する社会情勢は、北・中信地方との交流を絶やさなかった当地域にも、情報として伝えられたのは間違いないであろう。このように考えれば、日影平遺跡の環濠は、地域内集落間の緊張状態をあらわすのではなく、より広域な「クニ」同士の緊張状態に対処したものと、との解釈も許されるだろう。C地域に位置する観音前遺跡がやはり同様な防衛的環濠集落の形態をもつならば、こ

れは沼田地域弥生社会の北辺の守りを担っていたのではあるまいか。利根川右岸の崖辺高所に位置する下川田平井遺跡も、同様の役割を担い、同時存在した対岸の日影平集落との情報伝達を烽火等によって行っていた可能性も十分考えられる。では、具体的に想定できる敵対勢力は実在したのだろうか。繰り返して述べたように、南方の隣接勢力である淡川地域の集団とは、土器の様相や、石墨遺跡の円形周溝墓副葬品に見るように、交流の痕跡が濃厚である。それが友好的な関係か否かを実証するのは困難であるし、社会情勢の動向に伴ってその関係が大きく変化することもあり得るだろう。また、実際に大規模な戦闘行為が行われたとの物証も認められないことから、これ以上の憶測は無意味だろう。ここでは、列島内のどこかで起こったであろう戦乱や、「クニ」間における緊張関係についての情報を察知した沼田弥生社会が、具体的な敵対勢力の有無は別として、有事の際の対応策を図り、防衛上の要所である地点に防衛的集落を設けたと理解しておきたい。

なおこの時期には、石墨遺跡と戸神諏訪遺跡のそれぞれ、小規模な円形周溝墓と、それと同一の主体部をもつ木棺土墳墓によって墓域が形成されている(図13)。両者とも居住域からやや離れたにはいるが、同一地形面に位置することから、それぞれ集落に対応する墓域と考えられている。石墨遺跡例で見れば、6人の被葬者の墓と考えられ、鉄剣の副葬や鉄銅の出土が見られることから、集落の一般構成員ではなく、首長や祭祀的役割を担った中心的人物と想定できよう。墓形や、出土遺物の様相は、淡川地域の有馬遺跡群で見られる塚墓群に類似しており、鉄剣や銅は淡川地域から、あるいはそこを經由して入手したと考えられ、淡川地域社会との交流関係を保持していたことを窺うことができよう。

再編期 4期～6期に相当する。前段階で形成された弥生社会が大きく解体し、再構成される。開析谷や小規模な沖積地に依存していた小規模集落はほとんどが廃絶しており、異なる地域に移転したようである。防衛的拠点と位置づけた日影平遺跡や下川田平井遺跡も廃絶したと考えられている。そのまま継続するのは、拠点集落となった戸神諏訪遺跡や石墨遺跡だけだ。前述のように、戸神諏訪遺跡と石墨遺跡では、この時期から住居数が急増し、居住域が倍ほかに拡大する。この相反する集落の変化は全く偶然とは思えない現象だ。おそらく、何らかの事情により、周辺の小規模集落や防衛的集落が拠点地域に移転合流した結果ではなかろうか。その一方で、新たな集落の進出が特筆される。D地域の向田遺跡とG地域の糸井宮前遺跡がそれだ。両者は、すでに古墳時代に突入した段階の5期～6期に相当する。土器の様相は、無文の在在弥生系土器を残しながら、器種組成には土師器が主体的位置を占めつつある。先述したように、糸井宮前遺

跡は一時期に10棟以上の住居群で構成される集落で、集落規模からみれば、日影平遺跡や下川田平井遺跡に匹敵する。このことから、日影平集落の移動した姿と想定できないこともない。向田遺跡も同様の規模と時間幅をもつと考えられる。これらが、前段階の弥生集落群と異なるのは、それまで形成されなかった地点に占地することだ。向田遺跡は、河川氾濫の危険性をはらんだ広大な低湿地に面しており、一方の糸井宮前遺跡は水田経営には不便な、むしろ沼田台地を眺望する絶好の高位置にあることは既に述べた。また両者の共通点として、一定量のS字壺が組成に加わることに注目したい。これは、北上してきたS字壺を持つ集団との接触度の高さを意味するのだから、あるいは北上した集団そのものの姿なのか。どちらで理解するかによって、沼田地域における弥生社会の変遷過程について、全く異なる解釈が導き出せる。前者で理解するならば、在地弥生社会が新たな古墳文化を受容しつつも、旧来の社会的枠組みに大きな変化はなく、防衛的役割を糸井宮前集落、新たな水田の開発拠点として向田集落を形成したと解釈できよう。後者ならば、沼田弥生社会に進出するための「橋頭堡」的な役割を担っていたとの解釈が可能である。ここでは、どちらかに結論づけるだけの有効な論証方法が見つからないので、これ以上の言及は控えるが、前段階までに形成された弥生集落が、自らの耕地や居住地を放棄してまで、北辺の拠点地域に集住する集落群の動向が、群馬県平野部で古墳文化を築きつづけた新たな勢力の北上によって促されたとの解釈は、何一つ無理ではないと思われる。

沼田弥生社会の終焉は、この時期の直後に訪れる。全ての地域で集落が廃絶するのだ。拠点集落だった戸神諏訪遺跡も、新たに形成された糸井宮前遺跡も、一斉に終焉を迎える。その後、沼田地域での集落形成が再開されるのは、古墳時代中期まで待たなければならない。この、最大の画期こそ、群馬県東南部に巨大古墳が築造され、大規模水田開発が進んだ時期にほぼ相当する。沼田弥生社会を形成した集団が一機に全滅したとは考えにくいし、それを証拠立てようとする人為的物証や自然災害の痕跡も認められない。環境に大異変でも起こらない限り、彼らは自ら築き上げた土地を放棄することはあり得ないだろう。唯一考え得るとすれば、集団移住である。若狭徹は、榛名山東南部の弥生集団が、その終末段階で利根川流域の平野部や赤城山麓に移動したことを論じている(若狭 1998)。特に前橋市南部から太田市、あるいは利根川を超えた埼玉県北部に至る広範な地域に、古墳前期の集落が急増する事実は、在地弥生集団の自然増では理解不能なだけでなく出来事である。周辺地域における在地弥生集団の大量移住と解しておきたい。沼田地域でも、榛名山東南麓より一段階遅れて同様の動きがあった可能性は大きい。それが、自ずから運んだ途なのか、強

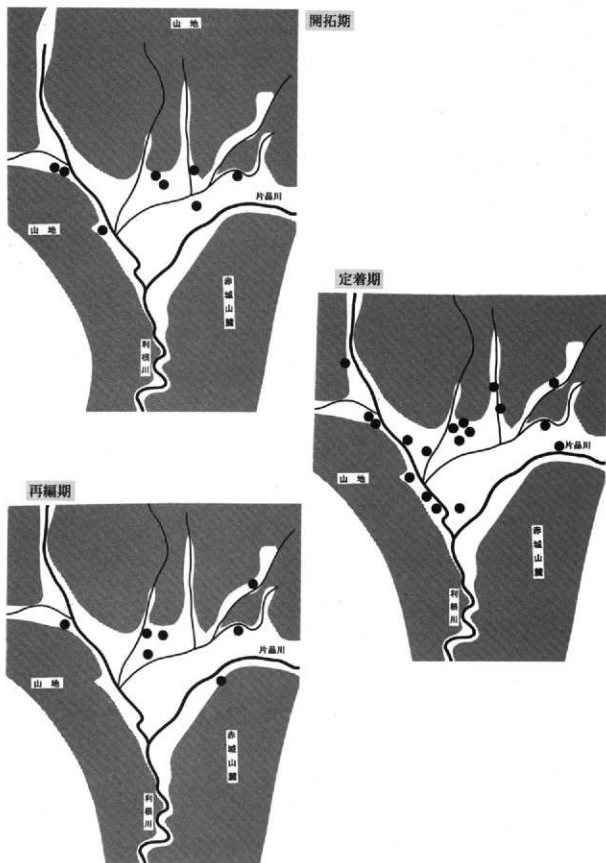


図18 集落分布の変遷

制的な植民なのかは定かでないが、古墳社会形成の新たな枠組みのなかに参画することでしか、生き延びる方策はなかったのかもしれない。

沼田弥生社会がこの大変革期を迎える直前、渋川地域ではすでにS字甕に表徴される新たな集団の進出が始まっていた。利根川を挟んだ有馬遺跡群の対岸に位置する北橋村北町遺跡では、4期相当期にS字甕の導入が見られる。樽式系土器を残しながら、5期にはすでに土師器を主体とする土器群に転換している。それは、単に日用具としての土器を土師器に替えたに過ぎないにせよ、その直後に続く地域的枠組みの激変を想起するならば、平野部を中心に進行しつつあった新たな古墳社会のなかに取り込まれたと考えていい。ところが、ここからわずか3km強しか離れていない北東の山麓部に、S字甕を受容しない同時期の集団が存在したのである。赤城村見立沼井遺跡がそれだ。調査地点で見られる限り、その後集落は途絶えたと考えられるから、この地を放棄して異なる地点あるいは地域に移住したと考えている。南下して古墳社会のなかに参入したか、あるいは北上して沼田弥生社会に合流した可能性も考えられよう。それについては、有馬遺跡群を中心とした渋川地域における弥生社会の終焉過程を追うことで、あらためて論及したいと考えている。だが、いったんは古墳社会を形成する集団との合流を拒絶して移住したとしても、沼田地域の終焉に見るように、最終的には古墳社会の中に再編成されていく運命にあったことは間違いないだろうと予測している。

5. 総括

沼田周辺地域における弥生社会の形成とその変遷過程は、樽式文化圏の北辺部といった地理的環境から、閉塞的な地域社会が成立したと想定していたが、思いの外、列島規模に及ぶ社会情勢が如実に現れていることを見いだした。古墳時代前期における弥生社会の解体については、既に多くの論者によって言及されていたが、それ以前の弥生社会形成過程については、大部分の集落遺跡が後期後半や後期末の一時期に一括して扱われることが多かったために、具体性を欠く場合が多かったように思う。それがために、拠点集落形成の背景や周辺の小規模集落との関係、また防衛的集落形成の必要性などについて、他地域の弥生社会形成過程をモデルにした図式的な理解に終始してきた感がある。

拠点集落の形成に関して言えば、戸神諏訪遺跡に見られたように、有利な地形環境に恵まれていたとはいえ、当初から大規模集落を構成していたわけではない。その初期には、他の小規模な集落と同様に小地域内での沖積地開拓にはじまる。やがて地理的優位性を生かして小地域における中核的存在となり、外界の社会情勢の変動を契機とする、周辺集落の併合や集住によって、地域社会

全体の拠点的大集落へと変貌を遂げたのだ。開拓谷や小規模沖積地に面した小規模集落に関しては、ともすればこのような拠点集落を母村として、周辺に派生していった子村である、との解釈で捉えがちだ。しかし、沼田周辺地域で見られる限り、開拓当初から小規模のまま継続するか、分村や移転をくり返して小地域集団を構成する様相がうかがえることから、そのような一辺倒な形成過程では理解できないことが判明した。

弥生時代は、稲作を主産業とすることで、集落間格差が生じ、それに起因する集落同士の軋轢と、これを解決する手段としての地域社会リーダーの出現や、暴力的解決法としての戦争行為があったと解釈されている。またそのような解決法をくり返しながら、次第に大きな弥生集団として地域社会が形成されるとの論法も多く見られる。だが実際として、どこの弥生社会も全く同じような形成過程と変遷を辿るものであろうか。実際には、自然環境の違いや、そこに定着した弥生集団の性格や個性、また他集団との交流の度合い等により、その地域に即応した独自の弥生社会が形成されたはずであって、その契機や変遷過程の理解について同一に語られる方が不自然だ。

沼田周辺地域における弥生社会で、調停役を果たしたと想定される首長や祭祀従事者の出現経緯の理解については是認できるとしても、拠点集落たる戸神諏訪遺跡の成立背景には、主に肥沃で安定的な水田可耕地や広域な居住地形などの地理的優位性に依拠していた可能性を強調したい。安定した耕地と居住地、さらに外界の脅威の少ない地理的位置が保証できれば、集落の長期存続と自己拡大があったはず、と考えるからである。だが、その場合の拡大の程度は、人口の自然増加率を大きく超えるものではなく、急激な拡大は周辺集落からの集住があったため、と考えたのであった。

一方、各個別地域における小規模集落では、その分布状況や動態から、人口増加あるいは飢饉に対処するための耕地と居住地の安定化や拡大は、集落間の軋轢が生じない程度に自らの地域内で解決を図っていたと考えられる。また、これらの小規模集落のうち、一定期間を経て他地点へ移転する場合は、畠の鎌刈りや田の水利環境の変化などが、大きく作用していた可能性を考えたい。また鉄製鋤類の普及していない、当地域の弥生後期段階における、これら土器出土率の高さから、高緯度での畠作に少なからず比重をかけていたことも推測されよう。水田可耕地ほどではないにせよ、集落維持条件に影響する一要素として考えておきたい。

日影平遺跡の環壕集落に見る防衛的性格は、地域内集落間の緊張関係をあらわしたと考えるのではなく、むしろ、外界での社会情勢に対応して、沼田地域弥生社会総体の防備を目的としたものであると位置づけた。それと同様

に、小地域毎に展開していたそれぞれの弥生集団が、限定された地域に集住する現象についても危機感を孕んだ外界動勢に促されたと理解しておきたい。開拓以来、定着してきた自らの生活拠点を放棄してまで、拠点集落を水田とした北辺地域に集住したのは、労働力の結集による中心とした北辺地域に集住したの、とする内在的背景で考えるのではなく、むしろ外部からの進入勢力に對面した守りの姿勢であった、と考えておきたい。

ところで、沼田地域に弥生社会が本格的に形成されたのは、V-2期後半ないしはV-3期初頭における、澁川地域を有力候補とする他地域からの移住の可能性が高いことを述べた。このような集落動態は、沼田地域だけに見られる現象ではなく、群馬県内の他地域でも看取される。

県南西部の銅川流域では、その上流域である富岡市周辺において、拠点的な大型集落が地域内の各所に展開するのが、ちょうどこの時期に相当する。「高地性集落」との評価で注目されることとなった中高瀬観音山遺跡や上流域奥部に位置する南蛇井増光寺遺跡は、IV期(中期後半)にすでに集落形成が開始しているが、時間的間隙をあけて、V-3期から本格的な拠点集落としての展開が始まる。富岡市周辺のV-1・2期(後期初頭～前半)の遺跡は、中核的拠点集落である阿曾岡権現堂遺跡を除けば、小規模集落として散在する状況を示すから、V-3期開始段階で地域的枠組みの再編成があったと考えている。一方、銅川上流域の吉井町周辺では、V-1・2期集落が多いにもかかわらず、その後続くV-3期集落の存在が比較的稀薄な状況がうかがえる。県内でも中期後半から後期にかけて、弥生集落の濃密な分布を示す榛名山東南麓ではどうか。ここでは、IV期からV期末まで継続的な集落展開を示すが、個別集落で見た場合、新保遺跡のような拠点を除くとして、周辺域を中心に、V-3期に新たな地点に集落形成が行われた様子が窺える。特に碓氷川流域の八幡台地近辺への集落展開は注目される。高位台地上の八幡遺跡、剣崎遺跡、少林山台遺跡などがその代表としてあげられよう。構式文化圏のV-3期に始まるこのような現象を、新たな集落形成による地域圏の拡大、と捉えることも可能だが、沼田地域での弥生社会形成と運動させて考えるならば、これは人口増への対応や新たな耕地開発を契機とした「拡大現象」ではなく、別の外的要因を背景とした地域毎の集落群再編ではなかったか。土器編年を暦年代に比定するならば、IV期を1世紀中頃まで、その直後のV-1・2期は紀元100年を中心に前後する頃、V-3期は2世紀後半頃から始まる現状では考えている。とすれば、V-3期の前半では「後国乱」、後半では「群馬台国と狗奴国の対立」が時代背景にあったと見ていい。それが列島内のどの地域での史実かが特定できない以上、過大評価するのは避け

るべきだが、鉄器や青銅器の流通に示されるように、当時の西日本弥生社会での社会情勢に関する情報についても、直接的でないにせよ入手していたことは間違いないと考える。西方の遠隔地で「大乱」が起こっているとの情報があったらされた時、群馬の弥生社会はどのような対応を迫られたのだろうか。V-3期における地域再編の動きは、これに反応した自衛手段と考えることはできないだろうか。

銅川流域の要所に位置する「高地性集落」として喧伝された中高瀬観音山遺跡は、その防衛的性格が強調されすぎたさきらいがあって、あたかも目前に戦乱の危機が迫っていた、あるいは焼失住居の多きから実際に戦乱があったかのような印象を与えるが、実態としては、V期を通して100年ちかくの長きにわたった長期継続集落であって、危急事態に直面して形成された、その場限りの集落とは思えない。集落形成の契機を想定するならば、地域弥生社会を守る備えとして、あらかじめそのような危機を察知し伝達する、といった役割を与えられていたのではないだろうか。その場合でも、仮想する敵対集団がどの、どの程度の集団なのかについては、考古資料から想定することは困難と言わざるを得ない。だがその主たる守備範囲は、かつて筆者が検討した「富岡型」壺・甕(木本1997)が地域域として主体を占める富岡市周辺地域が対象であったと想定したい。

本稿で述べた沼田周辺地域の弥生社会の防衛的拠点として、日影平遺跡の環壕集落を位置づけたように、弥生時代後期の段階では、構式分布圏全域がひとつにまとまっていたのではなく、土器の地域域に表徴されるような各地域毎にまとまった社会が形成され、防衛的集落形成にみるような危機管理体制にしても、地域社会が各々独自に対応していたと考えたい。

農耕社会の形成が「戦争」を生み出した、とは故佐原真氏の一貫した主張であった。また、列島内では生産力や武力のパラメーターとなる鉄製品や鉄素材の入手をめぐって戦争が起こった、との解釈も多くの論者によって主張されている。当然のことではあるが、それは農業生産や物資流通といった側面から利害が衝突する集団間に限って生じるのであって、利害関係を共有ないし、融通しえる範囲においては、むしろ平安状態を保つ努力がなされたのではないだろうか。沼田周辺地域のような小規模な弥生社会では、内部の集落間抗争は、集落間の壊滅に直結し、優位な集団にとっても労働力の減少から、集落の疲弊に結びつく。それは、地域社会全体の発展ではなく、むしろ衰退の途をたどることに他ならない。沼田周辺地域の弥生社会形成を理解する上で、集落間の抗争を想定しなかったのも、以上のような考え方のものである。

戦争がそれまでの旧社会を解体して、新たな世界の枠

組みを形成してきたのは、歴史的事実である。だがその結果は、勝者の利が拡大されるのみで、後世に新たな利害対立の種を宿すことになるのも、周知の事実だ。世の中に安定した平和をもたらすために戦争をするのだ、というのはまったくの詭弁にすぎない。集団間の競争原理が、全ての人間社会に普遍的に存在したという根拠もない。もちろん、限りある資源獲得をめぐる利害対立、現状より安定した生活への欲求などは、集団間での競争や闘争を促す大きな要因となり、原動力として働くのは仕方ないことも知れない。だが再度考え直してみたい。戦争がもたらすのは疲弊と新たな対立を生むだけだということ。現代人たる私たちが、過去の弥生人達が遭遇した経験や生き抜くための知恵に、学び取らなければならないことはまだまだ多く残されているのではないだろうか。

最後に、一昨年に急逝された故佐原真氏とは、ついに親しくお話を伺うチャンスに恵まれなかったが、奈良文化財センターの研修や、各地の講演会の中で氏の高説に接して、考古学的な学説はもとより、その研究姿勢や情熱に字ばせて頂くことが多かったように思う。弥生時代の戦争について語ったあとに、ドイツ語でエーデルワイスを唱った姿は、いまでも臆に焼き付いている。特に、世界平和を希求する氏の情熱は、日本が50年間、他国との戦闘行為によって殺したり殺されたりしていないことは誇りに思う、との言葉とともに、海外の心中にも深く刻み込まれている。だがついに、筆者に向けて自衛隊を派遣することになった今の日本の現状を見たら、どのような感想を持たれたらだろうか。氏が後年、考古学の成果をいかに現代の直面する問題解決のヒントとして考えるか、について説き、後学にその使命を託したことは良く知られている。及ばずながら筆者も、それを指針として一地方の弥生文化解明に取り組んだつもりである。力不足ゆえ、重要な問題の見落としや曲解、憶測の類は多々あろう。先学諸兄の論説を誤解する点があったらお詫びしたい。ご叱正、ご批判を願う次第である。

註

- 1) 神沢勇一は、関東地方における棚田文の波及を示す意見町式以後を後期とした(神沢 1966)が、当時、この編年的位置づけに同調する意見ほとんど見られなかった。
- 2) 比田井氏は解説(比田井 2002)のなかで、「電見町式」の代表例を前橋市清原東中塚遺跡出土遺物として挙げたが、これは「電見町式」の新段階にあたるものだ。これより古相を示す例として富岡市の南蛇井増光寺遺跡、小塚遺跡、高崎市の高崎城遺跡、電見町遺跡などがあるが、これらは中期後半に位置づけられることになるのだろうか。同書巻シリーズ「土器Ⅰ」では、石川日出志が電見町式を後期後半に位置づけている。地域間併行関係の再検討を提起されたものと理解するが、同一様式を中期と後期に分けて呼称することの混乱を避けた。在野弥生研究者に課せられた急務を受け取っている。
- 3) 壁内面を丁寧に研磨する手法を、箱清水式と樽式に共通する様式の

特徴として捉え「磨磨技法」と呼称されている(青木・飯島・若狭 1987)。

- 4) 白色灰状物質についての科学的な分析はまだなされていないが、ドロドロの液体だったのは間違いないだろう。また同様の物質は有孔珪にも認められることがあり、筆者はこの両者を組み合わせて調理等に用いる灰汁地用ではないかと想定した(大木 1967)が、具体的な検証は今後の課題と考えている。
- 5) B期の形状が北毛地域の特徴ではないかとの指摘は、すでに飯島克巳と若狭氏によって示されている(飯島・若狭 1988)。
- 6) ここで示した時期区分はすでに若狭が示した編年表(若狭 1990・1996)を新たな資料で再検証した結果に過ぎない。特に4期(古墳Ⅰ段階)と5期(古墳Ⅱ段階)の理解については変更の余地がないと思われる。ただし、本論では集落動向やその継続期間を検討することに目的をおいたため、従来一括されていたV-3期を細分することに主眼を置いている。また弥生時代、古墳時代という文化背景を加味した時代名称を冠せずに、単なる数字で時期区分を表したのは、編年を時間軸上のスケールとしてのみ考えたことからである。ここで土器変遷上の断層を想定するならば、若狭が示したと同様に3期と4期の間に大きな落差を認めないわけにはいかない。
- 7) 幾知川で水田を営む地元の言によれば、用水の整備された現在でも、標高500m付近より以北では稲の生育条件に違いがあり、「コシヒカリ」のような品種は作れないそうである。
- 8) ここでは、古墳築造をシンボルとして、大規模水田開発を可能にした、政治的かつ経済的にまとまりつつの広域社会、という意味で用いている。

参考文献

- 相沢貞樹・中村富夫 「群馬県北域村分郷八弥生住居跡」『考古学雑誌』59-1
- 青木一男 1999 「長野盆地南部の後期土器編年(発表メモ)」『99シンポジウム 長野県の弥生土器編年』長野県考古学会
- 青木和明・飯島克巳・若狭 1987 「箱清水式と樽式土器」『弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ』湖山園
- 赤塚文彦 1990 「考察」『範囲遺跡 愛知歴史文化財センター』
- 秋島 武 1995 「沼津宮遺跡」『沼津市史 資料編Ⅰ』
- 飯島克巳・若狭 1988 「樽式土器の再構築」『信濃』40-9
- 石川日出志 1992 『関東各地の農耕遺跡』新編 古代の日本 8 関東 角川書店
- 井上唯雄・梶原憲一 1977 「入門講座 弥生土器—北関東3」『考古学ジャーナル』143
- 入沢賢治・加藤二生 2000 「群馬県地域における弥生時代後期の概観」『第9回東日本縄文文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年』大正1989 「箱清水・鎌倉遺跡」財団法人群馬県歴史文化財調査事業団ほか
- 大木謙一郎 1984 「成果と問題点 1号住居址出土遺物について」『城平遺跡 遺跡調査』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団ほか
- 大木謙一郎 1997 「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団
- 大村 直 1983 「弥生時代におけるムラとその基本的経営」『史鑑』15
- 大村 直 1992 「古代東国社会の基盤」『新編 古代の日本 8 関東』角川書店
- 大村 直 2000 「弥生・古墳時代のムラ研究について」
- 尾崎喜左衛門 1955 「各地域の弥生式土器—北関東」『日本考古学講座4』
- 梶原憲一 1999 「概説 弥生時代」『新編 高崎市史 資料編Ⅰ』
- 神沢勇一 1966 「弥生文化の発原と地域性 関東」『日本の考古学Ⅲ』
- 工業善博 1968 「北関東地方Ⅰ」『弥生式土器集成本編2』東京堂
- 小池重典 2003 「日影平遺跡」沼津市教育委員会
- 佐藤明人 1988 「出土弥生土器について」『新保遺跡Ⅱ』財団法人群馬県歴史文化財調査事業団ほか
- 佐藤明人 1988 「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬の考古学』
- 佐原 真 1983 「弥生土器入門」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社
- 設楽博巳 1986 「電見町土器をめぐる」『第7回三編シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』

- 杉原荘介 1939 「上野原遺跡調査概報」『考古学』10-10
- 杉原荘介 1956 「弥生文化」『日本考古学講座4』
- 関根慎二 1985 「成果と問題点 古墳時代前半の遺構と遺物について」『糸井宮前遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 田口一郎 1981 「遺物の検討」『元島名符軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 田口一郎 1998 「新たな土器が成り立つとき」『人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館
- 田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁甕の普及と定着」『第7回 東海考古学フォーラム3重大会 S字甕を考える』資料
- 田口一郎 2001 「東海系土器の末裔たち」『第9回 春日井シンポジウム 東海学を深める～弥生から伊勢平氏まで～』
- 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』22-3
- 友廣哲也 1991 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」群馬考古学手帳2
- 友廣哲也 2003 「古墳社会の成立」『日本考古学』16
- 外山和夫 1982 「群馬県古井町祝神の弥生土器」『信濃』34-4
- 比田井克仁 2002 「関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観2 弥生・古墳時代 土器』講談社
- 平野進一 1980 「北関東西部における後期縄文土器について」『第1回三県シンポジウム 弥生土器—縄文の系譜』
- 平野進一 1986 「解説 弥生時代」『群馬県史 資料編2』
- 平野進一 1988 「弥生土器の終焉」『群馬の考古学』
- 水田 登 2000 「第三章 弥生時代」『沼田市史 通史編1』
- 三宅敦気 1988 「樽式土器研究の現状と課題」『東国史論』3
- 三宅敦気・相草建史 1982 「樽式土器の分類」『第3回三県弥生時代シンポジウム 弥生終末期の土器』
- 三宅敦気 1991 「町内遺跡Ⅰ」月夜野町教育委員会
- 三宅敦気 1993 「町内遺跡Ⅱ」月夜野町教育委員会
- 山本貞知・柳沼恵介 1975 「烏川流域の弥生文化」『水沼遺跡』
- 若狭 敏 1989 「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220
- 若狭 敏 1990 「群馬県における弥生土器の展開過程」『群馬考古学手帳』1
- 若狭 敏 1996 「編年 群馬県地域」『YAY』弥生土器を語る会
- 若狭 敏 1998 「群馬の弥生土器が眠るとき」『特別展 人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館
- 赤城村教育委員会ほか 1985 「見立竈井・見立大久保遺跡」
- 北橋村教育委員会ほか 1986 「分郷八崎遺跡」
- 北橋村教育委員会 1996 「北町遺跡・田ノ保遺跡」
- 渋川市教育委員会 1986 「中村遺跡」
- 昭和村教育委員会ほか 1985 「中継遺跡—長井坂城跡—」
- 昭和村教育委員会 1993 「川原原Ⅱ遺跡」
- 昭和村教育委員会 1996 「川原原Ⅰ遺跡」
- 白沢村教育委員会 1981 「寺谷遺跡発掘調査報告書（仮編）」
- 白沢村教育委員会 2003 「寺谷Ⅱ遺跡」
- 高崎市 1999 「新編 高崎市史 資料編1」
- 月夜野町教育委員会 1991 「町内遺跡Ⅰ」
- 月夜野町教育委員会 1993 「町内遺跡Ⅱ」
- 沼田市 1995 「沼田市史 資料編1」
- 沼田市教育委員会ほか 1985 「石鳥遺跡」
- 沼田市教育委員会 1991 「渡良地区遺跡群（奈良原遺跡）」
- 沼田市教育委員会 1989 「沼田市の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書」
- 沼田市教育委員会 1990 「町田小沢遺跡」
- 沼田市教育委員会 1990 「奈良地区遺跡群（奈良田内遺跡）」
- 沼田市教育委員会 1992 「沼田市西部地区遺跡群Ⅱ」
- 沼田市教育委員会・群馬県企業局 1993 「戸神諏訪Ⅱ遺跡」
- 沼田市教育委員会 1994 「町田小沢Ⅱ遺跡」
- 沼田市教育委員会 1993 「上久尾地区遺跡群」
- 沼田市教育委員会 1994 「沼田市西部地区遺跡群Ⅰ」
- 沼田市教育委員会 1996 「上光寺遺跡」
- 沼田市教育委員会 2003 「向田遺跡」
- 沼田市教育委員会 2003 「日影平遺跡」
- 沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1988 「戸神吉田遺跡」
- 沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1989 「上久尾橋場遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1982 「十二原遺跡 大原遺跡 前中継遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1984 「続平遺跡 諏訪遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985 「蘇田遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985 「糸井宮前遺跡Ⅰ」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1986 「大原Ⅱ遺跡・村主遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1986 「三沢沢・十二原Ⅱ遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989 「師遺跡・鎌倉遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989 「門前橋跡・対馬戸遺跡・高野宮遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989 「有馬系土器Ⅰ」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1990 「戸神諏訪遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1990 「有馬遺跡Ⅱ」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1993 「下川田下原遺跡 下川田平井遺跡」
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 2001 「石鳥遺跡（沼田チェーンベース地点1）」

群馬県における弥生時代後期から古墳時代前期の木製品

小林 正

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1. はじめに | 4. 弥生時代後期から古墳時代初頭の木製品の変遷 |
| 2. 弥生時代後期から古墳時代初頭の木製品 | 5. おわりに |
| 3. 古墳時代前期の木製品 | |

— 論文要旨 —

本稿では、群馬県における弥生時代後期から古墳時代前期の木製品の様相から、その系譜と変遷を明らかにする。

県内では、日高遺跡を始めとして、木製品を出土する遺跡は増加している。しかし、溝などからの出土が多いため、細かい時期毎に位置づけることは困難である。そこで、S字甕が入ってくるより前とそれ以降で分けて考える。

弥生時代後期から古墳時代初頭における県内の木製品では、直柄鍬と曲柄鍬が多く出土しているが、その中で曲柄又鍬が少なく、長野や南関東とはやや異なる点がある。

古墳時代前期になると、北陸・長野方面から、ナスビ形曲柄鍬が流入する。ただし、入り方は限定的であり、この時期では主体的にならない。木製品から見る限り、鉄刃の農具の不使用など、鉄器の使用も限定的である。北陸・長野方面からの情報は部分的な変化に止まるが、東北地方への伝播では、一定の役割を果たしている。

古墳時代前期における木製農具の様相は、長野のように急速な変化はなく、南関東との共通性が見られる。

キーワード

対象時代 弥生時代後期～古墳時代前期
対象地域 群馬県
研究対象 木製品

1. はじめに

本稿では、弥生時代後期から古墳時代前期における出土木製品の傾向とその変遷について述べる。どのような木製品があり、その種類や形態はどのような特徴があるのか。また、他地域との関係、あるいは独自性についても考えたい。

県内では、高崎市日高遺跡や高崎市新保遺跡をはじめとして、平野部の遺跡で出土が見られる。しかし、弥生時代に属する資料の多くは、溝や旧河川からの出土で、時期を特定することが困難な資料が多い。ここでは、弥生時代後期から古墳時代初頭で、S字鏃より前の段階と、それ以降の段階に分けて資料を整理して、主立ったものを提示して、出土量の多い農具と容器を中心として県内の様相を見ることが出来る。

なお木製品の分類・名称に関しては、『木器集成図録 近畿原始篇』（奈良国立文化財研究所 1993）や『六次A遺跡発掘調査報告』（穂積 2000）を典拠として、独自に行った。そのため、各報告書の記載とは異なるものがある。

2. 弥生時代後期から古墳時代初頭の木製品

群馬県内では、弥生時代に属する木製品が出土する遺跡は少ない。まとまった数の木製品が出土した遺跡は、高崎市日高遺跡、新保遺跡や高崎市新保田中村前遺跡などしかない。これらの遺跡から出土した木製品の量は膨大ではあるが、県内の様相を考えるには地域的な偏りがあるといわざるを得ないだろう。

(1) 農具

①直柄鍬（図1）

日高遺跡、新保遺跡で出土している。狭鍬、広鍬と横鍬に大きく分けられる。狭鍬と広鍬との分類基準は『木器集成図録 近畿原始篇』に従い、身の幅が15cm以下のもを狭鍬として扱う。しかし県内出土の直柄鍬は、身の幅は狭いものが多く、この分類を用いることが適切とはいえないかもしれない。

狭鍬は、先端がやや細くなる縦長の逆台形を呈するもの（1、2）、頭部が山形に尖るものがある（3、4）。台形を呈する狭鍬は、柄孔の突起はあまり明瞭でなく、低く作られている。

広鍬は、縦長の長方形を呈するもの（6、7）、縦長の台形を呈するもの（8）、頭部が尖るものがある（9～15）。長方形や台形のものには柄孔の突起があまり明瞭でない。その一方で、頭部が尖る広鍬では、柄孔の突起が明瞭なものが多い。突起の形は、刃がある先端部側が尖るものと、両端が尖るもの2種類が確認できる。

横鍬の長方形の形態を呈するものを横鍬とする（16～20）。出土数は、新保遺跡がほとんどではあるが、少なくはない。また、横鍬と関連する種類の農具として

は、鋸歯状の刃をもつエブリがあるが、断定できる資料は見いだせていない。身の形態は横長の長方形か台形であり、頭部は平坦である。横鍬の柄孔の突起は、明瞭なものとしていないものがある。

②曲柄鍬（図2）

曲柄鍬では、平鍬、又鍬が出土しているが、この時期の主体は、平鍬である。未製品ではあるが、平鍬には細長い大型のものが多く、身の長さが通常の倍近いものもある（14～16）。そして、身の形態では、肩が直線的な下がり肩を呈するものが多数を占めている。また、柄と結ばれる軸の挟りには様々な形態がある。上面に箱形に入れるもの（1、2）とV字に入れるもの（3）、側面に箱形に入れるもの（4、5）、上面と側面に入れるもの（6）など様々である。

平鍬には木製品の出土も多い。新保遺跡出土の未製品からは、2連で加工を進め、その後細部の調整を行うという、一般的な生産方法を採用していたことがわかる（12）。

又鍬の出土例は少なく、実態は確認しにくい。何点かはこの時期に属するとされているが（8～10）、曲柄又鍬が多く出土するのは、古墳時代前期以降であろう。

③鋤（図3）

出土例はあまり多くないが、一本鋤が出土している。身の肩が下がるので肩（2）のものと、下から張るもの（3）とが確認できる。また、把手や身を明瞭に作り出さない、掘り棒と呼ばれるようなものに近い未製品もある（4）。

④砕土具（図3）

山田昌久氏のいう有柄J字形木製品（山田 1986）、工藤哲司氏のいう打棒（工藤 1996）の一部に相当するものをまとめてみた。

ここでは、推測される用途を元に破土具として扱っておく。一木で作られており、身と思われる部分が鈍角に屈折するようになっている。身は、やや扁平となっているが、薄く作られているものと（7～9）、そうでないもの（6、10）とがある。また、加工はあまり丁寧ではない。

⑤農具柄（図4）

曲柄鍬の柄であるが、柄は台座となる部分が残っていないと、柄とは断定できないため、実際の出土量はもっと多いと思われる。柄は膝柄と反柄の2種類がある。

⑥横鍬（図4）

組み合わせ式のもの、管見の限り確認できていない。身の部分と柄の部分の境が明瞭でないもの（7）と明瞭なもの（8）とがある。しかし、作りは簡素なものが多い。

⑦杵（図4）

堅杵と横杵の2種類に分けられる。堅杵は握り部と握

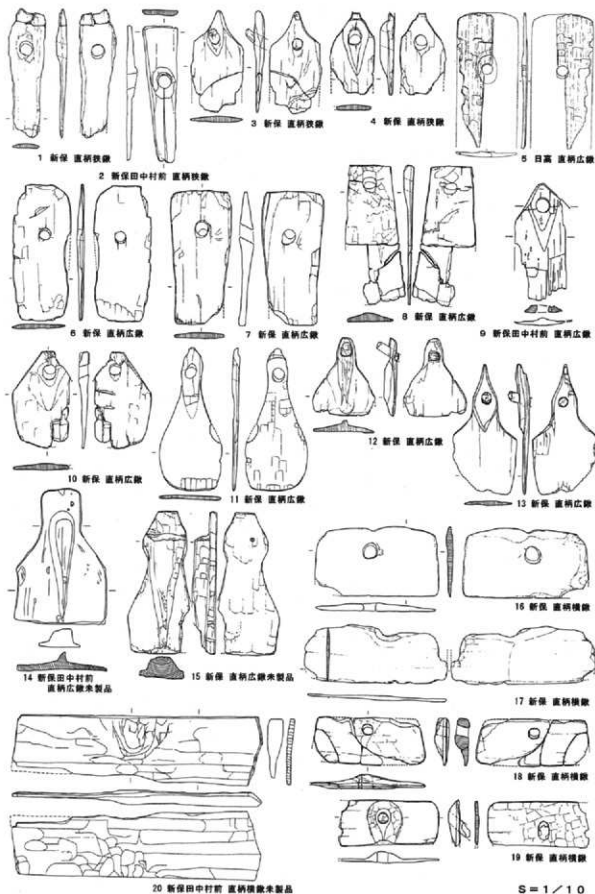


図1 弥生時代後期～古墳時代初頭の木製品(直柄鏃)

S = 1 / 10

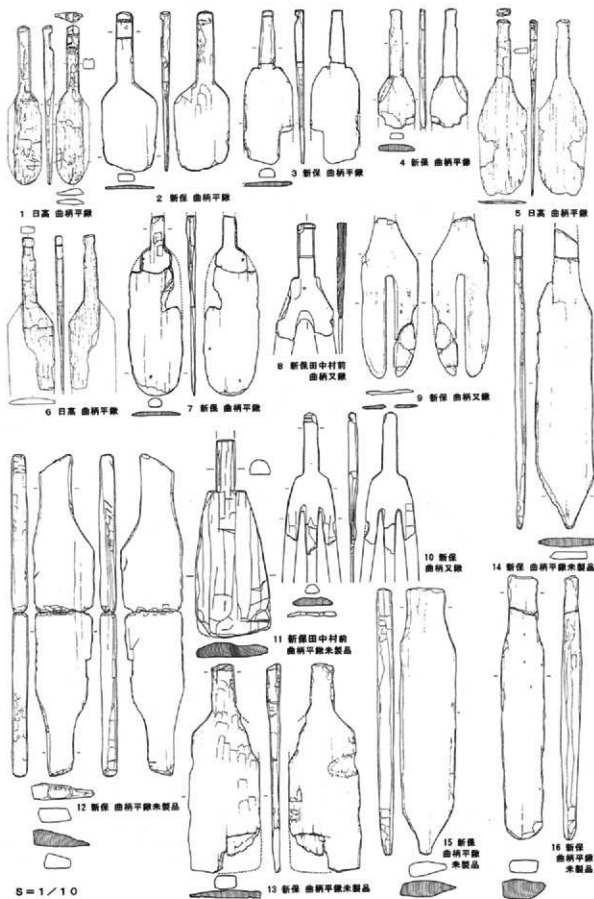
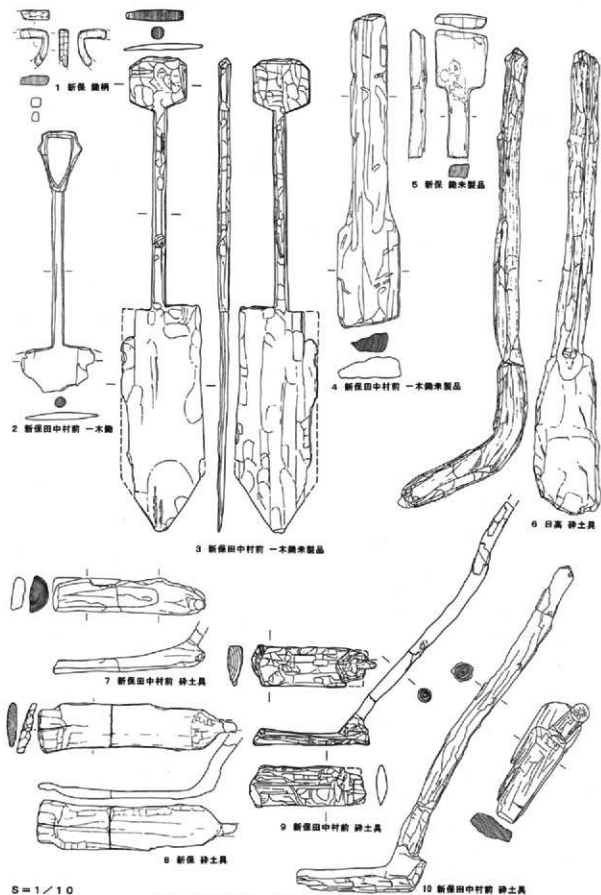


図2 弥生時代後期～古墳時代初頭の木製品（曲柄類）



S = 1 / 10

図3 弥生時代後期～古墳時代初期の木製品(櫛・神土具)

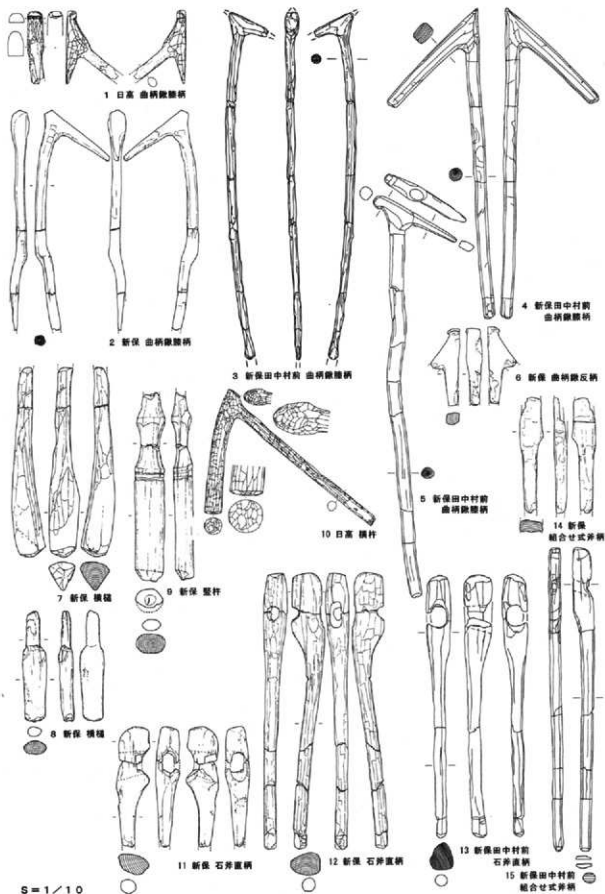


図4 弥生時代後期～古墳時代初頭の木製品（農具柄・槌・斧柄）

り部の境が明瞭で、握り部の中心に突帯が付き、そして、握り部に近い握き部に沈線がめぐる(9)。同様のものは、宮城県中在家南遺跡(工藤1996)などで出土している。この時期に東日本で多く出土している。また、この時期に横杵が出土することは、あまりないが、一木式のものが出土している(10)。小敷田遺跡でも出土しており(図10-7)、関連性が窺える。

(2) 工具

① 斧柄(図4)

大型始刃石斧の直柄が多く出土している(11~13)。組合せ式斧柄も出土している(14~15)。組合せ式斧柄に装着されたのは鉄刃なのか石刃なのかはわからないが、大型始刃石斧の柄がままとって出土していることを考えると、この時期ではまだ石斧の利用が多いといえよう。

(3) 容器(図5)

集落域に直接関わるようなところでの木製品の出土例がほとんどないため、容器の出土は多くない。また、製作技法状でみると、削り物が主体をなす。

什器と呼べるようなものとしては、ひょうたん容器・匙(1, 2)、高杯(3)、浅鉢(4~6)などがみられるが、漆塗りの什器は管見の限りはない。また、什器では挽物の存在が問題となるが、確認できない。

粗製容器の中で、深みのあるものを槽とするが、やや多く出土している(7~9)。丸みを持ったものが多く、脚付きのものは確認できていない。

木製品は新保田中村前遺跡でままとって出土しているのが特徴的である(10~15)。小型容器の木製品が目立つ。中には把手付きのものもあるが、これは蓋のものか、蓋付きの容器となるだろう(14)。

3. 古墳時代前期の木製品

古墳時代前期になると、群馬県内では木製品を出土する遺跡の数が増加する。弥生時代から木製品を出土している、新保遺跡や新保田中村前遺跡以外に、中毛地域では前橋市徳久仲田遺跡や伊勢崎市波志江中宿遺跡、伊勢崎市波志江中屋敷東遺跡があり、東毛地域では新田町中溝・深町遺跡などがあげられる。

ここでは、古墳時代前期に属する木製品の様相を考えてみる。

(1) 農具

① 直枝鎌(図6)

この時期になると、直枝の狭鎌や広鎌は減少するようになる。狭鎌は、縦長の逆台形のもの(1)と、身の頭部が尖るもの(2, 3)の2種類が確認できる。柄孔の突起は以前の時期と同様に、逆台形の物は突起は明瞭ではなく、身の頭部が尖る狭鎌は、柄孔の突起が明瞭である。

広鎌では、縦長の長方形のもの(4)と、台形のもの(5)、身の頭部が尖るもの(6)、身の上部にくびれが

つくもの(8)とが確認できる。広鎌は柄孔の突起が明瞭なものが多い。また、泥除の装着孔と思われるものが身の上部につけられた広鎌がある(4)。そして、身の下部に横帯がつくという特徴を持つ広鎌が確認できる(5, 6)。

直枝鎌の中にナスビ形又鎌がある(7)。この又鎌は柄孔が方形であり、珍しいものといえよう。柄孔があるため、ここでは直枝鎌として扱うが、形態的には、ナスビ形曲柄又鎌と変わらない。県内のナスビ形曲柄又鎌の系譜を考える上で、興味深い資料である。

横鎌は、それ以前の時期と同様に確認できる(9~14)。明瞭な鋸歯を持つものではないが、エブリも確認できる(11)。また、泥除の可能性のあるものもある(12~14)。

② 曲柄鎌(図6, 7)

曲柄鎌は、この時期にさらに増加する傾向にある。

平鎌(図6)では、軸に入られた装着用の抉りは、前面のみ入れたもの(18~20)、前面と側面に入れたもの(15~17)など、やはり多様である。身の幅は以前の時期と比べて、細身のものが多くように思われる。そして特徴的なものとしては、透かし彫りが入ったものがあげられる(20)。これは、幅広い身をもち、形態は曲柄又鎌に近い。

また、ナスビ形平鎌は、この時期に属すると確認できたものは、今のところない。

又鎌(図7)は、この時期から多く出土するようになる。いわゆる東海系曲柄又鎌について先に述べるが、身は幅狭のものから広いものまで確認できる。細いものはほとんど曲柄広鎌と同じ太さとなっている(1)。曲柄又鎌の刃は時期が下るにつれて太くなくなり全国的な様相から見ると、古い時期に属するのかもしれない。又鎌の大半は二又であるが、三又のものもみられる(8, 9)。三又の曲鎌が少数混じるのは、以前の時期と同様である。そして軸に入られた装着用の抉りは、前面のみ入れられたものが多い。

一方、ナスビ形又鎌は、この時期に属すると確認できるものの中では少ない(7)。傾向としては、東海系曲柄又鎌よりも刃の開き方が大きい傾向にある。

③ 鋤(図7)

波志江中宿遺跡の粘土探掘坑から鋤が集中して出土しているため、点数的には多い。把手や身を明瞭に作りださないものは掘り棒とでも呼ぶべきものである(13~15)。一木鋤の形態は、それ以前の時期と比べて大きな違いは見いだせない。ただし、又鋤はこの時期以降に特徴的な鋤といえるであろう(16)。

④ 砕土具(図8)

以前の時期と比べると、確認できた点数は少ない(1, 2)。また、身の曲がり方がゆるいため、この分類の中に入れることが適切か、検討が必要であるものもある(2)。

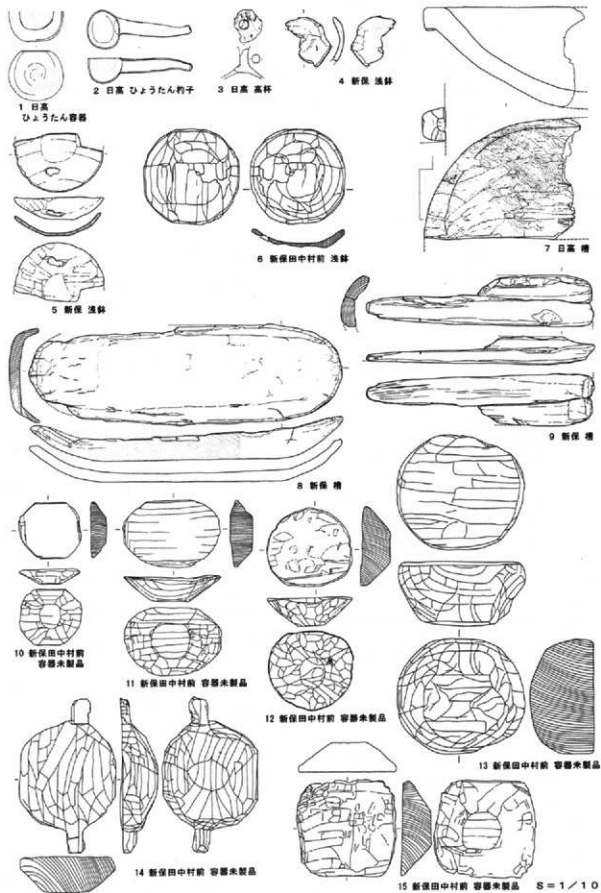


図5 弥生時代後期～古墳時代初期の木製品（容器）

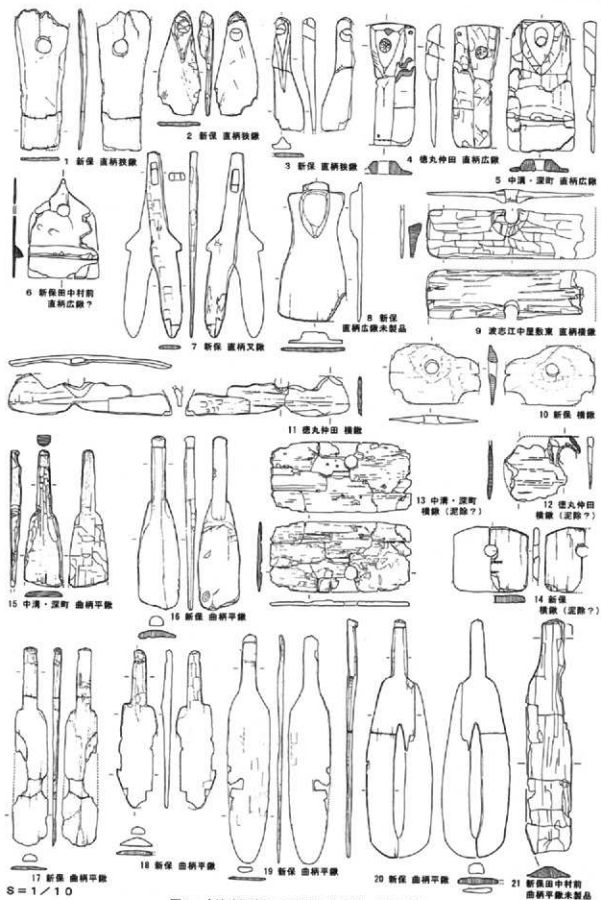


図6 古墳時代前期の木製品 (直柄鉄・曲柄平鍔)

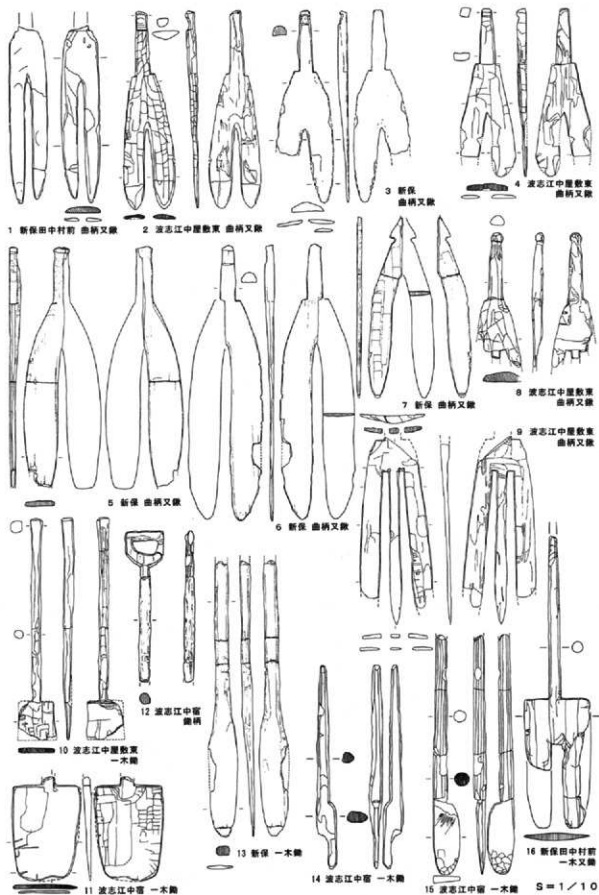


図7 古墳時代前期の木製品(曲柄又鋸・鋸)

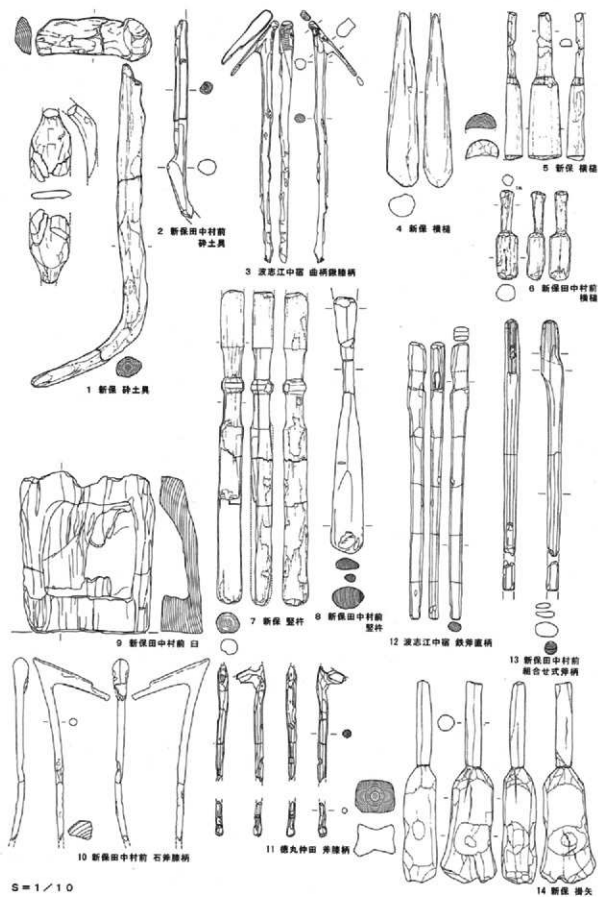


図8 古墳時代前期の木製品 (砕土具・農具柄・横槌・杵・臼・斧柄・掛矢)

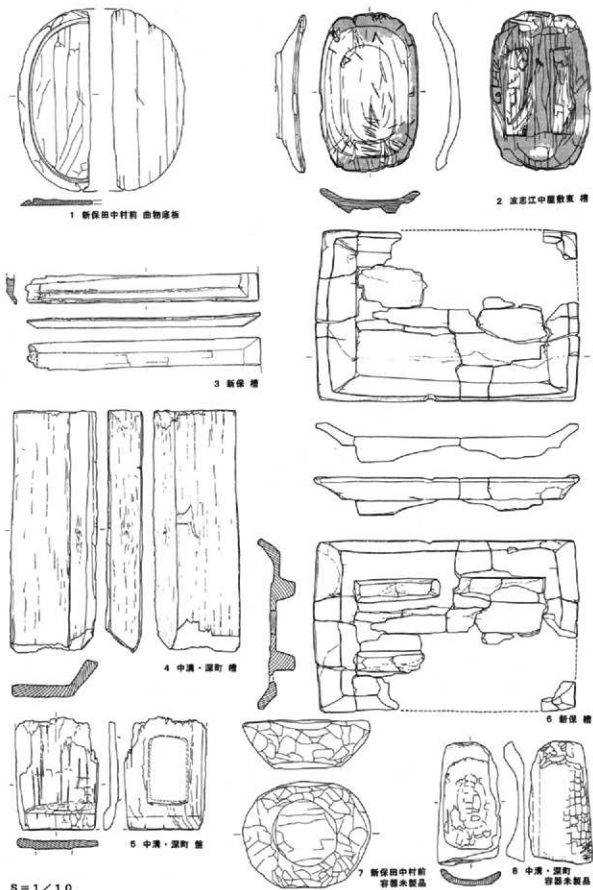


図9 古墳時代前期の木製品（容器）

弥生時代後期からこの時期に至るまで、このような木製品が存在するのは事実であろうが、常に多く見られるものではない。

⑤横樋 (図8)

以前の時期と同様に柄の部分と身の部分との境が明瞭でない、簡易な作りの横樋がある一方で(4)、身と柄の境が明瞭なものもある(5, 6)。

⑥杵・臼 (図8)

杵では、堅杵が出土している。堅杵は搗き部と握り部の境が明瞭で、握り部の中心に突帯が付いている(7)。その一方で、搗き部と握り部の境が明瞭でないものもみられる(8)。前者のような堅杵は、以前の時期でも出土しているが、搗き部に沈線がめぐることはない。次第に簡素化が進むのであろう。このような堅杵は千葉県国府間遺跡(図12-14)や中在家南遺跡(工藤 1996)などで出土している。

臼は、いわゆる大型臼が確認できている(9)。透かし彫りが入るもので、くびれはない。やや古い様相を持つように思われる。

(2) 工具

①斧柄 (図8)

以前の時期では、石斧の柄も目立ったが、この時期では鉄斧の柄が主体となると考えられる。ただし、石斧を組み合わせたと考えられる膝柄が出土しており(10)、完全に鉄斧へ移行したとはいえない可能性がある。

②掛矢 (図8)

横樋との関連や共通性が問題となるのであろうが、「出土木器集成」に掛矢と紹介されたものがある(14)。通常の横樋よりも大型で、身の部分は四角く、使用痕と思われるへこみがある。

(3) 容器 (図9)

この時期も槽や盤など粗製の容器が多く出土しているが、興味深いものとしては、曲物の底板が出土している(1)。新しい時期の資料が混入した危険性も考えなければならぬが、県内では、かなり古い例となろう。周縁部の溝の形態は古墳時代のものとして矛盾はない。

粗製容器の中で、深みがほとんどないものを盤とし(5)、それ以外を槽として扱う。この時期の容器類で特徴的なのは、大型の槽や盤が多く出土するようになり、そして、脚が付いたものが多いことであろう。また、大型容器は長方形で、角張ったものが多い。

4. 弥生時代後期から古墳時代前期における木製品の変遷

県内の木製品は、弥生時代から古墳時代へとどのような移り変わりがあったか、また、他地域との関連や影響を考察してみたい。しかし、出土量にまともな器種は限られており、農具と容器の一部に着目して考えて

みたい。

(1) 直枝鎌

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、広鎌、狭鎌ともある程度の数量は出土している。先に述べたが、狭鎌の中で縦長長方形の身を持つものは、柄孔の突起は明瞭ではない。しかし、長野県石川条里遺跡では、楕円形の突起が比較的しっかりと作られている(図11-1)(市川ほか 1997)。

また、身の頭部が尖る形の狭鎌や広鎌は、全国的に見ると、この時期では多くない種類である。ただし、県内や埼玉県小敷田遺跡(図10-10, 11)(吉田ほか 1991)、の例や、時期が下る可能性があるものの国府間遺跡(図12-1)などから、少なくとも関東では古墳時代前期にも継続するようである。

古墳時代前期になると、直枝広鎌や狭鎌はやや減少傾向にある。北陸地方では出土があるが、石川条里遺跡では、この時期には直枝広鎌や狭鎌は出土しなくなり、長野ではほとんど見られなくなる。県内では東西を問わずに、直柄鎌の出土は見られる。しかし、関東や東北地方と同様に、次第に曲柄鎌に取って代わられていくようである。

また、直枝広鎌の一部に、身の下部に横断する隆帯が付いたものがある。近畿・東海・関東・東北地方で散見できるが、工藤哲司氏によると、この時期では南関東に多いという(工藤 1996)。長野では、ほとんど直柄鎌は見られなかったため、この時期の県内の直柄鎌は、南関東との共通性が強まるのかもしれない。

直枝鎌の中に、ナスビ形で方形の装着孔を持つ又鎌がある。この時期に方形の装着孔をもつ鎌は、国府間遺跡などでも見られるが(図12-5, 6)、特に北陸方面に多い。そして、ナスビ形の鎌類は長野・北陸にみられ、南関東にはまだない。この又鎌の系譜は北陸方面に求めるべきであり、他の農具の系譜を求める上でも重要な資料であると考える。

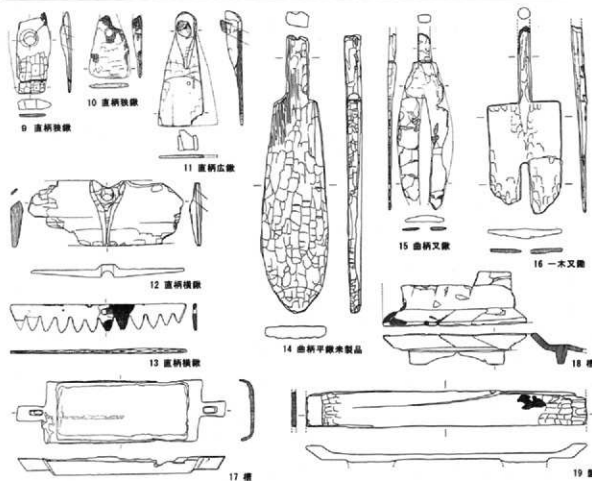
今回、泥除については明確な資料を得ることができなかった。直柄横鎌の一部にその可能性があるだけである。鎌においても泥除を装着するための溝や孔がつけられたものは1点だけであった。北陸地方や南関東地方では、弥生時代から古墳時代前期に至るまで、泥除が付く直柄鎌は存在している(図12-2, 3)、県内で使用があまりなかったというのは、特異に思われる。基本的に使用しないことが群馬県の特徴なのか、今後も確認していくことが必要であろう。

(2) 曲柄鎌

弥生時代後期から古墳時代初頭においては、曲柄鎌の主体は平鎌である。この時期の曲柄鎌はいわゆる東海系曲柄鎌と呼ばれるもので、県内でもこの時期にはすでに定着し、直枝鎌とともに用いられている。しかし、曲柄



弥生時代後期～古墳時代初期



古墳時代前期

8 = 1 / 10

图10 小敷田遺跡の木製品

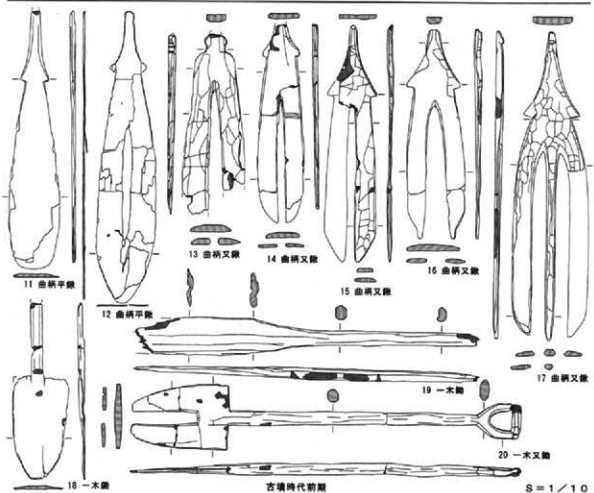
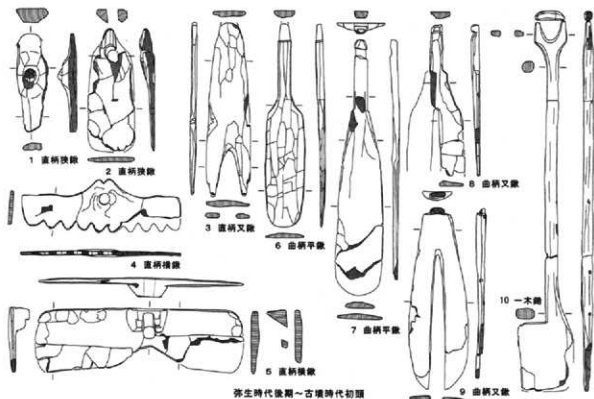


図11 石川糸里遺跡の木製品

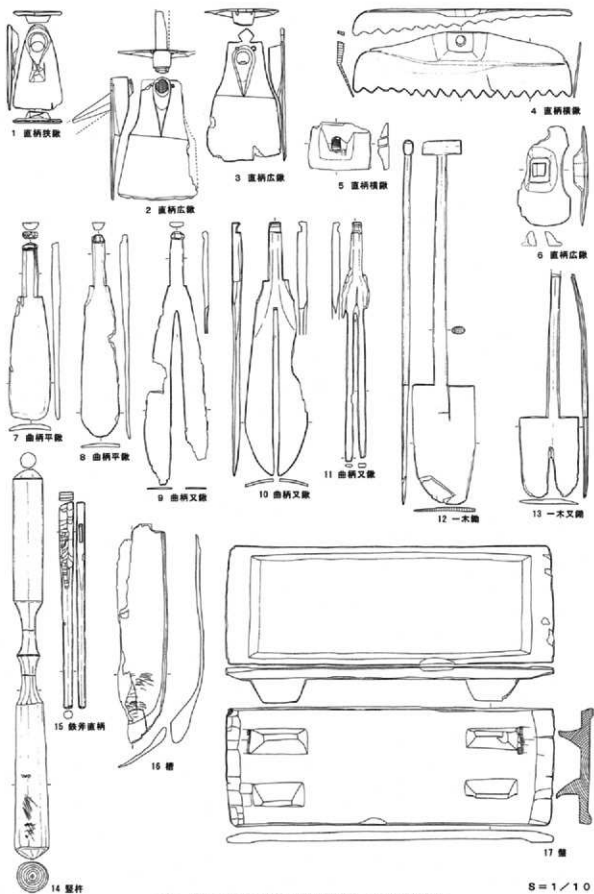


図12 国府岡遺跡の木製品（弥生時代末～古墳時代初頭）

又鍬は、割合としては低く、近隣の地域とは差があるように思われる。国府関遺跡ではすでにこの時期に又鍬の割合が高い。しかし、曲柄又鍬の中には、三又以上の多又鍬があるが、これは、少数が弥生時代後期から出土している。この点は小敷田遺跡や南関東とも共通する。

古墳時代前期になると、国府関遺跡のあとに続くような形で、曲柄又鍬が多く出土するようになる。全体的な数量は多くないが、小敷田遺跡も同様と考える。曲柄又鍬が主体となるこの時期で問題なのは、ナスビ形曲柄又鍬の存在である。石川条里遺跡では曲柄又鍬の主体はナスビ形となり、東海系曲柄又鍬を急速に駆逐している。南関東でナスビ形曲柄又鍬が登場するのはもっと遅れるため、県内のナスビ形曲柄又鍬は信州方面から取り入れたことがわかる。このことは、曲柄又鍬に限らず又鍬の系譜として、すでに山田昌久氏が指摘し（山田 1986）、樋上昇氏が曲柄又鍬を中心として詳しく述べている（樋上 1994）。しかし、古墳時代前期では、県内でもナスビ形曲柄又鍬はあまりみられない。ナスビ形が急速に普及した長野県北部とは大きな違いであり、部分的に用いられたように思われる。

同じように情報の一部分だけを取り入れた例として、透かし彫りし入りの平鍬がある。石川条里遺跡では、ナスビ形曲柄平鍬に透かし彫りが入ったものがある（図 11-12）。一方、県内では、東海系曲柄平鍬に透かし彫りが入っている。これを樋上昇氏は東海系曲柄平鍬とナスビ形曲柄平鍬の融合と呼ぶ（樋上昇 1994）。すでに用いられてきた東海系曲柄平鍬に、新しく入ってきた透かし彫りという情報を取り入れた結果である。

また、石川条里遺跡では、鉄刃を装着したナスビ形曲柄又鍬が出土しているが（図 11-16）、県内では、この時期に鉄刃が付く農具は出土していない。

このように、古墳時代前期に信州方面からの情報は、確実に群馬へ入ってきたことがわかるが、一部の情報は欠落し、入ってきた情報も主体的に取り入れられるわけではないことがわかる。ただし、ほぼ時を同じくして、仙台平野でもナスビ形曲柄又鍬がみられることを考えると、伝播の経路として、群馬を含めた北関東が重要な位置を占めていたといえよう。

県内でナスビ形曲柄又鍬が本格的に用いられるようになるのは、これ以降のことであろう。

(3) 鋤

管見の限りでは、組合せ式鋤は確認していない。弥生時代後期でも鋤の基本は、一本鋤であったのだろう。

石川条里遺跡では、弥生時代後期の鋤身の先端は平坦で、古墳時代前期から、身の先端が尖るようになるという。群馬県内では、身の先端部の変化は確認できない。鋤身が平坦なものと同尖るものは、それぞれの時期に両方とも確認できる。古墳時代前期にみられる鋤として、又

鍬がある。小敷田遺跡、石川条里遺跡でも同じ時期に出土している。千葉県国府関遺跡の例では、もう少しさかのぼる可能性もあるが、仙台平野も含めて古墳時代前期に広がっていったものと考えられる。

(4) 容器

全体的な数量は、鋤鋤類と比べると少なく、様相は把握しにくい。ここでは、朝り物の中から、粗製の槽を中心に述べる。現在、確認しているものからみると、弥生時代後期から古墳時代初頭では、脚の発達は見られない。脚付きの槽がある程度の割合でみられるようになるのは、古墳時代前期以降である。無論、容器に脚が付くことは弥生時代でも存在するが、脚がつけられることとその脚が高くなるのは、古墳時代前期からと考える。しかし、国府関遺跡のように脚付き、脚無しとの両者が混在するのが通常である（図 12-16, 17）ことから、県内の容器の様相については木製品が出土する集落域での調査例の増加を待ちたい。

6. おわりに

弥生時代後期から古墳時代前期に至るまでの群馬県内における木製品の様相について、農具類、容器を中心に述べてみた。鍬の様相から古墳時代前期に信州方面などからの影響があることを確認したが、その新しい影響はすでに主体的になるのではなく、部分的である可能性を考える。

国府関遺跡の様相は直柄又鍬に泥除けが付くものがあるなど、一部は異なるが、曲柄又鍬における又鍬の割合や一本又鍬の存在など、群馬県の古墳時代前期の様相に近いといえよう。農具の全体的な傾向としては、南関東との共通性を無視することはできないと考える。近接する小敷田遺跡の古墳時代前期における直柄又鍬や曲柄又鍬といった農具との共通性もそれを裏付けるであろう。

また、木製品から見ると、鉄器の存在も南関東に近いといえる。弁の鉄器化は、弥生時代後期ではそれほど進んでおらず、古墳時代前期になってようやく変わってきたに過ぎない。また、農具に鉄刃が付くことは古墳時代前期でも基本的には無かったと思われる。

以上のように、弥生時代後期から古墳時代前期における木製品から、長野方面からの影響と南関東との共通性について述べてみた。しかし、群馬県内だけでもきわめて多岐にわたる種類の木製品が出土しており、今回はその中からごく一部を取り出して、触れてみたにすぎない。比較すべき資料、検討すべき項目はまだ多い。今後の課題としたい。

本稿を草するに際して、次の方々からご助言、ご協力を賜りました。文末ながら、記して感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

相京建史、大木紳一郎、女屋和志雄、関 俊明、原 信行、渡會未央（敬称略、五十音順）

参考・引用文献

- 相京建史・小島敦子ほか 1990 『新保田中村前遺跡Ⅰ』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 市川隆之ほか 1997 『石川糸里遺跡』 静岡県泉理蔵文化財センター
- 大江正行ほか 1982 『日高遺跡』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 大木紳一郎ほか 2002 『徳丸仲田遺跡②』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 金井 武ほか 2002 『波志江中塚敷東遺跡』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 工藤晋司 1996 『中在家南遺跡・押口遺跡出土の木製品類』 『中在家南遺跡地』 仙台市教育委員会
- 熊谷 健ほか 2001 『波志江中宿遺跡』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 静岡県泉理蔵文化財調査研究所 1994 『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具から見る—』
- 黒崎 直 1996 『古代の農具』 日本の美術357
- 佐藤明人ほか 1986 『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 下城 正ほか 1994 『新保田中村前遺跡Ⅳ』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 菅谷通保ほか 1993 『国府岡遺跡群』 静岡県都市文化財センター
- 樋上 昇 1994 『耕作のための道具—ナスピ形農具を中心に—』 『季刊考古学』 47
- 樋上 昇 2000 『東海系曲柄杵再論』 『考古学フォーラム』 12
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始編』
- 福嶋正史ほか 2000 『新田東部遺跡群・』 新田町教育委員会
- 穂積裕昌 2000 『六大人遺跡発掘調査報告（木製品）』 三重県埋蔵文化財センター
- 埋蔵文化財研究会 1996 『古代の木製食器』
- 南 久和 1983 『金沢市二口六丁遺跡』 金沢市教育委員会
- 山田昌久 1986 『13 新保遺跡出土木製品』 『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 山田昌久 1986 『くわとすきの米た道』 『新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編』 静岡県泉理蔵文化財調査事業団
- 吉田 穂ほか 1991 『小敷田遺跡』 静岡県玉草埋蔵文化財調査事業団

群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって

— 長野原町の事例を中心として —

石 田 真

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. はじめに | 4. 県内北部の陥し穴再検討 |
| 2. 県外における研究動向 | 5. 結 語 |
| 3. 長野原町内における事例 | |

— 論文要旨 —

陥し穴は、北海道から九州まで日本列島全域において検出され、近年では、縄文時代だけでなく、旧石器時代、弥生時代から近世にわたる幅広い時代の陥し穴が調査されている。そのような状況の中で、ハツ場ダム建設工事に伴ない発掘調査が進行している群馬県北西部の長野原町でも、多くの遺跡で陥し穴の検出が相次いでいる。筆者は、その中の数遺跡で陥し穴を調査し、長野原町花畑遺跡の調査では、陥し穴の底面付近から金属製鋤先によると考えられる掘削工具痕を検出する機会を得た。このことより筆者は、当該地域の陥し穴が弥生時代から平安時代の間、特に古墳時代以降に構築されたものが大多数ではないかと考えるようになった。本稿は、群馬県北西部、特に長野原町の事例を中心に、その構築時期について再検討するものである。また、県外の事例を含め、こうした弥生時代以降に構築された陥し穴の存在を、県内研究者に広く認知してもらうことを目的としている。

本稿では、まず、東京都などの県外における調査事例を紹介し、その中で弥生時代以降の陥し穴の特徴について概観する。そして、長野原町花畑遺跡を中心とする町内の各遺跡の事例について、陥し穴の形態や確認面と覆土、遺構間の切り合い、出土遺物、掘削工具痕、火山灰分析や放射性炭素年代測定等を検討し、当該地域の陥し穴の構築時期について追究した。また、当該地域だけでなく、群馬県北部に位置する2遺跡についても陥し穴の構築時期について再検討を行なった。その結果、当該地域には弥生時代以降に構築された陥し穴として、楕円型と溝型の2形態が認められた。楕円型陥し穴の構築時期は、遺物・切り合い・覆土などから判断し、少なくとも縄文時代後期から平安時代までと考えられ、さらに掘削工具痕の存在・自然科学分析結果などをあわせれば、古墳時代以降に構築された可能性が高い。また溝型陥し穴では、その検出例は少ないが、立馬遺跡における他遺構との切り合いおよび火山灰の同定結果から、ほぼ平安時代に限定できることなどを指摘した。

キーワード

対象時代 縄文時代～古代

対象地域 群馬

研究対象 陥し穴

1. はじめに

現在、群馬県北西部の長野原町・吾妻町において、ハッ場ダム建設予定地内の発掘調査が進行中であり、2002年度には2冊の調査報告書が刊行された(諸田 2002・松原 2002)。報告書では、多数の遺跡から陥し穴¹⁾と考えられる土坑が検出され、報告されている。その中で筆者は、長野原町花畑遺跡において検出された陥し穴について、その構築時期が縄文時代後期から平安時代²⁾に及ぶ広い期間の中で捉えられる可能性を指摘した(松原 2002)。本稿では、この点について検討したいと考える。また群馬県内においては、こうした弥生時代以降に構築された陥し穴の存在に対し、その認識が一般的になっていないと考えられる。そのため県外における事例を紹介するとともに、県内の他地域の陥し穴についても再検討したい。

陥し穴に対する研究は、1973年の今村啓爾による神奈川県霧ヶ丘遺跡の報告以来(今村 1973)、北海道から九州まで日本列島全域において、その集成や時期・形態・立地・配置・底部施設³⁾・覆い・繰り返し使用の問題等様々な個別研究がなされてきている。現在では、「陥し穴」としての機能は認知され、その狩猟システム内での具体的な位置付けと陥し穴の実際解明に研究の視点は移行している」という佐藤宏之の指摘(佐藤 2001)のように、既述全体のシステムの構築をめざす新たな研究段階に差しかかっているといえる。個別の研究史は佐藤宏之により詳細にまとめられている(佐藤 1999)ため、ここでは県内における研究について若干触れたいと思う。

群馬県内においては、陥し穴あるいは陥し穴状とされる土坑を検出した遺跡はすでに130遺跡を超え、その数も1700基以上となっている⁴⁾。特に、月夜野町・沼田市を中心とする北毛地域、粕川村・宮城村等を中心とする赤城山南麓地域において多数確認され、100基を超える陥し穴を検出する遺跡も増加してきている。県内における研究では、菊池実による研究(菊池 1984・1986・1987)があげられる。菊池は断面スライスによる調査法を取り入れ、底部施設の検出や繰り返し使用の具体的な検討など優れた成果を残している。しかし、その後の陥し穴研究は、各遺跡の報告書に個別の考察がある程度であり(小村 1994、細野 1994、長谷川 2001等)、それすらないものも多い。県内においては、陥し穴研究はまだ低調であり、個別研究の段階にあると言わざるを得ない。また、県内の陥し穴の構築時期に関しては、ほぼすべての遺跡で縄文時代あるいは不明とされ、積極的に弥生時代以降と指摘しているものはまだないようである。縄文時代とされるものも早期あるいは前期に属するとされるものが大半である。

佐藤宏之は、陥し穴の所属時期に関しては遺構の性格上極めて手がかりが少なく、各研究者が最も意を払ってきた観点であるとしたうえで、陥し穴の時期推定方法を

次のようにまとめている(佐藤 2000)。

- イ、陥し穴を埋めている覆土中の遺物の年代観。
 - ロ、陥し穴土坑の中の覆土や土坑切り込み面の層序と遺跡の標準堆積土層との対比。
 - ハ、既知の広域火山区等年代の知られているマーカー層の利用。
 - ニ、遺構間の切り合い(新旧)関係。
 - ホ、自然科学的年代測定。
- 本稿でも、これらを中心に各遺跡を検討していきたいと考えている。

2. 県外における研究動向

まず、弥生時代以降の陥し穴について、県外でどのように認識されているか、見ていきたい。

(1) 東京都 多摩ニュータウンNo.740遺跡

東京都多摩市にあり、横積台地上に立地する(斉藤 1984)。1～3次調査あわせて総数538基の陥し穴が検出されている。その分類は次のようになっている。

- A型：土坑底に下部施設の存在しないもの。77基。
- B型：土坑底に平面形の小さな下部施設を持つもの。96基。
- C型：土坑底に大きな下部施設を持つもの。320基。
- D型：A型陥し穴の中で覆土が基本層序のII層に対比できるもの。45基。

この4分類は、基本的には上面形状が長楕円形、底面形状が隅丸長方形をなす楕円形の陥し穴に属するものであって、形想的には下部施設の形状・有無以外に目立った差異は認められないものである。本稿では特に、D型陥し穴について取り上げたい。D型陥し穴は、別に「II層土坑」とも呼ばれるものであり、覆土にII層が堆積していることをその特徴としている。II層は縄文時代後期から弥生時代、そしてより上位のII層(延暦19年(800年)および貞観6年(864年)の富士山の噴火産物とみなされている)の堆積するまでの遺物包含層として捉えられている土層である(鶴岡・小島 1988)。この陥し穴は当初は縄文時代の構築と考えられていたが、土坑底面や壁面にU字型鉄製鋸先状工具痕が確認されたことにより、構築時期の再考を余儀なくされたものである。工具痕は3次調査分のB型陥し穴19基中の9基から検出されている(図1)。その結果、斉藤はU字型の鉄製鋸先状工具による掘削痕から判断すれば、U字型の鉄製鋸は古墳時代中期以降の所産であるから、土層の年代観とあわせると、これらの土坑は古墳時代中期から平安時代初頭までの間に作られたものであろうとしている。次に配置では、土坑は台地上部には少なく、斜面地に拡散的に分布し、近接する2～4基が配列されて機能していたことが想定できるとしている(図2)。

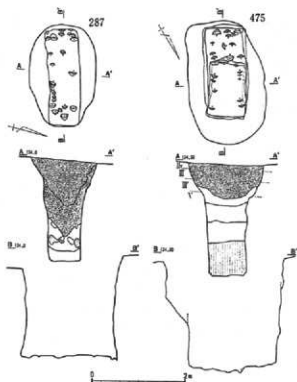


図1 多摩ニュータウンNo.740遺跡 287・475土坑
(報告書より引用)

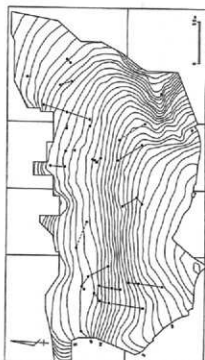


図2 多摩ニュータウンNo.740遺跡 D型陥し穴分布図
(報告書より引用)



図3 登谷遺跡 陥し穴の形態分類
(報告書より引用)

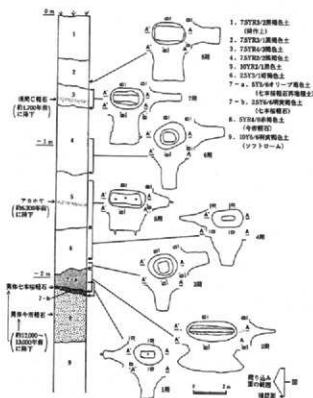


図4 登谷遺跡 各時期の陥し穴の確認面・断面
(報告書より引用)

また、このⅡ₇土坑に関しては、小島正裕・鶴岡正昭による研究が見られ（小島・鶴岡 1994）、多摩ニュータウン№740遺跡の調査知見に基づき、Ⅱ₇土坑について次のように整理を行なっている。

1. 形状は上面プランが長楕円形、底面が長方形。底面は比較的平坦であり、下部施設は存在しない。
2. 覆土は、暗褐色土とロームブロック土の互層のうえにⅡ₇層類似の土層が堆積。自然埋没。
3. 掘削痕はU字型の鋤先状の金属製工具によると考えられ、掘削の多くは長軸の中央から両端に向けて掘削している。底面に段差を有するものも見られる。
4. 土坑の配置は、近接する2～4基が配列されて機能。
5. 遺物は縄文土器片などがあげられるが、流れ込みによるものであり、土坑の時期や機能を示すものではない。
6. 年代観については堆積土の年代観、工具痕から古墳時代中期から平安時代初期が想定。
7. 機能については、従前の縄文土坑とは異なる新たな陥し穴として認識されるべき。

また、Ⅱ₇土坑など古代、少なくとも縄文時代後期から弥生時代以降の所産とみなしたい土坑について、関東・東北地方において集成を行なっている。関東地方では、東京都の多摩ニュータウン地域内で89遺跡、その他の地域で29遺跡、埼玉県で13遺跡、神奈川県で15遺跡、千葉県で7遺跡、栃木県で15遺跡、茨城県で4遺跡において検出された陥し穴をあげている。残念ながら群馬県に関しては指摘されていない。

(2) 栃木県 登谷遺跡

栃木県茂木町にあり、縄文時代草創期から古代にかけての陥し穴213基を検出している（中村 1998・2002）。中村信博は、これらの陥し穴について火山灰や掘り込み面の検討などから8段階の変遷を明らかにし、重要な成果を上げている。

中村は「掘込面と覆土」・「出土遺物」・「他遺構との切合い」という3要素に、「火山灰分析」「14C年代測定」を加味し、陥し穴の構築時期を推定している。その結果は図4としてまとめられる。本稿ではその中の7・8期に注目したい。7期は、縄文時代後期から古墳時代までの時間幅であり、掘り込み面である層位から浅間C軽石と標名二ツ岳浅川テフラが検出されていることから古墳時代の可能性が高いものである。楕円型陥し穴が見られる。8期は掘り込み面がさらに上層であり、土坑覆土上部に12世紀初頭に降下した浅間Bテフラと思われる火山灰質土が入り、平安時代の陥し穴と判断されるものである。また、火山灰質土の入り方からさらに細分される可能性を指摘している。楕円型陥し穴と円型陥し穴があ

る。

中村の研究で、特に目を引くのは陥し穴の細別形態分類である。中村は、「陥し穴には、基本的に円型、楕円型、溝型の3つの系統があり、断続的ではあるがこれらが独自性を保ったまま縄文時代を通して存在し、時期、地域、対象物の差によって使い分けられていた」という予察のもとに、先の時期区分ごとに時間的同時性をふまえた形態分類を行なっている。ここで特徴的なことは、似たような形態の分類が何度も登場することである（図3）。このことは、同一遺跡内においても似たような形態の土坑が、必ずしも同時に存在していたとは言えないことを示しており、掘り込み面と覆土の観察がより大切なことを示している。

次に実際の分類と配列であるが、次のようになっている。

7期

Q形：楕円型で、開口部が長楕円形で、底部が長方形となる大型で深い規格性のある一群。谷部に二基一組で配列される。

8期

R形：円型で、逆茂木痕を持ち規格性のある一群。尾根上平坦面から斜面にかけて弧を描くように7基が一列に配置される。

S形：楕円型で、開口部が長楕円形、底部が長方形となる大型で深い一群。斜面部に散在。単独配置。

T形：楕円型で、S形と同規模で、長軸の壁が外側にふくらむ一群。斜面部に散在。単独配置。

また楕円型陥し穴では、縄文時代草創期A形と7期のQ形や8期のS形では、図面のみを見る限りでは識別は困難であるとも述べている。

(3) 山梨県 丘の公園第5遺跡

山梨県高根町丘の公園第5遺跡では、8基の陥し穴が確認され、次のように分類されている（高野 1989・保坂 1990）。

A型：長さ2m、幅1m程度の楕円形の平面プランを主体とし、深さ1m程度の浅いもので、底面が平坦で広い。黒色土層下部の黒褐色土が遺構覆土を覆っており、掘り込み面がローム層に非常に近い位置にある。3基。

B型：長さ4m、幅1m程度の非常に細長い平面プランで、深さも1.5m程度と深く横断面がV字状を呈する。漆黒色土層下部の黒褐色土を掘り込んでおり、掘り込み面は、漆黒色土層のかなり上部にあると思われる。5基。

報告書では、A型を縄文時代、B型を古代以降、特に中世あたりの所産の可能性があると報告している。B型陥し穴については、覆土の観察と、陥し穴の両端部

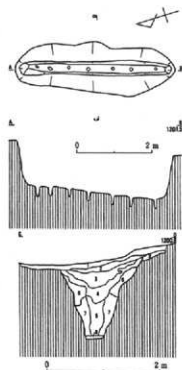


図5 丘の公園第5遺跡 B型7号陥し穴
(報告書より引用)

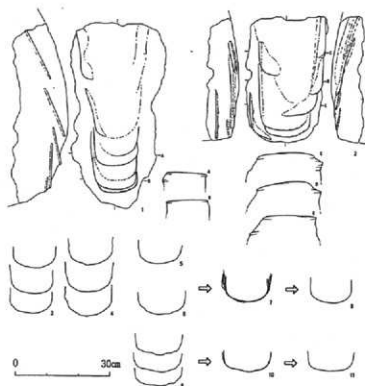


図6 丘の公園第5遺跡 陥し穴
掘削工具痕のモデリング画像実測図と刃先の形態
(報告書より引用)

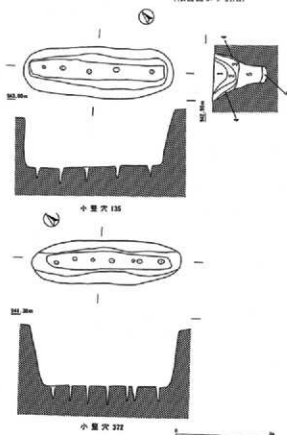


図7 南平遺跡 陥し穴 (桜井 2000より引用)

の底部付近に掘削工具痕がみられることを上げ、その観察結果から古代以降、特に中世あたりと考えているものである。

掘削工具痕については、B型7号陥し穴(図5)から検出された工具痕を石膏により型取りをしたのち、モデリング画像を作成し、その分析を行なっている(図6)。その結果、掘削具は鈍角に柄のついた鍬のようなものであったとし、鉄製鍬の使用を想定している。また、松井和幸(1987)の研究を援用し、その刃先の形態から「古墳時代から平安時代のU字形鍬・鋤先よりも直刃であり新しい要素があるといえる」としている。さらに、刃先の型取りの検討から遺跡内の7・9・11号陥し穴の掘削工具痕が同一の工具であり、2号陥し穴のものは別の工具による可能性を指摘している。これは、陥し穴の同時性を具体的に検証しうる優れた業績といえよう。

(4) 長野県 南平遺跡

長野県原村にあり、尾根上から26基の陥し穴が検出された。桜井秀雄は、南平遺跡の陥し穴を次のように分類している(桜井 2000)。

A型: 逆茂木を「埋め込んだ」と理解できるもの。

1型: 長径が1.5~2 m、短径が1 m程度の楕円形の平面プランをもち、深さが1 m程度のものを主体とし、底面が平坦で広いもの。逆茂木痕

は二つ有するものが多い。5基。

2型：長径が1～2mほどのほぼ円形の平面プランをもち、深さは1～1.5m程度の浅いものを主体とし、底面が平坦で広いもの。逆茂木痕を一つ有するものが多い。7基。

B型：逆茂木を「打ち込んだ」と理解できるもの。長径4m、短径1m程度の、細長い平面プランをもち、深さも1.5m程度と深く、横断面がV字状を呈している。逆茂木痕は数本であるものが大半である。12基。

C型：逆茂木痕を有さないもの。形態的にはA2型に類似している。2基。

板井はこれらの陥し穴について、検出段階ではすべて縄文時代に属するものと理解していたと述べた上で、次のような理由から、26基中のB型に属する12基については、縄文時代の遺構とすることに疑念を感じたとしている。

その理由は、①B型陥し穴は逆茂木の断ち切った断面を詳細に観察すると、逆茂木の先端を鋭く角錐状に作り出していることが観察でき、何らかの金属製工具をもってしなければ不可能であろう。②非常に狭い陥し穴に逆茂木を打ち込むことは、「かけや」に類する道具が不可欠であるが、縄文時代にはたして「かけや」に類する道具が存在したのであろうか。ということである。

そこで、B型陥し穴である小竈穴135と372(図7)の中から炭化した状態で見つかった逆茂木2点の放射性炭素年代測定を実施している。その結果は、小竈穴135・372とも縄文時代で15世紀～17世紀前半であったという。この結果を受け、先の疑念とも矛盾しないことから、B型陥し穴については中世後半から近世初頭頃に比定できるだろうとしている。

このように、県外の研究動向を見てみると、弥生時代以降の陥し穴は、小島・鶴間の集成でもわかるように関東地方各県の数多くの遺跡で検出され、その後も資料の蓄積が続いている。そのような状況の中で、群馬県内において、弥生時代以降の陥し穴が報告されていないという現状は、特異な存在と言えるのではないだろうか。

3. 長野原町における事例

長野原町は群馬県の北西部に位置し、町の北部を利根川の支流である吾妻川が東流している。地形的には、この吾妻川流域地帯の北部と浅間高原地帯の南部に大別される。本稿で取り上げる花畑遺跡・長野原一本松遺跡等は吾妻川により形成された段丘上や丘陵上に立地している(図8)。

町内では、形態および規模の類似した陥し穴が、先の遺跡のほかに向原遺跡、坪井遺跡、滝原III遺跡等で多数

確認されている。しかし、陥し穴の時期を知るための手がかりが非常に少ないという状況は、長野原町内の遺跡でも同様であり、いずれも構築時期は不明とされてきた。ただし、出土遺物から縄文時代、特に後期の可能性が考えられていた。今回取り上げた遺跡の陥し穴についても、覆土内の遺物が極めて少ないことや、他遺構との切り合いが皆無に近いこと等から、明確な構築時期の決定ができず、調査当初は縄文時代のものであろうと漠然と想定していたものである。しかし、花畑遺跡の調査で陥し穴の底部付近より掘削工具痕が検出され、金属器使用の可能性が生じたため、改めて構築時期の検討を始めたものである。この検討を始めるまでは、陥し穴による民衆が民俗事例でも知られていることは認識していたが、遺跡から見つかる陥し穴については、“おそらく縄文時代のものであろう”という先入観にとらわれていたことは否定できない。県外の事例を知り、反省するものである。次に、各遺跡の事例について検討していきたい。

(1) 花畑遺跡

長野原町大字林に所在し、吾妻川左岸の最上位段丘上に位置する遺跡である。標高650～680m程度であり、現在の林地区の集落の北東、段丘面の最奥部に立地する。山地から緩斜面へと地形の変換点に位置し、緩く南に傾斜している。遺跡の東には沢が流れ、深い谷となっている。1999-2000年に当事業団により約9,300㎡が発掘調査され、平安時代(9c後半)の住居3軒、土坑4基、陥し穴51基などが検出されている(松原2002)。

陥し穴は、調査区内の埋没谷に向かう傾斜地に構築され、調査区南部にやや集中して認められるが、調査区全域に広がっている。報告書では検出面の平面形状により、A型(円形・2基)、B型(楕円形・19基)、D型(隅丸長方形・27基)、E型(不明・3基)と分類しているが、本稿で扱うのはB・D型の47基についてである。断面形状と合わせ、さらに細分も可能であるが、基本的には楕円型としてまとめられるものであり、ここでは、同一形態とみなして扱いたい⁹⁾。

・確認面と覆土 確認面はローム層直上あるいはIII層上面である。III層は浅間一合軽石(As-Kn, 約5,400年前)と考えられるパミスを含む黒褐色土であり、この層上面で縄文・平安時代の両時代の遺構が確認される。本来の掘り込み面はより上層と考えられる。覆土は黒色土を基調としロームブロックを含む。締まりは非常に弱く、後述する100-33号土坑を除き、基本的に自然埋没と考えられる。

・配置 陥し穴の長軸と等高線との関係では、直交するものがやや多いが、斜行・平行するもの多く、特にまともにはない。配置単位は、土坑の規模・形状および長軸方向等を考慮し検討すると図9のようになる。単独ある

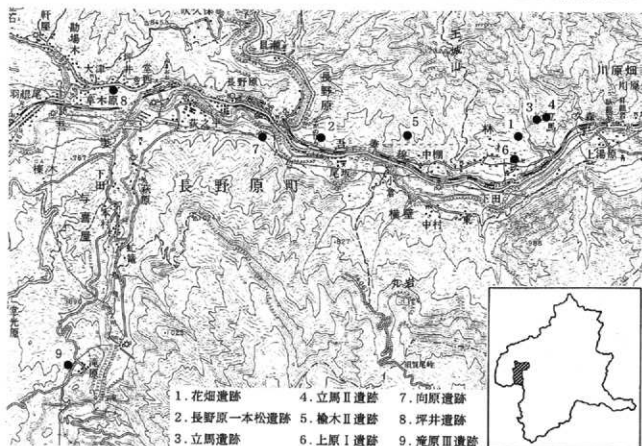


図8 長野原町 陥し穴検出遺跡(国土地理院「草津」50,000分の1)

いは2基一組と考えられるものであり、多数が列をなすような配置は認められない。

・遺構間の切り合い 明確な切り合いを示す遺構は認められない。ただし、100区20号土坑と100区33号土坑は、覆土の観察から若干の時期差を示すものと考えられる。20号土坑と33号土坑は隣接して構築されており、33号土坑の覆土2・3層にはロームブロックが不均質に混ざり人為的に埋められたと考えられるものである。おそらく20号土坑構築時に、33号土坑の凹みを埋めるように、排土されたものと推測される(図10)。なお33号土坑の4層以下は自然埋没であり、33号土坑が使われなくなり、ある程度放置されたのち、20号土坑が構築されたものである。

・遺物 陥し穴51基中において遺物が確認されたのは、10区5号土坑(縄文土器小片3点)、10区40号土坑(縄文土器小片2点)、11区1号土坑(縄文土器小片(磨磯式)2点)のわずか3基のみである。いずれも小片であり、流れ込みの可能性が高く、これをもって陥し穴の構築時期を判断することは不可能と考える。

・底部施設 断ち割りを行っていないため断定できないが、B・D型共に小ピット等の底部施設は認められない。A型とした円形陥し穴の1基には底部中央に小ピット

トが認められる。

・掘削工具痕 陥し穴掘削時の工具によるものと考えられる痕跡が、100-23・27・29号土坑の3基の土坑から検出された。覆土が黒色で底面や壁面が黄褐色であり、その色調の差が明瞭であるという好条件に恵まれ、非常に良好な状態で検出することができた。また土坑の底面および壁面にある土層が浅間草津黄色軽石(As-YPk)の上部アッシュ互層であり、この層が非常に硬い層であるため検出可能であったとも言える。底面が、この層を掘り抜きAs-YPkの軽石層に達している場合や、あるいはアッシュ互層に達していない場合には掘削工具痕は検出できていない。本来はより多くの陥し穴に掘削工具痕があったと思われる。

掘削工具の形態は、その痕跡が底面では土坑中央から長軸方向に斜め上方から進入し、壁面では全周にわたってほぼ垂直に進入していることから、鋤状の形態が想定される。刃先の形態は、痕跡の形状から幅約11cm程のやや丸い(U字状の)刃先を持つものであると推定できる。刃先の材質は、工具痕の面が平滑で刃先の断面形状が薄いため、石製ではなく木製や金属製の可能性が高い。また本遺跡の場合、土層が非常に堅緻なため、木製工具によりこのような土層を掘り進めた場合、材質にもよる



図9 花畑遺跡 階し穴の分布と配置 (S=1/800) (報告書に一部加筆)

であらうが、刷毛目状に木目のあとが残る可能性が考えられる。しかし、今回検出された工具痕にはそのような例は認められず、すべて平滑な面を呈していた。以上の観察から、今回検出された掘削工具痕は金属製の刃先をもつ鏟状掘削具による可能性が高いと考えられる。100区27号土坑については、後日の検討もできるように型取りを行っている。

・放射性炭素年代測定 前述の掘削工具痕が検出され、金属器使用の可能性が生じたため、3基の土坑覆土内に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定（AMS法）を実施した（古環境研究所 2002b）。分析した試料は、掘削工具痕の検出された100区23号土坑と、100区14・33号土坑の3基から抽出したものである（図10）。本来であれば、土坑底面直上の炭化物を対象とすべきであるが、直上には明確な炭化物層が認められなかったため、直上付近のものを覆土下位、また、土坑の深さの中程のものを覆土中位として扱った。しかし、抽出した炭化物は、長野県南平遺跡の事例のように明らかに遺構に伴う炭化物とは言えず、すべて覆土からの抽出であり、遺構が埋没する過程で堆積したものである。この場合、この炭化物は遺構の構築年代より、新しいものも古いものも両者が混ざる可能性が考えられる。しかし、前述したように100区33号土坑の覆土上位には、100区20号土坑構築時の排土と考えられるロームの二次堆積層でバックされており、この二次堆積層より下位の層位には、100区20号土坑構築以後の混入はかなり低いとみなせるものである。言い換えれば、100区20号土坑は、33号土坑の二次堆積層の下位より抽出した炭化物の年代より、確実に新しい構築と言ふことになろう。33号土坑は、この二次堆積層より下位の3点を分析対象としている。その結果は表1にみるように弥生時代あるいは古墳時代に比定される数値が得られた。この数値は金属器の使用とも矛盾するものではなく、妥当性の高いものとする。

表1 花畑遺跡 放射性炭素年代測定結果

試料名 (100区)	¹⁴ C年代 (年 BP)	補正 ¹⁴ C年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)
14号土坑	1,540±30	1,530±30	交点: cal AD 540
23号土坑			
覆土中位	1,640±30	1,620±30	交点: cal AD 425
覆土下位	1,650±50	1,640±50	交点: cal AD 415
33号土坑			
覆土中位	1,930±40	1,930±40	交点: cal AD 75
覆土中位	1,530±40	1,530±40	交点: cal AD 545
覆土下位	1,950±40	1,930±40	交点: cal AD 75

以上の所見を要約すると、花畑遺跡より検出された楕円型の陥し穴は、工具痕の検出や放射性炭素年代測定の

結果、弥生時代あるいは古墳時代以降の構築と考えられる可能性が高い。その特徴は上面形状が長楕円形あるいは隅丸長方形、底部形状が長方形となる底部施設を持たない楕円型陥し穴である。覆土は黒色土を基調とし、締まりが弱い。単独あるいは2基一組で配置され、長大な列をなすことはない。

(2) 長野原一本松遺跡

長野原町大字長野原字一本松に所在し、吾妻川左岸の上位段丘上に位置する遺跡である。段丘上は、崖礫性堆積物により南に傾斜する扇状地状を呈する。標高は約620～640mであり、谷による起伏も含め比高差は顕著である。発掘調査は1994年に当事業団により開始され、現在も継続中である。報告書では第1次（1994年）・第2次（1995年）・第3次（1996年）調査分の約20,000m²について報告を行なっている（諸田 2002）。縄文時代中期後葉～後期前葉を主体とする集落遺跡であり、竪穴住居跡のほか掘立柱建物や環状列石・多数の配石などを検出している遺跡である。しかし、縄文時代晩期以後の遺構は希薄であり、平安時代の住居跡が数軒調査されているのみで、土器片が少量出土する程度である。陥し穴については94基が報告されているが、調査は継続中であり、その総数はすでに百数十基になると思われる。

・形態 報告書では分類は行っていないが、平面・断面の形状や規模により少なくとも次のように3分類は可能と考えられる（図12）。

A類：上面形状が楕円形、下面形状が長方形であり、断面形状が短軸方向に大きく開くもの。長軸規模で2mを越す大型のものが多い。5-1土坑等。

B類：上面形状が楕円形あるいは長楕円形、底部形状が長方形であり、断面形状は直立か若干開くもの。長軸規模は150cm前後から200cm前後のものが多い。深さはバラツキがあるが、最大のものでは187cmをはかる。底面に10～20cm程度の段差をもつものも認められる。本遺跡で検出された陥し穴の多数を占めるタイプである。5-346土坑等。

C類：上面・下面ともに非常に整った長方形をなし、断面形状が直立するもの。本類は浅いものも多く、B類の下部の可能性もある。4-3号土坑。しかし、これらはすべて楕円型陥し穴に分類される陥し穴であり、本稿では細分が目的ではないため、一括して扱っておきたい。

・確認面と覆土 確認面はローム漸移層あるいは縄文時代中後期の遺物包含層であるIV層上面のものがほとんどであるが、掘り込み面はより上位と考えられる。覆土は基本土層のIII層を基調とする土で埋没している。III層と

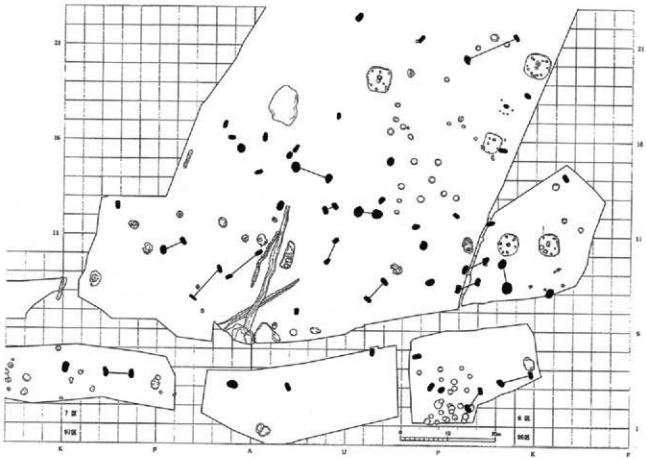


図11 長野原一本松遺跡 6・7区 陥し穴の分布と配置 (S=1/800) (報告書に一部加筆)

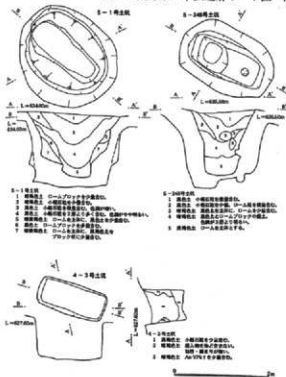


図12 長野原一本松遺跡 陥し穴 (報告書より引用)

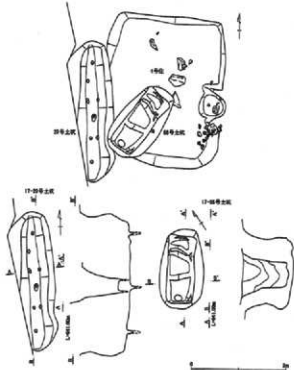


図13 立馬遺跡 陥し穴

は、混入物をほとんど含まず、締まりのない軟質な土層である。1128年の降下が考えられている浅間一泊川テフラ (As-Kk) を含む可能性が示唆されるII-2層と、IV層に挟まれた層位であり、層位の年代観としてもその値が与えられよう。埋没状況は、ほとんどは自然埋没と考えられるが、人為的な様相を示すものも見られる。覆土中に自然に堆積する考えられない直径10cmを越す礫が含まれることもあり、何らかの人為的な所為があったものもあると考えたい。

・**底部施設** 報告書には土坑底面に小ピット状のものが図示され、土坑一覧表に「逆茂木痕？」と記載されたものが12基見られる。しかし、明確に断定できるものは無く、基本的に底部施設は持たないと考えられる。

・**配置** 陥し穴の長軸と等高線との関係では、直交するものがやや多いが、斜行・平行するものも多く、特定角度にまとまりをもつ状況は認められない。配置単位は、土坑の規模・形状および長軸方向等を考慮し検討すると単独あるいは2・3基が一組となると考えられるものである(図11)。ただし、6区ではA類に分類したものが一定の標高に集中して見られる傾向があり、列をなす可能性もある。

・**遺構間の切り合い** 土坑等と切り合いをもつものは比較的多いが、遺構の時期・先後関係が明確に捉えられているものは非常に少ない。確定的なものは、縄文中期後葉の住居跡を切るもの2基、同じく中期後葉と考えられる土坑を切るもの2基の計4基だけである。ただし、基本土層と覆土の関係からいえば、多くは縄文時代中後期の遺構を切るものと考えられる。また陥し穴同士では、切り合いを有するものは1組だけであり、ほとんど切り合いは認められない。

・**遺物** 遺物は約半数の48基から確認されているが、ほとんどは縄文時代中期後葉～後前期葉にかけての土器片である。先述したように縄文時代中後期の遺構を切るものが多いと考えた場合、覆土に縄文時代中後期の遺物が混入することは当然予想されるものである。ただし、6-56号土坑からは縄文時代晩期終末あるいは弥生時代前期の土器片、6-20号土坑から弥生時代の可能性のある土器片が、それぞれ1点ずつであるが出土している。報告者は、混入の可能性を指摘しているが、遺跡での同時代の遺物の希少性を考慮すれば、より積極的に評価してよいものと考えられる。

・**掘削工具痕** 報告分では認められないが、その後の調査で新たに検出された陥し穴では、工具痕が認められるものも含まれている。

・**放射性炭素年代測定** 1基のみであるが、先のB類にあたる6-116号土坑の覆土内に含まれる炭化物の放射性炭素年代測定が実施されている(古環境研究所 2002a)。その結果は表2に示すように、7世紀後半から8世紀後

半代の数値が得られた。報告書では同時に実施された火山灰分析の結果とあわせ、土壌汚染の可能性があるのでとしている。しかし、花畑遺跡での分析結果を見れば、無理に汚染と考える必要はないと判断したい。この年代がそのまま陥し穴の構築年代を示すものではないとしても、そう遠くはない年代を示しているものと考えられる。

以上の所見を要約すると、長野原一本松遺跡より検出された陥し穴は細分される可能性を含むが、ほぼ楕円型に属す陥し穴である。また、覆土や遺物・放射性炭素年代測定の結果等を総合して検討すると、その構築時期は、縄文時代後期より新しく古代までその可能性が考えられることとなる。その特徴は上面形状が長楕円形あるいは隅丸長方形、底部形状が長方形となる底部施設を持たない楕円型の陥し穴である。覆土は黒色土を基調とし、締まりが弱い。単独あるいは2・3基一組で配置され、タイプによっては列をなす可能性もある。

表2 長野原一本松遺跡 放射性炭素年代測定結果

試料名 (6区)	¹⁴ C年代 (年BP)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 交点1σ
116号土坑	1,340±50	1,310±50	AD665~775

(3) 立馬遺跡

長野原町大字林に所在し、花畑遺跡の東方の山地中の狭小な平坦地に位置する。2002年に当事業団により調査された(飯森 2003)。未整理な遺跡のため詳細は把握されていないが、多数の陥し穴が調査されている。特に注目されるのは、平安時代の住居跡と切り合い関係をもつ楕円型と溝型の2形態の陥し穴が検出されたことである(図13)。楕円型陥し穴は花畑遺跡等で検出されている陥し穴と同様な陥し穴、溝型陥し穴は上面形状が3m×1m程度の長楕円形を呈し、断面形状がV字状となるものである。

楕円型陥し穴(17-29号土坑)は平安時代の住居跡の床下より検出され、住居跡より明らかに古い時期の構築である。また、溝型陥し穴(17-55号土坑)は住居跡を壊して構築されており、住居跡より新しい。さらに溝型陥し穴の覆土最上位には火山灰層が純層に近い状態で堆積し、火山灰分析ではAs-BとAs-Kkであるとの結果が出ている。このことより、本遺跡で確認された溝型陥し穴は明らかに平安時代に帰属する陥し穴であると判断できるものである。

この溝型陥し穴は本遺跡では3基が検出されているが、いずれも底部に1・2・1本の計7本あるいは1・2・2・1本の計6本が長軸に沿ってほぼ等間隔に並ぶ小ピットを検出している。断り調査を行なった1基の観察結果では、この小ピットは棒状のものを打ち込んだものと判断され、その打ち込まれた先端は、長

野原南平遺跡で指摘されているように、角錐状に鋭く削られているものであることが観察されている。また、同様な溝型陥し穴は隣接する立馬II遺跡においても検出されている。

なお本遺跡の楕円型陥し穴からは、覆土から弥生土器が出土するものも多く認められた。楕円型陥し穴が平安時代の住居に切られる事例は、後述する向原遺跡や同じく未報告である榎木II遺跡においても確認されており、逆に平安時代の住居を切る事例は知られていない。以上より、楕円型陥し穴の構築年代は弥生時代から平安時代までに限定できるものと考えたい⁹⁾。

(4) 向原遺跡

長野原町大字長野原に所在し、標高640mほどの吾妻川の右岸段丘上に立地する。長野原町教育委員会により調査され、約14,000㎡から縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての住居跡5軒、平安時代の住居跡10軒等が調査されている(白石 1996)。

陥し穴は14基検出され、すべて縄文時代の構築と考えられているようである。陥し穴の形態では、楕円型陥し穴と円型陥し穴の2種が認められ、次のように分類できる(図14)。

円型陥し穴：上面が直径120cm、底面が60cm程度の方形

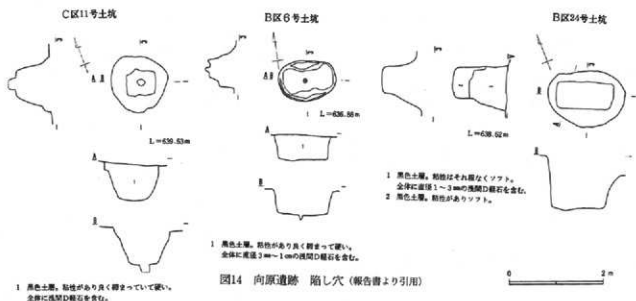


図14 向原遺跡 陥し穴(報告書より引用)

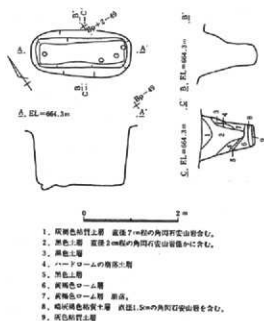


図15 中山と惣平衛塚遺跡 4号陥し穴(報告書より引用)

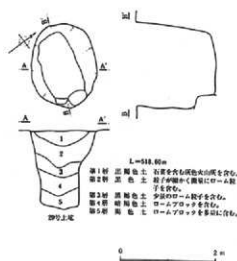


図16 小仁田遺跡 29号土坑(報告書より引用)

を呈するものであり、中央に小ピットをもつ。覆土は黒色であるが硬くしまっている。C区11号土坑の1基のみ。

楕円型陥し穴：形状は類似するが、底部施設の有無により2種に分けられる。

A類：底部中央に小ピットを有し、覆土が黒色土を基調とするが硬く締まるもの。底面中央が若干括れるものも見られる。B区6号土坑等3基。

B類：底部施設がなく、覆土が黒色土を基調とし柔らかく締まりのないものである。B区24号土坑等9基⁷⁾。

不明：記述からでは判断できないもの。2基。

このうち楕円型陥し穴B類は長野原一本松遺跡や花畑遺跡と同形態のものであり、弥生時代以降の陥し穴と思われる。断定できないが遺構写真に工具痕らしきものが写っているものもあり、その可能性は高いと考えられる。円型陥し穴や、楕円型陥し穴A類は逆茂木を有すことなど、楕円型陥し穴B類とは時期差があるものと考えられる。覆土の硬さを土圧による圧密作用の結果と捉えれば、より古い段階の陥し穴と考えることもできよう。

4. 県内北部の陥し穴再検討

最後に長野原町以外の事例について検討する。沼田市・月夜野町を中心とする群馬県北部地域は陥し穴を数多く検出している地域であるが、筆者が弥生時代以降に構築された可能性があると考える陥し穴について検討してみたい。

(1) 高山村 中山与惣平塚遺跡

吾妻郡高山村大字中山の標高640~670mほどの谷に面した北西斜面に立地する。遺跡からは23基の陥し穴が検出され、次の3タイプに分類されている(大西・金井・斉藤 1994)。

A：確認面での平面形は長楕円形。底面の平面形は長楕円形からやや中央が凹んだ分銅形。底面までの深さは浅い。底面ピットが検出される。12基。

B：確認面は楕円形。底面の平面形は長方形。底面までの深さが深く、ピットは検出されない。10基。

C：確認面の平面形は円形に近い。底面の平面形は長方形で深さが深い。底面ピットは検出されない。1基。

遺構の構築時期については、Aタイプに属す20号陥穴の火山灰分析の結果、鬼界アホヤ火山灰(K-Ah)が認められたため、23基中の21基については、覆土の類似性等から、縄文時代前期頃に構築された可能性が高くなったとしている。本論で注目したい陥し穴は残りの2基である。4号陥穴(図15)は試掘調査によるものであるが、

Aタイプに分類されるものである。ただし本文中に「底面ピットは逆茂木痕とするには疑わしい」との記述も見られるため、Bタイプの可能性もあると思われる。特に注目する理由は、その所見に「陥し穴底部までHr-FPが確認されている」とある点である。また、Bタイプの1号土坑においても堆積土中程までHr-FPが認められている。報告者は前記21基との時期差を認めながらも、下限については不明であるとしている。筆者はこれら2基の構築時期について、より積極的に古墳時代あるいはそれに近い時期に求めてもよいのではないかと考える。また、縄文時代前期頃とされる21基についても、特にBタイプのもはその形態的特徴の類似性から、これら2基と同時期のものを含んでいる可能性があると考えられる。

(2) 水上町小仁田遺跡

利根郡水上町大字小仁田に所在し、標高510~530mほどの丘陵部から河岸段丘上に立地する。陥し穴としては134基が報告され、次の3タイプに分類されている(水上町遺跡調査会 1985)。

タイプI：溝状に細長い土坑。断面形は開口部が広く、途中から急激に細く掘り込まれている所謂漏斗形である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。7基。

タイプII：四隅の角張った長方形の土坑で、掘り込みも深く、壁もほぼ垂直に落ち込み、底部は平坦である。覆土は黒褐色土を基調とする。104基。

タイプIII：四隅の角張った方形の土坑である。掘り込みは浅いものが多く、壁は垂直に落ち込む。覆土は黒褐色土を基調とする。23基。

報告書では、これらの土坑群の構築時期について、細かくは触れられていないが、縄文時代の土坑として扱っている。本稿では、この中のタイプIIの陥し穴に注目したい。利根・沼田地域では、楕円型陥し穴を検出する遺跡は多く見られるが、それらは底部施設を有するものを主体(相原他 1984・菊池 1986・小村 1994等)としており、本遺跡のように底部施設のないものは非常に客体的な存在である。その反面、このタイプIIは、平面形状・黒色土を基調とし締まりなしとする覆土の所見・底部施設を持たない点など、長野原町で見られる陥し穴と類似する特徴が多く、現時点では断定できないが、弥生時代以降の陥し穴の可能性もあるのではないかと考えている。また報告書には、タイプIIの陥し穴(図16)の13基、タイプIIIの陥し穴1基の覆土上位に、石英を含む褐色火山灰があるいは灰白色土を含むという記述がみられる。しかし残念なことには、この火山灰についての分析は行なわれていないようである。繰り返しになるが、陥し穴の年代決定の手掛かりは非常に少なく、このように火山灰

が堆積している状況は、非常に稀な状況と言えらるものである。今後付近で調査が行なわれ、同様な火山灰が検出された場合、ぜひその分析が実施されることを願うものである。

以上2遺跡ではあるが、長野原町以外にも縄文時代後期以降に構築された可能性のある陥し穴が含まれることを指摘したい。月夜野町・沼田市などで多く検出される陥し穴は、楕円型で底部施設を有するものが一般的である。このタイプの陥し穴は、従来どおり縄文時代早期あるいは前期の可能性が高いと考えている。しかし、今回指摘したものは、これらとはタイプが異なるものであり、今後注意されれば、この地域においても同様な陥し穴が増えてくるものと予想される。

5. 結 語

これまで、県外の事例も含め、長野原町における事例を中心として弥生時代以降の陥し穴について概観してきた。以下その特徴についてまとめ、結論としたい。

長野原町において検出された陥し穴のなかで、弥生時代以降と考えられる陥し穴は、楕円型と溝型の2形態が存在する。

楕円型陥し穴は、平面形状・断面形状等により、さらに細分される可能性があるが、上面形状が楕円形あるいは長楕円形、底面形状が長方形をなすものである。覆土は黒色土を基調とし、締まりのない柔らかいものが多い。底部施設はなく、底面および壁面に金属製U字状鋤先によると思われる掘削工具痕を残すものも見られる。傾斜地に構築されるものが多く、等高線と主軸のなす角度では、直交するものがやや多いが、斜交・平行するものも多く、特に規則性は読みとれない。単独あるいは2・3基を一組として配置される。構築時期としては、遺物・切り合い・覆土などから判断し、少なくとも縄文時代後期から平安時代までと考えられよう。掘削工具痕の存在・自然科学分析結果などをあわせれば、古墳時代以降の可能性が高いと言える。

溝型陥し穴は、その検出例は少ないが、上面形状が長径3m前後の長楕円形で、漏斗状の断面形状をなす。覆土は黒色土を基調とし、柔らかく締まりがない。また、覆土上位にAs-Kk等の火山灰を含むことがある。底部施設は打ち込みによるとと思われる小ピットが規則的に認められ、その断面には角錐状に削りだされている様子が観察される。構築時期は、立馬遺跡における他遺構との切り合いおよび火山灰の同定結果からほぼ平安時代に限定できる。長野県南平遺跡や山梨県栗丘の公園第5遺跡の陥し穴と類似した特徴をもつものであり、このような陥し穴は平安時代から中近世まで継続して作られていたと考えられる。

楕円型陥し穴は単独あるいは2・3基を一組と考えられるものであり、主軸方向が一定しないことも含め、かなり長期間にわたり、似たような位置に繰り返し構築されていたと思われる。栃木県登谷遺跡の事例では7期(縄文時代後期から古墳時代)の楕円型陥し穴は2基一組、8期(平安時代)では単独配置と指摘されており、本地域においてはこれら両時期が混在している可能性も考えられる。しかし、陥し穴同士が重複することはほぼ皆無に近いことから、意識的に同じ位置に構築することは避けていたと考えられる⁴⁾。また、ほとんどの陥し穴は自然埋没と考えられるものであり、新しい陥し穴の構築時には、古い陥し穴はまだ完全に埋没しきってはいなかったものと推察される。また、掘り返された場合は不明だが、積極的に繰り返し使用したと考えられるものは認められない。

以上が長野原町における弥生時代以降構築と考えられる陥し穴の特徴であるが、本稿では陥し穴の構築時期について焦点あてたため、その使用法や目的等については検討できなかった。長野原町内では弥生時代・古墳時代に相当する遺跡が非常に少なく、これまで集落などは認められていなかった。このことが多数存在する陥し穴の構築年代を弥生時代以降と想定することに対して、ためらいを感じさせる一因となっていたことは事実である。しかし、最近の調査では、立馬遺跡で弥生時代の住居跡や林地区の宮原遺跡で古墳時代の住居跡⁵⁾などが見つかりつつある。今後周辺の調査が進めば、さらに増加することが予想される。本稿では触れられなかったが、それら集落遺跡と陥し穴を検出した遺跡がどのような関係を有し、陥し穴がどのように機能していたのか、今後の課題としていきたい。

また、陥し穴が検出された場合、安易に縄文時代と考えてしまふきもあるが、思い込みや先入観といったものにとらわれず、弥生時代以降の陥し穴が存在するという事例をふまえ、出土遺物、遺構間の切り合い、火山灰を含む覆土の状況等、今後さらにその帰属時期を示す手がかりを探っていければと考えている。その構築時期が定まらない限り、集落との関わり、あるいは狩猟体系の解明には繋がらないと考えるからである。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、飯島義雄氏には文献収集をはじめ様々なご協力とご指導を頂いた。また、當日頃から叱咤激励をいただいている藤巻幸男氏・山口逸弘氏を始め、一緒に調査にあたった事業団の諸氏に記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 「陥し穴」「陥穴」「落し穴」等の用例があるが本稿では「陥し穴」を用いる。ただし、各遺跡の報告に関する部分では報告者の用語をそ

のまま用いる。

- 2) 「底郭施設」「坑底施設」「遊茂木痕」「棟状痕」等の用語があるが、本稿では「底郭施設」と呼んでおく。ただし、各遺跡の報告に関する部分では報告者の用語をそのまま用いている。
- 3) 筆者の意見に触れたもののみで、実際の数は更に多いと考えられる。今後集作業を進め、別の機会に報告したい。
- 4) 中村は「基本形態として楕円型・楕円型・溝型の3形態が存在し、それ以外の基本形態の中に各別の細別形態が存在するものと認識している」とも述べており、本稿もこれに従い楕円型・楕円型・溝型を基本形態として認識し使用している。
- 5) 本稿では、陥し穴の形態の細別分類について、各遺跡の統一を図ることができなかった。今後、集作業を進めるうえで、統一的な分類をしたいと考えている。
- 6) 弥生時代から平安時代までの間に構築されたということは、必ずしも弥生時代に楕円型陥し穴が存在したと言うこととは必ずしも一致しない。古墳・平安時代についても同様である。現段階では、楕円型陥し穴の構築時期が、この間であったことをさすものであり、それはこの間の一時に構築されていただけの可能性もあるし、この間定説と構築されていた可能性も含んでいる。現段階では絞り込めていない。ただし、楕円型陥し穴に分類される陥し穴であっても、その形態は総分される可能性を含んでおり、数時期にわたり構築されていたものと考えている。
- 7) 日原とした中の1基は遊茂木を有している。しかし、その他の特徴から本類に属するものと考えている。
- 8) 立土遺跡では、溝型と楕円型の陥し穴が重複する事例も検出されている。これは、構築時期が異なるであろうだけでなく、楕円型と溝型とも異なることなどともあわせ、異なる集団あるいは異なる持体体系に基づき構築されたものとも考えられよう。
- 9) 長野県教育委員会の富田孝彦氏のご指示による。

引用・参考文献

- 相原建夫・中沢 哲・菊池 実 1984 『大原J遺跡・村主遺跡』pp.33-44、pp.233-241 朝野馬場埋蔵文化財調査事業団
- 安藤広道 1992 『多摩丘陵地域における「陥穴状土壇」の時期』『民族考古』第1号 pp.69-84
- 飯塚康史 2003 『立馬遺跡・立馬日遺跡』『平成15年度 調査遺跡発表会』朝野馬場埋蔵文化財調査事業団
- 石岡憲雄 1991 『Tビット』について(再論)『埼玉考古学論集』pp.479-508
- 今村啓爾 1973 『窪ヶ丘 窪ヶ丘遺跡調査』
- 今村啓爾 1976 『縄文時代の陥穴と民族誌上の事例比較』『物質文化』27
- 今村啓爾 1979 『おとしあな』『世界考古学辞典』上 pp.164
- 今村啓爾 1983 『陥穴』『縄文文化の研究』2 pp.148-160
- 大西直也・金井 武・青藤英敏 1994 『中山与惣平塚遺跡』朝野馬場埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第180集
- 小川卓也 1994 『窪ヶ丘大畑遺跡』宮城府教育委員会
- 菊池誠一・菊池 実 1984 『縄文時代の陥穴調査二題』『群馬文化』198 pp.1-17
- 菊池 実 1986 『十二原J遺跡検出の陥し穴群について 一陥穴群の基礎的分析を中心として』『三後遺跡・十二原J遺跡』pp.491-496 朝野馬場埋蔵文化財調査事業団
- 菊池 実 1987 『縄文時代の陥し穴調査法と共生する諸問題 一原J遺跡・村西遺跡検出の陥し穴群分析から』『研究紀要』4 朝野馬場埋蔵文化財調査事業団
- 古墳境研究所 2002a 『長野原一本松遺跡の地質(土層)とテララ』『長野原一本松遺跡(1)』朝野馬場埋蔵文化財調査事業団 第287集 pp.275-278
- 古墳境研究所 2002b 『放射性炭素年代測定(2) 花畑遺跡』『ハッ場ダム発掘調査集(1)』朝野馬場埋蔵文化財調査事業団 第303集 pp.285-287
- 小島正裕・鶴岡正昭 1994 『古代の陥し穴土坑をめぐって』『東京都埋蔵文化財センター 研究紀要』Ⅷ pp.135-184
- 小村正之 1994 『貝野瀬中泉原ノ上遺跡』昭和埋蔵文化財調査報告書 第4集
- 西藤 遼 1984 『多摩ニュータウンNo.740遺跡 II。(D)型 土坑について』『多摩ニュータウン遺跡 一昭和58年度一』第7分冊 pp.309-310
- 板井秀雄 2000 『原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代』『信濃』第52巻 第10号 pp.57-69
- 佐藤宏之 1999 『陥し穴』『縄文時代』10 第3分冊 pp.211-220
- 佐藤宏之 2000 『北方狩猟民の民族考古学』北方新書
- 佐藤宏之 2001 『縄文時代の陥し穴』『考古学ジャーナル』468 pp.13-16
- 白石光男 1992 『長谷J遺跡 坪井遺跡』長野原埋蔵文化財調査報告書 第3集
- 白石光男 1996 『向原遺跡』長野原埋蔵文化財調査報告書 第5集
- 白石光男 1997 『滝原J遺跡』長野原埋蔵文化財調査報告書 第6集
- 高野玄明 1989 『丘の公園地内遺跡範囲確認調査(第2次)』(丘の公園第5遺跡)『丘の公園第2遺跡発掘調査報告書・丘の公園地内遺跡範囲確認調査(第2次)報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第46集
- 高橋信武 1994 『九州の陥し穴の変遷』『先史学・考古学論究』pp.1-45
- 鶴岡正昭・小島正裕 1988 『基本層序第II層(II B・II Y層)に関する留意』『東京都埋蔵文化財センター 研究紀要』Ⅳ pp.89-110
- 駒込河原彰 1994 『陥し穴』『縄文時代研究叢書』pp.41-42
- 中村信博 1998 『溝型陥し穴研究序説』『栃木県考古学会誌』第19号 pp.47-90
- 中村信博 2002 『登谷遺跡調査報告書』茂木町埋蔵文化財調査報告書 第3集
- 長谷川福次 2001 『鏡神遺跡 稲田遺跡群補遺』北群馬埋蔵文化財調査報告書 第31集
- 初山孝行・斉藤 弘 1985 『谷野野遺跡 第1次調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告書 第72集
- 初山孝行他 1986 『烏森遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書 第80集
- 保坂康夫 1990 『丘の公園第5遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第56集
- 野野高伯 1994 『赤城山南麓の陥し穴について』『窪ヶ丘大畑遺跡』宮城府教育委員会
- 福越正行 1986 『地域文化解説 関東』『岩波講座日本考古学別巻1』p.209
- 松井和幸 1987 『日本古代の鉄製農具、鋤先について』『考古学雑誌』第72巻第3号
- 松原孝志 2002 『ハッ場ダム発掘調査集(1)』朝野馬場埋蔵文化財調査事業団 第303集
- 水上町遺跡調査会 1985 『3 小仁J遺跡』『開越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 宮澤 寛・今井博博 1976 『縄文時代前期後半における土坑をめぐる諸問題 一わゆる落ち穴について』『調査研究集録』第1冊 pp.3-56
- 沼田康成 2002 『長野原一本松遺跡(1)』朝野馬場埋蔵文化財調査事業団 第287集
- 渡辺 誠 1996 『縄文時代の経済基盤』『考古学による日本歴史 2 産業I』p.29 (pp.27-39)

古代群馬の粘土採掘坑

— 波志江中宿遺跡をめぐって —

中 東 耕 志

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 4. 土器作り関連資料と南多摩の粘土採掘坑 |
| 2. 古代群馬の粘土採掘坑検出遺跡 | 5. 粘土採掘坑と集落 |
| 3. 波志江中宿遺跡粘土採掘坑の分析 | 6. おわりに |

— 論文要旨 —

北関東自動車（伊勢崎～高崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査により、伊勢崎市内の遺跡で古代の土器製作に関連した重要な発見がなされた。平成10年に伊勢崎市三和町の光仙房遺跡で、古墳時代の大規模な粘土採掘坑が発見された。さらに、平成11年に同市波志江町の波志江中宿遺跡で、古墳時代初頭の粘土採掘坑が検出され多様な木製品が出土した。さらに、両遺跡の調査と同時期に光仙房遺跡と、伊勢崎市三和町の舞台遺跡で須恵器窯跡が検出された。一連の調査に関連して、本県内においても採掘坑の粘土を使用し、須恵器窯の復元による焼成実験がおこなわれた。土器作りの基本である粘土に着目し、古代群馬における粘土採掘坑関連遺跡を集成するとともに、出土資料を集落とあわせ分析した。

一方、東京都の南多摩窯跡群に関連した地域では、縄紋時代の粘土採掘坑の調査をはじめ、須恵器窯跡と工人の居住域を含めた多くの遺跡が調査されている。この南多摩地域の調査成果と文献・民俗資料の一部を参照しつつ、古代群馬における粘土採掘坑を分析してみた。

その結果、粘土の採掘から土器作り、焼成に関する多様な資料が報告されていることを知った。また、粘土採掘坑から少なからず土器や木製品が検出されるとともに、一定の時間幅を持たせるならば、その時期も限定できることが判明した。本稿では群馬県の藪田東遺跡に始まる、粘土採掘坑と出土資料の集成をおこない、今後増加が予測される粘土採掘坑関連遺跡調査の一助としたい。

キーワード

対象時代 古墳時代から平安時代

対象地域 群馬県

研究対象 粘土採掘坑

1. はじめに

焼き物である土器は、人類最初の化学反応を応用した発明であるといわれている。その原材料である粘土は、地球の地表面覆う土の主成分であり、雨水や熱水等による岩石の風化作用により粘土が生成される。粘土は岩石と水的作用により形成されるが、さらに水の循環作用により、運搬・変質し粘土層として堆積する（白水 1990）。

日本列島で最初の土器は、今から約1万2千年から5千年前に作り始められたと推定されている。その土器作りは、土探しから生地作り、製作、乾燥、焼成の工程が考えられる。基本である粘土を採掘した遺構は、群馬県でも古墳時代初頭から平安時代の粘土採掘坑が発見されている。近年の発掘調査による光仙房遺跡と、波志江中宿遺跡での粘土採掘坑の発見は着目される。特に、波志江中宿遺跡の粘土採掘坑からは、粘土の採掘に関連した多様な木製品が検出された。本稿では波志江中宿遺跡を中心として、古代群馬の「粘土採掘坑」遺跡を集成するとともに、土器作りに関連した資料の検証をおこないたい。

2. 古代群馬の粘土採掘坑検出遺跡

現在までに群馬県内で検出されている粘土採掘坑関連遺跡の概要を集約するとともに、粘土採掘坑の形態及び出土資料からその年代を規定する。なお、県内における「粘土採掘坑」に関する研究史を概括するため、本項では発掘調査年代順に記載する。

(1) 藪田遺跡

本遺跡は利根郡月夜野町宇藪田内に所在し、上越新

幹線建設事業に伴って群馬県教育委員会文化財保護課により1976年4月から1978年9月まで調査された（下城・関 1985）。利根川上流部左岸の段丘状に形成された遺跡であり、西側の山麓部には「月夜野古窯跡群」と総称される、平安時代に須恵器を生産した洞・藪田・深沢窯跡群等の存在が指摘されていた。また、藪田東遺跡の調査結果として、隣接地に焼土、須恵器の散布が確認され窯体の存在が予想されたことにより、これを「藪田A支群」と呼称された。

本県において大規模調査に伴って検出された最初の粘土採掘坑関連の遺跡である。しかし、筆者も本遺跡の調査担当者であったが、調査時より月夜野窯跡群との関連は、考慮しつつ調査を実施したが、居住域と重複した位置に粘土採掘坑が形成されていることは、認識できなかった。その後、本遺跡の東側に「藪田東遺跡」として調査が実施され、調査担当の相京建史氏により粘土採掘坑の存在が指摘された。この、藪田東遺跡の調査成果を受け、報告書編集担当の下城 正氏が本遺跡の土坑を再検討し、粘土採掘坑を抽出し報告された。

本遺跡の平安時代に関する遺構は、住居跡9軒・粘土採掘坑11基・土坑1基・溝2条である。下城氏が「利根郡月夜野町所在 須恵器生産工人集落の調査」と副題をつけて報告しているが、本稿ではそのうちの5区5号住居跡と41号土坑（粘土採掘坑）に着目し、新旧関係をもつ住居と粘土採掘坑から出土した土器を比較してみたい。

図1が両遺構から報告された主要遺物である。調査所見によるならば、5号住居跡を切り41号粘土採掘坑が形

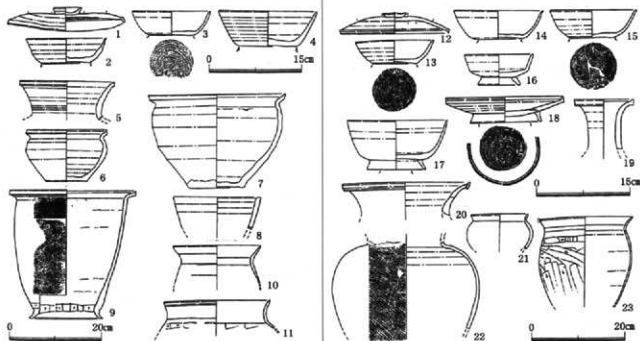


図1 藪田遺跡 41号粘土採掘坑と5区5号住居の土器

成されている。さらに、5号住居跡からは須恵器環・椀が多数出土したのと、乳白色粘土塊が検出されている。同図1～11が41号粘土採掘坑で、12～23が5号住居の主要遺物である。1は須恵器蓋で9世紀前葉、2・3は9世紀中葉の環、4は9世紀前葉の環、5・7は9世紀代の須恵器蓋、6は須恵器小型甕、8は掘り鉢、10・11は9世紀代の土師器甕である。12は9世紀中葉須恵器蓋、13は竈内出土の9世紀中葉の環、14は8世紀後半の碗、15は9世紀前葉の環、16・17・18は高台付き碗と皿、19・20は9世紀代の長頸壺、21・23は9世紀代の土師器甕、22は須恵器甕である。

これらの資料について、下城氏は「藪田遺跡平安時代集落の変遷」で、両遺構とも9世紀中葉の時期に位置づけている。また、関 晴彦氏は「奈良・平安時代の土器」で両遺構から出土している土器は、8世紀後半を含みつつ9世紀前葉から中葉の時期に位置づけられている。

(2) 藪田東遺跡

本遺跡は利根郡月夜野町藪田内に所在し、上越新幹線上毛高原駅の駅前広場整備事業に伴って、群馬県埋蔵文化財調査事業団により1979年4月から10月まで調査された(原 1982)。

群馬県において、最初に報告された粘土採掘坑関連の遺跡である。相京氏の談によるならば、図2に示したごとく、連続した土坑の土層断面図の切り合い関係と、粘

須恵器工人集団の集落が把握された。また、報告者の原雅信氏は花岡敏一氏による土器の胎土分析と、磯貝基一氏の遺跡周辺の地質調査をふまえ、「粘土採掘坑と須恵器窯」に関する検討をおこなった。このことは、以降の本県における粘土採掘坑の基本的な調査方法、及び研究目的が確立された遺跡として特筆される。その成果を踏まえつつ下城氏は、藪田遺跡と藪田東遺跡の須恵器工人集落を分析した。両遺跡の集落構造については、第4章で検証したい。

平安時代の住居8軒(9世紀後半から10世紀中葉)と、11群の粘土採掘坑が調査された。ローム層下に堆積する白色粘土を採取している。調査区域全体で193㎡余り採掘されたと推定されている。

採掘の手順は竪坑を基本とし、これを連続的に拡張することにより、粘土の採掘を行っている。図3が報告された基本的な採掘方法を復元した工程である。

第1段階 竪坑の掘削の後、底部の粘土の採掘

第2段階 壁部分の粘土の採掘

第3段階 採掘坑の拡張及び旧坑の埋め戻し

第4段階 拡張部分の粘土の採掘

さらに、採掘された粘土の水簾作業に関連した遺構として、「粘土土坑」が取り上げられた。また、工房跡の竪穴住居内の素地土・作業台としての台石・ロクロピットの存在も指摘されている。



図3 藪田東遺跡粘土採掘模式図

(3) 今井道・道下遺跡

本遺跡は前橋市今井町字道上、道下に所在し、一般国道17号(上武道路)建設に伴い、群馬県埋蔵文化財調査事業団により、1986年10月から1987年10月にかけて調査が実施された(大木・津島 1995)。検出された遺構は古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡63軒、掘立柱建物跡11棟、平安時代の鍛冶遺構1基(9世紀代)、平安時代の粘土採掘坑8群等である。

本遺跡の東側に位置する二之宮谷地遺跡とあわせ微高地上に集落が形成され、谷地形の中央窪地を囲んだ位置に、粘土採掘坑と祭祀の場で構成されている。本遺跡の立地する低台地は、榛名八崎軽石層(Hr-HP)以下礫層との間に、灰白色粘土層が堆積している。表土下2m前後で粘土層に到達し、30cm余り掘削している。粘土採掘の手順は、竪坑を掘ってから下位の粘土層の部分を横に掘削する方法が推定されている。また、採掘坑内には浅間B軽石(As-B)がレンズ状に堆積している。このことから、B軽石降下時にはまだ埋没しきれていなかったこ

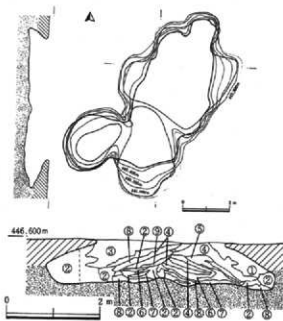


図2 藪田東遺跡第7群粘土採掘坑

土を引き上げ状況を示す堆積土により、「粘土採掘坑」と認定した経過を述べている。

本遺跡の調査により、利根川上流部での須恵器生産が復元されるとともに、藪田遺跡と本遺跡をあわせ一体の



図4 今井道上・道下遺跡粘土採掘坑の土器

とが指摘されている。第1・2号粘土採掘坑からは坏と須恵器蓋、2号からは須恵器蓋・平瓶・短頸甕が出土している(図4)。

本県平野部の奈良・平安時代と推定される粘土採掘坑であるが、土器製作に伴う粘土採掘坑としては特定されていない。

(4) 天引向原遺跡

本遺跡は甘楽郡甘楽町字天引に所在し、関越自動車道(上越線)建設工事に伴い御群馬県埋蔵文化財調査事業団が1989年4月から1991年8月まで発掘調査を実施した(木村・藤巻 1997)。主な遺構は、古墳時代中期から後期の竪穴住居跡121軒・粘土採掘坑67基・粘土土坑20基・溝1条・円形周溝遺構1基・白玉工房跡等である。また、図5・15に示したごとく、主な遺物は当該期の土器群多数・樹皮製曲物2点・梯子3点等である。26号と72号粘土採掘坑から出土した曲物容器は、伴出した土器から6世紀前半代に製作されたと推定されている。

木村 取氏の報告によるならば、粘土採掘坑は、一部5世紀終末段階の土器を含みつつも、6世紀前半段階に限定される。粘土採掘坑の分布する東側斜面は、谷地との比高差は約20mである。上位段丘面には南側の丘陵から選ばれた礫と青灰色粘土の互層(XV層)、及びローム層(III~X層)の間に粘土層が堆積しており、そのうちの下半に堆積しているXIV層が良質の青灰色から白色

粘土層である。白色粘土層は50cm前後の堆積である。採掘の手順は、堅坑を基本としている。連続的に拡張しているものは少ない。平面形は円形状を呈するものがほとんどで、3m前後から6m以上のもまで認められる。粘土採掘坑からは土器が119点、木製品は68点が出土している。大半の土器は、覆土中に投げ込まれた状態で出土しているが、木製品は底面付近から出土しているものが多いと報告されている。

また、粘土採掘坑周辺で、粘土で埋まった小規模な粘土土坑群が検出された。粘土土坑の規模は、直径50~100cmで深さは25cm弱である。遺物は出土していない。白色粘土で埋まったものや、黒褐色土を主体とし白色粘土が混じったものがある。平安時代後期の粘土土坑で、平安時代後期の水産施設の可能性が指摘されている多摩ニュータウン№146遺跡に類する遺構と解釈されている。

(5) 光山房遺跡

北関東自動車道(高崎~伊勢崎)建設に伴い、御群馬県埋蔵文化財調査事業団より1997年4月から1998年3月まで調査された(友廣 2003)。

本遺跡は伊勢崎市三和町に所在し、大間々扇状地南端部柏川左岸の洪積台地上に位置する。東側には舞台遺跡の「角谷清水」、また「男井戸」などの湧水地がある。さらに、南北方向の小支谷が開析されている。奈良・平安時代の住居跡が52軒検出されているが、粘土採掘坑は古墳時代後期6世紀代と推定されている。粘土採掘坑は、D区の南方向に傾斜する舌状地の突端部に383基検出された。現時点では、本県最大規模の粘土採掘坑群である。隣接地には古式土器器段階の住居跡1軒が検出されているだけで、居住地との関連は不明である。さらに、粘土採掘坑の形成されていた谷を挟んだ西側に、平安時代の須恵器窯が12基検出された。両者の時期は異なると判断されるが、それらは平野部の微高地に形成された遺構である。

微高地の北半部分では、粘土層まで70cm、南部分で35cmであり、西側縁辺部では100基余りの粘土採掘坑が密集している。粘土採掘の手順は、堅坑を掘削し、底面の粘土を採取する。その後、堅坑の壁部分の粘土を採掘する

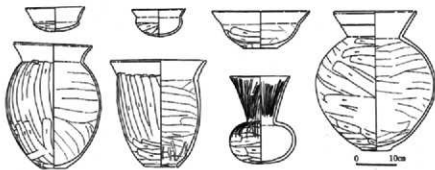


図5 天引向原遺跡粘土採掘坑の土器

基本的な探掘方法である。探掘坑の平面形態は、不定楕円形を呈し、長径1.3mから1.5m前後の規模である。探掘された粘土は暗色帯下部または暗色帯を抜いたところで止まっていることから、始良 Tn 火山灰 (AT) 下の暗色帯に相当する粘土を主として採取していると推測されている。また、暗色帯相当の粘土層も採取されているが、ATの火山ガラスを含み通称「始良土」と呼称されている粘土に類似している。12cmから14cmの厚さである。

出土した土器から友廣哲也氏は、1号粘土探掘坑は4世紀代、3・5・7・8号粘土探掘坑は平安時代、それ以外の大半は古墳時代後期の鬼高期に帰属すると推定している。それらの土器の多くは甕であり、粘土を選び出す道具と考えられている。図6の1は98号探掘坑の甕、同図2は275・276号の小型甕、同図3は1・42号の小型甕、同図4は87・276号の甕、同図5は35・99号の須恵器甕、同図6は10・141探掘坑・24号溝の球胴型の甕、同図7は91号の一木平鋸、同図8は58号の曲柄平鋸である。

(6) 波志江中宿遺跡

本遺跡は伊勢崎市波志江町内に所在し、北関東自動車道建設に伴い群馬県埋蔵文化財調査事業団により1997年12月から1999年10月まで調査がおこなわれた(熊谷2001)。旧石器時代から中世・近世の遺構が確認された複合遺跡である。

古墳時代前期の粘土探掘坑が66基検出され、多量の土器と木製品130点余りが出土した。熊谷 健氏の編集により土器130点と木製品58点が報告された。現在、群馬県内で確認されている、最も古い時代の粘土探掘坑である。さらに、多様な粘土探掘に関する資料が検出された遺跡としても注目されている。

3. 波志江中宿遺跡粘土探掘坑の分析

本遺跡については、調査時から古墳時代人の掘り残した粘土を使用して、台付甕や陶器の製作実験を行っている。

た。よって、調査時に粘土層の仮番号を付けていたので、調査結果の土層区分と比較しながら、本遺跡で採取された粘土層を検討してみたい。

(1) 粘土層の堆積と粘土の探掘

調査時の粘土層について、黄褐色ローム土層およびその上層を1層とくくり、「黒色～灰褐色粘土層 (黒と仮称)」を2層、下層の「灰白色粘土層 (灰色)」を3層、「黒褐色～茶褐色粘土層 (茶)」を4層とし、4層を上部の黒色が強い部分を4-1層、下部の茶色が強く白色のバミスを含んだ部分を4-2層と細分していた。以下の「淡緑色シルト質土」を5層と区分していた。なお、古墳時代人の探掘した粘土層は4-1層までで、現地表面から約2.5m程下がっている。図7は54号粘土探掘坑の断面と調査時の粘土層模式図、報告された断面図の比較である。

粘土探掘坑は波志江下沼に隣接したA区で確認され、さらに沼方向に連続していることが推測された。粘土探掘坑の位置する中央部から北西の波志江沼方向に傾斜し、低い部分にはAs-Bの堆積が顕著に認められた。さらに、54号粘土探掘坑の上半部には、Hr-FAがレンズ状に堆積し、6世紀前半段階ではまだ、探掘坑は完全には埋没しきれていないことが確認された。以下、ローム層が堆積しているが、上面で標高は約85m前後である。

調査時にATは、黒色粘土層中の上部に包含されていると推定されていた。土層模式図の台地部9層に該当する。また、調査時に4-2層と区分したHA-HPの軽石を包含する茶褐色粘土層は、粘土探掘されていない。

(2) 粘土と土器胎土の分析

本項では波志江中宿遺跡の土器胎土分析を中心として、群馬県内の粘土探掘坑と関連して最初に分析された藪田東遺跡、木製品を多出した天引向原遺跡の分析結果を検証してみる。

a. 波志江中宿遺跡

本遺跡では花粉分析と植物珪酸体分析をあわせ、粘土

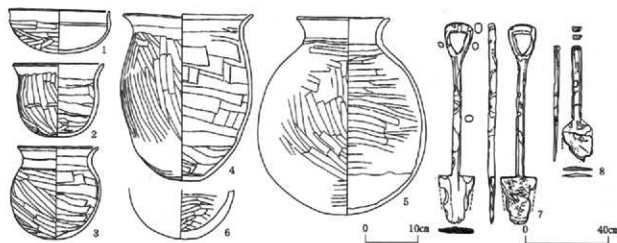


図6 光仙房遺跡粘土探掘坑の土器と木製品

層と土器胎土分析をおこなっている。分析者の藤根久・今村美智子氏は、「土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」と題して報告している(藤根・今村 2001)。粘土と土器胎土に包含されている珪藻化石などの微化石と、砂粒物の岩石学的特徴の視点から分析している。その結果、土器胎土には淡水珪藻化石が多く、沼沢湿地で形成された粘土を使用していることが判明した。これは粘土採掘坑周辺の粘土層の分析結果とも一致していた。ただし、粘土層と土器胎土の砂粒含有量には相違が認められ、土器の生地土として使用したと考えるならば、礫石を多く含む層の土を混和材として混合していたと推定している。地質学的に区分された単一土層(粘土層)の粘土を使用していたのではないという分析結果であった。

b. 菟田東遺跡

花岡純一氏の「菟田東遺跡出土土器の胎土分析」の論考がある。群馬県における最初の粘土採掘坑関連遺跡の報告であり、分析者の花岡氏と報告書の原・中沢 悟氏の分析視点を集約しておきたい。本県における胎土分析は、瓦窯跡出土資料の分析から、生産地同定の一方法として始められた。同時に、須恵器窯跡群資料の胎土分析段階に入った時期の、粘土採掘坑の胎土分析である。須恵器生産に伴う粘土採掘坑と集落、さらに窯跡の関連を解明することが目的の一つとして認識されていた。

分析資料としては、本遺跡の住居出土の須恵器と周辺部の須恵器窯跡採集須恵器、及び消費地と推定されている地域の資料を取り上げている。さらに、時期差をもつ須恵器、器種別と、肉眼観察による焼成方法と胎土の相

違が認められたものを等分析対象試料としている。結果としては、本遺跡の粘土採掘坑の粘土を生地土とした須恵器窯跡は、現在確認されていない窯跡によることが指摘された。また、元素成分分析の項目を検討する必要があることも指摘された。一方、磯貝基一氏による「菟田東遺跡周辺の地質 3. 粘土層について」の分析では、グリーンタフや溶結凝灰岩が浸食・堆積して形成された白色粘土であることが解明された。

c. 天引向原遺跡

木村氏は粘土と土器の胎土分析をおこなった目的を明記している。第1点は採掘された粘土の理化学的特徴を明らかにすることにより、土器製作の粘土を目的として採掘されたか判断することであった。第2点は土師器製作上の特殊例として注目された粘土紐接合部の「粘土に刻みつける技法」と、土師器の生地の特徴である「1個体の土器に異なる粘土が用いられている事例」を解明するためであった。分析をおこなった藤根久・古沢美智子氏は、「土器の胎土と地山粘土の分析」と題して報告している。

藤根・古沢氏は「粘土材料による胎土の分類と粘土材料の違い」の項で、粘土の起源を知るために粘土中に含まれる珪藻化石や骨針化石などに着目している。水深1m内外の沼沢湿地で堆積した粘土と推定される「淡水成粘土を用いた胎土」、水成環境に見られる珪藻化石や骨針化石が含まれる粘土である「水成粘土を用いた胎土」、本遺跡周辺の段丘礫直上粘土層である「その他粘土」に3分類している。土器の胎土は粘土採掘坑の粘土(段丘堆積物)と特徴が類似しているものと、遺跡周辺の低湿地などで堆積した水成粘土を使用した両者が認められた。分析結果として本遺跡の粘土採掘坑は、AT 火山灰層下の灰白色から淡黄色粘土層を採掘し、珪藻化石はほとんど含まれず、段丘堆積物の粘土であることが判明した。

(4) 採掘坑出土資料と分類

波志江中宿遺跡の粘土採掘坑からは、粘土採取と関連した多様な木製品が検出され当初から注目されていた。そのうち1号住居出土資料も含め、木製品58点と土器が130点が報告された。木製品については、女屋和志雄氏の「波志江中宿遺跡出土木製品について」の論考がある(女屋 2001)。女屋氏は木製品の分類にあたり、数基単位で粘土採掘がおこなわれ、長期間にわたり採掘を繰り返す專業集団の存在を推定している。さらに、木製品を掘削具、容器、梯子、杭や厚板などに分類している。これらは採掘用の道具や足場の補強、粘土を搬出するための道具であり、多くは坑内の底面や壁際で出土し、共存する土器とともに時期、用途が特定できる一括資料であると評価している。

掘削具 掘り棒・一木平鋸・膝柄・直柄

掘り棒 発見当初は「樺棒・突き棒」と呼称していた。

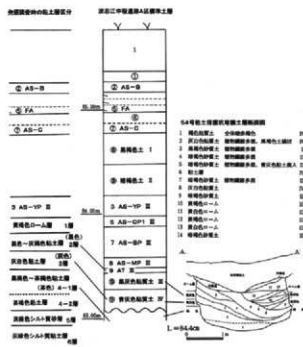


図7 波志江中宿遺跡粘土層模式図と54号粘土採掘坑断面

また、これらの掘り棒は、用途不明の木製品としての形態も含まれている。女屋氏は「全体がへら状にそぎ落とされたもの」と、「すりこぎ状に厚いままのもの」に分類している。掘削具の中では最も数が多く、クスギ、コナラの割材を使用している。この二者は調査中より、1本の棒状木製品の両端が使用され、先端が細く尖ると厚く丸みをおびたものがあることに着目されていた。図8の1(報告No158)は39号探掘坑出土で、長さ57.8cmの掘り棒である。先端部は細い丸棒状になり、下端は扁平で鴨の嘴状になっている。同図2(No160)は長さ68.5cmで、下半部全体が扁平になり、先端部のみ削り出されている。掘り棒の平均的な長さは、およそ59.7cmである。

一木平鋤 クスギとアカガシ材を使用した6点が出土している。同図3(No164)は12号探掘坑出土で、櫛状になり柄の一部が欠損しているが、長さ63.3cmである。オール状の鋤は長い柄がつき、短身の片刃部となる。農具から改良されたもので、横方向に突いて切りくずすのに使用された掘り棒の一種と推定されている。同図4(No169)は64号探掘坑出土で、スコップ状の鋤部分を削り取り、柄の部分掘り棒として転用した代表例であろう。長さは61.0cmである。粘土層を掘り削り、ブロックとして採取するために、各種の形態の「掘り棒」を使用していたと考えられる。

膝柄 同図5(No174)は23号探掘坑出土のクリ製鋤の柄で、長さ64.0cmである。又鋤を装着し、粘土層までを掘削するとともに、粘土を採掘したと判断されているが、組み合わせの鋤部分が検出されていないので、膝柄部分

のみで採掘の道具として使用された可能性もあろう。

直柄 同図6(No175)は39号探掘坑出土のケヤキ製板状鉄斧を装着した斧で、長さ73.3cmである。粘土探掘の現場で木製品の加工に使用されたと推定される。

容器 盆と籠

盆 同図7(No179)は36号探掘坑出土のカエデ製盆の半欠品で、長さ73.0cmである。

籠 45号探掘坑でクスギの根を使用した籠の縁と推定される木製品が確認されている。

両者ともに粘土を搬出するための容器と推定されている。

梯子 同図8(No178)は50号探掘坑の底面から出土した梯子で、両端が欠損しているが、現存長196.0cmである。探掘坑への出入りに使用したものである。この他に、女屋氏は45号出土の報告No177など複数の探掘坑から出土した資料を、梯子の代用に仮設された櫛状の足場と推定されている。

板材と杭 板材には足場板として建築部材からの転用品と粘土搬出用の厚い板がある。また、21号探掘坑等では杭が出土している。これは、長さ88.2cmである。

土器 S字状口縁台付壺

古墳時代前期の台付壺類が多量に出土している。熊谷氏は土器の出土状況について、粘土探掘坑の上層部、埋没土中と底部近くの検出に分類している。粘土の採掘が終了したときに廃棄されたものよりも、次の探掘坑が掘削の粘土層より上層土や、その後の「作業道(踏み台跡)」から出土していることが多く、粘土探掘坑の埋没後一定

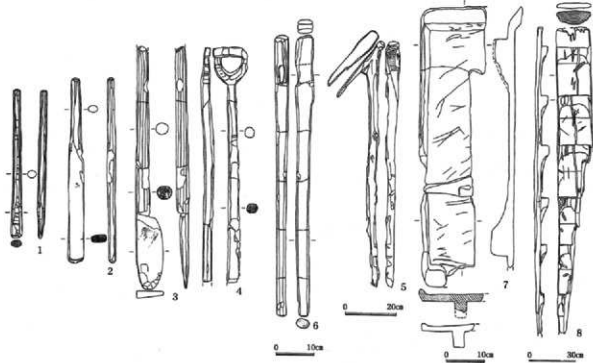


図8 波志江中宿遺跡粘土探掘坑の木製品

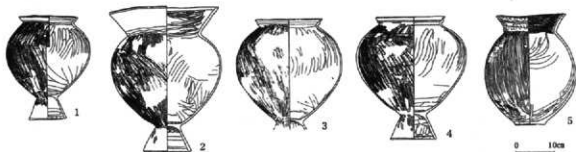


図9 波志江中宿遺跡粘土採掘坑の土器

期間地表面となっていた付近から出土しているものが多く調査所見を記述している。また、S字口縁台付壺の出土について熊谷氏は、祭祀、実用の両面から検討しているが、主として湧き水を掻き出すための容器としての利用説を支持したい。台部が打かかれた資料が、少なくとも出土している点にも注目してほしい。

掘り棒や直柄とともに39号採掘坑から図9の1（報告No.23）のS字口縁台付壺、また24号採掘坑から同図2（No.121）単口縁台付壺が出土している。これとともに、台部を打ち欠いた同図3（No.56）のS字口縁台付壺が出土している。また、10号採掘坑からは同図4（No.8）の肩部に横ハケを施すものと、同図5（No.126）の折り返し口縁の壺が出土している。

4. 土器作り関連資料と多摩の粘土採掘坑

町田市多摩ニュータウンNo.248遺跡の粘土採掘坑が、現在確認されている日本列島最古のものである。縄紋時代中期の勝坂式から加曽利E式段階、さらに後期にかけての粘土採掘坑である。

本項では土器作りに関する関連遺構・遺物と、現在最も密着して粘土採掘坑関連遺跡の検出されている多摩丘陵の資料を確認しながら、古代においてどのような粘土の採掘がおこなわれていたか分析してみる。当然、粘土の採掘は土器作りの生地を求めるだけではなく、竈や土壁、土屋根、また窯体用粘土等の採掘も想定できる。その中でも、波志江中宿遺跡のように堅坑を深く穿つタイプの粘土採掘坑に着目してみた。

(1) 伝統的な土器作り

『日本書紀』巻第三 神代下 神武天皇 即位前記戊午八月〜九月の条

天皇は夢の中で、「天香山の社の中の埴土を取って、平らかなワラケである天平埴を八十枚と、御神酒を入れる神聖な瓶である埴埴はにへ（厳覚いつへ）を作って、天神地祇を敬い祭れば、賊は自然に平定されるであろう」という、土器製作に伴う粘土採取に関する記事がある。さらに、天皇は二人の者に「天香山に行って、こっそりとその頂の土を取ってくるように命じ、国家統治の大業

の成否は、おまえたちの仕事にかかっている」と命じたと続いている（川副・佐伯 1987）。

これから考えられるのは、単に焼き物の原料を求めるという事だけでなく、国家統治に係わる極めて重要な行為であると、受け止められていたことが知られる。当然、どこの粘土でも良いということではなく、古代大和朝廷における最も神聖な地の一つと考えられていた「天香山の土」に限定していることは注目される。

伝統的な土器作りが継承されている、三重県多気郡明和町箕村の伊勢神宮御料土器調製所は著名である。この付近は高天原から埴土（はにつち）を移したという伝承のある地で、古くは多気郡有爾（宇仁）郷といわれていた。この箕村に所在する北野遺跡からは、古墳時代後期から奈良時代にいたる土器器焼成坑が多数検出された。

延暦の「皇太神宮儀式帳」によると、土器には土器器（はじのうつわ）と陶器（すえのうつわ）の二種があり、土器器作物忌である麻織部春子女（おみのはこめ）と父の倭人が、1年間の御料として土器器は3,260口製したという。また、陶器作内人（すうのうつわつくるうちんど）である磯部主麻呂のつくるものは465口製したと記されている。

南里空海氏によるならば、土器調製所で現在1年間に作成している土器は、およそ57,000個におよぶという。餅・アワビ・タイ・伊勢エビ・マスの切身などを盛る六寸土器が2,250個、飯・餅・スルメなどの乾魚・海藻・野菜・果物などを盛る四寸土器が20,000個、飯・塩・白酒・清酒などを盛る三寸土器が19,500個、御盃が9,000個、御箸台が2,020個、御水碗が2,050個、御酒壺が2,300個、大土鍋が12個製作されている。

(2) 多摩の粘土採掘坑

a. 最古の粘土採掘坑「多摩ニュータウンNo.248遺跡」（斎藤・松崎 2000）

本遺跡は東京都町田市小山に所在し、町田市相原・小山地区の東京都土地区画整理事業に伴い、1990年より1991年にかけて発掘調査が実施され、縄紋時代中期から後期の粘土採掘坑6群が検出された。現時点では、最古の粘土採掘坑群であるとともに、粘土採掘場出土の土器

及び打製石斧が、直線距離にして250m離れた集落遺跡のNo245遺跡の資料と接合したことにより注目されている。

縄紋時代の粘土探掘坑は2,405m²調査され、さらに5,500m²余りにひろがると推定されている。出土遺物は土器・石器・土器・炭化物・木製品である。報告書によるならば、土器は縄紋時代早期後半から後期までで、2,056点出土している。また、石器は石核・石匙・磨製石斧・打製石斧・礫器・加工礫・石皿・剥片等173点であった。

また、及川良彦氏はA区からE区の粘土探掘坑群の変遷を分析している(及川 2000)。粘土探掘のプロセスを「粘土の発見」、「粘土探掘準備」、「粘土探掘開始」、「粘土探掘拡大」、「粘土探掘終焉」想定している。さらに、粘土探掘坑と地層断面模式図を提示し、探掘対象となったのは、多摩ローム層の下部と御殿崎礫層の間の粘土層で、約40万年から50万年前に形成されたと推定している。また、及川氏は「多摩丘陵内の粘土探掘坑の類別」と「縄文時代の粘土探掘坑の類別」を集成している。

b. 探掘方法の復元 「南多摩寮群 八王子市東京造形大学宇津貫校地内遺跡」(坂浩・服部 1992)

本遺跡の粘土探掘は、山麓部の傾斜地の南北80m・東西100mの範囲で確認された。基本的な探掘は、土層断面の観察より、粘土層上面に堆積した土層を除去し、徐々に斜面山側へと進んでいったと解釈されている。この粘土探掘の状況を園村維敏氏は、模式図として提示されている。

- 第1段階 粘土の堆積を確認するとともに、斜面谷側より探掘を開始する。
- 第2段階 順次山側へ探掘は進行し、古い探掘坑は排土により埋められる。
- 第3段階 掘り込み面との落差が大きくなり、山側への探掘を中止する。

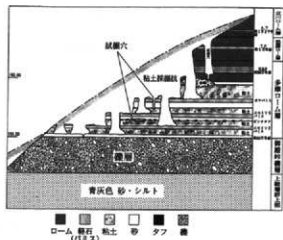


図10 多摩ニュータウンNo.248遺跡の粘土探掘坑断面模式図

第4段階 完掘後は手前に粘土面が露出し、多くの探掘痕跡が残る。

これにより、本遺跡の大規模な粘土探掘坑群が形成されたと解釈されている。これらの粘土探掘坑群は、平安時代のものであり、探掘坑に伴い水場遺構と斜面下には須恵器窯跡が検出された。粘土探掘坑からは木製の鋤、掘り棒、藁製品も、水場遺構では曲物が検出された。

c. 坑道をもつ壑坑タイプの粘土探掘坑 「八王子市多摩ニュータウンNo146遺跡」(斎藤・田中・比田井 1982)

本遺跡では、坑道をもつ壑坑タイプの大規模な粘土探掘坑が検出されている。本稿では群馬県内で検出されている代表的な壑坑タイプの粘土探掘坑である波志江中宿遺跡と比較するため、特に「木製足掛け具」を出土した多摩ニュータウンNo146遺跡を検証してみる。

東京都八王子市南大沢地内に所在する。1981年5月から8月にかけて調査が実施された。平安時代後期の粘土探掘坑28基・粘土土坑54基等が検出された。出土遺物は少なく、須恵器環1、土師器環3、土師器壺4、灰軸陶器1、鉄斧1、木製足掛け具3点等であった。探掘坑と谷下の水田面との比高は、約25mである。探掘坑の規模および形状は、①長さ5m～10m、幅1m～1.5mの坑道に、径2mから3mの円形の壑坑(粘土探掘部)が連続するものが基本的である。確認面より壑坑底面までの深さは、基本的な形状である①の坑道+壑坑のものは、4m前後の掘削を必要としており、目的の粘土層に至るまでには、大量の排土がでると考えられている。このために坑道は、排土処理および探掘粘土の運搬に必要不可欠なものとして設けられ、探掘坑の基本的な形状も、ここに起因すると報告者の斎藤 進氏は推定されている。図17が16号探掘坑から「木製足掛け具」である。また、本

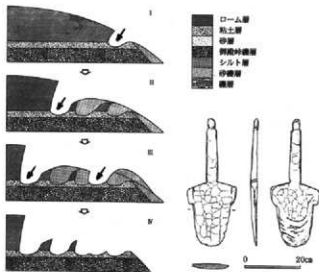


図11 東京造形大学宇津貫校地内遺跡粘土探掘坑断面模式図

遺跡の特徴として、粘土採掘坑の切り合いは少ないことと、堅坑がある程度埋没した状態で粘土を保管したと考えられる白色粘質土が検出された。その他、採掘した粘土を溜めたと推定されている「粘土土坑」が、54基検出されている。

このように、多摩ニュータウンNo.146遺跡は、4m以上も掘削された粘土採掘坑の代表的遺跡であるが、明治5年に京都府により編纂されたと推定されている「京都陶磁器説」(藤岡幸二氏蔵本)の「京都陶磁器説并図」に「粘土採掘坑の図」が掲載されている(藤岡 1962)。

○土堀方法

山麓或ハ山頭ニ方六尺ノ穴ヲ掘リ漸次ニ深ク掘采ル。凡珪礫両土ノ如キ方六尺ノ地ヲ掘テ四千貫目許ノ土ヲ得ヘシ。第一号、二号図ノ如シ。平地及山頭ハ円穴ヲ掘ル蓋方ナレハ土塊刷レ易キ故ナリ。深十尺ヨリ三十尺ニ及ブ。若シ水脈アレハ堅ニ水道線ヲ掘穴底ニ水溜ヲ作り溜水ヲ汲去ル第二号、三号図ノ如シ。器械左ノ如シ。

さらに、多摩ニュータウンNo.146遺跡の報告でも検討されているように、各遺跡の採掘量の比較については、二つの問題がある。粘土採掘坑全域を完掘され遺跡は少ないことと、粘土層は数面にわたり堆積していることが多く、実際に掘削・使用された粘土層を判読することが困難な場合が多いことである。藪田東遺跡では各粘土採掘

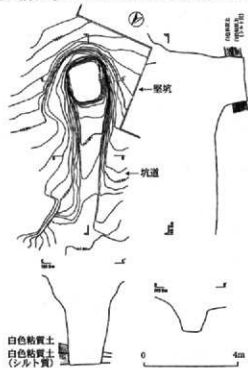


図12 多摩ニュータウンNo.146遺跡1号粘土採掘坑

坑の1㎡単位の白色粘土採掘量を立米で算出している。12群の粘土採掘坑のうち計測できた11群の総計は、188.71㎡である。その内、白色粘土採掘量の㎡当たりの採掘量平均は、0.30㎡である。

多摩ニュータウンNo.146遺跡では、1人が入れる程度の17号採掘坑は、白色粘質土採掘量0.05㎡・白色粘質土層以下の採掘総量0.24㎡で、合計0.29㎡程度の粘土しか採掘できていない。最大の20号採掘坑は6㎡以上採掘している。1基当たりでは、平均2㎡程度の採掘量である。白色粘質土以下の採掘量の平均は4.8㎡である。

(3) 粘土採掘の道具

採掘関連の木製品としては、波志江中宿遺跡で良好な資料が出土し、前章で記述したので掘り棒・鋤等は割愛し、それ以外の資料について取り上げたい。

なお、「京都陶磁器説」には、粘土採掘の道具として次の記述がある。

比羅伎(ヒラキ) 疋羅(イカキ)

網疋羅(アミイカキ) 畚(フゴ)

比羅伎ハ鉄ノ如クニシテ、少シ彎形ヲ為ス。

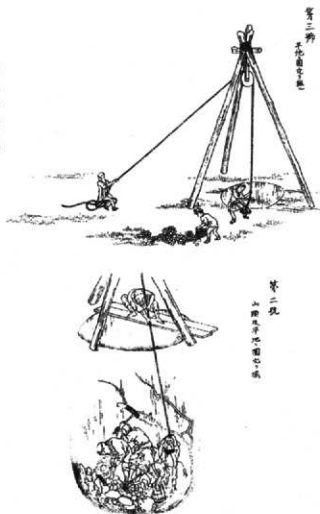


図13 「粘土採掘坑の図」(「京都陶磁器説并図」)



図14 「粘土採掘の道具」(京都陶磁産井原)

右器械第四号図ノ如シ。

また、近世から明治にかけての瀬戸地域の民俗資料として、「ツル」と「カモ」と呼称されていた粘土採掘道具が保存されていることは、波志江中宿遺跡の掘り棒等と比較するうえで注目される資料である。

曲物 天引向原遺跡からは樹皮製の曲物容器が、26号と72号粘土採掘坑から各1点ずつ出土した。いずれも底面に密着した状態で出土しており、かたわらに杭が置かれた状態であった。伴出した土器から6世紀前半代に製作されたものと推定されている。

東京造形大学宇津貫校地内遺跡の水場遺構からも出土している。

製物容器 天引向原遺跡の28号から出土している。

草鞋 東京都町田市小山に所在する多摩ニュータウンNo949遺跡では、古墳時代の粘土採掘坑より草鞋か草靴の台部と推定される藁製品が2点出土している(宇佐美1998)。報告者の宇佐美義春氏は、長さは左足で25.8cm、湾曲部を水平にすると27cm前後だと推定している。ただし、乳や鼻緒の編まれた痕跡はない、ということである。さらに、半足の草鞋が出土している。検出時点では

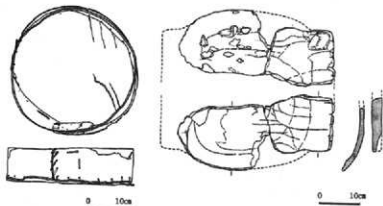


図15 天引向原遺跡粘土採掘坑の木製品

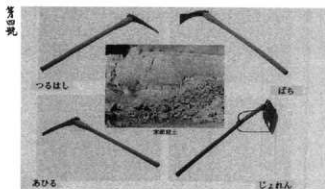


写真1 瀬戸地域の粘土採掘道具(瀬戸市歴史民俗資料館)

片側の前乳と後乳と緒の一部が確認していた。長さ17.8cmで、湾曲を正すと約19cmほどになる。縦織の筋は横に走るが、横編み材は板状に浮き上がって十分な観察ができない。ただ芯縄が縁に沿って左右1本、中央部に2本確認されているが、鼻緒は不明である。なお、東京造形大学宇津貫校地内遺跡の水場遺構からも藁製品が出土しているが、種別は不明である。

木製足掛け具 多摩ニュータウンNo146遺跡の16号採掘坑では、二股の自然木を利用した「足掛け具」が検出されている。全長111cm、横木の長さ38cmである。横木を差し渡し、両端をつで巻き、縛ってあった。採掘坑内の底部に堆積するグレイシルト層に刺し込まれた状態で検出された。竪坑部から坑道への採掘粘土の運搬状況を知る資料と考えられている。

杭 天引向原遺跡の11基の粘土採掘坑から38本の杭が出土している。ただし、その内の一部は掘り具として使用されていたと推定されている。

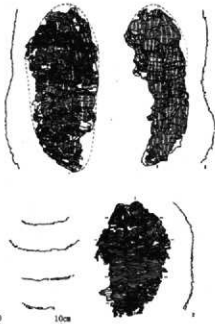


図16 多摩ニュータウンNo949遺跡粘土採掘坑の草鞋

鉄斧 多摩ニュータウンNa146遺跡では、平安時代の4号探掘坑内の覆土中位より、長方形に近い鉄板の一端を刃とした鉄斧が出土している。全長8.1cm、刃幅は4.1cmであり、手斧として使用されたと推定されている。

(4) 粘土土坑

群馬県においては、粘土溜め土坑ないしは粘土水取土坑と推定されている遺構は、藪田東遺跡、天引向原遺跡で出土している。特に、良好な出土例は多摩ニュータウンNa146遺跡の平安時代の粘土土坑である。本遺跡では粘土探掘坑とともに、54基の粘土土坑が検出されている。

粘土土坑の形状は、基本的に円形を呈し、直径約70cm～1.7m、深さ約20cm～90cm程である。探掘坑の使用が停止した後に、坑道部に集中的に作られた状態と推定されている。粘土土坑覆土の観察から、白色粘質土およびそのブロック土の堆積がみられることにより、土坑内で粘土を均一化させるとともに、水取作業をおこなった施設であると推定されている。なお、本種の土坑からは、遺物は検出されていない。

比田井克仁氏は隣接するNa144遺跡の土器製作の工房跡が、この粘土探掘坑と関連した遺跡であると考えている。土器製作の工程が、粘土探掘→粘土の精選→成形→乾燥→焼成というプロセスを経るとすれば、Na146遺跡は、この生産活動を担った工人たちの、第1段階の、粘土探掘から精選の場であると推定している。



図17 多摩ニュータウンNa146遺跡粘土探掘坑の木製足掛け具

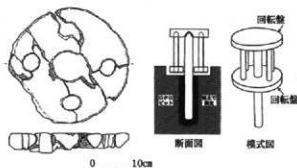


図18 野木遺跡のロクロ回転盤と復元図

(5) 土器製作と工房跡

a. 「ロクロ回転盤」—青森県野木遺跡—(中嶋・櫻井 2000)

青森県野木遺跡では、平安時代のロクロ回転盤と推定され木製品が出土している。集落に近接した水場遺構のある沢から出土した。クリ材を柁目取りした長さ25.2cm、厚さ4.2cmである。中央の軸と周囲には4本の支柱で上下の盤をつなげた穴が柁目買かれている。蔵ロクロの下の回転盤と推定されている。

b. 「ロクロピット」—東京都大佛寺裏遺跡—(坂野・上野 2000)

南多摩郡跡群の八王子市鎌水の大法寺裏遺跡では、奈良・平安時代の竪穴状遺構5基・掘立柱建物1棟・粘土探掘坑5基・焼土坑7基・土坑15基・炭窯1基等が検出されている。本遺跡はロクロピットを有する竪穴状遺構などの存在により、土器製作に関連した工房集落と考えられている。

第1号竪穴状遺構の平面形は、長方形を呈する。床面にロクロピット3基、粘土溜、焼土坑が検出されている。ロクロピットと推定されている土坑は、隅丸方形を呈し、長径約48cm、短径約47cmである。軸穴の径は約10cm、深さは約28cmである。ピット内の軸穴を囲む覆土は、粘土湿じりの土を数層叩き締めながら充填されていた。これより、竪穴状遺構はロクロピットや粘土溜などの存在から、工房跡であったと推定されている。

また、第1号掘立柱建物跡はその規模は桁行2間(5m)梁行2間(4.5m)の小形であり、柱穴も小型のものが多くやや不規則な並びを呈していることから、土器の選別・乾燥等何らかの作業に使われた施設と考えられている。

群馬県内の遺跡では、藪田東遺跡の6号住居床面の土坑が、ロクロピットに該当する可能性が指摘されている。少なくとも工作台としてのロクロ軸木を固定することは可能であったと推定されている。また、舞台遺跡の須恵器窯跡群に隣接した、8世紀後半段階の69号住居でも、ロクロピットに類似する形状の2段階築の土坑が検出されている。

c. 工房跡と粘土の出土

伊勢崎市三和町に所在する舞台遺跡は、北関東自動車道建設に伴い1995年4月から2000年3月まで発掘調査が実施された旧石器時代から近世までの複合遺跡である(綿貫 2001)。古墳時代の住居跡215軒(前期149軒、後期66軒)、9世紀から10世紀の住居51軒、須恵器窯跡11基(その他、築造途中に放棄された1基がある)、掘立柱建物と歴史時代の住居跡51軒等が検出された。

舞台遺跡は、東側に「男井戸」(大井戸)西側には「角弥清水」と呼称される湧水地があり、「角弥清水」から南流する谷地の比高差3m程の東斜面に平安時代前期の須恵器窯跡が11基形成されている。この谷間に近接する台地上に工房跡と思われる6棟の竪穴住居が検出された。綿貫邦男氏は須恵器窯跡と関連した8世紀後半から、9世紀前半ないしは中頃に於て形成された須恵器工人関連施設と考えている。また、3棟2列に配置された住居跡であり、軒間・列間に極めて企画性が強いと、居住域の中心部からははずれた窯跡群と隣接して検出されたことから、須恵器製作に直接関わった工人集団の居住施設・工房施設・原材料の粘土や製品の保管施設等の遺構である可能性が高いと記述している。63号住居は8世紀後半から9世紀前半の時期で、「小成」と刻書された紡錘車が出土している。67号住居は9世紀前半の時期で、数点の窯跡製品と思われる資料が出土している。68号住居は墨書土器が出土している。

敷田東遺跡の4号住居の床面から白色粘土が検出されている。また、6号住居では扁平な河原石が底面をやや掘りくぼめ設置されており、生粘土をこねる際の作業台として使用されたことも推定されている。

一方、多摩ニュータウンNo.918遺跡では古墳時代前期と後期の住居跡内より粘土塊が出土しており、粘土分析の結果、No.248遺跡の粘土探掘坑に近いが、母材の粘土そのものではなく、調査された素地土の可能性が高いことが明らかにされた(及川 1999)。また、鳩山窯跡群と南比

企窯跡群に関連した埼玉県嵐山町節新田遺跡では、平安時代のロクロピットをもち粘土を集積した竪穴住居の工房跡が報告されている。

d. 叩き板 一 波志江中屋敷東遺跡(金井 2002)

伊勢崎市波志江町字中屋敷東に所在する。北関東自動車道建設に伴い1998年2月から1999年3月まで群馬県埋蔵文化財調査事業団により発掘調査が実施された。古墳時代の水田・溝・土坑から土師器・鉄鏡・埴輪・木製器(建築部材)・生活道具が出土した。水田畦畔の芯材として、建築部材・農具・叩き板・容器等が出土した。

図20の叩き板はC区16号溝から出土。台地と低地(水田)を区画し、水田に送水する施設と考えられる溝から出土した。1枚板から削りだして、羽子板状にしている。長さ32.2cm、幅5.5cm、厚さ1.7cmである。敲打部32.2cm、先端部5.7cm、基部4.8cm、柄部長さ15.8cm、径1.5cmである。敲打部表面の木目によって、断面三角形の溝が8条ほられている。さらに、柄部に近い所で、木目に直交する1条の溝が掘られている。敲打部中央や先端部付近に摩滅がみられる。柱目。樹種はヤマガワである。

水田の開閉時期は、As-C降下後と考えられる。また、出土土器から古墳時代初頭の時期に製作されたと推定されている。

また、伊勢崎市教育委員会の調査による本遺跡北東に位置する、大沼下遺跡ではAs-C降下後に作られた水田と同時期の住居跡5軒が確認されている。

e. 当て具 一大阪府日置荘遺跡(入江・江浦 1995)

大阪府堺市日置荘原寺町地に所在する日置荘遺跡河道P-2からは、古墳時代後期から飛鳥時代と推定されるコウヤマキ製当て具3点と、スギ製叩き板2点が出土している。本遺跡は近畿自動車道松原さきみ線並びに都市計画道路松原大津線建設工事に伴い、1991年4月から1993年3月まで大阪府文化財センターにより調査された。IV調査区P区の埴輪窯と須恵器窯の構築された開析谷の河道から出土した。

当て具は長さ14.7cm、径10.8cm、柄の長さ10.8cm、柄の角度25度で、木芯を残す一木作りで、身部の中央付近は使用により年輪の柔らかい部分がすり減っている。叩き板は長さ31.7cm、幅9.6cm、厚さ3cm、柄の長さ20.4cm、42本の刻み線が認められる。

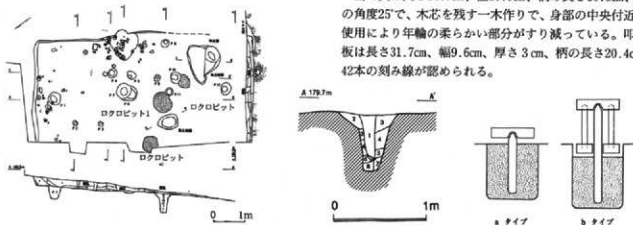


図19 大法寺遺跡1号竪穴状遺構とロクロピット断面図

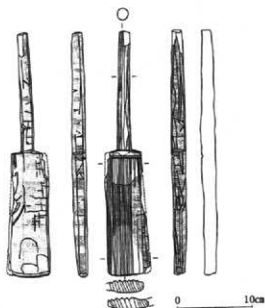


図20 波志江中屋敷東遺跡の叩き板

また、大阪府大庭寺遺跡では、5世紀前半の初期須恵器とともに陶製の当て具が出土している。

(6) 土器の焼成

a. 光仙房遺跡の須恵器窯跡 (縮貫 2000)

本遺跡は県内最大規模の粘土探掘坑が検出された地点の、西方100mに9世紀代の須恵器窯跡が12基検出された。大間々扇状地形末端部の平野部に形成された窯である。平坦地に形成された特異な須恵器窯群である。周辺部においては、三和工業団地遺跡と舞台遺跡を合わせ26基の須恵器窯跡が検出されている。報告者の縮貫氏は、「三和古窯跡群」とも呼べる状況であると記述している。また、本遺跡の開窯・操業時期は9世紀前半から中頃であると推定している。1号窯跡はローム層を掘り抜いた地下式窑室である。窯の規模は、窯体の全長3.7m、燃焼部床面

の傾斜角度は約15度、燃焼部長さ0.9m・燃焼部1.4mで燃焼部幅0.6mである。焼成部には焼台として拳大の扁平な川原石が、60個余り検出された。須恵器環・皿・碗が少量出土している。

また、大規模な粘土探掘坑と平地に形成された須恵器窯が近接して検出されたことにより、古代人の掘り残した粘土を新たに採掘し、軸轆引きした坏・甕を製作して、須恵器窯で焼成実験をおこなった。

b. 土師器焼成坑 三重県北野遺跡一(竹田 1996)

三重県多気郡明和町養村・明星・本郷に所在する北野遺跡は、1990年度から調査を開始し、1995年度の第5次調査までに226基の土師器焼成坑が検出された。全国最大の土師器生産遺跡である。第5次調査概報によるならば、図23のSF189は長軸1.8m、短軸1.2mの隅丸の三角形で、他の土師器焼成坑にくらべて小形で、検出面からの最も深い所で27cmである。奥壁面に強く被熱する部分が認められるのと、床面も熱を受けている。先端部分に土坑がある。埋土中にみられる粘土は、土器とともに廃棄されたものと推定されている。また、第6層中からは、土師器碗・皿・高坏・甕・有孔広口筒形土器など奈良時代の遺物が出土したが、使用しなくなった土器を土師器焼成坑に廃棄したと考えられている。

5. 粘土探掘坑と集落

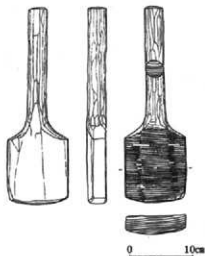
—波志江中宿遺跡と波志江西宿遺跡の関連—

(1) 波志江西宿遺跡の集落

本遺跡は伊勢崎市波志江町に所在し、北関東自動車道建設に伴い、岐阜県埋蔵文化財調査事業団により、1998年9月から2000年6月まで調査された(杉田・桜井 2002)。波志江中宿遺跡の粘土探掘坑の時期に一部並行し、最も近接地に位置する遺跡である。古墳時代初頭の住居跡19軒、掘立柱建物跡2棟等が検出されている。



図21 日置荘遺跡の当て具と叩き板



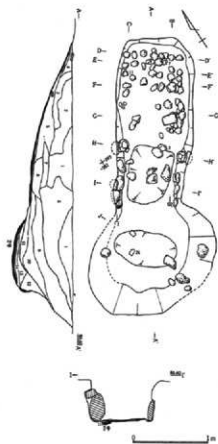


図22 光仙房遺跡の1号須恵器窯

特に、波志江中宿遺跡で量的に多く検出されたS字状口縁台付甕の検出例をみてみると、A区1・2号住居、B区3・5・8・9号住居、C区1・2・3・5号住居で出土している。10軒からS字状口縁台付甕が出土している。この中でも、B区8号住居・C区1・3・5号住居で主体的に出土している。さらに、報告者の杉田茂俊氏は「波志江西宿遺跡出土S字状口縁台付甕について」論考で、波志江中宿遺跡出土のS字甕との対比をおこなっている(杉田 2002)。両遺跡の比較のため、波志江西宿遺跡C区3号住居を取り上げている。本住居からは、S字状口縁台付甕が4点と、単口縁の甕が口縁部及び胴部破片を含め4点、小型壺1点、器台4点、甕1点、鉄製鎌1点等が出土している。4世紀末から5世紀初頭の時期と推定されている。杉田氏は両遺跡のS字状口縁台付甕の相違を、集落と粘土探掘坑という遺跡の性格の違いが土器に反映された可能性も示唆しつつ、波志江中宿遺跡の土器を田口一郎氏の編年第IV期に位置づけた。また、波志江西宿遺跡の資料は田口編年第V期とし、波志江中宿遺跡の土器が古く、波志江西宿遺跡が新しいと両遺跡の時間差をみだしている。

(2) 集落と粘土探掘坑遺跡の関連

女屋氏は粘土の用途を土器の材料と判断している。そ

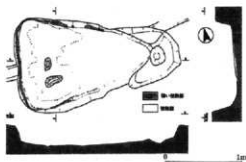


図23 北野遺跡のSF189号土師器焼成坑

して、集落内の廃材や手近な道具を自前の道具として使用し大規模な粘土探掘をおこなっていた。一組3～4人程度で共同作業をおこなう古式土師器生産に伴う專業集団(職人)であり、粘土探掘坑の規模から地域の需要をまかなっていたと考えている。なお、報告資料からは203.5m²が探掘されたと推定される。

波志江中宿遺跡の粘土探掘坑出土資料については、第2章でも触れたが、最も多く出土しているのは、S字状口縁部台付甕である。図24の1は、12号探掘坑出土の河張型であるが、横ハケを持たないタイプのものである。18号探掘坑からは、同図2のように横ハケを施した資料も少量出土している。同図3のように台部に欠損したのものも多い。この、48号探掘坑からは同図4の単口縁台付甕もある。また、同図5の21号探掘坑から出土したような甕も少量出土している。胴上半部に焼成後の穿孔があり、粘土探掘に伴う祭祀行為がおこなわれていたと推定されている。本遺跡でも一部手掘土器が出土している。しかし、「日本書紀」には粘土採取の場所等にはふれていないが、探掘された後への記述は確認できない。また、探掘坑からの土器の出土状態等から、土器の穿孔はより実用的な側面を重視した方が、解釈し易いのではないだろうか。例えば、探掘坑の上部で水を汲み上げるための紐等の呪縛穴も考えてもよいのではないだろうか。

(3) 藪田遺跡と藪田東遺跡の集落構造

下城氏は藪田遺跡の報告書で「藪田遺跡平安時代集落の変遷」と題して、藪田遺跡5区南半部と藪田遺跡は同一の遺跡であると判断し、須恵器製作に係わる遺跡の集落構造を分析している。台地上の集落を構成する遺構としては、住居17軒・粘土探掘坑11基・溝2条である。粘土探掘坑の存在、焼成時のヒビ割れ・歪みのある多量の土器の出土等から、近接する窯跡群と工人集団の居住地としての性格が確実であると推定している。粘土探掘坑は東西に走る台地の北半では集中し、南半では散在している。また、本集落の西半には吸水と排水の2本の溝がめぐっている。

以上のような遺構で構成される藪田遺跡の陶工集団の集落は、土器より5期に区分される。本遺跡の主体であ

る9世紀代を前葉・中葉・後葉の3期に、10世紀代は前半と後半の2期に区分した。下城氏はこの土器区分に基づき、菟田遺跡の陶工集団は、土器の上から8世紀末にはこの地域の窯業生産に参入したと考えられ、9世紀前葉では台地上を粘土採掘場として利用し、9世紀中葉において、居住地・採掘場・共有の作業場・捨て場が設定され、本格的な窯業生産を開始したものと推定されている。しかし、9世紀後葉には、集落規模の縮小、構成単位の解体、分村化の始まり、9世紀末をもって左回転の土器や、須恵器胎土の變等の特徴を持った集団は、消滅・移動あるいは在地集団に吸収されて行ったと推定されている。

(4) 古代群馬における粘土採掘坑関連遺跡の編年

以上、群馬県内において調査された古代の粘土採掘坑と主要遺物を検証してきた。本県の粘土採掘坑に関する研究は、1979年の菟田東遺跡の調査からであり、25年余りしか経過していない。その経過の中で、北関東自動車道建設に伴い大規模な粘土採掘坑関連の遺跡が調査された。特に、波志江中宿遺跡では塹坑タイプの粘土採掘坑が発見されるとともに、時期の限定された多数の土器と木製品が検出された。

一方、粘土採掘坑からは遺物が出土しない、ないしは出土したとしても時期的にかなり重複した時期の資料が混じるといふ解釈がおこなわれている。しかし、粘土採掘坑は遺構の性格上住居跡と同様には判断できないが、出土土器に一定の時間幅を持たせるならば、粘土採掘坑の形成時期も限定できることが判明した。また、居住地ないしは水田等の周辺から検出され用途が不明であった木製品の一部が、粘土採掘に係わる道具であることも解

明された。

1	波志江中宿遺跡	
4	4世紀代	古墳時代初頭
2	天引向原遺跡	
5	5世紀から6世紀	古墳時代中期から後期
3	光仙房遺跡	
6	6世紀	古墳時代後期
4	今井道上・道下遺跡	
8	8世紀から9世紀	奈良・平安時代
5	菟田遺跡・菟田東遺跡	
9	9世紀代	平安時代

6. おわりに

及川氏は多摩ニュータウン№248遺跡の報告で、全国の縄紋時代関連の粘土採掘坑を集成している。また、南多摩窯跡群関連の粘土採掘坑では、多くの調査成果が報告されている。現時点において、群馬県内では縄紋時代及び弥生時代の粘土採掘坑と土器焼成土坑は検出されていない。故に、縄紋時代と弥生時代の粘土採掘坑については、今後の検討課題となる。

古墳時代初頭から平安時代に至る6遺跡の粘土採掘坑を検討してきた。この6遺跡全体が、土器製作に関する粘土を採掘した遺跡として認定できないが、例えば本県の北部山間地域に位置する菟田遺跡と菟田東遺跡は、須恵器窯跡群に隣接した粘土採掘坑と須恵器工人集落であることが解明されている。一方、波志江中宿遺跡は平野部の沼沢地に近接した粘土採掘坑であるとともに、波志江西宿遺跡が居住地と推定されている。本遺跡では粘土採掘に関連する多くの木製品が検出された。粘土層も概略ローム層を含めるならば、4層確認できた。土器胎土分析結果からも、土器作りに関する粘土の採掘が指摘され、藤根氏は「土器粘土採掘坑」と仮称している。しかし、実際のS字状口縁部台付壺の製作に関し、どの粘土層の粘土が使用されたか、またブレンドされたかも今後の検討課題である。

粘土採掘坑関連遺跡では、通常の住居跡から出土する土器と共通する資料も出土するが、それとは異なる専用の道具も出土していることが判明した。また、土器や木製品にしても、集落内で使用していた道具の一部を再生加工し使用している。直接関連する居住地を解明することは、難しい問題も内包しているが、遺跡間の関連を追究するうえで有効な手段であることも明確である。

一方、実際の粘土採掘坑の発掘調査では、調査途中で土坑群が粘土採掘坑と認定されるケースが多い。特に、独立した塹坑タイプではなく、連続して掘削された場合には、各採掘坑のプラン確認が容易ではなく、調査進捗上でも問題となる場合が多い。通常の粘土採掘坑の調査

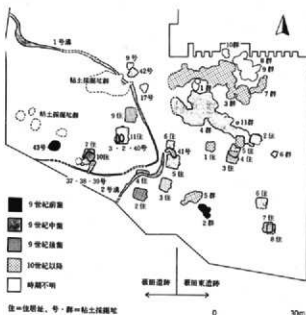


図25 菟田・菟田東遺跡平安時代集落の変遷

でも、地表面から深くなり底面でオーバーハングしているケースが多く。波志江中宿遺跡のように沼湿地に隣接している場合には、水処理と崩落の危険に対応しなければならなくなる。今後、粘土採掘坑に関する遺跡の検出例も増加することと予測されるが、調査方法もさらに検討を要する。

本稿を草するにつき、神宮御料土器調査所の土器と文献については神保佑史氏、斎宮及び文献関連では高島英之氏より、舞台遺跡・光仙房遺跡の須惠器窯は錦貫邦男氏、また、群馬県で最初に粘土採掘坑が検出された藪田東遺跡の土坑を粘土採掘坑として認定した経過については相康建志氏、藪田遺跡の須惠器編年については関 晴彦氏、波志江中宿遺跡と波志江西宿遺跡の土器は大本紳一郎・田中一郎氏、波志江中宿遺跡の木製品については女屋和志雄氏、日置荘遺跡の当て具については木津博明氏よりご教授を賜った。さらに、多摩丘陵の土器採掘坑については、「多摩ニュータウン遺跡-No248遺跡-1」の及川良彦氏の論考を参照させて頂いた。記して厚く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 藤岡幸二 1962 『京都陶磁器説・京都陶磁器図説』(藤岡幸二蔵本・編著) 財団法人京都陶磁器協会
大西政太郎 1978 『陶芸の伝統技法』理工学社
斎宮 進・田中純男・比田井克己 1982 『多摩ニュータウン遺跡-昭和36年度-』(第1分冊) 多摩ニュータウンNo.146遺跡- 東京都埋蔵文化財調査報告第2集 朝野馬泉埋蔵文化財センター
原 啓信 1982 『藪田東遺跡』国道291号街路改良工事地域埋蔵文化財調査報告書 朝野馬泉埋蔵文化財調査所
下城 正・関 晴彦 1985 『藪田遺跡-利根郡月夜野町所在須惠器生産工場集落の調査-』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第4集 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団
川岡武蔵・佐伯有清 1987 『日本書紀 上』中央公論社
瀬戸市歴史民俗資料館 1989 『瀬戸市歴史民俗資料館展示解説』
白水清雄 1990 『粘土のはなし』技報堂出版
坂路秀一・服部敬史 1992 『南多摩窯跡群-東京造形大学宇津貫校地内における古代窯業の発掘調査報告書-』東京造形大学宇津貫校地内埋蔵文化財発掘調査所
矢野進一 1992 『伊勢神宮の衣食住』東書選書130 東京書籍株式会社
渡辺 一 1994 『須惠器作りのムラ-工人集落の歴史的性格-』『古代東国の民衆と社会』古代王権と交差2 株式会社名著出版
大本紳一郎・津島寿章他 1995 『今井道上-道下遺跡-』一級国道17号(上武道路) 改築・改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団調査報告書第187集
入江正則・江浦 寿 1995 『日置荘遺跡』近畿自動車道松原さきみ線及び都市計画道路松原大津線建設に伴う調査報告書 御大塚文化財センター
竹田憲治 1996 『北野遺跡(第5次)発掘調査概報』三重県埋蔵文化財調査報告133-5 三重県埋蔵文化財センター
木村 聡・藤巻幸男 1997 『白倉下家・天引向原遺跡V-1甘菜パークエリア地内遺跡の調査-』古墳時代本文編 関越自動車道(上総線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第46集 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団調査報告書第221集
宇佐美義春 1998 『多摩ニュータウン遺跡-先行調査報告 9-』東京都埋蔵文化財センター調査報告第52集(多摩ニュータウンNo.949遺跡)
御東京部教育文化財団東京都埋蔵文化財センター
及川良彦 1999 『多摩ニュータウン遺跡-No.918遺跡-1』東京都埋蔵文化財センター調査報告第61集 御東京部教育文化財団東京都埋蔵文化財センター
斎宮 進・松崎元樹・原川雄二・山本孝司・及川良彦他 2000 『多摩ニュータウン遺跡-No.247・248遺跡-1』東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集 御東京部教育文化財団東京都埋蔵文化財センター
及川良彦 2000 『多摩丘陵内の粘土採掘坑の類型』『多摩ニュータウン遺跡No.247・248遺跡-1』収録
中嶋友文・櫻井有一他 2000 『野木遺跡III(第1分冊)』青森県中核工業団地整備事業に伴う遺跡地埋蔵文化財調査報告書第281集 青森県埋蔵文化財センター
坂路秀一・上野恵司・宮井 香・土屋美恵子 2000 『南多摩窯跡群-大法寺墓地造成にともなう古代工房跡の発掘調査報告-』大法寺義遺跡調査団
土器作り研究会 2000 『須惠器窯焼成実態報告-光仙房遺跡須惠器窯を利用して-』『研究紀要』18号 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団
錦貫邦男 2000 『光仙房遺跡(須惠器窯跡編)』北関東自動車道(高崎-伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 朝野馬泉埋蔵文化財調査報告書第308集
錦貫邦男 2001 『舞台遺跡(1)(奈良平安時代編)』北関東自動車道(高崎-伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団調査報告書第282集
錦貫邦男 2001 『須惠器工人集落施設『舞台遺跡(1)(奈良平安時代編)』収録
熊谷 健 2001 『波志江中宿遺跡』北関東自動車道(高崎-伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団調査報告書第283集
女屋和志雄 2001 『波志江中宿遺跡出土木製品について』『波志江中宿遺跡』収録
藤根 久・今村美智子 2001 『土器の粘土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴』『波志江中宿遺跡』収録
金井 武 2002 『波志江(中)敷家遺跡』北関東自動車道(高崎-伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団調査報告書第291集
杉田茂俊・板井美枝 2002 『波志江西宿遺跡(1)(古墳時代・中近世編)伊勢山遺跡』北関東自動車道(高崎-伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団調査報告書第307集
杉田茂俊 2002 『波志江西宿遺跡出土のS字状口縁付土器について』『波志江西宿遺跡(1)(古墳時代・中近世編)伊勢山遺跡』収録
南里空也 2003 『伊勢の神宮』株式会社世界文化社
友廣哲也 2003 『光仙房遺跡(集落編)』北関東自動車道(高崎-伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 朝野馬泉埋蔵文化財調査事業団報告書第305集

集落からみた古墳時代毛野の社会背景

友 廣 哲 也

- | | |
|-----------|--------------------|
| 1. はじめに | 6. 周溝墓からみた土器様相 |
| 2. 研究略史 | 7. 土器からみた井野川流域と荒砥地 |
| 3. 本稿での検討 | 8. 墓からみた井野川流域と荒砥地域 |
| 4. 荒砥地域 | 9. まとめ |
| 5. 要 | 10. おわりに |

— 論文要旨 —

群馬県内では以前より古墳時代前期の土器様式はS字状口縁台付壺を壺の主体とする東海様式であるとされ、多くの東海地方からの人々が入植してきたと考えられてきた。しかし、県内の遺跡出土土器の構成を再検討すると、様々な複数外来地域からの土器が認められる。つまり東海地方から人が来たのではなく、当時の群馬県は弥生時代から古墳時代にかけて、東海地方、畿内地方、北陸地方等様々な地域の人々が行き交い、交流を持っていたことが分かってきた。その交流にあたっては遠隔地や周辺地域間をつなぐ交流網が存在していた可能性が高い。その交流網を駆使し群馬県の人々は様々な文化・物・情報を受容したと考えられる。さらに弥生時代の後期には様々な物・情報も伝播しており、外来土器や文物、情報の交流は古墳時代初頭期だけの現象ではない。つまり群馬県の人々は弥生時代から古墳時代にかけて東海地方だけではなく汎列島内広い範囲で様々な地域の人々と交流を継続・維持している。

一方で土器の広い交流と並行し、周溝墓は群馬県内で弥生時代中期から確認されている。古墳時代になると方形区画の強い墓制へと展開した。古墳時代前期の方形周溝墓からも多数の外来土器が出土する。県内の方形周溝墓から出土する土器組成の検討から外来土器を取り上げ被葬者の出自を群馬県ではなく東海地方に想定する論もある。本稿では集落と墓との有機的な接点を想定し、集落生活者と墓群の被葬者の関連を想定し、墓の被葬者を隣接する集落に住んだ人であるという前提で検討した。目的は生活の場と死後の埋葬地との総合的判断のためである。結果は墓出土土器と集落の出土土器を比較検討した結果、被葬者の生前の生活の場を隣接する集落に求めることができた。考古学では墓に供献される土器は被葬者の出自をより強く示すとされてきた。本稿では墓の被葬者の特定も確認できたと考えられる。群馬県の古墳時代社会は共通する墓制を含め広い交流の中で様々な文化や物、情報を受容して成立した社会であったことが理解できた。

キーワード

対象時代 弥生～古墳時代

対象地域 群馬県

研究対象 交流・外来土器

1. はじめに

毛野の人々は3世紀後半になると今まで作り、使用していた樽式土器の製作使用をやめ土師器に変換する。この選択は汎列島的に古墳時代の成立という大変革の結果でもある。弥生土器が土師器へ変質したことは当時の毛野の人々の選択に他ならない。ただし、毛野の人々が樽式土器の製作・使用をやめ、土師器を選択したことは弥生時代中期から後期にかけて栗林式土器が樽式土器への変化や、古墳時代後期に壜が長胴化する現象とは異なる理由、要因があったと考えられる。栗林式土器から樽式土器の変化は文様要素・構成・施工工具等に前代からの系譜・伝統を持ち、文様変遷から段階的な移行を推察することを可能にしている。さらに毛野・信濃に分布した弥生時代中期栗林式土器は後期に至り、毛野では樽式土器、信濃では箱清水式土器の二つの形式を創出することになる。従ってそこには信濃と毛野の人々の土器選択の嗜好に地域性があったことが指摘できる。

古墳時代後期の壜の長胴化現象は壜様という機能性があり、嗜好によるだけではない。

弥生時代の土器型式・文様の変化にに表れる地域性はやがて古墳時代になると汎列島的に無文土器である土師器に統一される。この変化の背景には広く一つの政治社会に統一されていく社会的構造変質・背景を感じさせる。そして今まで地域性を維持した弥生土器が土師器に統一される。さて弥生時代から古墳時代にかけて違い地域間で土器が交流、移動した事実がある。土器が移動した背景には人間の移動や文化・情報の交流の存在を認めることができる。つまり弥生時代から古墳時代への文化変質は広範な土器の交流を経て同じ土師器を作り使用するということである。したがって土器が交流した事実の裏には活発な人的な交流がある。そこには弥生土器が持つという地域性はなくなり、古墳時代は汎列島的に同じ土師器の使用へ統一されたと考えることができる。

群馬県では1952年太田市内石田川河川改修工事に伴いS字状口縁台付壜を含む土師器が出土した(石田川遺跡報告書刊行1968)。発見当初より土師器は外来の人が持ってきたもので、古墳時代は従来の在地の人間から発展した文化ではないとされ今日に至っている(発見時はS字状口縁台付壜が東海地域に出自を持つことはまだ分かっていなかった)。そして、弥生時代樽式土器を持つ人々は山麓に住み、土師器を持つ人々は平野部に入植し並立して存在したとされた。やがてS字状口縁台付壜が東海地方の土器であることがわかり群馬県南部の平野部に東海からの入植民がきたとされた。近年は東海からの入植民は最初に高崎市井野川流域に入植し、井野川流域は一気に東海の土器様式に変換した。その後東海様式は周辺に波及した。これが現在群馬県内にある入植民説である(入植、入植地という用語は非常に政治的な背景を

持つ用語である、事実入植民説には政治的な背景をもつと考察しているものもある。もし入植民説が成立するとすれば背後にある政治権力(国家?)の存在に言及する必要がある)。

しかし、弥生時代終末から古墳時代前期の毛野では東海の土器や畿内、北陸等様々な地域のいわゆる外来土器が出土している。外来土器の出土は同時に並行して長野県や南関東でも広く確認されている。じつは石田川遺跡にも東海系をはじめ複数他地域の土器が混在している。高崎市井野川流域でも同様に東海地方を含めた複数他地域からの外来土器が混在して出土し、毛野の交流対象は対東海の関係だけではない事がわかる。(なお、本稿では現在の群馬県地域を毛野と呼ぶ)。

2. 研究略史

外来土器の研究は多くの先学の業績がある。石田川遺跡の調査を担当した松島栄治氏は当初より外来の入植集団を想定した石田川式土器様式を提唱された(松島1968)。梅澤重昭氏は石田川式土器Ⅰ・Ⅱ分類案を提示した(梅澤1978)。田口一郎氏はS字状口縁台付壜の編年組列案を提示し、群馬県内での指標となっている(田口1971)。若狭徹氏は外来土器の標度度注目し時間的、空間的な分類案を示した。(若狭1990・2000)深澤敦仁氏は樽様式の崩壊とS字状口縁台付壜出現の問題から編年案を示した(深澤1998)。大木紳一郎氏は弥生土器の編年案を提示した一連の研究を母胎にS字状口縁台付壜の技法的観点から専業生産品との見解を示した(大木2001)。

小泉範明氏、井上昌美氏、飯島義雄氏は石田川遺跡出土土器の再検証をおこない新たな分析検討をおこなっている(小泉・井上・飯島1998・1999・2000)。

小島敦子氏は土器の変質とともに墓域の検討から集落論を展開した(小島1990)。周溝墓の展開から古墳社会の成立に迫った論考は梅澤氏も上げられる(梅澤1994)。これら一連の研究は弥生時代から古墳時代への大きな社会変質を土器・墓制から解明しようというものである。一方入植民説は松島氏が提唱されて以来梅澤氏は新たな開拓集団、田口氏は東海に母集団を持つ集団移動民、橋本博文氏と梅澤氏は政治的背景を持つ入植民集団の存在を提示した(梅澤・橋本1981)。若狭徹氏は最初に井野川流域に東海地方から入植し、その後在地の集団の再編がおこなわれ、さらに周辺に拡散定着するとの考えを示した(若狭1990)。大木紳一郎氏はS字状口縁台付壜が専業集団の専業生産品であるとの見解から「換言すれば、土器づくりの技術体系そのものが移入されたのであり、そこには在地弥生土器の技術伝統は産物のみみられない。このことから当地でのS字状口縁台付壜の誕生には在地の集団は何ら関わりを持たなかった」といっても過言では



- 1 東京B遺跡 2 中山A遺跡 3 村主遺跡 4 堀東遺跡 5 頭無遺跡 6 荒砥荒口遺跡
 7 荒砥北原遺跡 8・9 荒砥三木堂遺跡 10 荒砥南原遺跡 11 下増田越瀬遺跡 12 荒砥島原遺跡
 13 波志江中野面遺跡 14 荒砥二之塚遺跡 15 荒砥上ノ坊遺跡

図1 荒砥地域遺跡分布図 (1/50,000「前橋」)

ないだろう』としている(大木 2001)。

一方高橋浩二氏は文化の交流の結果、一時的な人の移動はあっても集団的な入植や移住とは言い切れないとの立場を示し、同じ立場から北陸の古墳出現期の社会構造を解明した(高橋 1997・1999)。筆者も高橋氏と同様な立場にあり、内容は前稿で示した(友廣 2003)。

3. 本稿での検討

筆者は前稿(友廣 2003)で新保遺跡を中心とした井野川流域集落遺跡出土土器を検討した。略述すると群馬県内で農耕の開始が認められる遺跡は弥生時代中期に比定される。そして遺跡群が持つ共通の特徴は遠隔地の土器が出土することにある。出土する土器は南東北地方の南御山2式、北関東地方の御新田式、埼玉の池上式等が初期農耕遺跡から出土している。筆者はこの現象を弥生時代中期に農耕技術や情報の交流があった結果と考えた。高崎市内平野部の微高地上に所在する新保遺跡では農具、卜骨用の骨、装身具、鉄剣の柄頭等の製造・貯蔵・供給の拠点集落である事から農作業・食料生産にきょうきょうとした社会とは異なることが理解でき、さらに渡川市有馬遺跡では中国産の鉄の存在を認めた。有馬遺跡出土鉄剣は登呂遺跡と強い共通性をもつ柄頭を装着しており当時はすでに広い文物の交流網だけでない生活様式を含む情報網を持っていたことを認めた。当時の人々が

樽式土器から土師器導入を選択し、製作するにあたりその交流網は最大限利用されたと考えた。土師器の導入も東海地方からの様式的な導入では無く、各器種を東海・北陸・畿内等の複数地域から取り込んでいた。つまり井野川流域は弥生時代中期から継続した社会が存在し、その社会は遠隔地、周辺地域との流通網や交流網を整備した社会であった。そして土師器の導入にあたっては遠隔地間の交流網が稼働し新しい生活体系を形成したと判断した。毛野ではS字状口縁台付甕は甕の主要機種の一つではあるがS字状口縁台付甕が主体の東海様式の土器組成にはならないことも理解できた。

さて前稿では社会の変質に伴う土器・物の交流を土器の検出実体を概観・検討した。ここではさらに前稿の結果が県内の他地域と同様な様相を示すのか、あるいは異なった結果を示すのかを検証したい。本稿では群馬県前橋市を中心に県中央部の集落と周溝墓出土土器を井野川流域と比較検討したい。また前稿同様外来土器・外来系土器との呼称は便宜的に非在土器全てを指し、様式とは複数器種のセットを持って様式としたい(友廣 2003)。

4. 荒砥地域

本稿で使用する荒砥地域とは現在の前橋市東部・大胡町・船川村・赤堀町・伊勢崎市北西部を含む大間々扇状地の南西の一部を指す、したがって特に前橋市荒砥地域



図2 荒砥荒口・東原B遺跡分布図(色の濃い部分が台地上・番号は図1と同じ)(1/25,000「大胡」)

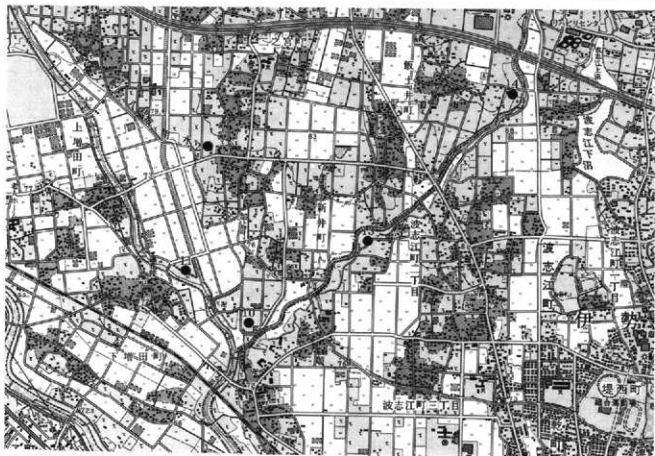


図3 荒砥平原・波志江中野面遺跡分布図（色の濃い部分が台地上・番号は図1と同じ）（1/25,000「大図」）

を指してはいない（便宜的にこの名称を用いる）。

現在この地域は弥生時代後期の遺構は少なく、集落の規模も小規模であり、集落の増加は弥生時代終末から古墳時代前期を待たなくてはならない。しかし荒砥地域には弥生時代中期の遺構・遺跡を確認することができる。弥生時代中期の遺跡は前橋市内荒砥島原遺跡・荒砥前原遺跡・荒口前原遺跡・今井白山遺跡、粕川村の西迎遺跡、伊勢崎市西太田遺跡があり、井野川流域の新保地域と同時期の遺跡である。荒砥地域の遺跡は低地に面した台地の上に存在している。以前より遺跡群はすべてが小集落であるとされていたが、筆者の検討では遺跡は小規模ではないことが分かってきた。その理由は荒砥地域の発掘調査は昭和50年代から60年代まで圃場整備事業として広大な面積の調査が継続してきたが、各々の遺跡の調査面積が小さく、その結果遺跡の調査件数が多くなった。そしてその一つ一つに遺跡名が冠されてきた。この結果遺跡数は非常に多く、かつ小規模な遺跡が多いとの印象が定着した。そこで弥生時代中期の南東北系の土器と栗林式土器が共存して出土した住居跡を検出した荒砥荒口遺跡周辺を見ると東500mに弥生時代から古墳時代の住居跡が検出された鶴谷遺跡群、北200mには古墳時代前期住居跡約20軒が検出された荒砥諏訪西遺跡、南200mに住居

跡と円形周溝墓を検出した荒砥北三木堂遺跡、南西200mには古墳時代前期の周溝墓を検出した荒砥北原遺跡等が接している。

また荒砥川と神沢川が合流する地点には弥生時代中期南東北系の土器を出土する荒砥前原遺跡、西北700mに弥生時代後期方形周溝墓を検出した下増田越渡遺跡、北1.2kmには古墳時代前期荒砥島原遺跡、西に隣接して荒砥宮原遺跡、北東1.2kmに古墳時代前期住居跡、周溝墓を検出した伊勢崎市波志江中野面遺跡が存在している。

このような遺跡群に共通する特徴は弥生時代中期から古墳時代前期に至る遺跡群が同じ低地を望む台地上に接して存在していることである。このように遺跡群は今まで別の遺跡と考えられていたが筆者は同じ低湿地・水田地を望む集落として差し支えないと考えている。その理由は同じ時代に同じ低湿地を望む集落が数百メートル先に住む人々と没交渉していたとは考えられないからである。

つまりこのような遺跡群は別々の存在ではなく実は荒砥地域の小河川流域に所在する多くの低地部を望み群として遺跡が存在している。つまり弥生時代中期に始まった農耕可耕地への進出を継続していることが看取でき、我々は集落の一部を個々に発掘した結果別々の遺跡（集

落)と考えてきたが、実は同じ低地をのぞむ台地上の同一集落と考えることができる。さらに住居跡群の成立時期は弥生時代中期から始まり古墳時代へと継続していく。荒砥荒口遺跡北東1.2km、低地を南東にのぞむ東原B遺跡では古墳時代前期の住居跡が約20軒、前方後方型周溝墓2基を含む周溝墓16基と2基の墓棺墓が確認され、隣接する中山A遺跡では前方後方型周溝墓と方形周溝墓の2基、南に接する村主遺跡では古墳時代前期住居跡約20軒、南東500mに古墳時代前期住居跡約10軒の北田下遺跡が接している。つまりこのように低地を囲むように住居跡群と周溝墓群が接して立地することは荒口遺跡周辺と東原B遺跡周辺は住居跡群と周溝墓、居住域と墓群が低湿地を取り込むような形で立地する理想的な農耕集落である。荒砥地域にはこのような低地を望む小高い台地上に集落が多数存在している。集落立地の機能性は低湿地を望む農耕にあったと理解でき、農耕を志向していた集落であったことと理解できる。

5. 壘

では当時の荒砥地域にあった集落内の出土土器の構成を検討する。そこでここでも前稿と同一の手法を用い、荒砥地域を検討したい。

検証方法は弥生時代終末から古墳時代前期にかけ、当時の日常生活の煮炊きに使用される壘をもつ住居跡の壘を分類し数量及び比率を調べ実態把握することから始める。該当時期の毛野には4器種の壘が存在する。4器種とはS字状口縁台付壘・単口縁台付壘・土師器平底壘・樽式土器壘であり、4器種の壘がどのような出土傾向を持ち、土器種との構成を検討し土器様式の実態を把握しようとするものである。また土師器平底壘は弥生時代以来の伝統壘である平底を基調とし、樽式土器壘と同様に地に出づを想定している(古墳時代前期を含む時代区分の中で樽式土器壘という用語を用いる。これは土器の型式名として使用するものである。樽式土器は古墳時代になっても消失しない。つまり古墳時代に存在・継続する土器の型式名として使用する)。

荒砥地域16遺跡全体の壘出土比率はS字状口縁台付壘272個体22.9%、単口縁台付壘161個体13.5%、土師器平底壘646個体54.3%、樽式土器壘111個体9.3%である。延べ軒数はS字状口縁台付壘132軒24.2%、単口縁台付壘90軒16.5%、土師器平底壘248軒45.5%、樽式土器壘75軒13.8%である(表1～4・図4～7)。表5～8、図8～11は井野川流域の資料である。両資料を比較すると、井野川流域のS字状口縁台付壘と荒砥地域の土師器平底壘が各々逆の立場で数値に表れている。単口縁台付壘と樽式土器壘の比率は荒砥地域では井野川流域より高い数値を示し、井野川流域と比較して単口縁台付壘で荒砥が4.2%、樽式土器壘は荒砥が4.1%勝っている。次に単器

種壘の住居跡軒数はS字状口縁台付壘は荒砥が井野川流域より5軒多く比率では5.2%低く、土師器平底壘は14.4%荒砥が高い比率を示している。壘単器種を出土する住居跡を見ると出土比率で54.3%の土師器平底壘は21.1%と半分以下の比率になる。また単口縁台付壘・樽式土器壘も単器種になると低い数値を示す。そして荒砥地域と井野川流域の共通点は単器種壘を持たない複数器種壘を持つ住居跡が多いということにある。つまり荒砥地域も井野川流域の集落の人々は決まった器種の壘はないことが取捨できる。それでは単器種壘を持つ住居跡はどうか、図5、表2にあるS字状口縁台付壘単器種住居跡は芳賀団地遺跡でS字状口縁台付壘が4軒確認されているが、土師器平底壘も同様に4軒が検出されている。下地遺跡では15軒の土師器平底壘単器種壘の住居跡が検出されたが、同一遺跡内でS字状口縁台付壘単器種壘住居跡2軒、単口縁台付壘単器種壘住居跡2軒も確認され、集落内での統一は認められない。波志江中野面遺跡ではS字状口縁台付壘単器種壘を持つ住居跡が7軒と荒砥地域と井野川流域全域を合わせて一番高い比率を示す。しかし、中野面遺跡の土師器平底壘の延べ軒数は17軒を数え、S字状口縁台付壘は出土量比、延べ軒数とも卓越しているが、大多数の住居跡ではS字状口縁台付壘だけの構成を選択してはいない。つまり荒砥地域では東海のS字状口縁台付壘を主体とした東海の土器様式はなく、しかし最大出土量の土師器平底壘を中心とした土器構成でもなく、様々な地域の土器が在地の土器の中に混在している。

つまり壘は複数器種がどちらも75.4%(井野川流域)、64.6%(荒砥地域)という数値が認められる。

では次に外来土器の出土傾向はどうか、荒砥上ノ坊遺跡は北陸の土器が多数出土し、報告書でも北陸との関連を指摘し注目されていた遺跡である。しかし表4、図7で分かるように北陸系土器が量的に多量に出土しても実は東海系の遺物を出土する住居跡と延べ軒数では同数の11軒なのである。そして上ノ坊遺跡の最大の延べ軒数は土師器平底壘23軒である。荒砥上ノ坊遺跡の土師器平底壘と樽式土器壘を出土する延べ軒数の合計は36軒と最大量を示す。つまり荒砥地域では北陸系の土器様式はなく、また東海のS字状口縁台付壘を主体とした東海の土器様式でもない。しかし最大出土量の土師器平底壘を単器種選択する事実もなく、様々な地域の土器が在地の土器の中に混在している。

6. 周溝墓から見た土器様相

ここまで住居跡出土の土器を検討し、集落内での土器様相を見たが、次に井野川流域と荒砥地域の墓出土土器を比較したい。まず井野川流域下佐野遺跡を概観する。下佐野遺跡からは26基の周溝墓が検出されている(表

表1

遺跡名	S字壙	単台壙	土壙	樽罍	鏡	鉄剣	鏡	鏡	S字壙	単台壙	土壙	樽罍
内瀬遺跡	23	21	61	46	151	276	50	40.1	15.2	13.9	40.3	30.4
京坂上ノ坊遺跡	5	9	69	21	104	269	28	38.6	4.8	8.6	66.3	20.1
京坂西原遺跡	1	8	14		23	61	7	37.7	4.3	34.7	60.8	
京坂高野遺跡	6	3	4		13	31	7	48.3	53.3	20	26.6	
京坂二之東遺跡	26	7	6		39	72	12	54.1	66.6	17.9	15.3	
飯土井上組遺跡	7	2	7		16	51	2	31.3	43.7	12.5	43.7	
芳賀窪地遺跡	35	8	38		81	194	37	41.7	43.2	9.8	46.9	
横俣遺跡	14	19	73	2	108	298	32	36.2	12.9	17.5	67.5	1.8
柳久保遺跡	19	3	28		50	102	10	49	38	6	56	
村主・谷津遺跡	0	5	29	20	54	161	20	33.3	0	9.2	53.7	37
鶴谷遺跡群日	1			1	3	25	2	17	33.3	0	33.3	33.3
北田下遺跡	0	1	22	7	30	97	11	30.0	0	3.3	72.3	23.3
下塚1・日遺跡	26	28	112	3	169	491	41	42.1	15.3	16.5	66.2	1.7
京坂西原西遺跡1	54	42	123	0	219	511	38	42.8	24.7	19.2	56.2	0
京坂西原西遺跡2	2	3	31	10	46	91	19	50.5	4.3	6.3	67.4	21.7
東京日遺跡	0	0	7	2	10	19						
渡志江中野南遺跡	51	2	28	1	82	204	25	40.1	62.1	2.4	34.1	1.2
計16遺跡	272	161	646	111	1190	2944	331	40.4	22.9	13.5	54.3	9.3

表2

遺跡名	S字壙	単台壙	土壙	樽罍	その他	合計
内瀬遺跡	1	0	8	7	27	60
京坂上ノ坊遺跡	0	0	1	1	17	28
京坂西原遺跡	1	1	1	0	2	7
京坂高野遺跡	1	0	0	0	3	7
京坂二之東遺跡	3	0	0	0	7	12
飯土井上組遺跡	0	0	0	0	2	2
芳賀窪地遺跡	4	0	4	0	16	37
横俣遺跡	1	0	3	0	22	32
柳久保遺跡	0	0	1	0	7	10
村主・谷津遺跡	0	0	3	1	14	20
鶴谷遺跡群日	0	0	0	0	1	7
北田下遺跡	0	1	6	1	3	11
下塚遺跡	2	2	15	1	18	41
京坂西原西遺跡1	3	0	9	0	16	28
東京日遺跡	0	0	7	2	10	19
渡志江中野南遺跡	7	0	1	6	16	25
計16遺跡	23	4	59	13	181	331

表3

遺跡名	S字壙	単台壙	土壙	樽罍	合計
内瀬遺跡	14	12	31	29	86
京坂上ノ坊遺跡	5	6	23	13	47
京坂西原遺跡	1	3	5	9	19
京坂高野遺跡	5	3	3	11	21
京坂二之東遺跡	11	4	6	23	54
飯土井上組遺跡	2	1	1	4	8
芳賀窪地遺跡	22	7	24	53	106
横俣遺跡	9	14	29	2	54
柳久保遺跡	8	3	8	19	38
村主・谷津遺跡	0	5	15	13	33
鶴谷遺跡群日	0	0	0	0	1
北田下遺跡	0	1	10	1	13
下塚1・日遺跡	16	15	33	3	67
京坂西原西遺跡1	17	11	25	0	53
京坂西原西遺跡2	2	3	17	9	32
東京日遺跡	19	2	17	1	39
渡志江中野南遺跡	132	90	248	75	546

表4

遺跡名	東海	北陸	畿内	樽	土壙	鏡	計
内瀬遺跡	19	4	5	29	31	2	90
京坂上ノ坊遺跡	11	11	4	13	23	0	62
京坂西原遺跡	2	0	0	0	5	1	8
京坂高野遺跡	7	0	2	0	3	0	12
京坂二之東遺跡	11	0	0	0	6	0	17
飯土井上組遺跡	2	0	2	0	1	0	5
芳賀窪地遺跡	26	1	6	0	24	0	57
横俣遺跡	14	5	4	2	29	0	54
柳久保遺跡	8	0	6	0	8	0	22
村主・谷津遺跡	3	0	5	13	15	1	37
鶴谷遺跡群日	2	0	1	1	1	0	5
北田下遺跡	2	0	1	6	10	0	19
下塚1・日遺跡	16	1	1	19	33	1	71
京坂西原西遺跡1	19	3	12	3	25	0	62
京坂西原西遺跡2	3	1	9	17	0	0	30
東京日遺跡	19	0	2	1	17	0	39
渡志江中野南遺跡	164	26	51	96	248	5	576

9)。

表を見て分かるように出土が一番多いのは56個体の壺、続いて33個体のS字状口縁台付甕である。S字状口縁台付甕が出土する墓は総数26基中11基と全体の42%で

図4

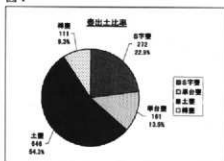


図5

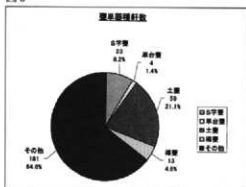


図6

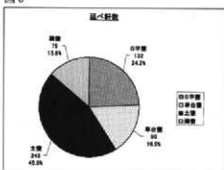
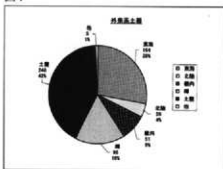


図7



ある。つまり井野川流域最大のS字状口縁台付甕を出土する集落の墓の半分以上からは東海様式の壺S字状口縁台付甕は出土しない。また畿内系の小型壇・二重口縁壺が出土する墓は6基、北陸系の土壙を出土する墓が3基、

表5

遺跡名	S字罫	単行罫	土罫	樽罫	段段罫	総数	罫材数	罫率	S率	単台率	土率	樽率
熊野堂・雨夜遺跡	6	12	13	8	39	70	10	55.7	15.3	30.7	33.3	20.5
新保遺跡	43	16	44	12	115	229	24	50.2	37.3	13.9	38.2	10.4
新保田中村前遺跡	24	1	19	15	59	102	14	57.8	40.6	1.6	18.6	25.4
八幡遺跡	44	9	28	12	93	178	19	52.2	47.3	9.6	30.1	12.9
高崎情報地遺跡	35	4	16	2	57	126	25	61.4	4	7	28	3.5
保良田遺跡VII	11	8	10	7	36	72	9	50	30.5	22.2	27.7	19.4
倉加野方福寺遺跡	19	1	4		24	48	5	50	79.1	4.1	16.6	
下青田・瀧川遺跡	11	11	25		47	99	3	47.4	23.4	23.4	53.1	
下佐野遺跡	129	4	43		176	333	37	52.8	73.2	2.2	24.4	
舟橋遺跡	11		5		16	33	6	48.4	68.7	0	31.2	
元総社西川遺跡	14	3	2	1	20	32	4	62.5	70	15	10	5
藤島川端遺跡	95	6	46	9	156	282	43	55.3	60.8	3.8	29.5	5.8
12遺跡合計	442	75	253	66	830	1694	199	51.9	59.9	10.3	30.7	8.1

図8

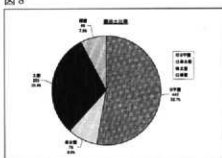


表6

遺跡名	S字罫	単行罫	土罫	樽罫	その他	合計
熊野堂・雨夜遺跡	0	0	0	0	7	10
新保遺跡	0	0	2	1	16	24
新保田中村前遺跡	1	0	0	0	10	14
八幡遺跡	3	0	0	1	10	19
高崎情報地遺跡	2	1	1	0	10	25
保良田遺跡VII	0	0	0	1	8	9
倉加野方福寺遺跡	0	0	0	0	2	5
下青田・瀧川遺跡	0	0	0	0	3	3
下佐野遺跡	5	0	1	0	20	37
舟橋遺跡	1	0	1	0	3	6
元総社西川遺跡	1	0	0	1	2	4
藤島川端遺跡	5	1	4	0	10	15
12遺跡合計	18	2	9	4	101	171

図9

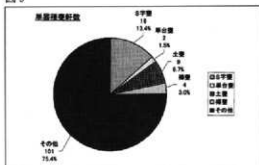


表7

遺跡名	S字罫	単行罫	土罫	樽罫	合計
熊野堂・雨夜遺跡	3	6	7	4	20
新保遺跡	13	6	18	6	43
新保田中村前遺跡	11	1	11	6	29
八幡遺跡	13	8	12	4	37
高崎情報地遺跡	20	2	11	2	35
保良田遺跡VII	4	5	7	5	21
倉加野方福寺遺跡	3	1	3	1	7
下青田・瀧川遺跡	2	3	3	2	8
下佐野遺跡	35	4	19	1	58
舟橋遺跡	5	0	4	0	9
元総社西川遺跡	3	1	2	1	7
藤島川端遺跡	34	6	30	6	43
12遺跡合計	146	43	127	34	317

図10

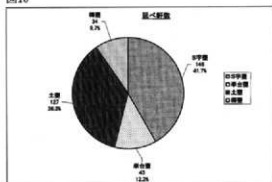
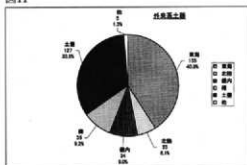


表8

遺跡名	東南	北陸	畿内	樽	土罫	他	計
熊野堂・雨夜遺跡	3	0	1	4	7	1	17
新保遺跡	16	1	5	6	18	0	46
新保田中村前遺跡	12	1	12	6	11	0	43
八幡遺跡	15	5	1	4	12	0	37
高崎情報地遺跡	20	4	0	2	11	2	43
保良田遺跡VII	7	0	1	5	7	0	17
倉加野方福寺遺跡	3	2	0	0	3	0	8
下青田・瀧川遺跡	3	0	0	1	3	0	7
下佐野遺跡	35	6	6	1	19	1	69
舟橋遺跡	5	0	1	0	4	0	10
元総社西川遺跡	2	0	1	1	2	1	7
藤島川端遺跡	34	4	6	7	30	0	51
12遺跡合計	155	23	34	35	127	5	319

図11



さらに樽式土器を出土する墓が2基確認できる。また7区3号方形周溝墓ではS字状口縁台付罫と樽式土器が共存出土している。他に4号方形周溝墓ではS字状口縁台付罫と単口縁台付罫、土師器平底甕、同5号方形周溝墓ではS字状口縁台付罫と畿内小型埴、同6号方形周溝墓ではS字状口縁台付罫と北陸系器台、同8号方形周溝墓ではS字状口縁台付罫と赤彩された甕や椀、I地区D

区2号方形周溝墓ではS字状口縁台付罫と畿内系と東海系の甕と共存する。このように下佐野遺跡周溝墓出土土器はS字状口縁台付罫と共存する土器群は在地土器に混じり複数他地域の土器が混在している実体が認められる。このような出土は下佐野遺跡の住居跡群出土土器の出土傾向と符合する。

一方荒砥地域では東原B遺跡と中山A遺跡で計20基の

表9 下佐野遺跡

遺構名	S字罫	単台罫	土罫	神罫	竪	高坪	器台	埴	鉢	他	総計	備考	
1地区A区1号方形周溝墓	2				1	1					4		
1地区A区2号方形周溝墓	1										1	S字状口縁台付罫破片	
同 3号方形周溝墓						1					1	高坪罫片	
同 4号方形周溝墓	14	1			13	1					29	内行花文罫・前方後方形周溝墓 単口縁台付罫・二重口縁罫・土師器平底罫	
同 5号方形周溝墓	2				3						5	小型埴	
同 6号方形周溝墓	1				3		1	4		1	10	北陸系器台	
同 7号方形周溝墓					2						2		
同 8号方形周溝墓	2				6						2	10	赤砂舎・椀
同 9号方形周溝墓								1			1		
同 10号方形周溝墓						1					1		
同 12号方形周溝墓					2	1					3	北陸系高坪	
1地区C区1号方形周溝墓					1			1			2	ひさご壺	
同 2号方形周溝墓					1						1	小型埴	
同 3号方形周溝墓	1				4	2					7	ひさご壺	
同 4号周溝墓												遺物なし。形状不明。	
同 5号方形周溝墓	2				5		1				8	ひさご壺・小型埴・二重口縁罫(畿内系)	
同 6号方形周溝墓					2			1		1	4	小型埴	
同 7号方形周溝墓	4				4						8		
1地区D区1号方形周溝墓			2		4	2					6	ひさご壺	
同 2号方形周溝墓	2				3						5	二重口縁罫(畿内・東海)	
寺園地区3号方形周溝墓					4						4	二重口縁罫(東海)	
下佐野住地区													
7区1号方形周溝墓							1				1		
7区2号方形周溝墓												遺物なし。	
7区3号方形周溝墓	2		4	1	1	1	1				10	埴式土罫	
7区4号方形周溝墓				1				1			2	埴式土罫	
7区5号周溝墓												遺物なし。椀形	
計 26 基	33	1	6	2	56	8	3	8			4	123	
透 べ 数	19	2	2	2	16	7	3	8			3		

表10 倉加野万福寺遺跡

遺構名	S字罫	単台罫	土罫	神罫	竪	高坪	器台	埴	鉢	他	総計	備考
1号方形周溝墓	2				12	2		3	3		22	ひさご壺・二重口縁罫(畿内・東海)・小形埴
2号方形周溝墓					1	1					2	
3号方形周溝墓											0	発掘遺物無し。S罫の破片出土(記載)
4号方形周溝墓											1	二重口縁罫(畿内)
5号方形周溝墓											1	舎?
6号方形周溝墓					2						2	ひさご壺
7号方形周溝墓					1	1			2		4	S罫破片出土(記載)
8号方形周溝墓					2	1		1			4	小形埴
9号方形周溝墓					1	1			2		4	小形埴
10号方形周溝墓											0	遺物無し。
11号方形周溝墓	1								1		2	
12号方形周溝墓					1						1	
計 12 基	3				19	5		3	7		39	

周溝墓・甕棺墓が確認できた。20基の墓のうちS字状口縁台付罫が確認できたのは第13号方形周溝墓で破片が確認できたのみである。表1にあるように東原B・中山A・村主・北田下遺跡50軒の罫を持つ住居跡から出土したS字状口縁台付罫は2個体2軒の出土である。

この地域の遺跡からは住居跡群基群ともにS字状口縁台付罫の検出は少ない。しかしS字状口縁台付罫以外の外来土器を出土する住居跡は13軒が確認でき、外来土器を意図的に拒絶しているとは認められない。村主遺跡では小形埴が6号・18号・29号・49号住居跡から、またひさご壺は37・49号住居跡から出土し、34号住居跡では埴式土器と小形埴・ひさご壺が共存出土している。さらに29号・33号・35号・40号・46号住居跡からは単口縁台付罫が出土している。

東原B遺跡の南約5km、現在の伊勢崎市波志江町に25

軒の罫を持つ住居跡と20基の周溝墓を検出した波志江中野面遺跡がある。住居跡出土S字状口縁台付罫は51個体と罫のうちで62%を占め、周溝墓出土S字状口縁台付罫は12個体37.5%を占める。波志江中野面遺跡の住居跡25軒のうちS字状口縁台付罫を出土する住居跡の延べ軒数は19軒76%と高い比率を占め、周溝墓は6基30%である。またS字状口縁台付罫を出土する住居跡は16号・30号住居跡で小形埴と、7号方形周溝墓周溝墓でS字状口縁台付罫、埴式土器・赤井戸式土器と北陸系の高坪が出土している。住居跡の土器構成はS字状口縁台付罫が多いがS字状口縁台付罫を主体とする東海様式ではない。周溝墓から出土したS字状口縁台付罫は12個体、S字状口縁台付罫が出土した周溝墓の数は20基中6基である。7号方形周溝墓は6個体のS字状口縁台付罫の他1個体の単口縁台付罫、5個体の土師器平底罫とともに、埴式土器、

表11 東原B・中山A遺跡

遺 跡 名	S字壺	単台壺	土壺	樽壺	壺	高坏	甕台	埴	鉢	他	総計	備 考	
1号周溝墓			4	2	1		2			1	10	樽壺・赤塗・前方後方形・樽壺・二重口縁壺	
2号周溝墓			12		10	3	3	1		5	34	前方後方形・赤塗・樽壺	
3号方形周溝墓			2		1	7	1			1	12		
4号方形周溝墓												遺物なし。	
5号方形周溝墓			8			2	1			1	11	樽壺	
6号方形周溝墓			3			1	1				5	樽壺	
7号周溝墓												1	方形～甕内形。
8号周溝墓			1				1				2	2	方形～甕内形。遺物なし。
9号方形周溝墓			1								1		
10号周溝墓													甕内形？遺物なし。
11号周溝墓													甕内形。遺物なし。
13号方形周溝墓	1?		2	1							4	樽壺	
14号方形周溝墓		1	3		1	2					7	前方後方形周溝墓。樽壺。	
15号方形周溝墓			2			2					4		
16号方形周溝墓			1			2					3	前方後方形周溝墓	
17号方形周溝墓	1	1								1	3	前方後方形周溝墓。樽壺。B II	
1号壺棺													樽式土器
2号壺棺													樽式土器
中山A遺跡													
1号前方後方形周溝墓			2					2			6		
2号周溝墓													遺物なし。
計 20 基	1	2	42	3	13	20	16	1	2	9	103		

表12 波志江中野面遺跡

遺 跡 名	S字壺	単台壺	土壺	樽壺	壺	高坏	甕台	埴	鉢	他	総計	備 考	
1号方形周溝墓	2		3		5	4	1			3	18	横高坏・ひきご壺・二重口縁壺	
2号方形周溝墓					3						3	内彫浮文	
3号方形周溝墓	1				2	1		1			5	頸部突起	
4号方形周溝墓	1		1		1				1		4		
5号方形周溝墓			1		8	2		1	2		14	二重口縁壺・	
6号方形周溝墓			1		1	1					3		
7号方形周溝墓	6	1	5		12	2	4	3			33	樽・赤塗・北陸高坏	
8号方形周溝墓					1	2					3		
9号方形周溝墓					2				1		3		
10号方形周溝墓									1		1		
11号周溝墓													形状不明。掲載遺物なし。
12号方形周溝墓						1			3		5	掲載遺物なし。	
13号方形周溝墓	1				5				1		11	前方後方形周溝墓	
14号方形周溝墓	3	2									4		
B区1号方形周溝墓	1		2						1		4		
2号周溝墓													形状不明
3号方形周溝墓					4		1		1		6	ひきご壺	
4号方形周溝墓					1						2		
C区1号方形周溝墓	1				3						4	折り返し口縁壺	
D区1号方形周溝墓	1				1						2		
計 20 基	12	5	14		51	13	8	2	16		121		

赤井戸式土器、北陸系の高坏が併せて出土し、中野面遺跡も東海様式ではなく、外来土器は複数地域にその出自を求めることができる。

さて東原B・北田下・村主遺跡の土器構成を見ると外来の土器の出土が遅く、井野川流域に比べ古墳文化の取り入れが遅いと指摘があった。しかし、S字状口縁台付壺の出土例は非常に少ないが、小型埴あるいはひきご壺、二重口縁壺、北陸系土器が出土することから量は少ないが土師器化への始動は開始されていると考える事ができる。さらに東原B遺跡周辺と中野面遺跡では東海形式S字状口縁台付壺の出土量に差が認められるが、同様な現象も井野川流域で確認できる。

井野川流域下佐野遺跡南東約1.5kmに倉賀野万福寺遺跡がある。壺を持つ住居跡は5軒、12基の方形周溝墓が確認されている。住居跡出土遺物をみると遺跡全体の出

土器の79.1%はS字状口縁台付壺であるが、実体は15個体が1軒から出土し、2軒からはS字状口縁台付壺は出土していない。12基の周溝墓を概観するとS字状口縁台付壺は3個体2基であり、周溝墓から出土する器種は小型埴や二重口縁壺、ひきご壺等が確認され、倉賀野万福寺遺跡周溝墓では複数地域からの外来土器が混在し、S字状口縁台付壺が少ない。

7. 土器から見た井野川流域と荒砥地域

さて前稿では群馬県内の古墳時代前期集落の住居跡群出土土器の実体把握を目的に土器を検討した。結果は井野川流域はS字状口縁台付壺を壺の主体とする東海様式の土器群であるとはできなかった。今回は同様に荒砥地域の遺跡と周溝墓、さらには下佐野遺跡、倉賀野万福寺遺跡周溝墓検出土器を検証してみたが、ここで

もS字状口縁台付甕を甕の主体とする東海・土師器様式は確認できず、井野川流域での周溝墓と荒砥地域の墓の間の土器構成にも大きな隔たりは見いだすことはできなかった(ただ井野川流域ではS字状口縁台付甕が多く荒砥地域では土師器平底甕が多い、しかしどちらの甕も各々の地域で土器構成の主体となるには至っていない)。事實は複数外来地域の土器が混在して出土し、土師器化していく過程を認めることができた。井野川流域、荒砥地域出土土器群の傾向から様々な複数外来土器の存在を確認し、その混在状況は周溝墓が接する住居跡群と同様な傾向を示すことが認められた。さてさらに東海様式・S字状口縁台付甕にこだわると前稿の結論のように下佐野遺跡住居跡で出土した129個体のS字状口縁台付甕は土器構成の中で東海様式の器種構成を持つものは極めて少ない、また周溝墓から出土したS字状口縁台付甕は33個体、単口縁台付甕1個体、土師器平底甕は6個体を数えるが、S字状口縁台付甕を出土する周溝墓は26基中10基38%で、墓出土土器の構成も東海様式と認定できるものは無い。さらに実体はS字状口縁台付甕を出土する10基のうち6基は明確に東海要素とは異なる土器と共存する。その内訳はI地区A区4号前方後方形周溝墓では単口縁台付甕、土師器平底甕をはじめS字状口縁台付甕と小型埴と共存するもの1基、北陸系の土器と共存するもの1基、畿内系の二重口縁甕と共存するもの1基、樽式土器と共存するもの1基、さらには赤彩された甕と共存するものを含めるとS字状口縁台付甕が出土する10基のうち6基は明確に東海様式ではない事が確認できる。したがって筆者が前稿で確認していた住居跡出土土器の混在状態は周溝墓出土土器も同様であることが分かる。下佐野遺跡に隣接する倉賀野万福寺遺跡でも住居跡出土土器はS字状口縁台付甕が甕の中で79.1%を占めながらも出土は1軒に集中し、5軒のうち2軒からはS字状口縁台付甕を出土せず、周溝墓出土のS字状口縁台付甕は12基のうち2基3個体の出土である。さらにS字状口縁台付甕を出土した1号方形周溝墓からは小型埴が共存し、他に小型埴を出土する周溝墓は計3基が確認されている。下佐野遺跡と倉賀野万福寺遺跡の計38基の周溝墓のうちS字状口縁台付甕を出土する墓は全体の12基31.5%で土器の内容も様々な地域の外来土器が共存している。井野川流域の下佐野遺跡・倉賀野万福寺遺跡の2遺跡では住居跡出土土器群と同じ構成を持つ土器群が周溝墓からも検出され、土器構成から同じ集落内の居住者が被葬者であったことを示していると言える。つまり、墓出土土器の検討から被葬者は明らかに毛野在地の社会に生きた事を証明していると考えられることができる。

一方荒砥地域東原B・中山A遺跡の20基の周溝墓・壱棺墓からは1点のS字状口縁台付甕片が確認でき、東原B遺跡住居跡からは2点、北田下、村主遺跡からはS字

状口縁台付甕は検出されていない。しかし南5kmに所在する中野面遺跡では住居跡のS字状口縁台付甕の出土は25軒51個体甕の中で62%を占める。また土師器平底甕は28個体で、両甕の延べ軒数はS字状口縁台付甕が19軒、土師器平底甕が17軒と量比の差は延べ軒数には数値としてあらわれず、結果どちらも土器構成の中で甕の主体とはならない。周溝墓を見るとS字状口縁台付甕は12個体、単口縁台付甕5個体、土師器平底甕14個体と土師器平底甕が2個体多いがここでもどちらかが主体とならず、7号前方後方形周溝墓ではS字状口縁台付甕6個体、単口縁台付甕1個体、土師器平底甕5個体にあわせ樽式土器壺・赤井戸式土器壺・北陸系の高杯が共存出土している。ここでも住居跡出土土器、周溝墓出土土器構成の主体はS字状口縁台付甕・土師器平底甕・単口縁台付甕の特定できず、土器の構成は複数外来地域の土器と在地の土器が混在することに特徴が認められる。

さて荒砥地域では東原B遺跡・中山A遺跡・北田下遺跡・村主遺跡グループはS字状口縁台付甕は非常に少ないが、近接する中野面遺跡ではS字状口縁台付甕は井野川流域と量比的には遜色ない。いずれにしても東原B遺跡周溝墓出土土器群の構成は集落出土土器と同じ傾向を示し、中野面遺跡でも集落と墓群の土器構成は各々共通している。荒砥地域と井野川流域全体の比較ではS字状口縁台付甕と土師器平底甕の量比が違ってくることも荒砥地域は遺跡によってS字状口縁台付甕の量比の大きさが目立つことが分かる。しかし倉賀野万福寺遺跡の周溝墓群ではS字状口縁台付甕は少ない。さらに荒砥地域では外来の土器も東海・北陸・畿内系土器が多数確認でき、荒砥上ノ坊遺跡では多数の北陸系土器が出土し注目集めたが、東海系・畿内系土器が樽式土器と出土し、最大出土の甕は土師器平底甕である。上ノ坊遺跡例ではむしろ積極的に複数地域からの外来土器の取り入れを看取することができ、また村主・北田下遺跡は土師器平底甕に嗜好が向いていたとの理解が成り立つ。

いずれにしても井野川流域と荒砥地域の集落・墓域の出土土器の検証からはS字状口縁台付甕を主体とした東海様式の土器組成は確認できなかった。

8. 墓から見た井野川流域と荒砥地域

以前筆者は県内の周溝墓の検討をした。略述すると群馬県内では周溝墓は円形や楕円形等の不定形の溝が巡る周溝墓が弥生時代に存在し、古墳時代になると方形区画が明瞭になり、4隅切れ方形周溝墓は弥生時代から継続している。また弥生時代は不定形の周溝墓とともに壱棺墓、裸土墓が併用して墓域を構成している。東原B遺跡では1・2号前方後方形周溝墓から樽式土器と二重口縁甕が出土し同時に壱棺墓が検出されるなど新しい墓制と弥生以来の伝統が共存するという現象を認めることがで

き、周溝墓からは土師器と樽式土器が共存して出土し、同様に下佐野遺跡、倉賀野万福寺遺跡の周溝墓も複数外来地域の土器とともに在地の土器群の共存が認められる。このような現象は伝統的な弥生時代の人々が古墳時代に周溝墓を取り入れたことが分かる。並行して荒砥地域と井野川流域に於いて共通して新しい墓制を取り入れたわけである。

また井野川流域に所在する下佐野遺跡と倉賀野万福寺遺跡の周溝墓は合計で38基のうち東海のS字状口縁台付甕を出土する墓は全部で13基38%であり、その他多くの外来土器が混在出土し東海地方のみとの交流だけでは理解できないことが分かる。荒砥でも同様な傾向が認められ、同時期に荒砥地域と井野川流域には方形周溝墓に変換している。そして方形周溝墓を取り入れた彼らは明らかに生前使用した土器構成を持って葬られた。さてこのように井野川流域と荒砥地域では古墳時代前期になると方形周溝墓という墓制が同じように定着している。つまり、毛野在地の社会に方形周溝墓という墓制がすんなり採用されたのは毛野内部での共同体の成立を認め、その社会が持つ流通網が継続的に機能したことを認めることができる。さらに毛野の人々は弥生時代中期から継続的に他地域との活発な交流を維持し、やがて古墳文化を取り入れたのである。

9. まとめ

井野川流域と荒砥地域の住居跡・周溝墓出土土器の構成をみた。井野川流域住居跡ではS字状口縁台付甕の出土量は52.7%で延べ軒数は41.7%に下がり、荒砥地域では土師器平底甕の出土量は54.3%、延べ軒数は45.5%に下がる。両地域ともに出土量は延べ軒数になると下がる傾向を示す。つまり井野川流域ではS字状口縁台付甕を複数個持つ住居跡が多く、荒砥地域では土師器平底甕を複数個持つ住居跡が多いことが分かる。しかし両地域ともに甕の混在状態は井野川流域で75.4%、荒砥地域では64.6%と単器種の甕を主体とするような土器構成をなさない。つまり両地域での古墳時代前期の土器様式は甕は複数種混在することが一般的であることがわかる。

さて井野川流域と荒砥地域住居跡群から出土した土器群の傾向はS字状口縁台付甕を主体とした土器様式ではない。一方周溝墓出土土器はどうであったか、下佐野遺跡周溝墓群出土土器はS字状口縁台付甕、小型埴・北陸系土器等の複数器種の外来土器とともに樽式土器の出土も確認でき、II地区7区3号方形周溝墓ではS字状口縁台付甕、土師器平底甕、樽式土器が共存出土している。つまり墓群出土土器の構成は住居跡群出土土器の構成とおおきく異なることはない。東原B遺跡周溝墓群ではS字状口縁台付甕破片1個体のみ出土で、住居跡群50軒

では2個体のみ出土である。井野川流域倉賀野万福寺遺跡では12基の周溝墓のうちS字状口縁台付甕を出土するのは2基3個体である。このように近接する地域内でもS字状口縁台付甕に対する指向に違いが認められる。東原B遺跡ではS字状口縁台付甕は出土しないが小型埴・ひさご甕が確認でき、波志江中野面遺跡ではS字状口縁台付甕を含め畿内や北陸の外来土器が多数検出され、土師器平底甕住居跡も確認されている。しかしS字状口縁台付甕が少ない事は東原B遺跡が土師器導入を拒絶した結果ではない。なぜならばS字状口縁台付甕以外の外来土器が出土しているからである。そしてS字状口縁台付甕が少ないことは井野川流域と荒砥地域が異文化社会で井野川流域が移民集団である根拠はないと考えられる。なぜならば表1に表れるように東原B遺跡・北田下遺跡・村主遺跡では3遺跡の住居跡50軒からS字状口縁台付甕は東原B遺跡で2個体、他の2遺跡では出土しないが、小型埴・ひさご甕・北陸系外来土器が出土する。下佐野遺跡・倉賀野万福寺遺跡ではS字状口縁台付甕の出土量は多いが墓から出土するS字状口縁台付甕は両遺跡あわせて38基中13基で、小型埴・ひさご甕・北陸系土器・樽式土器が出土し、東原B遺跡あるいは波志江中野面遺跡住居跡・周溝墓群と同様な土器構成を見せる。

以上のように各集落間での外来土器の混在を示す土傾向に強い共通性が指摘でき、従来指摘されたような東海様式の住居跡や、さらに東海様式を出土する周溝墓はほとんど確認できない。ここで強調したいのは集落と隣接する墓群から出土する土器構成は互いに強い共通性を持っている事がわかる。考古学では是供献土器であるの出自を表すとされてきた。そして関東地方の墓や古墳から東海系の甕やS字状口縁台付甕を出土すると東海の人々の移動等が指摘されてきた。しかし、S字状口縁台付甕と東海を結びつける前に周溝墓群に接する集落出土土器の土器構成と比較すると共通することが分かる。したがって墓の被葬者は生前暮らしの場所の近くに葬られ、生前に使用した土器の構成をもって葬られたと考えられる。周溝墓は古墳時代の毛野の人々が受容し定着した墓制である。井野川流域下佐野遺跡・倉賀野万福寺遺跡の方形周溝墓出土土器は被葬者の出自を毛野の人である事を示す樽式土器、北陸・畿内・東海土器というまに彼らが生前使用した土器構成で埋葬された。したがってここで取り上げた墓の被葬者は生前隣接する集落で生活していたと考えられることができる。

10. おわりに

本稿では土器の新旧関係を検証してはいない。現在群馬県古墳時代前期の土師器の編年は東海地方のS字状口縁台付甕の組列を軸としたものである。さてその東海編年での一番古い型式はA類S字状口縁台付甕である。井

野川流域の熊野堂遺跡遺跡が廻間編年のA類S字状口縁台付壺片が1片出土した。口縁部の破片であり、他の土器との共存関係は明確ではない。したがってこのS字状口縁台付壺がA類で群馬県では非常に古い可能性は指摘できるにとどまる。なぜならば廻間遺跡と同様な分類検証は群馬県内でするだけの量はない。他の土器との比較対象の資料もない中で新旧の検証はなされない。またS字状口縁台付壺だけが東海形式の土器ではなく、S字状口縁台付壺が出土しないが樽式土器とひさご壺が共存する荒砥地域の遺跡が井野川流域の遺跡群より新しいという根拠も証明はなされてはいない。そこで県内の土器群を新しい土器の分期視点をもって検討する必要がある。

毛野での土器の変質は視覚的、形相的に様々な外来土器との人・物・情報と接しながら成立した。汎列島的な地域社会の統一においても各々の社会内部で様々な社会背景の異なりが存在する。それは地形であり、社会体系であり、社会構造にある。そういった在地の地域性・地域個性をみないで一方的な東海からの外圧で統一するとの理解は早計である。しかし筆者は弥生時代社会構造が古墳時代社会構造に成長発展したとの理解はまだできない。古墳時代の成立には人・物・情報が様々な複雑に機能し、ある部分では同じだがある部分では全く新しい体系を伴い成立したと考えている。そういった視点から古墳時代前期の遺構・遺跡の出土土器を分類検証したいと考えている。つまり栗林式土器が樽式土器に変化したこと、樽式土器が土師器に変換したことは全く社会背景が異なり、栗林式土器から樽式土器への変質は集団内での承襲・出自という地域個性を発揮しているが、樽式土器から土師器への変質は全く文様に表れている個性が消滅してしまうからである。しかし、様々な複製外来土器の混在するという共通性がある。つまりこれも当時の毛野の個性であると考えることができる。栗林式土器が樽式土器に変化したのとは社会背景の異なる変質である。つまり土器形式の変換・導入である。それは時間の経過による内的変化ではなく、人間によって選択された系譜である。だから古墳時代前期の土師器は樽式土器の承襲を引かない。大木氏の指摘したように新しい技法とともに受容し、受け入れたものである。しかし、人の違いとみることはない。毛野の人々が新しい技法・技術を導入することはとても簡単なことであるからだ。古墳時代の前期の土師器の分類は中期から後期への弥生土器の変質とは全く異なる認識で分類編年をしなくてはならない。古墳時代後期における粟の長期化が甕出現という生活体系の変化・生活様式の違いから生まれることもある。ただ古墳時代前期が大きな政治性や戦乱によるとの視点だけでは土器や社会の変質は語れない。いづれにしても毛野の人々は今までとは全く違う土器の形相を取り入れたのである。問題はなぜ複製地域土器の混在して出

土するかの理由を考えることから始まる。そして今までと全く系譜を異にする土器はその後自分では変質もしなければ変化もしない。物は独自で進化・発展はしない。一方作り手・使用者には自由な選択がある。自由な意志をもった人間が土器を作り、使用することが社会体系を構成したのである。ここでは墓の被葬者の生前の生活場を特定できたとする。さらに同じ視点で古墳時代前期の社会構造の検討を継続したいと考えている。

(補註) 現在整理中であるが荒砥前遺跡500mに萩原遺跡がある。年報報告では弥生時代から古墳時代前期に継続する遺跡が確認されている。

参考文献

- 相沢健史・小島敦子 1992 『新保田中村前遺跡II』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
相沢健史・小島敦子 1993 『新保田中村前遺跡III』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
秋池 武 1983 『倉賀野万福寺遺跡』高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会
赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財調査センター
赤塚次郎 1992 『東海系のトレス3・4世紀の伊勢湾沿岸地域』『古代文化』1
阿子島香 1983 『ミドルレンジセオリー』『考古学論叢』1 沢長良介先生選記念論文集刊行会
イアン・ホプター (原簿百子訳) 1996 『過去を読む』フジインターナショナルプレス
飯塚卓二 1984 『熊野堂遺跡(1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
飯塚卓二 1989 『下佐野遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
飯塚卓二・安原和志編・関根健二 1990 『熊野堂遺跡(2)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
池田洋彦 1992 『分類という発想』新編遺書
石川日出志 1998 『弥生時代中期東部の4地域の併存』『戦国史学』第102号
石坂 茂 1983 『荒砥前遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
井野謙一 1991 『芳賀遺跡』前橋市教育委員会
梅澤卓郎・橋本博文 『シジボウ木園東における古墳出現期の諸問題』学生社
梅澤卓郎 1994 『毛野』形成期の地域相—前方後方墳及び周溝墓の分布を中心に—『戦国史学』91号
梅澤卓郎 1994 『毛野の周溝墓と前方後方形周溝墓』『戦国史学』92号
大木謙一郎 1985 『荒砥前遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大木謙一郎 1994 『2号初川出土弥生土器について』『新保田中村前遺跡IV』
大木謙一郎 2001 第5章まとめ『元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について』『元総社西川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大塚久雄 1965 『共同体の基礎理論』岩波書店
大塚久雄 1966 『社会科学の方法』岩波書店
大塚久雄 1977 『社会科学における人間』岩波書店
小野和也 1987 『下野田・瀬川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
小川英子 2000 『狩猟社会の農耕社会の交流：相互関係の視点』『交流の考古学』小川英文編 朝倉書店
金子浩昌 『新保田遺跡出土の骨角器・骨角牙製品』『新保田遺跡1』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
金子浩昌 1994 『新保田中村前遺跡出土の骨角器』『新保田中村前遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
加納俊介 1991 『東日本における後期弥生土器研究の現状と課題』『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会
加納俊介 2000 『S字壺の分類を考える』『S字壺を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会

- 川村浩司 1994 「関東南部における北陸土器の様相について」『庄内式土器研究VI』
- 川村浩司 1998 「土器の交流から見ると北陸地方と群馬県地域」『人が動く・土器も動く』かみつけの里博物館
- 川村浩司 1999 「庄内行跡における上野出土の北陸系土器について」『庄内式土器研究XIX』
- 神戶聖節 1989 「八幡遺跡」高崎市教育委員会
- 神戶聖節 1991 「高崎情報館地誌」高崎市教育委員会
- 小泉朝明・飯島義雄 1998 「石田川式土器の再検討①」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号
- 小泉朝明・井上昌英・飯島義雄 1999 「石田川式土器の再検討②」『群馬県立歴史博物館紀要』第20号
- 小泉朝明・井上昌英・飯島義雄 2000 「石田川式土器の再検討③」『群馬県立歴史博物館紀要』第21号
- 小島敦子 1996 「葛城からみた北陸論研究の基礎操作」『古代』第90号
- 小島敦子 1998 「高城上ノ坊遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 飯井 隆 1984 「熊野遺跡第三地区・雨森遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 飯野正信 2003 「武蔵野型について」高崎市史研究17 高崎市史編さん専門委員会
- 佐藤明人 1986 「新保遺跡1」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人 1988 「新保遺跡II」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人 1990 「有馬遺跡II」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤洋一郎 2002年 「雨の日本史」角川選書337
- 設楽俊也 1986 「葛城町土器を集めて」『第7回三原シンポジウム』東日本における中期後半の弥生土器 北東考古古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学協会誌
- 下城 正 1989 「船橋遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城 正 1994 「新保中村前遺跡IV」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城 正 2000 「村主・谷津遺跡」群馬県教育委員会
- 白石光男 1992 「横濱遺跡」前橋市教育委員会
- 須藤 宏 1991 「集団と首長基—群馬県太田市周辺の一分析—」『群馬県考古学手帳』2 群馬土器協会
- 大学合同考古学シンポジウム委員会編 2002 「弥生の「ムラ」から古墳の「クニ」へ」学生社
- 高橋純三郎 2001 「総論：村落と社会の考古学」『現代の考古学6』朝倉書店
- 高橋浩二 1999 「S字状口縁付土器の伝播とその評価」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究会10周年記念論集—』
- 高橋浩二 1997 「北陸における古墳出現期の社会構造—土器の計量的分析と古墳から—」『考古学雑誌』第80巻3号 日本考古学会
- 高橋土編纂委員会 1998 「新編 高崎市史」資料編1 原始古代
- 田口一郎 1978 「鈴ノ宮遺跡」高崎市教育委員会
- 田口一郎 1981 「元島名得軍塚古墳」高崎市教育委員会
- 田口一郎 1998 「新たな土器の交流と立つと」『人が動く・土器も動く』
- 田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁部の波及と定着」『S字型を考へる』第7回東海考古学フォーラム三重大実行委員会
- 田中良之 1986 「縄文土器と弥生土器1 西日本」『弥生文化の研究3』雄山閣
- 田中良之 1991 「いわゆる従来型の再検討」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生追悼記念論文集 文庫出版
- 都出比呂志 1989 「日本農耕社会の成立過程」岩波書店
- 都出比呂志 1993 「前後方墳体制と民家形成」『特集山論叢』第7号 史学編
- 都出比呂志 1996 「国家形成の諸段階」『歴史評論』551号
- 常木 晃 1999 「食料生産社会の考古学」朝倉書店
- 徳江芳夫 1985 「荒砥二之堰遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 都 眞 1985 「足立藩井遺跡」赤城村教育委員会
- 友廣哲也 1984 「有馬遺跡群B区」『研究紀要1』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 友廣哲也 1988 「古式土器類出現期の様相と浅間川C軸古字」『群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 友廣哲也 1991 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳2』群馬土器協会
- 友廣哲也 1992 「群馬県の古墳時代前期の土器様相」『古代』94号 早稲田大学考古学
- 友廣哲也 1994 「北関東の古墳時代文化の受容」『古代』98号 早稲田大学考古学
- 友廣哲也 1995 「上野の古墳時代文化の受容」『古代探源IV』瀧口憲生先生追悼論文集 早稲田大学考古学
- 友廣哲也 1995 「藤島文化圏の弥生時代終末から古墳時代初期頃の基制」『古代』100号 早稲田大学考古学
- 友廣哲也 1996 「群馬県の北陸土器と古墳時代集落の展開」『古代』102号 早稲田大学考古学
- 友廣哲也 1997 「石田川式土器考」『古代』104号 早稲田大学考古学
- 友廣哲也 2003 「古墳社会の成立—北関東の弥生・古墳時代の地域間交流—」『日本考古学』16号 日本考古学協会
- 友廣哲也 2004 「北関東古墳時代前期土器の様相から見た古墳時代社会の成立」『古代』112号 早稲田大学考古学
- 中尾佐助 1990 「分期の発見」朝日選書
- 橋本博文 1994 「関東北部における古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山田出版社
- 長谷川福次 1996 「北町・田ノ保遺跡」北碓村教育委員会
- 比田井克仁 1997 「定型化古墳出現前における遺構、畿内と関東の連続」『考古学研究』第44巻第2号
- 比田井克仁 2001 「関東弥生首長の相対的位置づけとその成立過程」『古代』109号
- 比田井克仁 1987 「南関東出土の北陸土器について」『古代』83号
- 広瀬和雄 2003 「前方後円墳国家」角川選書
- 広瀬和雄 2003 「日本考古学の通説を疑う」洋泉社
- 深澤敦仁 1988 「上野における土器の交流と展開」『庄内式土器研究XVI』
- 福嶋正史 2000 「中溝・深町遺跡」新田町教育委員会
- 藤田弘夫 1991 「都市と権力」創文社
- 藤田弘夫 1993 「都市の論理」中央公論社
- 藤巻孝男 1985 「荒砥前遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤巻孝男 1993 「五目牛清水田中田遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 北条芳隆・瀧口孝司・村上恭通 2000 「古墳時代像を見直す」青木書店
- 前原 豊 1982 「堀ノ内遺跡」藤岡市教育委員会
- 前原 豊 1985 「柳久保遺跡」前橋市教育委員会
- 前原 豊 1996 「内堀遺跡」前橋市教育委員会
- 松村一昭 1978 「赤堀村前遺跡」赤堀村教育委員会
- 松本直子 2000 「認知考古学の理論と実践的研究」九州大学出版会
- 松島栄治 1968 「石田川」石田川刊行会
- 三浦茂三郎 1996 「下城1・II遺跡」群馬県教育委員会
- 水田 稔・石北道樹 1985 「石田遺跡」沼田市教育委員会
- 森岡秀人 1993 「土器移動の諸類型とその意味」『紀載』4号
- 山浦 清 2000 「説文から察文化形成期にかけての北海道—本州の交流とその系システムの展開」73—89頁『交流の考古学』小川英文編 朝倉書店
- 山田昌久 1986 「くわとすきの来た道」『新保遺跡1』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 若狭 徹 1990 「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220
- 若狭 徹 1990 「保保遺跡III」群馬県教育委員会
- 若狭 徹 1991 「群馬県における弥生土器の消滅過程」『群馬考古学手帳1』群馬土器協会
- 若狭 徹 1992 「北西関東における弥生土器の成立と展開」『鎌古史学』第84号
- 若狭 徹 1996 「群馬県地域」『YAYノ(やいっ)ノ』弥生土器を語る会 20回追悼記念論集 弥生土器を語る会
- 若狭 徹 1998 「群馬の弥生土器が終わるとき」『人が動く・土器も動く』
- 若狭 徹 2000 「S字状口縁部波及期の様式変革と集積動態」『S字型を考へる』第7回東海フォーラム三重大大会事務局
- 若狭 徹 2002 「古墳時代の地域経営」『考古学研究』第49巻第2号 考古学研究会
- 渡辺 仁 1985 「人はなぜ立ちあがったか」東京大学出版会

所謂「三和工業団地Ⅰ遺跡型」の 「周溝をもつ建物」の構造

飯島 義雄

1. はじめに
2. 三和工業団地Ⅰ遺跡における「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」
3. 大平遺跡における「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」
4. 三和工業団地Ⅰ遺跡と大平遺跡の「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」の比較検討
5. まとめ

— 論文要旨 —

これまで群馬県域や南関東地方の沖積地で検出されてきた古墳時代前期の「周溝をもつ建物」は、堅穴部の周囲に一部入開口を掘り残しつつ溝を巡らせており、堅穴部と周溝及び屋根は構造的に一体のものと想定してきた。

しかし、群馬県伊勢崎市三和工業団地Ⅰ遺跡で検出された古墳時代前期の「周溝をもつ建物」はそうした構造とは異なると考えざるを得ない。静岡県浜松市大平遺跡で検出されている類例を参考にすると、中央の堅穴部とその周囲を巡る周溝は構造的に一体のものとは考えられず、周溝は基本的に雨水が標高の高い所から堅穴部の周囲へ浸入するのを防止するための施設であり、かつ堅穴部の周囲に降った雨水を集落外の低地へ導く溝の一部と考えられる。

また、三和工業団地Ⅰ遺跡と大平遺跡では、「周溝をもつ建物」に堅穴部から外部への溝一排水溝があり、周溝からの溝と連結している。さらに、両遺跡では、堅穴部から外部への溝はあるものの周溝のない古墳時代前期の「排水溝をもつ建物」が存在する。これらの溝は、本来堅穴部へ浸入した水の排水用であるとともに、堅穴部での炊事等に依わる生活排水用であったものと推定される。つまり、建物の構造が似ていると言うことは、建物内での行動様式が似ていることを示しているのである。

さらに、大平遺跡に隣接した遺跡で古墳時代前期の「排水溝をもつ建物」が検出されており、大平遺跡の位置する地域では「排水溝をもつ建物」そしておそらく「周溝をもつ建物」は一般的な建物として存在していたと推定される。また、東海地方東部の地域では、弥生時代後期に遡って「排水溝をもつ建物」が存在している。

こうした状況から、三和工業団地Ⅰ遺跡で「周溝をもつ建物」そして「排水溝をもつ建物」が検出された背景として、大平遺跡の位置する地域から「周溝をもつ建物」の築造技術を有する人が移住したとの考えが支持されるのである。

建物を含む遺構のあり方も土器等の遺物と同様に、古墳時代前期における社会の変容を示す資料となり得るのであり、今後の追求が必要である。

キーワード

- 対象時代 古墳時代前期
対象地域 群馬県域・東海地方東部
研究対象 周溝をもつ建物・排水溝をもつ建物

1. はじめに

群馬県域における古墳時代前期の遺物・遺構そして遺跡の様々な状況を概観すると、前代から継続する要素が見られるものの、前代には見られない要素が突然ともいふべき状況で出現することが知られる。そのことは、弥生時代から古墳時代へ移行するにあたり社会のあり方に大きな変化が存在したことを予測させるのである(飯島 1997)。

この間、筆者は本地域において古墳時代前期の社会の実態を把握すべく、いくつかの要素に焦点をあてて検討してきた。その中で、古墳時代になって本地域に出現した要素である「周溝をもつ建物」を取り上げ、これまで南関東地域で方形周溝墓とされてきた遺構の中に、竪穴部の周囲に溝を巡らした建物「周溝をもつ建物」(図1)が含まれている、とした(飯島 1998)。それは、竪穴部の周囲の一部を入口部として掘り残しつつ溝と周堤を巡らせた建物であった遺構を、後世の地表面からの削平が深く及んだことによる竪穴部の欠失に災いされ、発掘時における柱穴の未検出や誤認により、建物との認識がないままに周溝の形状のみから方形周溝墓と理解してきたことに対し、訂正を求めたのである。

その後、「周溝をもつ建物」の周溝同士を連結する溝に注目し、そうした連結溝で接続された周溝から集落に隣接する低地部へ導かれる溝が存在することから、周溝間の連結溝は周溝内の雨水を集落外へ導くための排水溝の一部であると理解した。そして、同一の排水溝を共有する建物は同時存在の可能性が高いと想定することにより、古墳時代前期の集落研究における一視角を提議した(飯島 2000)。また、個別の遺跡における「方形周溝墓」とされた遺構の再検討を行い、それらが方形周溝墓ではなく「周溝をもつ建物」と考えるべきことを提案した(飯島 2003)。

そうした中で、群馬県伊勢崎市三和工業団地I遺跡(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999b)において、これまで問題にして来た建物とは構造が異なると想定される「周溝をもつ建物」と、竪穴住居の内部から外側に向かう溝を備えた建物がセットで検出された。この「周溝をもつ建物」は、佐波郡玉村町に所在する上之手八王子遺跡で検出されていたものと、周溝の形状や竪穴部から掘削される溝の有無等の特徴からその構造が異なり、上之手八王子遺跡における「上之手八王子型」と区別して「三和工業団地I遺跡型」と類型化された(飯口 1999)。一方、三和工業団地I遺跡型の「周溝をもつ建物」に類似した構造の建物は、静岡県浜松市大平遺跡(財団法人浜松市文化協会 1992)で検出されており、両遺跡の遺構で東海地方西部を起源とするS字状口縁台付甕形土器が出土し、両遺構とも古墳時代前期の近接した時期に属するとともに、両遺跡の間に類似の遺構が検出されないこ

とから、遠隔地間における類似した構造の建物の出現の背景として、東海地方東部から群馬県域への「直接的な移住」が想定されたのである(飯口 1999)。

そして、近年、上之手八王子遺跡が立地する前橋台地上の北関東自動車道の建設に伴う発掘調査で「周溝をもつ建物」の類例が増加し、周溝の形状等から複数のタイプが存在することが指摘され、その意味が論じられている(石守 2003)。

ところで、上之手八王子遺跡を含め前橋台地上で検出されている「周溝をもつ建物」は後代における遺構の影響を受け、遺存状況が不良の例が多く、その構造を理解するには慎重な分析が必要である。一方、三和工業団地I遺跡で検出された「周溝をもつ建物」は遺存状況が極めて良好であり、細部の構造も比較的よく把握されている。本稿においては、直線距離で約230km離れた伊勢崎市三和工業団地I遺跡と静岡県浜松市大平遺跡(図2)で検出された「周溝をもつ建物」と関連する遺構の構造をやや詳しく検討し、将来における「周溝をもつ建物」の本格的な検討に備えることとしたい。

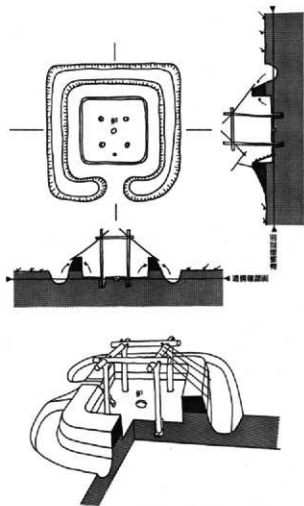


図1 これまでの「周溝をもつ建物」のモデル
(飯島 2000による)

2. 三和工業団地1遺跡における「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」

三和工業団地1遺跡は、赤城山の東部で渡良瀬川により形成された大開々扇状地の西の末端部に位置し、東に「男井戸」、西に「角弁清水」の湧水により形成された小さな谷の間の南面する緩やかな斜面上に立地している(図3)。

本遺跡では、古墳時代前期の遺構として竪穴住居124軒、掘立柱建物8棟、平地式建物1棟、畑などが検出されている。その竪穴住居に含まれている「周溝をもつ建物」である12号住居と、やはり竪穴住居で内部から外側に向かう溝を備えた9号住居を詳しく見てみたい(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1999b)。

(1) 12号住居(図3・4・6、写真1)

12号住居は、上記の東西の沢のほぼ中央部で検出されている。竪穴部の平面形はほぼ隅丸方形で、規模は長軸長5.5m、短軸長4.8mで北東-南西方向に長軸をもつ。面積は24.77㎡であり、大型に属する。掘形の底面はローム層中で確認面から70cmの深さであり、各壁沿に幅1mほどの範囲が中央部分よりやや深く掘り込まれている。掘形の底面から20cm程度の高さに貼床が施されて平坦面が構築され、床面となっているが、1回の貼り直しが認められたとする。断面図で見ると、最終床面の約10cm下

にほぼ全域に及ぶ平坦な分層線が確認でき、当初の床面かと想定される。住居のほぼ対角線上に四隅から約1.2m離れた位置に4個の柱痕が検出された。貼床が柱痕の際まで及んでいることから、立柱後に貼床が施されている、とされる。住居中心部と北東隅の柱痕の中央部あたり、長軸長80cm、短軸長60cmの平面形が隅円形の粘土の広がりがあり、その中央部に強く火熱を受けた焼土が検出され、炉跡と考えられる。壁際には最終使用面で幅10cm、深さ10cmで全周する壁溝が検出された。竪穴部の南東隅部で南東隅の柱痕と南辺の壁の間に、長軸長90cm、短軸長80cmで平面形がほぼ正方形を呈する深さ40cmの貯蔵穴が検出されている。

さて、竪穴部の南辺を除く3辺のまわりを竪穴部から約3m離れて、上幅70cm、下幅20cm、深さ70cmの溝が隅円弧状に回り、竪穴部の東方部で方向を変え南東方向に延び、後述する9号住居の内部から掘られ東方の湧水である「男井戸」により形成された沢に向かう溝に9号住居の南東部で接続する。本周溝及び9号住居からの溝に接続する溝は、その埋土が自然堆積の状況を示しており(図4・6)、掘削後埋め戻されることなく、開放状態であったものと理解される。また、周溝の深さは、確認面から70cmで12号住居の各壁沿にやや深く掘られた掘形の深さと同一であり、注目される。

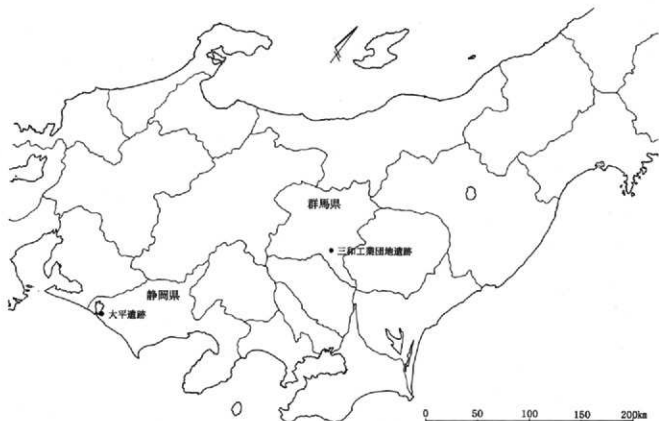


図2 三和工業団地1遺跡(群馬県伊勢崎市)と大平遺跡(静岡県浜松市)の位置

そして、堅穴部南壁の中央や西側部の掘形底面と同一レベルから南方へ直線的に約3m掘削された溝は、東方向へ直角に折れ、上記の周溝の延長である溝に接続する。この堅穴部の南壁からの溝は、堅穴部との接続部で溝上部の幅約30～50cmが掘り残され、溝の底面でトンネル状に掘り抜かれて接続されている（写真1—⑤）。

この南壁からの溝の堅穴部との接続部の掘形底面のレベルと9号住居から掘られた溝の80m東方向の東端部のそれは約25cmの比高差で、約0.3%の下り勾配である。住居の最終使用面では深さ10cmの壁溝が全周しており、壁溝が住居使用時に開放状態であったとしても床面は掘形の底面レベルより上位にあり、住居としての使用時には勾配率はやや大きくなる。なお、堅穴部の南壁からの溝は、堅穴部の床面が構築されても、堅穴部の壁面にトンネル状の空間が確保されていた（写真1—⑥）。堅穴部の南壁からの溝についての埋土の情報は示されていないが、上記周溝等と同様に自然堆積であり、掘削後埋め戻されることなく、開放状態であったものと想定しておきたい。

このように、本溝の両端部の標高値は小さいとは言え下り勾配を示し、溝の深さが70cmと深いことと合わせて考えると、開放状態であった溝に流入した雨水や溝に注がれた水は、東の谷に向かって導かれたものと考えられる。

さらに、この堅穴部に巡る楕円弧状の溝では、北西部と北東部、そして楕円弧状の溝の延長部で堅穴部南壁から延びた溝との接続部の手前の3ヶ所で、上部を掘り残して底面でトンネル状に掘り抜いた箇所がある。このトンネル部の幅を平面図（図4）により測ると、中央部で約10cm、端部で最大で約30cmである。写真（写真1—①～③）によれば、このトンネル部の上位は断面が弧状に掘られている。周溝の意味や建物の構造を考える上で、この断面の弧状の部分が本来の掘形であるか否かが問題となる。北西部と北東部のトンネル部の位置は平面形が隅丸方形の堅穴部の隅部の延長上に近く、堅穴部の屋根との有機的な関連が窺えそうである。しかし、楕円弧状の溝の延長部の排水溝で堅穴部南壁から延びた溝との接続部手前のトンネル部の位置は、堅穴部の屋根との関連は想定できない。管見によれば、他に類例を知らず、それが本来の掘形であるとすれば、その意味は不明と言わざるを得ない。もし、それが本来の掘形ではないとすれば、以下のような類推が可能となる。つまり、本遺構の確認面は基本土層（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1999a）における所謂「漸移層」の下部であり、その下部が黄褐色ローム層となる。本遺構の確認面がその「漸移層」であることに着目し、このトンネル部の上位の断面が弧状に掘られているのは、発掘調査時にしまりの弱い土質で暗褐色を呈する地山の漸移層の部分が、溝

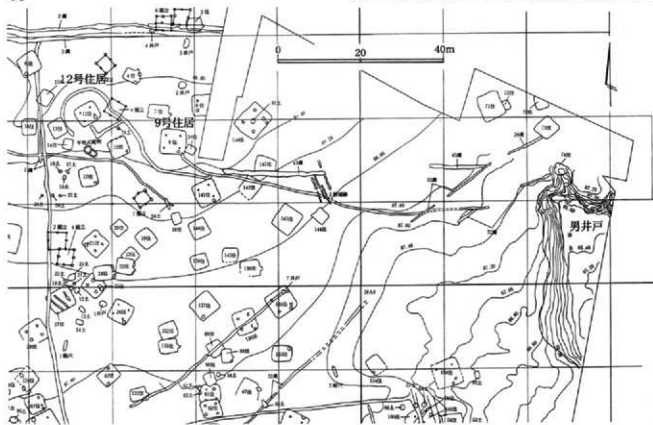


図3 三和工業団地1遺跡における「周溝をもつ建物」(12号住居)と「排水溝をもつ建物」(9号住居)

(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999b による)

の埋土最上層の暗褐色土と明確な区別がつかず、楕円弧状の溝のプランの延長上で掘られ下部のしまりのある黄褐色ローム層の上部で止められた結果である、と考えるのである。つまり、本来このトンネル部の上端は遺構掘

削時の地表面においては平坦であったと想定するのである。そうした想定が許されるならば、このトンネル部の上面の端部の幅が約30cmで、中央部が約10cmと狭いのは溝の掘削後における浸食の結果とし、本来は全体が狭く

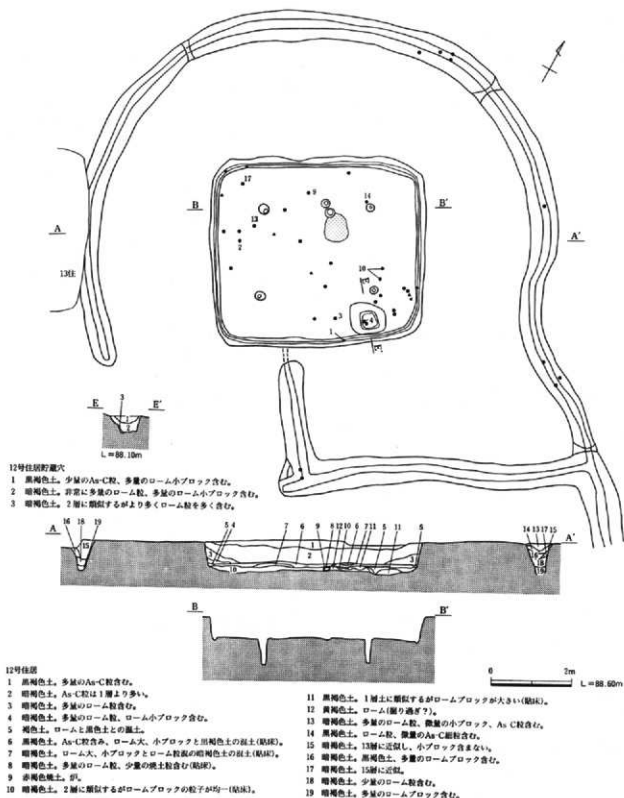


図4 三和工業団地1遺跡における「周溝をもつ建物」(12号住居) (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999bによる)

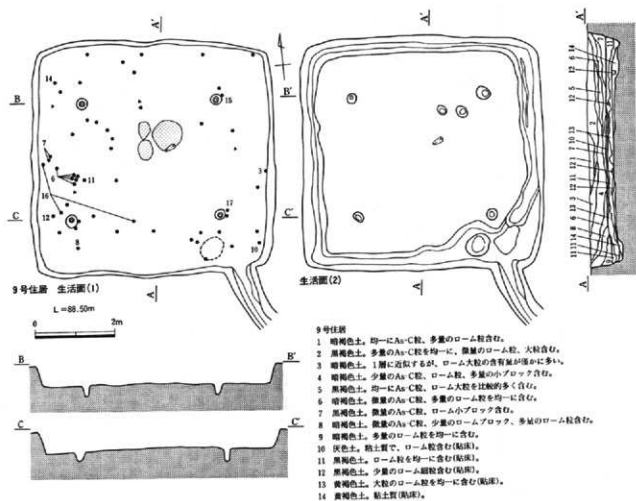


図5 三和工業団地I遺跡における「排水溝をもつ建物」(9号住居)(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999bによる)

ても約30cmの幅の陸橋であったものと想定したい。そうした前提に立てば、この陸橋は上部が通行可能であったことが考えられる。つまり、本周溝の遺構確認時にその幅が70cmあり、当時の地表面ではそれ以上の幅があるはずであり、この溝を渡る際には陸橋が有効な施設になっていたものと思われる。

そして、上記のように楕円弧状の周溝もその延長部の溝も開放状態であったと考えられ、降水時には雨水が溝の中に入ることが想定される。周溝が標高の高い地点とその両側に回り、標高の低い辺には存在しないことを考えると、本溝は標高の高い堅穴部の北側からの雨水が堅穴部の周囲に及ぶことを避けるために掘削されたものと考えられよう。

また、堅穴部から周溝部までの距離が約3mあることは、屋根の軒先が溝の上部まで達していたとするには距離が有りすぎ、堅穴部と周溝の間、つまり堅穴部に架けられた屋根と周溝の間には人の歩行が可能な空間が存在したと想定すべきであり、周溝に設けられたと想定した陸橋と合理的な関係が存在したことを示していると考

られる。

こうした理解によれば、冒頭に述べた周溝と堅穴部の一体的な構造としての「周溝をもつ建物」のモデルとは別に、「周溝をもつ建物」のモデルを設定しなければならなくなる。つまり、堅穴住居の周囲に、堅穴部とは構造的に一体とはならず堅穴部の周囲への雨水の浸入を防ぐ目的で溝を巡らした「周溝をもつ建物」である。

以下において、上記の一連の溝の内、楕円形状の部分に周溝と呼び、それより南東ないし東方に延びた溝と堅穴部から外部に一部トンネル状に掘られた溝を排水溝と呼ぶ。しかし、機能的には周溝も排水溝の一部である。

本住居及び周溝そして排水溝からはS字状口縁台付変形土器を含む古式土器器が出土している。

本遺構は、堅穴住居を巡る周溝の西側で古墳時代前期の小型の堅穴住居である13号住居と、東側で8号掘立柱建物と重複し、13号住居が本住居を巡る溝を切っているが、8号掘立柱建物との新旧関係は不明であった。

(2) 9号住居(図5・6、写真1)

本住居は前述の12号住居の南東方向約12mの場所に検

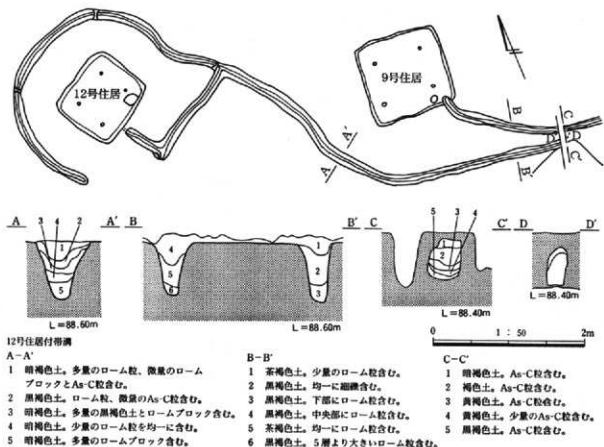


図6 三和工業団地I遺跡における「周溝をもつ建物」(12号住居)と「排水溝をもつ建物」の周溝と排水溝

(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999bによる)

出され、東西の長軸長6.2m、南北の短軸長5.9mの平面形がほぼ正方形の竪穴住居で、面積35.13㎡の大型に属し前述の12号住居より一回り大きい。

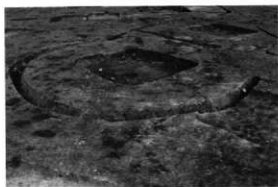
掘形としては、全体的にローム層が約60cm掘り込まれ、各壁際に沿って幅約1mの範囲が中央部よりやや深く掘り込まれている。この掘形の面に平坦に貼床を施し生活面を構築しているが、貼床は部分的なものも含めて2回の貼り直しが認められるとし、合計で3面の生活面が検出されている。竪穴部のほぼ対角線上でその隅部から約1.5m離れた場所に直径10cmの柱痕が確認され、貼床が柱痕の間まで及んでいることから、立柱後に貼床が施されたとする。処としては、竪穴部中央からやや北側に寄った場所で3個所に平面形が円ないし楕円形の焼土が確認され、最も大きなものは直径が80cmの平面形が円形で南縁に川原石を据えている。当初の床面には幅25cm、深さ10cmでほぼ全周する壁溝が存在したが、最終生活面では存在しなかった、とされる。この最終生活面では壁溝が構築されない点は、排水溝の意味を考えると示唆的であり、後述することとした。また、掘形の確認時に、竪穴部の南東隅部で平面形が円形で、直径50cm、深さ70cmのピットを検出し、貯蔵穴と判断され、この貯蔵穴の

位置も注目される。

本住居の南東隅部で掘形底部と同一レベルから掘られた上幅70cm、下幅20cm、深さ60cmの溝は、東側の低地部に向けてほぼ直線的に約60m延びる。また、前述のとおり本住居の東側で12号住居から掘られた溝が連結するが、12号住居から掘られた溝は上端部を約50cmを残し、底面で幅20cm、高さ50cmのトンネル状で検出された(写真1-⑦)。本溝は、住居との接続部と60m東の端部との比高差は10cmで、約0.2%の下り勾配である。本溝の埋土も自然堆積の状況を示しており、12号住居の周溝や排水溝と同様に、掘削時以降は開放状態であったものと想定され、溝の両端部で下り勾配の状況を示すことから、住居内からの排水用の溝であったと考えられる。こうした排水溝のみで周溝をもたない竪穴住居を「排水溝をもつ建物」と呼ぶ。

9号住居の排水溝に12号住居の排水溝が連結している状況からすると、9号住居と12号住居は同時に築造されたか、9号住居の築造後に12号住居が築造され、一定期間併存したものと考えよう。

本住居からはS字状口縁台付変形土器を含む古式土師器が出土している。



①周溝全景



②周溝内の陸橋



③排水溝の陸橋



④周溝からの排水溝に竪穴部からの排水溝の連結



⑤竪穴部の掘形の底面からトンネル状に延びる排水溝



⑥竪穴部の底面からトンネル状に延びる排水溝



⑦9号住の排水溝とトンネル状に連結する12号住の排水溝

写真1 三和工業団地1遺跡における「周溝をもつ建物」(12号住居)と「排水溝をもつ建物」の周溝と排水溝 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団提供)

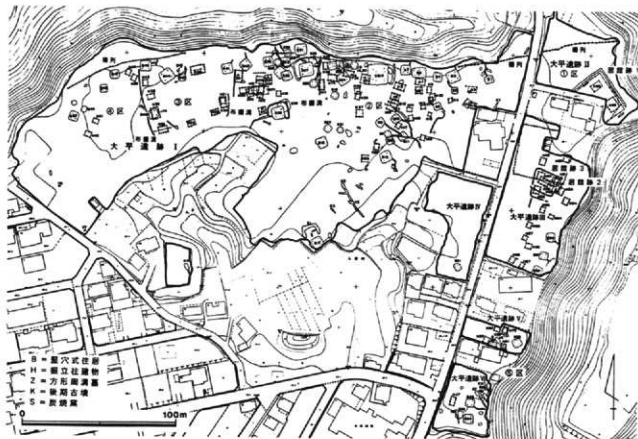


図7 大平遺跡遺構分布図(鈴木 1993による)

古墳時代前期の小型の竪穴住居である10号住居と南東部で重複するが、10号住居の覆土が薄かったため新旧関係は確認できなかった。

3. 大平遺跡における「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」

大平遺跡は、浜名湖の東部に位置し、更新世に古天竜川により運ばれた土砂が海中に堆積した地が陸化して形成された三方原台地上の南端部に立地し、東西約400m、南北約250mのほぼ全域に古墳時代前期の集落が展開していた(図7)。本遺跡で検出された「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」について見てみよう(財団法人浜松市文化協会 1992b)。

(1) S B27A・B(図7・8・9)

台地の北縁部に立地する本「周溝をもつ建物」の竪穴部は2基が重複しており、南北8.6m、東西9.0mの平面形が隅丸方形のもの(S B27A)と、南北6.6m、東西6.7mの平面形がやはり隅丸方形のもの(S B27B)があり、前者の南西隅部を基点にして南北・東西の両辺を縮小して構築されている。

当初の竪穴部(S B27A)の柱穴は4本で、貼床が施されている。地床炉は北西隅部の柱穴の内側に存在する焼土の部分が想定されるが、西側中央の焼土も本竪穴部

に伴うかもしれないとする。縮小後の竪穴住居(S B27B)も柱穴は4本で、貼床が認められる。地床炉は北西部の焼土検出部と想定される。特徴的なことは、本竪穴部の南西隅部に河原石を使った石敷が検出されていることである。石敷部からは部特別な遺物は出土してはならず、その性格は不明としている。

2基の竪穴部の周囲には南辺を除く東・北・西の3辺を囲むように竪穴部から約3mの距離を保って溝(S D17・18)が巡る。竪穴部の北東部には平面形が不定形の遺構が重複し、東辺(S D18)と北辺(S D17)とは連続した状態では検出されていないが、本来は連続して周溝であったものと考えられる。これらの溝は幅0.4~0.8m、深さ0.36~0.38mで、埋土は自然堆積の状況を示し(図9)、掘削後は開放状態であったと理解され、当初の竪穴部(S B27A)から約3mの外側に平面形が隅丸方形の走向を示して回り、その南西端部は竪穴部の壁の内側直下を全周する壁溝の南西隅部からトンネル状に延びた排水溝と連結している。また、この周溝の北西隅部から溝が西に延びた先で北側の谷に向かう。この周溝と排水溝は、本遺跡が台地上に立地しながらも地山に不透水層が存在し、水はけが極めて悪い環境⁹⁾に対応した施設と考えられる。

そして、「排水溝をこの南西から出すのは地形に逆らう



図8 大平遺跡における「周溝をもつ建物」(SB27A・B、SB39) (財団法人浜松市文化協会 1992による)

ものである」とする。このことの意味は、この竪穴部付近の最高所はその南部にあり、壁溝との関係で言えば排水溝は竪穴部の北東もしくは北西の隅部から北部の谷に向かって溝を掘削するのが合理的であるということであろう。さらに、排水溝が西側に向かうのは、本建物の北側に存在した竪穴住居を避けるためであるとしている。遺構検出時の状況と遺構構築時の状況を同一視することには問題があるが、この排水溝の位置は竪穴部の壁溝からの排水のみを考慮して決定されているのではないことを示唆しているものと受け止めたい。

また、本遺構において、竪穴部が縮小されながら周溝がそのまま機能していたとすれば、竪穴部と周溝は建物としての構造上において直接的な関係はなく、竪穴部そして竪穴部に架けられた屋根と切り離されてもその機能は維持されたことを示していると考えられよう。

ところで、竪穴部からの排水溝は、縮小後の竪穴住居(SB27B)の南西隅部の石敷きの南西端部の先に取り付けられている。石敷部の断面図(図9)によれば、石敷下部の掘り方も石敷きの面も排水溝の出口に向かって傾斜しており、石敷部での排水に合理的な状況を示して

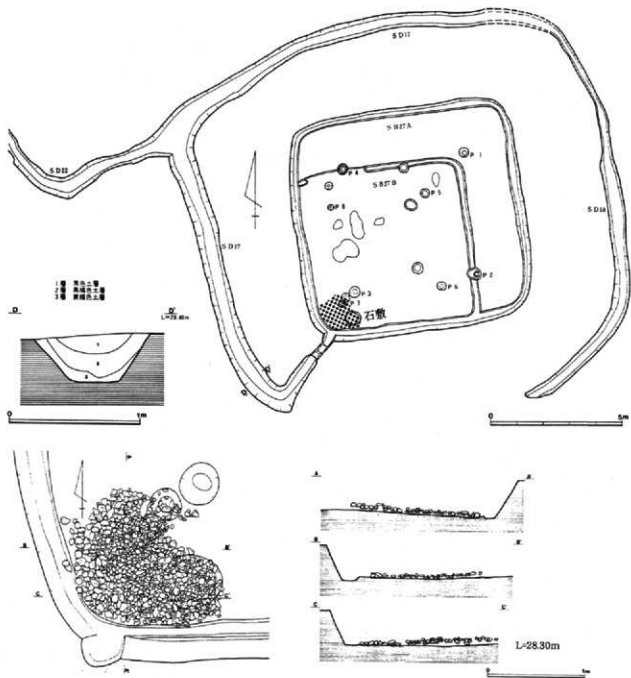


図9 大平遺跡における「周溝をもつ建物」(S B27A・B) (財団法人浜松市文化協会 1992による)

いる。石敷部での水を使った行為が存在したことを強く示唆するものと考えたい。

本竪穴住居及び周溝からS字状口縁台変形土器を含む古式土器器が出土している。

(2) S B39 (図10)

前記S B27A・Bの南西方向約30mの、台地を侵食する浅い谷の谷頭の付近に位置する。竪穴部の平面形は隅丸方形で、南北8.0m、東西8.0mの大型住居である。柱は4本で、壁溝は南西隅部の両側を除いて検出された、とする。貼床の有無は確認できず、地床炉は中央部から

やや東にずれて検出された焼土の位置と考えられる。「貼床がはっきりしないこと、焼土が1つだけであることから、長期に生活していた住居跡ではなかった」とされる。

北、東、西側に竪穴部から2~2.8mの間隔を保って幅0.4m、深さ0.17mの周溝が、平面形で隅丸方形の走向を示して存在する。竪穴部の南東隅部からの溝が周溝に接続し、この南東隅部から50cmの溝内には地山の黄色土が充填していたことから、この部分はトンネル状であったと考えられている。また、西辺の中央やや南に付設された竪穴部から周溝に繋がる排水溝(S D27)は幅0.3m、

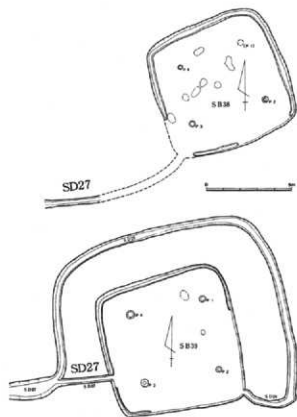


図10 大平遺跡における「周溝をもつ建物」(S B39)とそれに重複する「排水溝をもつ建物」(S B38)
(財団法人沢村松本市文化協会 1992による)

深さ0.38mで、西に直線的に延び、周溝と接続した後、さらに西に延びやや南方へ弧を描きながら浅い谷に向かう。

本住居は「排水溝をもつ建物」であるS B38と北東部で重複し、S B38が先行し、同住居の埋土が人為的であることから、S B39の建設に伴いS B38は埋められたとする。そして、S B39の排水溝(S D27)はS B38の北西隅部からの排水溝(S D27)を利用している、とされる。

(3) 「排水溝をもつ建物」(図11・12、表1)

本遺跡における古墳時代の竪穴住居は、拡張(3例)・縮小(2例)・建替(4例)の場合は1軒として算定すると59軒であり、古墳時代前期に属するのは56軒である。その内、「排水溝をもつ建物」は前記の「周溝をもつ建物」の2軒を除いて34軒であり、全体の竪穴住居の約61%で竪穴部からの排水溝が確認される(表1)。

これらの排水溝のほとんどは平面形が隅丸方形の竪穴住居の隅の部分から外部にトンネル状に延び(図11)、場合により他の排水溝と連結しながら谷部へ導かれている。しかし、排水溝の中には平面形が隅丸方形の竪穴住居の隅の部分からではなく、辺の中央部付近から外部に延びる例もある(図12)。

また、あまり明瞭ではないが、排水溝の竪穴住居への取り付け部の近くには貯蔵穴とされる土坑が存在する例があり、実測図によれば排水溝の取り付け部における住居床面に円形もしくは不整形の掘形をもつくぼみが存在する例がある(図11)。後者におけるくぼみが人為的な構造物の反映であるとするれば、前述のS B27Bで見た石敷との関連が想定されるのである。

4. 三和工業団地I遺跡と大平遺跡の「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」の比較検討

さて、これまで見てきた三和工業団地I遺跡と大平遺跡で検出された「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」の特徴から理解されることをまとめてみたい。

まず、特徴の第1に挙げなければならないのは、これまでの「周溝をもつ建物」では必ずしも明確ではなかった周溝に囲まれた内部の竪穴部が、両遺跡の「周溝をもつ建物」においては明確に存在することである。つまり、両遺跡の「周溝をもつ建物」は平地式建物ではないということである。

第2は、両遺跡の「周溝をもつ建物」において、竪穴部の平面形が隅丸方形の竪穴住居の三辺をほぼ一定の間隔を保って比較的深い溝が、平面形が楕円形状もしくは隅丸形状に通り、その溝は勾配は緩いものの谷部まで導かれていることである。この溝は埋土の堆積状況から掘削後においては埋戻されることなく、開放状態であったと理解される。そして三和工業団地I遺跡の例と大平遺跡の1例(S B39)によれば、周溝は竪穴部の周囲への雨水の浸入を防ぐのを目的として標高の高い部位に周溝を巡らし、低い辺に溝はめぐらさないのを基本としていると考えられ、雨水の管理を目的として構築されているものと想定されるのである。しかし、大平遺跡の例(S B27A・B)では竪穴住居の四辺の内、標高の低い辺にも周溝を巡らしているように見えるが、それはさらに標高の低い場所に隣接して竪穴住居が存在していたという個別の事情の反映によるものであると考えられるのである。

第3は、両遺跡の「周溝をもつ建物」において、竪穴部と周溝との間隔や大平遺跡における竪穴部の縮小例(S B27A・B)からして、竪穴部と周溝は建物の構造として直接的な関係はないと考えられることである。また、三和工業団地I遺跡の周溝の例ではその途中にトンネル状の陸橋が存在し、竪穴部と周溝の間には人が歩行できる空間が存在したことが考えられる。大平遺跡では周溝部にトンネル状の陸橋が存在したことを積極的に示す状況は認められていないが、竪穴部と周溝の間隔からして、三和工業団地I遺跡と同様に竪穴部と周溝間における歩行可能な空間の存在が想定されよう。さらに、竪穴部の周溝は平面形が隅丸方形の3辺のみを巡り、1辺

表1 大平道路で検出された整穴住居一覧

(○:存在 △:部分的に存在 ×:認められない)

No.	名称	主軸方位	規模南北×東西m	和位置	貯蔵穴位置	壁溝	排水溝位置	時期
1	S B01A	N20°W	4.5×4.7	1 やや北東	北東隅	○	なし	前期
2	S B01B		4.6×5.2	2 中央	南西隅	○	1 北辺中央	中期
3	S B02A	N 3°W	3.6×4.0	2 北東・西	なし	○	なし	前期
	S B02B		4.2×4.0	2 東・南東	なし	○	1 北西隅	前期
4	S B03	N25°W	7.5×8.0	不明	北東隅?	○	1 北東隅	前期
5	S B04	N 1°W	5.7×5.5	3 北東	南東	○	不明	前期
6	S B05	N23°W	4.5×4.7	1 北東	南東	×	1 南東隅	前期
7	S B06A	N 3°E	(6.5)×(5.3)	1 南東	南西	不明	不明	前期
8	S B06B	N 7°W	6.1×(5.9)	1 中央(やや東)	南西・南東	○	不明	前期
9	S B07	N 3°E	6.2×6.0	不明	なし	○	1 北東隅	前期
10	S B08	N40°W	5.0×5.4	1 東	なし	○	1 南東隅	前期
11	S B09	N21°W	4.2×4.6	2 北東	なし	×	1 南東隅	前期
12	S B10	N24°W	5.0×5.1	2 東(やや北東)	なし	×	不明	前期
13	S B11	N33°W	5.3×5.6	不明	なし	△	1 南東隅	前期
14	S B12	N36°W	5.1×5.2	2 西	なし	○	1 南東隅	前期
15	S B13	N44°W	5.4×5.9	2 中央・東	なし	○	1 南東隅	前期
16	S B14A	N 1°E	13.2×12.4	11 北東・北西・南	なし	○	1 南東隅	前期
	S B14B		10.4×10.8	なし	○	1 南東隅	前期	
17	S B15	N20°W	7.0×7.6	4 中央・西・東	南東	○	1 南東隅	前期
18	S B16	N21°W	6.8×6.5	不明	2 北西・南西	不明	なし	前期
19	S B17	N27°W	(6.9)×(6.6)	不明	なし	○	不明	前期
20	S B18	N 8°E	4.4×4.6	2 西	なし	○	なし	前期
21	S B19	N 5°W	(4.5)×(3.7)	なし	なし	×	不明	中期
22	S B20	N25°W	4.6×4.6	2 北東	南東	○	不明	前期
23	S B21	N34°W	4.1×3.9	1 西	なし	△	なし	前期
24	S B22	N48°W	4.8×4.7	不明	南西	×	なし	前期
25	S B23	N 4°E	(4.5)×4.6	1 西	南西	○	不明	前期
26	S B24A	N31°W	7.1×7.7	4 中央・東・南・北西	なし	○	1 北東隅	前期
	S B24B		7.7×8.3	なし				前期
27	S B25A	N13°W	5.3×(5.0)	1 西	不明	○	1? 北東隅	前期
28	S B25B	N11°W	4.2×3.9	なし	なし	△	1 北東隅	中期
29	S B27A	N 7°W	8.6×9.0	1 北東	不明	○	1 南東隅	前期
	S B27B		6.6×6.7	4 西・北西	なし	○	1 南東隅	前期
30	S B29	N 0°W	5.1×4.9	4 東・北東	なし	○	1 北東隅	前期
31	S B30	N23°W	6.1×6.4	不明	2 北・南東	○	なし	前期
32	S B31	N 3°W	7.2×7.4	不明	南東	○	不明	前期
33	S B32	N42°W	6.8×6.7	4 中央・東・北西・北西隅	北西	△	1 北東隅	前期
34	S B33	N 9°W	5.9×6.1	不明	南東・北壁中央	○	1 北西隅	前期
35	S B34	N 6°W	4.3×4.4	2 東	なし	×	1 北東隅	前期
36	S B35	N 9°W	6.2×(6.1)	不明	南東	○	1 北東隅	前期
37	S B36	N13°W	4.6×4.5	1 やや東	なし	○	1 北西隅	前期
38	S B38	N20°W	7.7×7.8	5 中央・西・東	なし	○	1 南西隅	前期
39	S B39	N13°W	8.0×8.0	1 東	なし	○	1 南西隅・西中央	前期
40	S B40	N40°W	6.6×(6.8)	不明	南東?	○	1 北東隅	前期
41	S B41	N10°W	6.8×6.9	1 東	北東?	○	1 北東隅	前期
42	S B42	N 8°W	(4.6)×5.0	2 南・北東	北西?	×	1?	前期
43	S B44	N35°W	(7.9)×8.9	1 東	南東	○	1 東隅	前期
44	S B45A	N22°W	5.7×4.9	2 北西・南東	南東	○	1?	前期
	S B45B		5.7×6.3	なし				前期
45	S B46	N10°W	(6.9)×6.8	2 南東	南東	△	1 北東隅	前期
46	S B47	N 7°W	5.6×6.0	不明	南東	○	なし	前期
47	S B48	N 6°W	5.0×5.0	1 北東	南東	○	なし	前期
48	S B49	N25°E	3.4×3.9	1 東	南東	×	なし	前期
49	S B50	N22°E	5.9×5.9	3 北東・南西・南	南東	○	不明	前期
50	S B51	N31°W	4.7×4.1	不明	南東	○	なし	前期
51	S B52	N32°E	2.8×3.2	1 北東	なし	○	1 南東隅	前期
52	S B53	N 7°E	5.2×5.4	3 東・西	南東	○	1 南東隅	前期
53	S B54	N 4°W	5.9×6.0	不明	なし	×	1	前期
54	S B55	N 7°E	3.6×4.6	1 北東	なし	○	なし	前期
55	S B56	N27°E	(6.0)×5.6	不明	なし	○	不明	前期
56	S B57	N15°E	4.9×5.3	不明	南東	○	1 南東隅	前期
57	S B58	N 2°E	5.8×5.6	不明	なし	○	1 南東隅	前期
58	S B59	N31°W	4.9×5.4	2 北西	南東	△	不明	前期
59	S B60	N15°E	5.1×(5.1)	1 東	不明	○	不明	前期

※ 拡張: S B02・24・45 縮小: S B14・27 建替: S B03・07・54・58

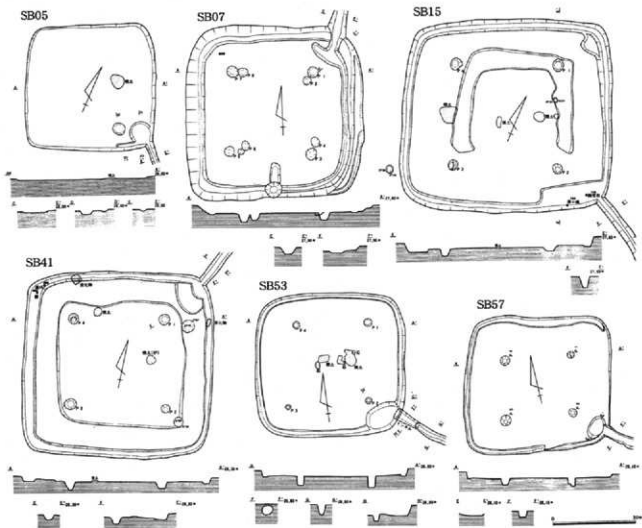


図11 大平遺跡における「周溝をもつ建物」の排水溝付設部前面の施設(財団法人浜松市文化協会 1992による)

それも南辺には廻らないことは、屋根の構造や堅穴部への入口部との関係があることを予測させるのである。

第4は、両遺跡において、「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」がセットで存在することである。「周溝をもつ建物」は大平遺跡では2軒、三和工業団地I遺跡では1軒と、両遺跡で少数であり大きな相違点はなさそうである。しかし、「排水溝をもつ建物」は、三和工業団地I遺跡では1軒なのに対し、大平遺跡では多数検出されている。

第5は、堅穴部からの排水溝は、両遺跡において、平面形が隅丸方形の隅部の内側から外側に向かって延ばされるのを基本とする。三和工業団地I遺跡における「周溝をもつ建物」では堅穴部から延びる排水溝の設置される位置が隅部ではない。しかし、大平遺跡でも「周溝をもつ建物」であるSB39において先行する「周溝をもつ建物」の排水溝を再利用する方法で堅穴部の辺の中央部付近に排水溝を付設しており、「排水溝をもつ建物」の例でもわずかではあるが隅部でない個所に排水溝が設置さ

れており、類例がない訳ではない。

第6は、両遺跡の「周溝をもつ建物」・「排水溝をもつ建物」の堅穴部において、排水溝の設置される辺の近くに貯蔵穴が設置されている例があることである。そして、そして大平遺跡の「周溝をもつ建物」の堅穴部で排水溝の内側に検出された石敷が水を使った行為つまり炊事時の水洗等のための施設であることが推測され、「排水溝をもつ建物」の排水溝が接続する堅穴部の内部に円形もしくは不整形のくぼみがそうした施設と関連する可能性が想定されることである。

第7は、両遺跡の「周溝をもつ建物」・「排水溝をもつ建物」の堅穴部や溝内からは東海地方西部に起源があるとされるS字状口縁台付壺形土器を含む古墳時代前期の古式土器器が出土していることである。

このように、三和工業団地I遺跡と大平遺跡で検出された「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」はいずれも古墳時代前期に属し、その構造の多くの点においてよく似ている、と言える。そして、その建物の構造が似

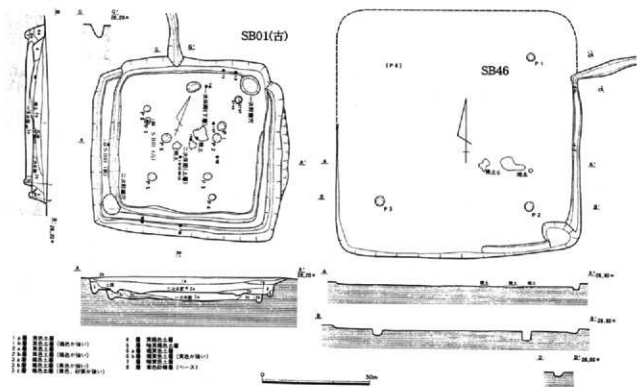


図12 大平遺跡において排水溝が隅部以外に付設されている竪穴住居例（財団法人浜松市文化協会 1992による）

ているということは、建物を構築する伝統・技術の類似性とともに、その建物の内部や集落における行動様式や行動規範が類似していたことに他ならないことを示している、と考えられるのである。

大平遺跡の存在する台地の谷を挟んだ西の台地に立地する中平遺跡（浜松市博物館 1983）では、「周溝をもつ建物」は検出されていないものの、古墳時代前期の「排

水溝をもつ建物」が数多く検出されており、古墳時代前期には少なくとも浜名湖東岸の地域には「周溝をもつ建物」そしておそらく「周溝をもつ建物」が一般的な構造の建物として存在していたものと考えられる。

また、大平遺跡の東方約25kmに位置する静岡県磐田郡浅羽町の北原遺跡（浅羽町教育委員会 1987）・団子塚遺跡（浅羽町教育委員会 1992）では、弥生時代後期から「排

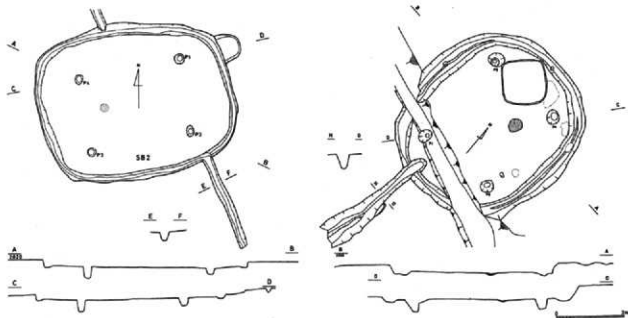


図13 弥生時代後期における「排水溝をもつ建物」（左：団子塚遺跡、右：北原遺跡 浅羽町教育委員会 1987・1992による）

水溝をもつ建物」が検出されており(図13)、東海地方東部において、遅くとも弥生時代後期から「排水溝をもつ建物」の築造が行われていたものと推定される。

そして、三和工業団地Ⅰ遺跡で検出された「排水溝をもつ建物」は当初排水溝に連結される竪穴部の壁溝を付設しながら、最終的な貼床時には壁溝を付設していない。その事情は以下のように考えられる。

これまで群馬県域を含め関東地方で「周溝をもつ建物」の検出された遺跡は水位の高い沖積地に立地していた。そのため、「周溝をもつ建物」は沖積地に対応した構造の建物であると考えてきたが、本稿で問題にした「周溝をもつ建物」の検出された大平遺跡は台地の上である。しかし、台地の上と言いつつも地山に不透水層が存在し、水はけの悪い環境であり、排水用の溝が見えなかったものとして想定される。そうした立地環境では排水溝をもつ工業団地Ⅰ遺跡は扇状地の上に立地しており、決して水はけが悪いとは言えない。それでありながら大平遺跡と三和工業団地Ⅰ遺跡で類似した遺構が検出されているのである。これは、大平遺跡の存在する東海地方東部を中心として水はけの悪い環境で「周溝をもつ建物」を構築し、本地域に移住した人が出自地域の伝統に従って類似の構造の建物を構築した結果と考えられよう。しかし、両者の立地条件の違いにより竪穴部への雨水の浸透対策は不要であるとの判断から、後に「排水溝をもつ建物」の竪穴部の壁溝は付設されなくなった、と想定されるのである。

ところで、三和工業団地Ⅰ遺跡における「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」の居住者がすべて東海地方東部からの移住者とは即断できない。建物を構築した人の中に東海地方東部を出自とする人がいたとは言っても、同一の建物で居住した集団そして同一集落で居住した集団がすべて出自を同じくするか否かは、「周溝をもつ建物」以外の竪穴住居やその他の遺構そして出土遺物等の検討を待たねばならないのである。古墳時代前期の集団の編成の実態は当時の社会の在りようを考える上で重要な検討課題と言えよう。

さらに、三和工業団地Ⅰ遺跡における「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」については、古墳時代前期の竪穴住居等と重複関係が存在しており、集落全体の変遷の中での「周溝をもつ建物」と「排水溝をもつ建物」の位置づけが検討されなければならないであろう。

5. まとめ

これまでの「周溝をもつ建物」の理解(図1)では、その周溝は隅丸方形の竪穴部における4辺中、1辺の中央部のみが途切れていたが、本稿でみたように三和工業団地Ⅰ遺跡と大平遺跡で検出された「周溝をもつ建物」の周溝は、隅丸方形の竪穴部の4辺中、1辺のほぼ全体

に遡らない。このことと、三和工業団地Ⅰ遺跡における「周溝をもつ建物」の周溝部に存在する陸橋が人の歩行用であるとすれば、竪穴部の規模と竪穴部と周溝の距離に差異があるものの、ほぼ同一の構造である大平遺跡における「周溝をもつ建物」も竪穴部と周溝の間には人が通行可能な空間があった可能性がある。そうであるとすれば、両遺跡で見た「周溝をもつ建物」の構造は、本稿の冒頭に見たこれまでの「周溝をもつ建物」のモデルとは異なることとなる。

三和工業団地Ⅰ遺跡で検出された「周溝をもつ建物」については、すでに筆者が問題にしてきた「周溝をもつ建物」(図1)とは異なり、前者を「三和工業団地Ⅰ遺跡型」、後者を「上之手八王子遺跡型」と呼称することが提案されている(坂口 1999)。さらに、群馬県域で検出されている「周溝をもつ建物」を集成し、溝の形状により細分化し、その系統が論じられもしている(石守 2003)。しかし、「周溝をもつ建物」のもつ歴史的な意味を把握するためには、その基本的な構造の理解が不可欠と考えているところである。特に、本県の前橋台地上で検出されている「周溝をもつ建物」については、遺存状況も不良であり、報告内容を実態として見るのに危険性が伴い、資料批判をした上でその構造を把握することが必要である。

また、「周溝をもつ建物」の周溝にしてもあるいは排水溝にしても、本当に水が流れた痕跡が存在するののかとの間に十分な所見が得られているとは言えない。また、貯蔵穴の実際の機能についても追求不足である。さらに、屋根や入口の構造も明確ではない。今後の発掘調査においてこうした点に関する意識的な解明の努力が必要と言えよう。

ところで、本県域における古墳時代前期における社会の在りようについては、弥生時代以来の在地の集団の主体性を重んじる立場がある(友廣 2003)が、筆者は波川市有馬遺跡において弥生時代後期の墓一礎床墓が古墳時代前期の北陸系の土器を出土する竪穴住居や畑により壊されることに着目し、古墳時代の社会への移行を担った主体は本地域以外から入ってきた集団であった、と想定しているところである(飯島 1997)。

今後とも、「周溝をもつ建物」を含め、弥生時代から古墳時代にかけての社会の変化の実態解明に努めることを期し、ひとまず筆を置きたい。

本稿を執筆するにあたっては、三和工業団地Ⅰ遺跡を調査された坂口 一氏・桜岡正信氏、大平遺跡を調査された鈴木敏則氏に調査時の所見をうかがうとともに、有益なご教示を頂きました。しかし、もし遺跡・遺構の理解に誤りがあれば、その責はすべて筆者が負うものであります。

また、方形周溝墓研究会の伊丹 徹・伊藤敏行・及川良彦・長瀬 出・杉崎茂樹・福田 聖・池田 治・立花実・松井一明・小泉範明・岡本美希の各氏には、例会の席上等で多大な啓蒙を受け、本稿を執筆する上で重要な示唆を与えていただきました。

明記して、心から感謝申し上げます。

註

- 1) 三和工業団地1遺跡を調査した坂口 一氏にご教示を得た。
- 2) 大平遺跡を調査した鈴木敏則氏にご教示を得た。

引用・参考文献 (年代順)

- 浜松市博物館 1983 『西鶴江 中平遺跡』浜松市教育委員会
 浅羽町教育委員会 1987 『北原遺跡』
 財団法人浜松市文化協会 1991 『佐鳴湖西岸遺跡群 写真図版編 I・II』佐鳴湖西岸土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
 財団法人浜松市文化協会 1992 『佐鳴湖西岸遺跡群 本文編 I・II』佐鳴湖西岸土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
 浅羽町教育委員会 1992 『諸子塚遺跡(1)』ワコゴルフクラブ諸井ショットコース造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 向坂剛二 1993 浜名湖をめぐる古墳時代の動向『浜松市博物館報』V p.19
 鈴木敏則 1993 大平遺跡—古墳時代の家族居館か—『浜松市博物館報』V pp.20~27
 石野博信 1993 弥生・古墳時代の家地の成立と展開—大平遺跡の背景—『浜松市博物館報』V pp.28~36
 佐野五十三 1994 集落の変化『静岡史 通史編1 原始・古代』第1編 静岡のあけぼの 第五章 古代国家へのあゆみ 第一節 集落の変化 pp.275~294
 飯島義雄 1997 墓が壊されることの意味—於川市有馬遺跡における検討を中心として—『群馬県立歴史博物館紀要』第18号 pp.1~16
 飯島義雄 1998 古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 pp.65~78
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999a 『三和工業団地1遺跡(1)—旧石器時代編—』三和工業団地造成事業に伴う三和工業団地1遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第246集
 津島秀章 1999 遺跡をとりまく環境『三和工業団地1遺跡(1)—旧石器時代編—』第1章 pp.1~10
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999b 『三和工業団地1遺跡(2)—縄文・古墳・奈良・平安時代他編—』三和工業団地造成事業に伴う三和工業団地1遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第251集
 坂口 一 1999 周溝の巡る住居について『三和工業団地1遺跡(2)—縄文・古墳・奈良・平安時代他編—』VI 調査の成果 2 pp.262~265
 飯島義雄 2000 古墳時代前期集落の研究における排水溝の意義—一所懸命 佐藤史君追悼論文集』pp.225~235
 飯島義雄 2003 大開々屈伏地の扇形低地に立地する香桶田遺跡における「方形周溝墓」の再検討『利根川』第24・25号 pp.384~393
 友廣哲也 2003 古墳社会の成立—北関東の弥生・古墳時代の地域間交流—『日本考古学』第16号 pp.71~91
 石守 晃 2003 周溝をもつ建物『中内村前遺跡(2)—5~7区—』北関東自動車道(高崎~伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第21集 第3章 5~7区小結(2) pp.316~326 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第322集

上野の竪穴式小石槨

齊藤 幸男

- | | |
|----------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 画期の設定 |
| 2. 研究抄史 | 5. 墓制への位置づけ |
| 3. 属性の検討 | 6. おわりに |

— 論文要旨 —

上野地域における竪穴系埋葬施設の殆どを占める竪穴式小石槨について、各属性ごとに検討を行った。その結果、時期的変遷を示す属性と地域的なまとまりを示す属性、集団を示す属性を抽出できた。また、他地域に於いて有効な属性が上野では同様の結果を示さない様子も確認できた。

竪穴式小石槨を広く古墳時代の墓制として捉えた時、上野地域全体に共通するあり方と、それとは別に小地域内のみで共通するあり方を見ることができる。また竪穴式小石槨の初現期に採用される古墳が、西毛では大型円墳などの下位に属する小規模墳であるのに対し、中毛が大型円墳などを含むこと、方墳や積石塚にも採用されること、東毛では客体的なあり方を示すことなどから、古墳時代後期における西毛地域の卓越性に小石槨の導入と普及の鍵があること、採用する被葬者の階層性や出自が広範囲であることを指摘した。さらに、その形態については木棺からの変化を想定した。

このような作業を経て、竪穴式小石槨のもつ歴史的意義の一端を明らかにした。

キーワード

対象時代 古墳時代
対象地域 上野
研究対象 竪穴式小石槨

1. はじめに

古墳の埋葬施設の構造は、竪穴系と横穴系とに二分される。上野に1万基はあったと考えられる古墳のうち、そのほとんどは横穴系のもので、特に横穴式石室である。6世紀初頭頃に導入された横穴式石室は、前方後円墳はもろんのこと、当時盛んに築造された群集墳にも採用され、主流となった。

竪穴系埋葬施設には粘土槨、障柵などがある。これらは主に5世紀までの前方後円墳や大型円墳、帆立貝式古墳に採用されたもので、数は少ない。竪穴系でもっとも多く検出されるのが、横穴式小石槨（以下、小石槨と略す）と呼ばれるものである¹⁾。5世紀後半の群集墳に採用されたことで数を増やし、6世紀前半も引き続き築造されたが、この頃を境に横穴式石室へと転換し、次第に姿を消していく。しかし、7世紀以降も群集墳や無墳丘墓などの埋葬施設として確認されており、墓制における一定の地位を保っていた。

これまで、群集墳を中心に多くの小石槨が調査されてきた。しかし前方後円墳などの首長墓に採用されないこともあってか、尾崎喜左雄以来多くの研究が積み重ねられている横穴式石室とは違って、基礎的な研究さえも決して多くないのが実情である。

本稿は、上野の小石槨の様相を把握するため、まず構造的特徴や分布展開、構築時期などを属性ごとに検討し、合わせて当地域における墓制の中での位置づけを図ろうとするものである。

2. 研究抄史

上野における戦後の小石槨研究は、尾崎喜左雄の論考²⁾に始まる。尾崎は自身が手がけた7例の横穴式石槨を紹介し、その構築法について、「墓壇を掘り死屍を置いて、死屍に沿って、長めの襖を差し込んで造ったもの」とし、「死屍のみ納れ得るのみのもので、他のものを入れる余地はない」と、その狭さを指摘している。また、竪穴系内部主体の編年も試みている³⁾。小石槨については、屍体に合わせて内部構造をつくるものから、内部構造を先に作り、これに屍体を納めることが起こったとし、そこに尺の使用を想定した。

また尾崎は、小石槨の初現として太田市・小谷場1号墳を挙げた⁴⁾。これは、竪穴系内部主体をもつ小円墳の墳丘盛土下に構築された、墳丘をもたない小石槨と考えられる。構築の際の掘り方が樽式土器と思われる壺を出土した層を掘り込んでおり、構築時期を弥生時代に比定している。その後この壺は梅沢重昭により五領式土器であることが指摘された⁵⁾。

80年代にはいと、桜場一寿が小石槨をもつ古墳のあり方に着目し、①群集する例、②単独ないし複数で存在する例、③横穴式石室墳に関連する例、④付随的な例、

の4タイプに分類した⁶⁾。その上で小石槨が盛行するのは5世紀後半から6世紀前半であり、初期群集墳の内部主体がその好例であることを述べた。また、6世紀以降に見られる群集墳の無袖型横穴式石室との類似を指摘し、小石槨からの技術的変遷を予想している。

桜場はこの後、小石槨自体の分類を行っている⁷⁾。竪穴系埋葬施設を狭義の竪穴式石室、粘土槨、障柵、木炭槨、木棺直葬、竪穴式小石室に分けた。その上で長さを基準に、I類—石室内に石棺を置き、II類—2m以上で遺骸を入れるのに十分な長さ、III類—1.5~2mで遺骸を入れるのにぴったり長さ、IV類—1.5m以下で成人には不足する長さ、に分類した。さらに壁体に用いた石材の扱いからA類—川原石、角礫を地中に一列に差し込んで壁体とする、B類—川原石、角礫を2段から3段に乱石積で壁体とする、C類—箱式石棺状のもので、凝灰岩などの切石を組み合わせるものと板状石を差し込んだもの、の3類に分類し、このうちのII~IV類とA~C類を小石槨の分類に用いた。特にC類の二つは系譜を同じくし、5世紀中葉の長持形石棺と5世紀後半の舟形石棺の影響下に、簡略化して成立したとの指摘を行っている。

荒木勇次は茨川市内の小石槨を床面の規模に着目して分類し、Hr-I降下前（殆どはHr-S降下前）より降下後の方が、幅が大きく最大幅と端部幅の比が小さい傾向にあることを指摘した⁸⁾。この変化に合わせて床面の敷石の施工方法なども変化することから、Hr-I降下後の小石槨に横穴式石室からの影響を予想している。

松村一昭は、ほぼ全面を発掘調査した葦岸山古墳群中の各古墳を編年する中で、小石槨の裏込めや床面の構築手法の違いを時期差として援用している⁹⁾。このように一古墳群の中で構造差から編年を試みたものには、上植木光山房遺跡における掘り方上面の被覆構造に基づいたもの¹⁰⁾、芳賀西部団地遺跡における小石槨の構築面や周堀の有無、周堀底面と小石槨のレベル差などから古墳の階層性を見ようとしたもの¹¹⁾などがある。

上野以外の地域に目を転じると、古くは鳥居龍造による箱式石棺の分析がある¹²⁾。長壁と短壁の構築法に着目したもので、現在でも有効な視点として利用されている。また、後藤守一は箱式石棺分布の偏在性を指摘し、そこに民族・集団差を見た¹³⁾。

戦後では小野真一による箱式石棺の伝播経路の考察に始まる¹⁴⁾。この中で、上野の事例として台所山古墳、御富士山古墳付近の前方後円墳、轟山下古墳、御三社古墳を挙げた。松岡文一は規模の長短比に着目して分類した¹⁵⁾。三木文夫は長壁の石材の枚数や置き方・継ぎ方などの構築方法によって4分類し、時期や分布について論を及ぼす¹⁶⁾。茂木雅博は常陸地域の箱式石棺について、設計段階から短壁に重点を置いていることを指摘し、分布や時期の問題を論じている¹⁷⁾。これらの研究によって、箱式石棺

の構造を分析するための視点はだいたい出そろったと言える。

近年では、上野恵司らによって下野地域と総地域の箱式石棺に対する論考がなされた¹⁵⁾。まず総では、用石からA類-板石を使用するもの、B類-小型ブロック状の切石を使用するもの、C類-基底部の大型石材の上に小型石材を積むものの3分類、石材からa類-片岩、b類-砂岩の2分類、側壁の構成からア-石材が縦長に置かれる、イ-横長に置かれる、ウ-縦長と横長の組合わせて置かれる、エ-以上の折衷系、の4分類を示した。この各組み合わせによる時期的地域的展開や石材の需給関係を見た上で、小地域内の政治展開を考察し、6世紀中葉に前方後円墳や帆立貝式古墳の埋葬施設として採用され、横穴式石室導入後はその下位にある埋葬施設として位置づけられたこと、またB・C類に横穴式石室の影響があることなどを指摘した。

下野では、常川秀夫や竹沢謙の先行研究¹⁶⁾を受けて、墳丘の有無、構築位置が封土内か地下か、妻石と側壁の接点の位置関係、板石使用か川原石使用か、側壁の石を横長に用いるか縦長に用いるかといった視点から分類を行った。このうち、川原石を用いるものと横長に用いるものは特定の地域にのみ分布することを示し、その他9類については時期的変遷として5世紀後半から7世紀まで5段階を設定した。特に妻石と側壁の接点の位置関係は、各時期における明瞭な変遷が追えるとする。また、横穴式石室導入以後は、それまで一部首長墳にも採用されていたものが従属的な傾向を窺わせることなどを指摘した。

一方、秋元陽光は下野地域の小石室についてその分類と変遷、性格について論じている¹⁷⁾。ここでは小石室の定義を、①石材(主に川原石)を小口積みにして側壁を構築する ②規模は、全長2m以下の小規模なものであり、更に2m前後の伸展葬の可能なものと、全長1m前後の不可能なものに大別される ③控え積み認められない ④本来墳丘が存在しないか、存在したとしても周溝のない小規模な墳丘であったと考えられる、とする。上述した上野恵司の箱式石棺とは、主に壁体の構築法が異なる。小口壁の構築法から、1類-片方を横積にする、2類-側壁同様小口積みにするが、側壁より大型の石を用いて横及び縦に積み重ね、側壁より段数を減じるもの、3類-側壁同様小口積みするもの、に大きく分類する。小口積みによる壁体を横穴式石室の影響と考え、奥壁表現の簡略化、即ち1類から3類へという流れを読む。そして、同様の構造をもつ横穴式石室の年代観から、6世紀後半以前から7世紀に構築年代を想定している。

小石室の性格については、未だ古墳築造者(家父長)とはなり得ない者の墓とし、本来外部施設がなかった葬法(土坑墓)に横穴式石室の影響が及んだ結果出現する

ものと考えた。

ところで、上野の小石塚と同様な構造をもつものは、早くに尾崎喜左雄が指摘した²⁰⁾ように、近畿地方をはじめ中国地方や北九州に多く見られる。

九州では「石棺系石室」「石棺系竪穴式石室」と呼ばれ、山中英彦らによって整理された²¹⁾。山中は、I類-扁平割石小口積み、II類-塊石積みの竪穴式石室、III類-箱式石棺を母胎にした石棺系石室、に分けている。これは畿内に見られる竪穴式石室を受容し在地化して、II・III類の小型のものが生まれたとするもので、他の研究者も大筋ではこれに類する見解である。

近畿・中国地方では、広島県の事例を中心に構築法や規模などを分析した名本二六雄の仕事²²⁾などがあつたが、近年では福永伸也が近畿地方の小竪穴式石室について検討している²³⁾。福永は小竪穴式石室を、「石積み小竪穴式石室」-ほぼ同じ大きさの石を用いて壁体を積み石で構成、「石棺系小竪穴式石室」-壁体最下段に大きな石を立位で使用し(箱式石棺の石組と捉える)、この上に石を積む、の大別2分類を行った。更に石棺系について、a型-箱式石棺上に板石を置く、b型-壁体の一部が2段以上の積み石、c型-側壁全体が2段以上の積み石、d型-四壁が2段以上の積み石、の4細別を行い、a型からd型へ、竪穴式石室との類似度を増しながら変遷する可能性を指摘した。

また、近畿地方に於いては石棺系が大部分であり、竪穴式石室とは構築手順が異なることから、箱式石棺からの発展を想定し、壁体が積み石で構築されることや最上部の板石、重なる蓋石の造作に竪穴式石室の影響を見る。福永の言葉を引用すれば、「石棺系小竪穴式石室は、石材を使った埋葬施設を用いる集団のなかで社会的にやや有力な地位にある者の墓として、箱式石棺を基礎に長大な竪穴式石室の外観のみをとり入れて造られた埋葬施設」である。

近畿地方の箱式石棺については、清家章の分析がある²⁴⁾。綿密な属性分析に基づいて型式を設定し、残された人骨の歯冠から型式間の血縁関係を跡づけた。作業の結果、階層を表す型式として長側壁1枚タイプと長側壁複数タイプがあり、1枚タイプの方が上位の階層にあること、集団差を表す型式として有底石タイプと無底石タイプ、またその細分別として小口形状のH字形・II字形・ロ字形があり、箱形木棺の影響が認められるを明らかにした。

以上に見てきた埋葬施設はそれぞれ名称が異なっている。構築時期や系譜も同一ではなく、現時点で一括りに議論することはできない。しかし本論で扱う小石塚とは構造が極めて類似しており、階層的にも前方後円墳などの被葬者よりも下位の首長や、更に下位の小古墳あるいは無墳丘墓といったレベルである点も同一である。よっ

て、小石標の分析をする上でこれらの視点は大きい参考になる。本章では、これら先学に学びながら上野地域の小石標の構造について具体的に検討していく。

3. 属性の検討

まず、本稿で扱う小石標について定義付けしたい。小石標は礫等の石材を用いて箱状の施設を作り、直接遺体を納める²⁸⁾ 竪穴系の埋葬施設である。よって石室などの上位構造をもたず、下位構造として棺をもつ礫標とも異なる。基本的に遺体の大きさに合わせて構築される。

一般的な構築法は次の通りである。墳丘や地表下に平面隅丸方形の掘り方を設ける。およそ小石標の規模の2倍程である。この中に裏込めを施しながら壁体を構築する。礫の隙間には粘土や小礫を充填して箱状に密閉する。床面を造作して伸展・仰向で遺体を安置し、壁体上端に蓋石を渡す。蓋石の隙間には壁体同様に小礫や粘土を詰め、更に蓋石の上から裏込めにかけて、礫を積んだり粘土で被覆することによって密封する。最後に土を被せて掘り方を埋め戻し、埋葬が完了する。人骨の出土例から、頭位側の幅が足位側より広く、中央部がやや膨らみ胴張り状を呈するものも多い。また、壁体や蓋の石材も頭部側のものが大きい傾向がある。

このような構造をもつ小石標は、上野に於いて200例近くを挙げることができる²⁹⁾(表1)。上述の先行研究では

壁体の枚数や縦ぎ方、床面の構造、裏込めの材質、長壁と短壁の接点の構造などを基に分類している。本章では小石標を各属性ごとに検討し、上野例に対して意味のあるものか否か、またどの様な意味があるのかを明らかにしたい。

構築位置 小石標が墳丘垂直方向のどの位置に構築されているかをみると、I：墳丘盛土内と、II：旧地表下の二つに大別される。墳丘が調査時までには削平されているものが多いため、盛土の造成と小石標構築作業の前後関係がつかめないものも多い。小石標が被覆も含めて全て地表下にあるものも、上位が盛土内にあるものも、小石標本体が旧地表面に達しているものは全てI類とした。I類についても、墳頂部・盛土中位などに関わらず全てI類とした²⁸⁾。

位置の判明する177例の内、I類は40例である。5世紀後半を中心に、5世紀中葉から6世紀前半までを含む。分布も広範囲に渡り、特定の地域に集中しない。の中には、空沢36号墳のような積石塚²⁹⁾や方墳が7例含まれる。これらは後述するように、被葬者が特定の階層であることを表示する古墳であり、円形を基本とする盛土墳とは墓制の原理が異なる。方墳や積石塚の多くがI類若しくはI類の可能性のあるもので、鏡石古墳のように直径7m、高さ2mと、このタイプの中では大型のものから、剣崎長瀬西遺跡5号墳のように盛土が30cm程の低墳

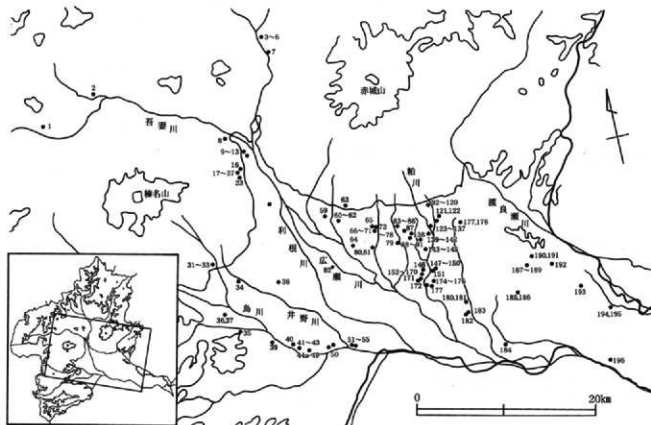


図1 小石標分布図

丘のものまで含まれることは、方墳や横石塚にあっては、規模に関係なく盛土(礫)内に小石塚を構築することを強く意識していたと考えられる。

通常の盛土墳では、その規模が大きいことを指摘できる。丸塚山古墳(帆立貝式、81m)や連磨山古墳(35m)、蕨手塚古墳(37m)をはじめ、初期群集墳中の上位にある大胡町5号墳(17m)や赤堀村299号墳(19m)などがある。

6世紀のものでは、恵下古墳や塚廻り4号墳第1主体部がある。恵下古墳は古い報告ではあるが、径約27mの円墳で高さが4.5または5.4m、墳頂から1.5または1.68m下で主体部に達するという記述²⁰⁾からI類としてよい。塚廻り4号墳(帆立貝式、22.5m)第1主体部は既に破壊されていたが、掘り方の形状や床面の造作から、残存する第2主体部同様の小石塚と考えられる。耕作で削平された墳丘は残存高50cmだが、築造当初も1m前後の低墳丘を予想する。このような墳丘にあって、先に地表下へ小石塚を構築せず、盛土内に掘り方を取ったことは墳丘内に構築することを意図したものであろう。

半田南原26号墳は、径10.6mと墳径としては小さいクラスであるものの、直刀と剣が1振ずつ副葬されている。小規模墳における小石塚の副葬品が、通常は全く無いか、有っても刀子や鉄鏝が少量程度であることからすれば、この被葬者は階層的に比較的上位にあると言える。

これに対しII類は、規模が10m以下と小さくて葺石や埴輪などの外表施設をもたないものや、無墳丘墓がほとんどである。5世紀後半以降、古墳時代を通して存在し、地域的偏りもない。

II類の小石塚を主たる埋葬施設とするものの内、規模がおよそ15m以上のものは石ノ塔、白藤A-2・D-3・F-1、上縄引7号、深津三騎堂2号、赤堀村25号、同285号、同286号、五日牛3号、三筆2号の11例のみである。この中でも三騎堂2号墳(6c1/3?)は群中では規模が小さく、副葬品も鉄片1のみで葺石・埴輪を装備しないなど、必ずしも階層的上位ではない。白藤A-2号墳(6c1/3)も、群中の規模は中位であり、蓋石を失っているために副葬品の有無は不明ながら葺石・埴輪を装備しないなど、三騎堂と同様の傾向にある。古墳の階層性は各古墳の情報や古墳群中のあり方などを総合的に判断する必要があるが、II類で階層的に上位にあるとする傾向は、小石塚全体からすると認められない。

このようにみてきた時、小石塚の構築位置は階層性を表す属性であり、I類はII類に対して上位であるとすることができる。

石材 壁体や蓋石、底面に用いる石材には、I：山石・川原石、IIA：片岩系などの板状に剝離するもの、IIB：凝灰岩・石灰岩・角閃石安山岩の容易に加工できるもの、がある。多くは山石、川原石などの形状表記で報告され

るI類であり、これらで種類が特定できるものはほぼ全て安山岩である。基本的に古墳築造場所の周囲で採取できる礫を用いると考えられ、崖岸山6号墳や赤堀村16号墳のように併用している例も見受けられる。山石が川原石による特定の傾向は見いだせないことから一括してI類とした。全体の9割近くを占める。

IIA類としたものは5例である。正観寺遺跡G区石塚(図2)は片岩系を、丸塚山古墳3号石塚は緑泥片岩を用いる。正観寺例は扁平に加工しているが、丸塚山例の加工の有無は不明である。連磨山古墳A号(図3)・B号石室、蕨手塚古墳C構造は珪岩質で、A号は加工し、C構造は礫石を用い、B号の加工の有無は不明である。片岩は西毛から埼玉西部に産出し、珪岩は渡良瀬川流域で採取できる。いずれも小石塚構築の為に選択したもので、遠方から運び込む必要があり、I類よりも労力・資

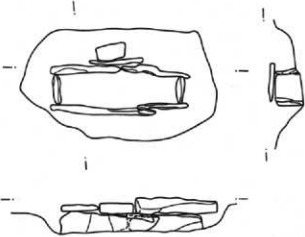


図2 正観寺遺跡G区石塚

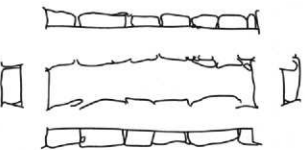


図3 連磨山古墳A号石室

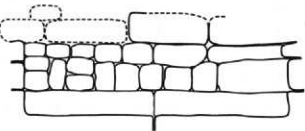


図4 恵下古墳小石塚

力を要する。これらは性質上薄い板状の石材を得やすく、特に片岩は長い石材とすることができる。使用枚数が少なくて済み、継ぎ目が合わせ易く、より箱形に近い小石櫛を構築できるメリットがある。達磨山A号・B号石室は枚数が多く石材の使い方が異なるが、壁体を薄くできるという点で共通する。どちらもその希少性に価値が生じることは勿論である。

分布は、正観寺例が井野川流域に位置する他は粕川流域にまとまるものの、数が少なく論ずるのが難しい。ただ正観寺例を除いて大型墳に採用されており、構築時期も、追葬による副次的な埋葬施設の時間差を考慮する必要があるものの、5世紀中葉から後半としてよい。数が少なく確定的ではないが、II A類は階層差を表している可能性がある。

II B類は18例で、丸塚山1号・2号石棺の5世紀後半などから始まり、西長岡東山14号墳第2主体部の6世紀後半以降まで続く。II B類に用いられた凝灰岩の産出地は確定していないものが多いが、三筆2号墳の分析²¹⁾で馬見岡凝灰岩に同定され、笠懸村西鹿田周辺を産出地とする可能性が高いとされている。八王子丘陵南側など一帯は凝灰岩の産出地であり、他の古墳もこの凝灰岩を使用したと思われる。天神山古墳群は馬見岡凝灰岩産出地の至近にあり、最も遠い下瀬名8号墳も10kmの距離にある。これより遠方には見られないことから地域色が強いと考えられる。

同じII B類でも使用頻度や部位、加工のあり方などに違いがある。下瀬名8号墳(10m、5c4/4)と峯岸山18号墳(4m、6c1/3)は未加工のまま使用し、下瀬名は壁体と蓋、底面の基礎に、峯岸山では壁体の主たる用石として長さ約1mのものを使用する。共に小規模墳であ

るほか、隣接する石材間の継ぎ方が粗くなり、表面が平坦でないなど密閉性や箱状としての精緻さに欠け、凝灰岩のもつ加工しやすいという特性が生かされていない。このような石櫛の状態や規模などから、2基とも低い階層の古墳とすることができる。峯岸山18号墳と同じ古墳群の赤廻村285号墳(帆立貝式、23.5m、6c1/3)下部石櫛は、底面の基礎として凝灰岩割れ石を組み敷くもので、他の部位には使用していない。直刀、鹿角刀子の副葬品や人物・馬・器財を含む埴輪などから、古墳群中の上位階層である。このような例は、使用量や部位と階層は関連しないことを示す。

大刀や船載鏡、馬具など多量の副葬品が出土した恵下古墳(円、約27m、6c1/3、図4)は、小石櫛本体全てに加工した凝灰岩を用いる。底面は1m程のもの2石で構成され、壁体はブロックを積上げるなど、他には見られない技術を用いている。また、石材の接点をL字状に切り欠く造作を施したものに、丸塚山古墳・台所山古墳(墳形・規模不明、6c中頃?)・重田古墳(円、12m?、6c前半?)がある。各古墳のデータや数が不足するが、高いレベルで加工を施したのものには階層的上位の古墳が多い傾向にあり、どの程度入念な加工を施したかが被葬者の階層的位を位置を表していると考えられる。

凝灰岩を用いることは、その特性を生かしてII A類と同じメリットを求めるものであろう。労力・實力を要することも同じである。しかし本類の全てに階層的上位を指摘することは難しい。総じてII B類は、地域性を表すと同時に階層性を弱く表す属性といえる。

規模 小石櫛は基本的に人体に合わせた大きさであり、短壁の長さは40cm前後に集中する(図5)。これに対して長壁の長さは、180cm前後に分布の中心があるもの、

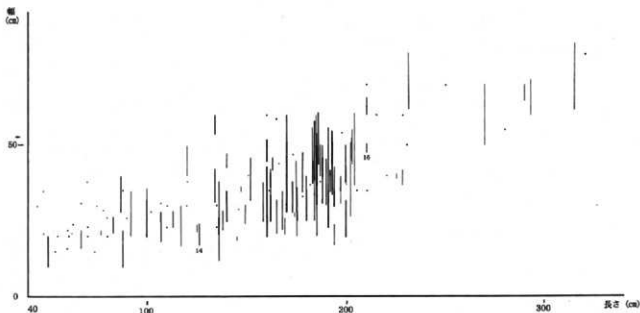


図5 小石櫛規模分布